例　　言

1．本書は、北海道斜里郡斜里町字川上 190 番地（道路敷地内）に所在する川上 1 遺跡（登載番号：I － 08 － 190）の発掘調査報告書である。
2．調査は、町道羅萠道路改良工事に伴う埋蔵文化財保護のための緊急発掘調査である。
3．調査は 3 カ年に及んだ。調査年度、期間、面積ならびに調査体制は以下の通りである。

平成 24 年度

発掘調査期間　平成 24 年 9 月 1 日～平成 24 年 10 月 31 日（発掘作業）
平成25年1月11日～平成25年3月22日（整理作業）

調査面積　380㎡

調査体制

調査主体者	斜里町教育委員会	教 育 長	村田良介
事　務　局	斜里町立知床博物館	館　　長	山中正実
担当者・調査員	斜里町立知床博物館	学芸主幹	松田功
	〃	臨時職員	村本周三・田代雄介

発掘作業員

曽我祐子、星野純子、本間さと子、加藤英信、小坂佳佑、近藤政幸、高橋清、中村益之、平沼龍博、山辺基晴、吉田深雪。

整理作業員

平田陽子、阿部智宏、井上博之、牧野睦美、元木哲之、湯浅秀明。

平成 25 年度

発掘調査期間　平成 25 年 5 月 23 日～平成 25 年 8 月 31 日（発掘作業）
平成 25 年 9 月 1 日～平成 26 年 3 月 25 日（整理作業）

調査面積　820㎡

調査体制

調査主体者	斜里町教育委員会	教 育 長	村田良介
事務局	斜里町立知床博物館	館　　長	山中正実
担当者	斜里町立知床博物館	学芸主幹	松田功
調査員	〃	学 芸 係	平河内毅

発掘作業員

平田陽子、井上博之、牧野睦美、元木哲之、湯浅秀明。

整理作業員

近藤富士子、斉藤　葵、佐藤トモ子、西塚玲子、野口京子、平田陽子、井上博之、牧野睦美、元木哲之、湯浅秀明。

平成 26 年度

発掘調査期間　平成 26 年 5 月 20 日～平成 26 年 8 月 27 日（発掘作業）
平成 26 年 10 月 1 日～平成 27 年 3 月 25 日（整理作業）

調査面積　1,281㎡

調査体制

調査主体者	斜里町教育委員会	教 育 長	村田良介
事　務　局	斜里町立知床博物館	館　　長	山中正実
担　当　者	斜里町立知床博物館	学芸主幹	松田功

調査員　　〃　　学 芸 係　　平河内毅
　　〃　　臨時職員　　工藤大

発掘作業員

平田陽子、井上博之、牧野睦美、元木哲之、湯浅秀明。

整理作業員

斉藤　葵、佐藤トモ子、西塚玲子、平田陽子、井上博之、牧野睦美、元木哲之、湯浅秀明。

4．本書の執筆は、松田、平河内、工藤がそれぞれの分野を協議し分担した。第１章と第２章の PIT1･2･4 ～ 6、焼土遺構の焼土５・６・14 ～ 16・25、木炭範囲１・３・４、第３章の表土出土石器については松田が、第２章の PIT3・７～ 13・15 ～ 20、柱穴群、焼土遺構の焼土範囲２及び焼土１・３・７・13・18、木炭範囲２・５、第３章のⅦｂ層出土土器、Ⅶ・Ⅶａ層出土石器、まとめにかえての「1 斜里町内における縄文中期の竪穴住居形態にみる地域集団について」は平河内が、第２章の PIT14・21 ～ 47、焼土遺構の焼土範囲１及び焼土２・４・８～ 12・17・19・20・23・24・26、木炭範囲７・８、第３章のⅦ・Ⅶａ層・表土出土土器、Ⅶb2・Ⅶｂ層出土石器、まとめにかえての「2 斜里町における縄文中期の焼土の一考察」は工藤が文責を負う。なお、報告書に係る図面、図版作成については平河内、工藤が担当した。遺物写真撮影、画像処理等については、元木、牧野が
中心となり作業にあたった。レイアウト及び編集作業は平河内が Adobe InDesign を使用して作業にあたった。

5．遺跡出土の石器材質については、知床博物館の合地信生学芸員に肉眼鑑定をお願いした。

6．発掘調査区、層位図、遺構平面･断面図、遺物平面･垂直分布図等にはそれぞれスケールを入れ縮尺比を示した。また、土器実測図は１／４、拓本は１／２、石器実測図はレキ石器の一部（１／４）を除き１／２に縮尺を統一した。遺物写真図版も実測図の縮尺に合わせた。

8．遺跡位置図には、国土地理院発行の１／25,000 地形図、斜里(NK － 55 － 31 － 5 － 1･2)の一部を使用した。また、遺構などの平面図中に付している方位は全て磁北である。

9．出土遺物の保管・管理は、斜里町教育委員会（斜里町埋蔵文化財センター）で行う。

10．文章等に記載している略号は以下の石質を示している。

OB：黒曜石、AND：安山岩、HS：硬質頁岩、CH：チャート（硅岩)、AG：メノウ、
SP：蛇紋岩、GR － SCH：緑色片岩、BL － SCH：青色片岩、B － SCH：黒色片岩、
AMP：角閃石、SS：砂岩、MS：泥岩、RH：流紋岩、PU：軽石。

11．発掘調査及び本書作成にあたり、以下の方々、機関のご協力、ご指導、ご助言を賜りました
ここに氏名を記し、感謝申し上げます (順不同、敬称略)。
北海道教育委員会（文化財・博物館課)、岡本富士夫、岡本昭二、森　悟、島田秀一。

目　　次

例言……Ⅰ～Ⅵ
川上1遺跡
第１章　調査の概要……1～9
第２章　遺構……10～59
第３章　遺構外出土遺物……60～77
まとめと考察……78～94
報告書抄録……95

図　版　目　次

第１図　遺跡位置図……2
第２図　地形測量図及びグリッド配置図……3
第３図　遺構配置図……4
第４図　層位図（1）……6
第５図　層位図（2）……7
第６図　層位図（3）……8
第７図　層位図（4）……9
第８図　PIT2(竪穴)……11
第９図　PIT2 遺物平面・垂直分布図……12
第10図　PIT2(竪穴)床直出土土器……13
第11図　PIT2(竪穴)床直出土石器……13
第12図　PIT3(竪穴)……13
第13図　PIT3 遺物平面・垂直分布図……14
第14図　PIT3(竪穴)覆土出土土器……14
第15図　PIT3(竪穴)覆土出土石器……14
第16図　PIT7(竪穴)……15
第17図　PIT7 遺物平面・垂直分布図……16
第18図　PIT7(竪穴)覆土出土土器……16
第19図　PIT7(竪穴)覆土出土石器……16
第20図　PIT18(竪穴)及び
遺物平面・垂直分布図…18
第21図　PIT18(竪穴)覆土出土土器……19
第22図　PIT18(竪穴)覆土出土石器……19
第23図　PIT24(竪穴)……20
第24図　PIT24 遺物平面・垂直分布図……21
第25図　PIT24(竪穴)覆土出土土器……21
第26図　PIT24(竪穴)覆土出土石器……21
第27図　PIT25(竪穴)……22
第28図　PIT25 遺物平面・垂直分布図……23
第29図　PIT25(竪穴)覆土出土土器……23
第30図　PIT25(竪穴)覆土出土石器……23
第31図　PIT36(竪穴)及び
遺物平面・垂直分布図…24
第32図　PIT36(竪穴)覆土出土石器……24
第33図　PIT40(竪穴)及び
遺物平面・垂直分布図…25
第34図　PIT40(竪穴)覆土出土土器……25
第35図　PIT40(竪穴)出土石器……25
第36図　PIT47(竪穴)及び
遺物平面・垂直分布図…27
第37図　PIT1、PIT4～6、8～11
(土坑)及び遺物平面・垂直分布図…29
第38図　PIT4(土坑)覆土出土土器……29
第39図　PIT5(土坑)覆土出土土器……29
第40図　PIT12～17(土坑)……32
第41図　PIT19(土坑)及び
遺物平面・垂直分布図…33
第42図　PIT19(土坑)出土土器……35
第43図　PIT19(土坑)出土石器……35
第44図　PIT20～22(土坑)……35
第45図　PIT23(土坑)及び
遺物平面・垂直分布図…37
第46図　PIT23(土坑)覆土出土土器……38
第47図　PIT23(土坑)出土石器……38
第48図　PIT26～29(土坑)……39
第49図　PIT30～35,37(土坑)及び
遺物平面・垂直分布図…41
第50図　PIT37(土坑)覆土出土石器……41
第51図　PIT38～43(土坑)……43
第52図　PIT44～46(土坑)及び
遺物平面・垂直分布図…45
第53図　PIT44(土坑)覆土出土石器……46
第54図　PIT45(土坑)覆土出土石器……46
第55図　柱穴群……48
第56図　焼土範囲１……49
第57図　焼土範囲２……49
第58図　焼土範囲２出土石器……50

第 59 図　焼土 1 ～ 9 及び木炭範囲 2a･2b……52
第 60 図　焼土 10 ～ 13,18 ……53
第 61 図　焼土 14 ～ 17,19 ……55
第 62 図　焼土 20 ～ 26……57
第 63 図　木炭範囲 1,3 ～ 8　……59
第 64 図　遺構外出土土器　Ⅶ層 ……63
第 65 図　遺構外出土石器　Ⅶ層 ……64
第 66 図　遺構外出土土器Ⅶ b 層（1）　……65
第 67 図　遺構外出土土器Ⅶ b 層（2）　……66
第 68 図　遺構外出土土器Ⅶ b 層（3）　……67
第 69 図　遺構外出土土器Ⅶ b 層（4）　……68
第 70 図　遺構外出土石器Ⅶ b 層（1）　……69
第 71 図　遺構外出土石器Ⅶ b 層（2）　……70
第 72 図　遺構外出土石器Ⅶ b 層（3）　……71
第 73 図　遺構外出土土器Ⅶ b-2 層 ……72
第 74 図　遺構外出土石器Ⅶ b-2 層 ……73
第 75 図　遺構外出土土器Ⅶ a 層 ……74
第 76 図　遺構外出土石器Ⅶ a 層 ……74
第 77 図　遺構外出土土器　表土 ……75
第 78 図　遺構外出土石器　表土（1）　……76
第 79 図　遺構外出土石器　表土（2）　……77
第 80 図　斜里平野における縄文中期の
遺跡密度分布図　…79
第 81 図　斜里平野における縄文中期の
遺跡分布図……82
第 82 図　土坑に伴う焼土　朱円 20 遺跡　……88
第 83 図　竪穴に伴う焼土　アキベツ 11 遺跡…88
第 84 図　焼土群が単独で検出
ポンシュマトカリペツ 11 遺跡 ……89
第 85 図　2 パターンの焼土　川上 1 遺跡……89
第 86 図　儀礼を行った焼土群
ポンシュマトカリペツ 13 遺跡……90

第 1 表　竪穴住居跡形態観察表……85~87
第 2 表　縄文中期遺跡焼土検出データ……91~93

写真図版目次

PL.1
川上 1 遺跡遠景
川上 1 遺跡近景
PL.2
発掘前風景
発掘体験学習（1）
発掘体験学習（2）
調査風景（1）
調査風景（2）
PL.3
ア -3 ～ 9 区　完掘状況　SW →
ア -35 ～ 40　区完掘状況　NE →
アー 6 ～ 9 区　完掘状況　NE →
A-10 ～ 14 区　完掘状況　NE →
B-11 ～ 13 区　完掘状況　NE →
B-35 ～ 36 区　完掘状況　SW →
B-36 ～ 38 区　完掘状況　NE →
C-32 ～ 34 区　完掘状況　SW →
PL.4
PIT 2（竪穴）完掘状況　W →
PIT 2（竪穴）床直土器出土状況
PIT 2（竪穴）床直石器出土状況
PIT 2（竪穴）南壁セクション
PIT 3（竪穴）完掘状況　SW →
PIT 7（竪穴）検出状況　NE →
PIT 7（竪穴）測量調査風景
PIT 7（竪穴）完掘状況　NW →
PL.5
PIT 18（竪穴）完掘状況　S →
PIT 24（竪穴）完掘状況　S →
PIT 25（竪穴）完掘状況　SE →
PIT 36（竪穴）完掘状況　SE →
PIT 40（竪穴）完掘状況　NW →
PIT 40（竪穴）南壁セクション
PIT 47（竪穴）検出状況　NW →
PIT 47（竪穴）完掘状況　NE →
PL.6
PIT 1（土坑）完掘状況　W →
PIT 4（土坑）完掘状況　S →
PIT 5（土坑）完掘状況　N →
PIT 6（土坑）完掘状況　W →
PIT 8（土坑）完掘状況　W →
PIT 9（土坑）完掘状況　W →
PIT 10（土坑）完掘状況　S →
PIT 11（土坑）完掘状況　W →
PL.7
PIT 12（土坑）完掘状況　W →
PIT 13（土坑）完掘状況　N →

PIT 14（土坑）完掘状況　N →
PIT 15（土坑）完掘状況　W →
PIT 16（土坑）完掘状況　S →
PIT 17（土坑）完掘状況　W →
PIT 19（土坑）完掘状況　N →
PIT 19（土坑）出土石器
PL.8
PIT20（土坑）完掘状況　S →
PIT21（土坑）完掘状況　W →
PIT22（土坑）完掘状況　E →
PIT23（土坑）完掘状況　SE →
PIT23（土坑）出土石器
PIT23（土坑）出土石器
PIT26（土坑）完掘状況　NE →
PIT30（土坑）完掘状況　S →
PL.9
PIT31（土坑）完掘状況　E →
PIT32（土坑）完掘状況　S →
PIT33（土坑）完掘状況　SE →
PIT34（土坑）完掘状況　S →
PIT35（土坑）完掘状況　SE →
PIT37（土坑）完掘状況　SW →
PIT38（土坑）完掘状況　S →
PIT39（土坑）完掘状況　N →
PL.10
PIT41（土坑）セクション
PIT42（土坑）完掘状況　N →
PIT43（土坑）完掘状況　N →
PIT44・45・46（土坑）完掘状況　SE →
ア -7 区　柱穴列検出状況　N →
ア -8・9 区　柱穴列検出状況　W →
焼土範囲 1　検出状況　S →
焼土範囲 2　検出状況　S →
PL.11
焼土 4a・4b（Ⅶb2 層）　検出状況　S →
焼土 5（Ⅶb2 層）　検出状況　N →
焼土 15a（Ⅶb1 層）　検出状況　S →
焼土 23a・23b（Ⅶb1 層）検出状況 NE →
焼土 25a（Ⅶa 層）　検出状況　S →
焼土 25b（Ⅶa 層）　検出状況　S →
木炭範囲 3（Ⅶb1 層）　検出状況　E →
木炭範囲 4a（Ⅶb1 層）　検出状況　N →
PL.12
A-6 ～ A-9 区セクション　N →
A-18・19 区　セクション　N →
A-20 ～ A-21 区セクション W →
Ma-b5　検出状況　W →
石器（Ⅶb2 層）出土状況
石器（Ⅶb2 層）出土状況
土器（Ⅶb 層）出土状況
土器（Ⅶb 層）出土状況
PL.13
遺物（Ⅶb 層）出土状況
石器集中（Ⅶb 層）出土状況
石器（Ⅶb 層）出土状況
土器（Ⅶb 層）出土状況
土器（Ⅶb 層）出土状況
石器（Ⅶb 層）出土状況
石器（Ⅶa 層）出土状況
石器（Ⅶ層）出土状況
PL.14
作業風景（1）
作業風景（2）
作業風景（3）
作業風景（4）
作業風景（5）
作業風景（6）
作業風景（7）
作業風景（8）
PL.15
PIT2(竪穴) 床直出土土器
PIT2(竪穴) 床直出土石器
PIT3(竪穴) 覆土出土土器
PIT3(竪穴) 覆土出土石器
PL.16
PIT7(竪穴) 覆土出土土器
PIT7(竪穴) 覆土出土石器
作業風景
PL.17
PIT18(竪穴) 覆土出土土器
PIT18(竪穴) 覆土出土石器
PL.18
PIT24(竪穴) 覆土出土土器
PIT24(竪穴) 覆土出土石器
PIT25(竪穴) 覆土出土土器
PIT25(竪穴) 覆土出土石器
PIT36(竪穴) 覆土出土石器
PIT40(竪穴) 覆土出土土器
PIT40(竪穴) 覆土出土石器

PL.19
PIT4(土坑)覆土出土土器
PIT5(土坑)覆土出土土器
PIT19(土坑)出土土器
PIT19(土坑)出土石器
PL.20
PIT23(土坑)出土土器
PIT23(土坑)出土石器
作業風景
PL.21
PIT37(土坑)覆土出土石器
PIT44(土坑)覆土出土石器
PIT45(土坑)覆土出土石器
焼土範囲2出土石器
PL.22
遺構外出土土器　Ⅶ層
作業風景
PL.23
遺構外出土石器　Ⅶ層
PL.24
遺構外出土土器Ⅶb層（1）
PL.25
遺構外出土土器Ⅶb層（2）
作業風景
PL.26
遺構外出土土器Ⅶb層（3）
PL.27
遺構外出土土器Ⅶb層（4）
PL.28
遺構外出土石器Ⅶb層（1）
PL.29
遺構外出土石器Ⅶb層（2）
PL.30
遺構外出土石器Ⅶb層（3）
作業風景
PL.31
遺構外出土土器Ⅶb-2層
PL.32
遺構外出土石器Ⅶb-2層
PL.33
遺構外出土土器Ⅶa層
遺構外出土石器Ⅶa層
PL.34
遺構外出土土器　表土
PL.35
遺構外出土石器　表土（1）
PL.36
遺構外出土石器　表土（2）

第１章　遺跡の概要

立　地（第１図）

当遺跡は北緯 43° 51′ 18″、東経 144° 37′ 24″、斜里市街地より清里市街地（南西方向）へ約 10km 進んだ町境に隣接した斜里川右岸段丘上の標高 13 ～ 15 mに位置する。遺跡がのる丘陵地は、摩周岳起源とされる斜里層及び止別砂礫層や、屈斜路火砕流などからなる第四紀沖積世・洪積世火山噴出物を主とした堆積層から構成されている。

遺跡の東側には斜里平野と斜里岳山麓の境界を形成する標高 50 mほどの丘陵地があり、遺跡が存立する河川段丘面に続いている。西側には斜里川が流れ、過去幾度となく起きた河川流路変遷を示す数段の段丘面を形成している。さらに西方には、屈斜路火砕流を主たる構成層とする小清水台地が海岸まで伸びている。

周辺の遺跡には、斜里岳の裾野に広がる丘陵上に分布するもの（川上５～ 11 遺跡）と河川段丘面上に分布するもの（川上２～４遺跡）とに大きく分けられる。時代構成は各遺跡によってさまざまだが、両者に共通して確認できる時期は縄文中期である。異にする点は、河川段丘面より高位の丘陵地上に古い縄文早期の遺跡が散見することである。

発掘調査区設定（第２図）

調査区は、斜里町役場建設課の町道（町道羅萠道路）改良工事事業の計画図面から、世界測地系の基準点Ｘ：－ 16,135.381、Ｙ：29,939.295（３級基準点：H23-8）とＸ：－ 15,974.344、Ｙ：30,146.055（３級基準点：H23-7）とを結ぶ線上を基準線とし、そこから調査範囲を覆うように調査区を設定した。調査区内の一区画は５ｍ×５ｍ（25㎡）とし、区画番号はＸ軸：町道羅萠道路に沿った直線延長方向（北東方向）をアラビア数字順（０～ 47）、Ｙ軸：Ｘ軸に直交する方向（北西方向）をアルファベットおよびカタカナの 50 音順（Ａ～ C、ア）とした。

層　位（第３～５図）

３ヵ年の調査で調査区内の堆積層について第Ⅰ～Ⅹ層までを確認し、Ⅶ・Ⅷ層が遺物包含層であることが判明した。堆積土層中、挟在するテフラ層（火山灰及び軽石）を３枚確認した。確認堆積層及びテフラの詳細については下記に記す。なお、第Ⅰ層としたものは耕作土で主たる層が撹乱されている状態であったが、旧表土が残されていた清里町との町境防風林内（発掘区南端）では、黒褐色腐植土層が発達していた。また、現道下の堆積土層は耕作による影響が少なく、良好な状態で残されていたことから、遺物包含層のⅦ層をａ・ｂ層の２層に区分し、さらにｂ層をｂ１・ｂ２層と細分することが可能であった。

以下、基本層位と遺物文化層について解説する。

Ⅰ層　南側町境防風林内では黒褐色腐植土層。層厚５cm。道路を含む調査区全域では表土（耕作土）層。30 ～ 50cm。

Ⅱ層　防風林内及び現道下で確認された層。灰褐色火山灰層（Ta － a：樽前山ａ火山灰、西暦 1739 年降灰）。場所によっては、下記のⅣ層（Ko － c2：駒ケ岳 c2 火山灰）と混在している。層厚 1cm。以下、Ⅶ層まで同じく防風林内や現道下で確認される場合が多かった。

Ⅲ層　黒色土層。層厚 3cm。

Ⅳ層　灰白色火山灰層（Ko － c2：駒ケ岳 c2 火山灰、西暦 1694 年降灰）。層厚５～ 7cm。

Ⅴ層　黒色土層。層厚３～ 5cm。

Ⅵ層　黄褐色軽石層（Ma － b5：摩周岳 b5 軽石、約 1,000 年前降灰）。層厚５～ 10cm。

Ⅶ層　黒褐色～暗褐色土層。ａ・ｂの２層に区分でき、ｂ層についてはさらにｂ１・ｂ２層に細分できた。層厚 20 ～ 35cm。

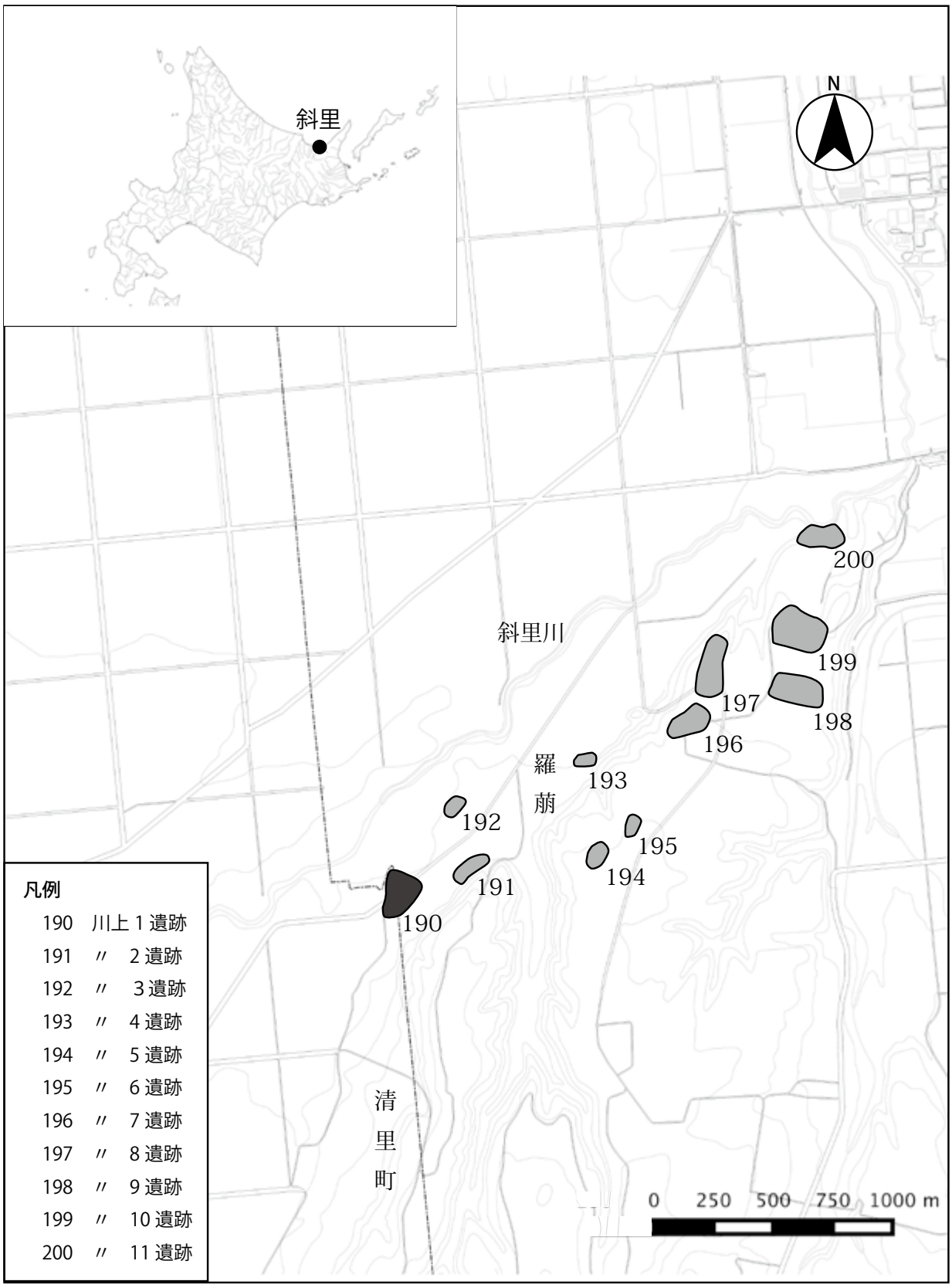
Ⅶａ層　黒褐色土層。縄文時代晩期の文化層を含む。層厚５～ 10cm。

Ⅶｂ -1 層　明褐色～褐色土層。軽石を含む。縄文時代晩期～中期の文化層を含む。層厚 10 ～ 20cm。

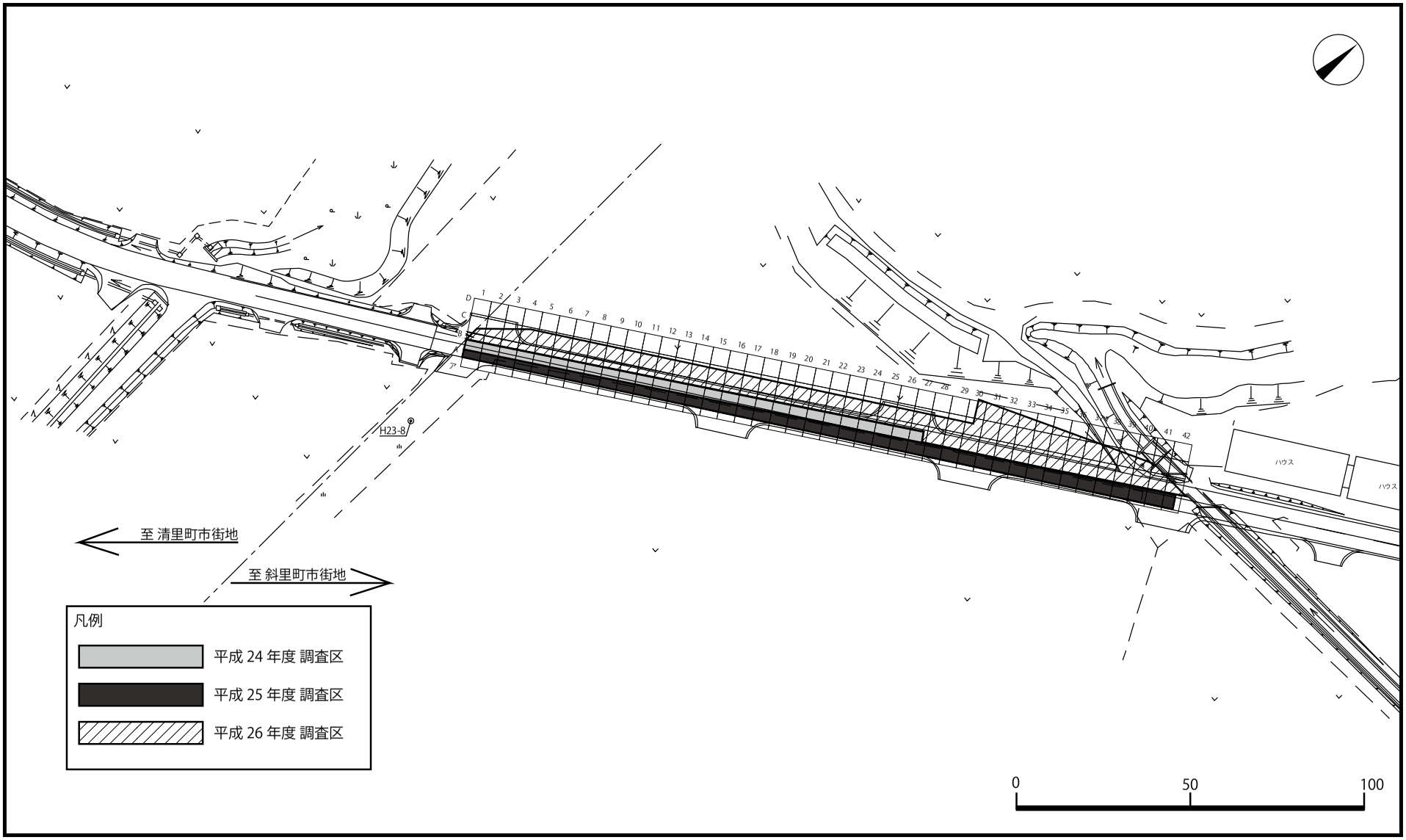
Ⅶｂ -2 層　黒褐色土層。軽石を含む。縄文時代中期の文化層を含む。層厚 10 ～ 20cm。

Ⅷ層　褐色～暗褐色土層。軽石を含む。縄文時代早期の文化層を含む。層厚 15 ～ 20cm。

Ⅸ層　黄褐色ローム質土層。層厚 30 ～ 50cm。


斜里
N
斜里川
羅
萠
清
里
町
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
0 250 500 750 1000 m
凡例
190 川上１遺跡
191 〃 ２遺跡
192 〃 ３遺跡
193 〃 ４遺跡
194 〃 ５遺跡
195 〃 ６遺跡
196 〃 ７遺跡
197 〃 ８遺跡
198 〃 ９遺跡
199 〃 10遺跡
200 〃 11遺跡

第１図　遺跡位置図



第 2 図　地形測量図及びグリッド配置図

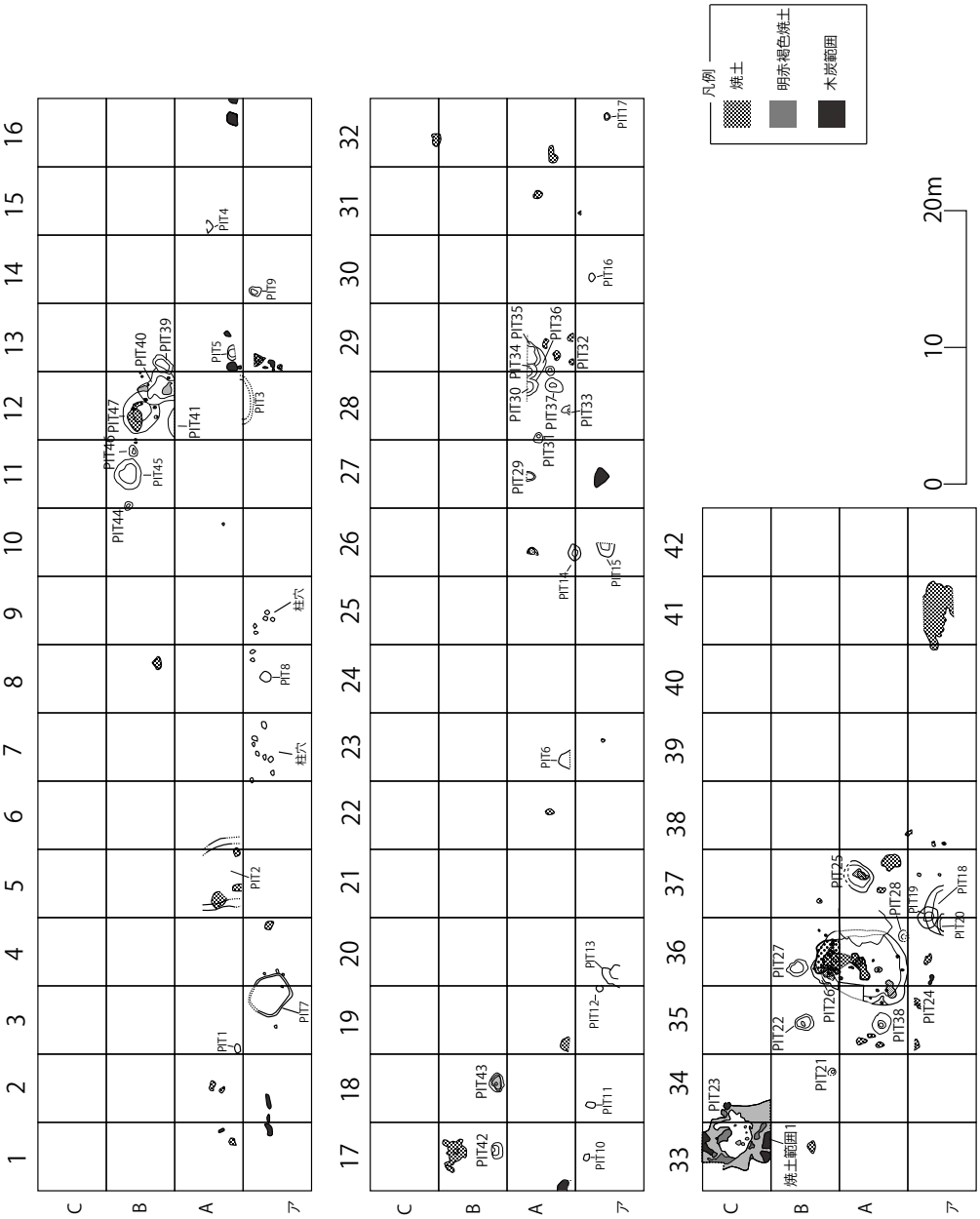
Ｘ層　　河川堆積層・川砂層。河川堆積による火山灰、砂、レキ、軽石が互層し下層に続く。止別砂礫層。

遺構の概略（第 3 図）

調査の結果、竪穴住居跡 9 軒、土坑 38 基、焼土範囲及び木炭範囲を含む遺構大小合わせて 58 箇所であった。竪穴住居、土坑、焼土・木炭範囲遺構のほとんどが縄文中期のものであったが、構築時期の不明のものもあり、他の時期のものが混在する可能性もある。

遺物の概略

出土遺物の内訳および点数は、土器 615 点、石器 2,386 点、炭化物 190 点、レキなどその他 44 点の合計 3,235 点であった。1 ㎡あたりの出土量は 1.3 点と少ないほうである。その原因としては、営農活動により遺物包含層の大半が消失していたことが大きく影響しているものと考えられる。土器は、縄文中期のトコロ 6 類土器が主たるもので、このほか、出土点数は少ないが、縄文早期の東釧路Ⅲ式土器や縄文晩期のヌサマイ式土器も出土している。石器は土器同様、主たる時期は縄文中期と考えられる。両面調整ナイフやスクレイパーなど中期特有の石刃剥離技術を用いたと推察されるものが出土している。



第 3 図　遺構配置図

遺物の分類

当遺跡からは土器、石器、自然遺物が出土している。以下、分類した。

(1)　土器

Ⅰ群　縄文時代早期に属するものである。東釧路Ⅲ式土器である。

Ⅱ群　縄文時代中期に属するものである。いわゆる北筒Ⅱ式土器相当とされるトコロ６類式土器である。

Ⅲ群　縄文時代晩期に属するもので、ヌサマイ式相当の土器と考えられる。

(2)　石器

Ⅰ群 石　鏃

ａ類：有茎石鏃、ｂ類：無茎石鏃、ｃ類：未製品、欠損品

Ⅱ群 石　銛 最大長が３～5.5cm、最大厚が４～６㎜、重量が１～５ｇに相当するものを石鏃と石槍の中間のものとして便宜的に石銛として分類した。

ａ類：有茎石銛、ｂ類：無茎石銛

Ⅲ群 石　槍

ａ類：有茎石槍、ｂ類：無茎石槍、ｃ類：未製品、欠損品

Ⅳ群 石　錐

ａ類：棒状、ｂ類：つまみ部有するもの、ｃ類：未製品、欠損品

Ⅴ群 削　器

ａ類：ナイフ、ｂ類：つまみ付きナイフ、ｃ類：安山岩製ナイフ（安山岩製大型剥片を利用したナイフで、晩期に特徴的に見られる）

Ⅵ群 掻　器 刃部加工形態から分類した。

ａ類：ラウンドタイプ、ｂ類：サイドタイプ、ｃ類：エンドタイプ、ｄ類：ミックスタイプ

Ⅶ群 剥片、砕片

ａ類：リタッチド・フレイク（加工痕のあるもの）、ｂ類：ユーティライズド・フレイク（使用痕のあるもの）

Ⅷ群 石核・原石

ａ類：プラット・フォームを有するタイプ、ｂ類：プラット・フォームを有さないタイプ、ｃ類：棒状原石

Ⅸ群 石　斧

ａ類：打ち欠きや敲打により整形されているもの、ｂ類：磨かれて整形されているもの

Ⅹ群 たたき石

ａ類：棒状レキが素材、ｂ類：扁平レキが素材、ｃ類：円レキが素材

ⅩⅠ群 くぼみ石

ａ類：片面に窪みがあるもの、ｂ類：両面に窪みがあるもの

ⅩⅡ群 すり石

ａ類：棒状レキが素材、ｂ類：扁平レキが素材、ｃ類：円レキが素材、ｄ類：その他のもの

ⅩⅢ群 石　鋸

ａ類：刃部が１ヵ所、ｂ類：刃部が複数、ｃ類：未製品・欠損品

ⅩⅣ群 砥　石

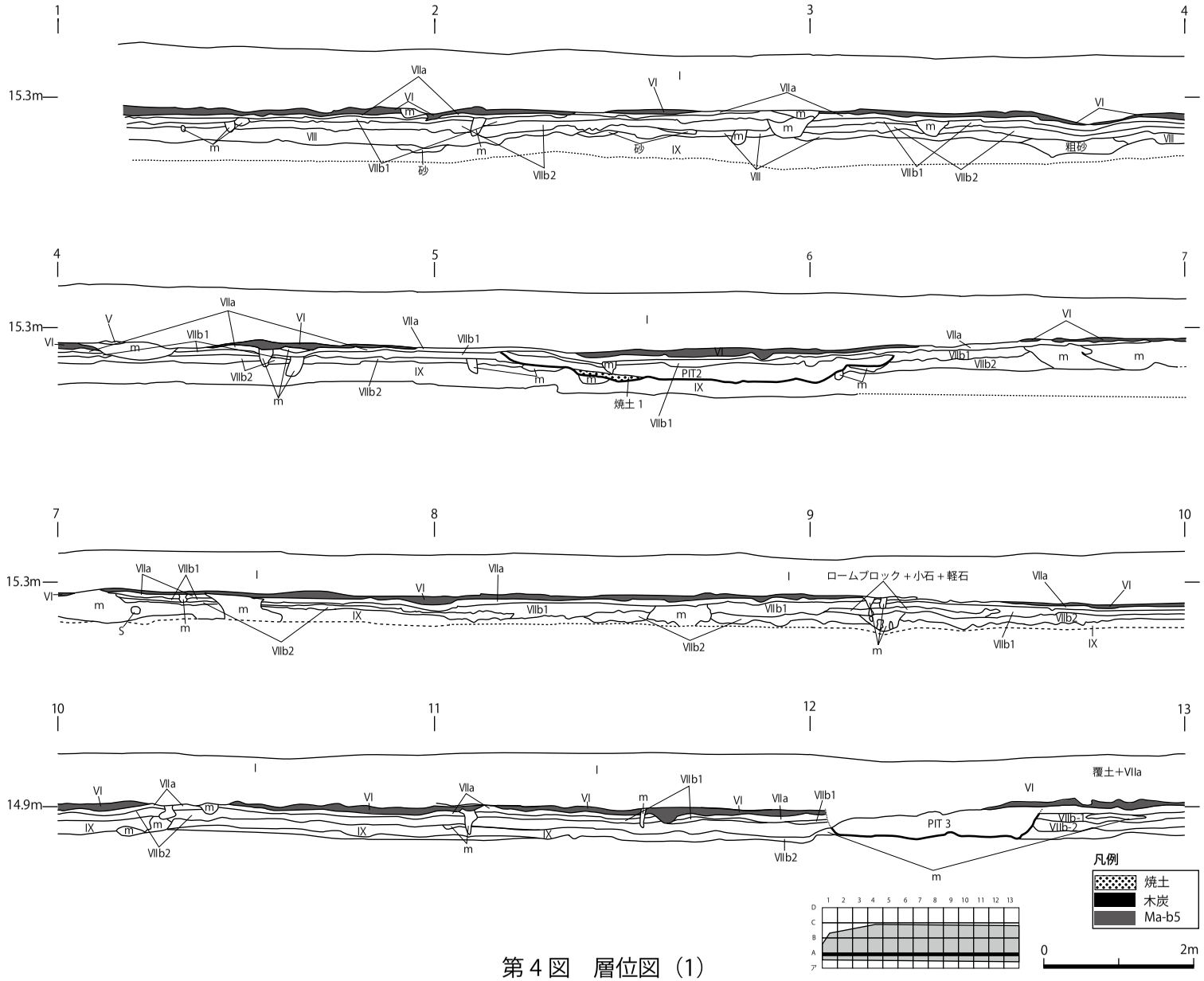
ａ類：研磨面が有溝のもの、ｂ類：研磨面が１ヵ所のもの、ｃ類：研磨面が複数あるもの

ⅩⅤ群 矢柄研磨器

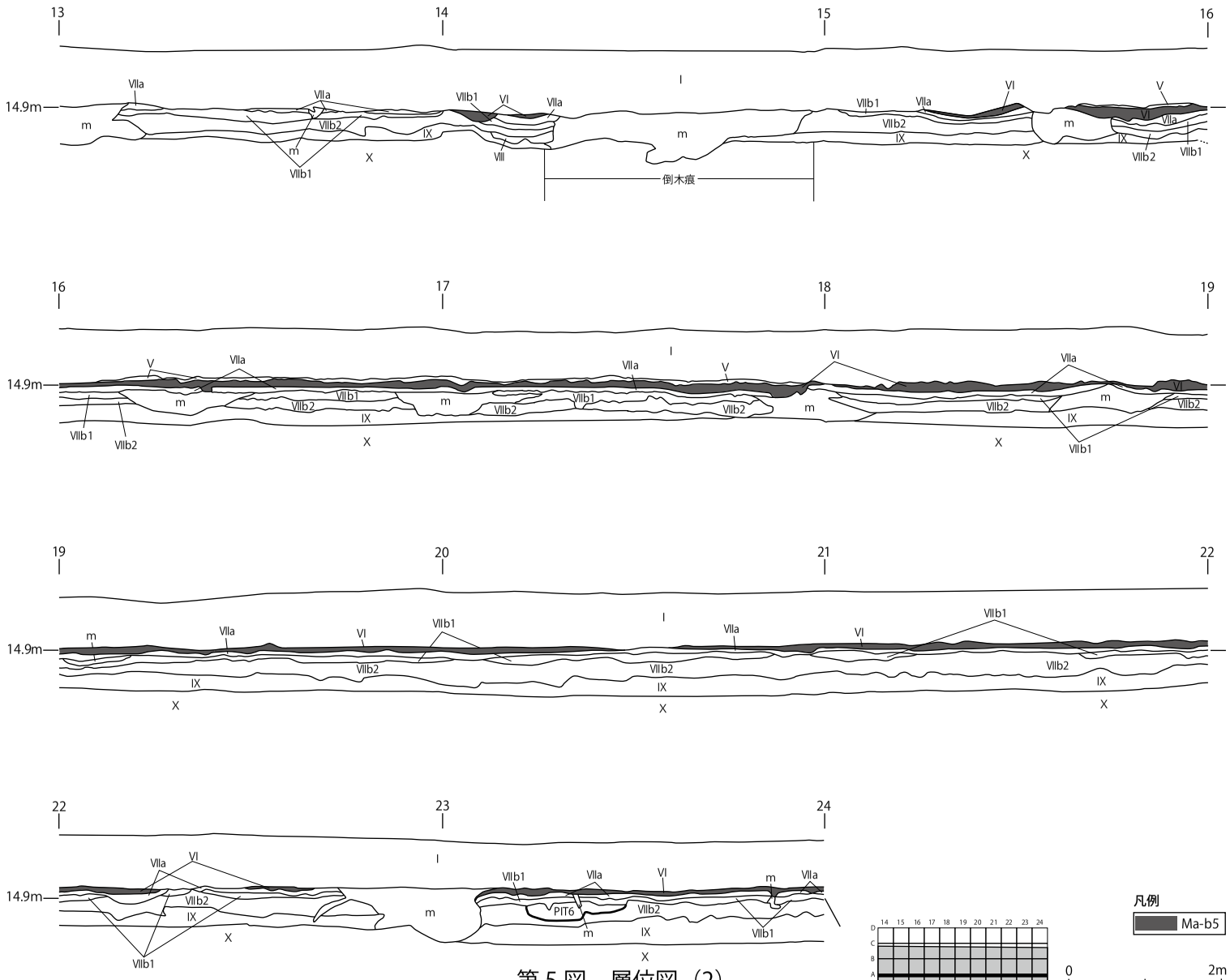
ⅩⅥ群 台石・石皿

(3)　自然遺物

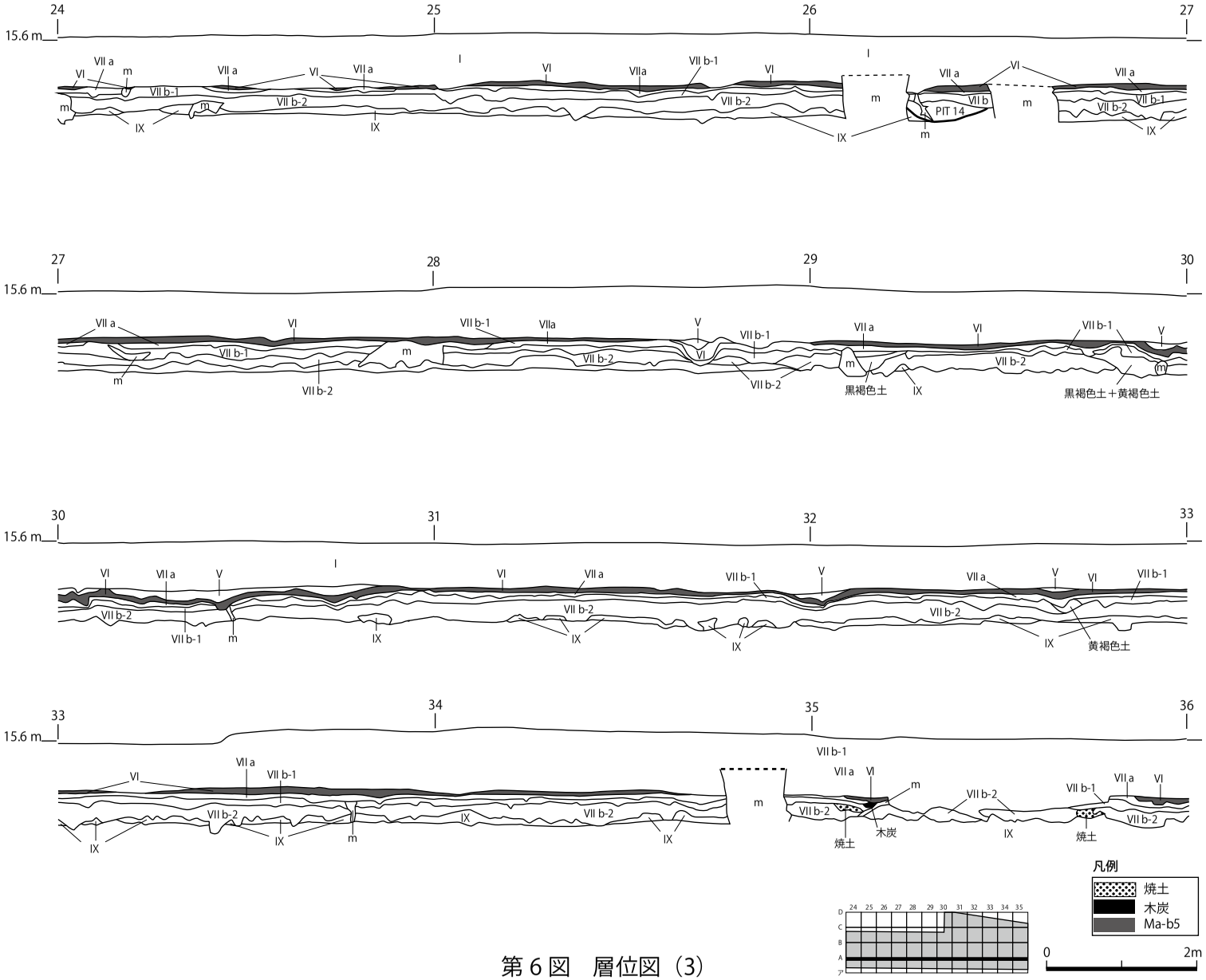
人工的な加工が認められない遺物で、炭化植物遺体、焼土粒、ベンガラ粒、褐鉄鉱、焼けた動物骨が出土した。


15.3m
14.9m
VIIa
VIIb1
VIIb2
VI
I
VII
VIII
IX
V
m
砂
粗砂
PIT2
PIT 3
焼土 1
ロームブロック＋小石＋軽石
覆土＋VIIa
凡例
焼土
木炭
Ma-b5
0
2m

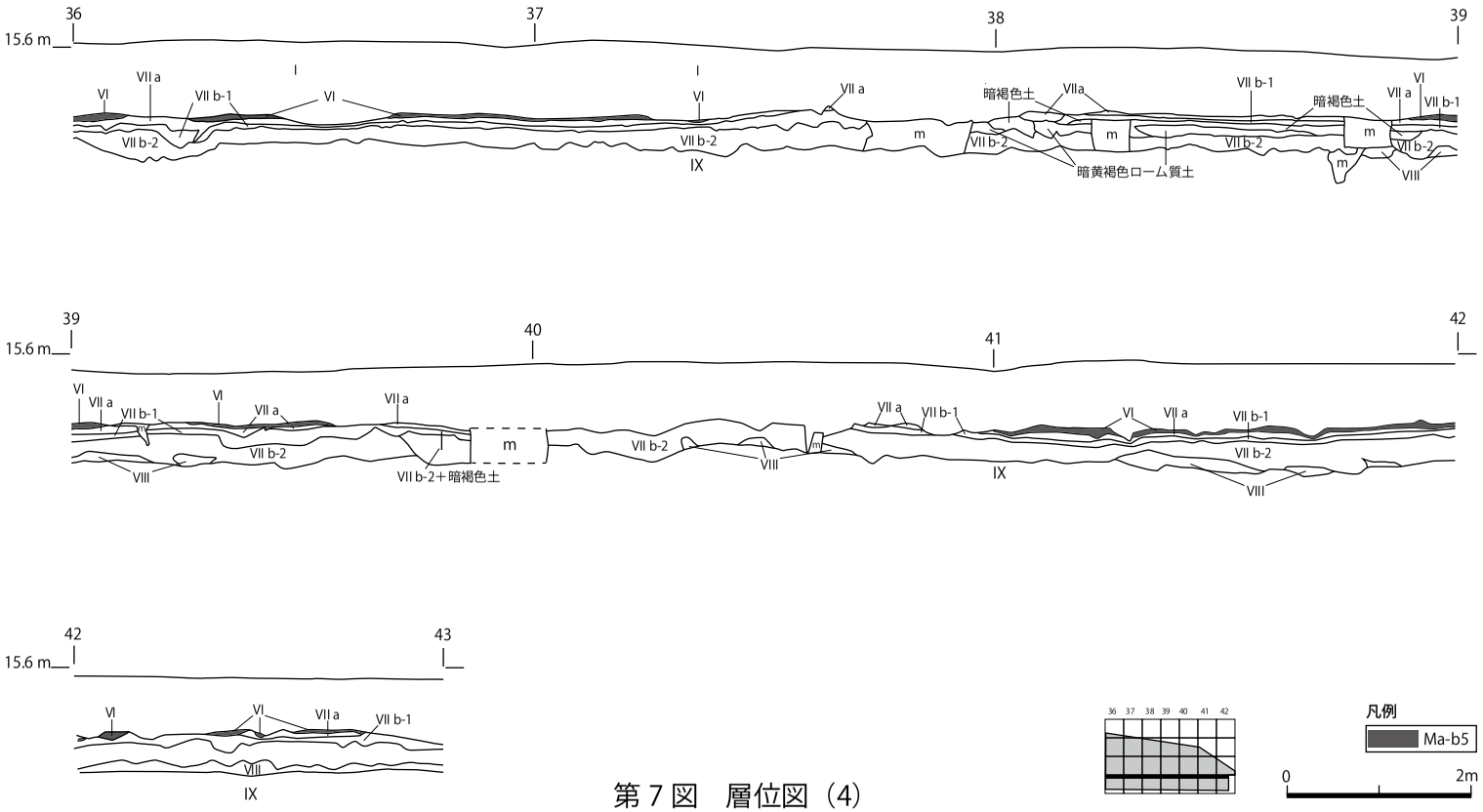
第４図　層位図（1）


13
14
15
16
14.9m
I
VIIa
VIIb1
VI
VIIb2
IX
X
m
VIII
倒木痕
V
17
18
19
20
21
22
23
24
PIT6
凡例
Ma-b5
0
2m

第５図　層位図（2）


24
25
26
27
15.6 m
VII a
VI
m
VII b-1
VII b-2
IX
VII b
PIT 14
28
29
30
V
黒褐色土
黒褐色土＋黄褐色土
31
32
33
黄褐色土
34
35
36
焼土
木炭
凡例
焼土
木炭
Ma-b5
0
2m

第６図　層位図（3）


15.6 m
36
37
38
39
VI
VII a
VII b-1
VII b-2
VIII
IX
m
暗褐色土
暗黄褐色ローム質土
40
41
42
VII b-2＋暗褐色土
43
凡例
Ma-b5
0
2m

第７図　層位図（4）

第２章　遺　構

PIT 2（竪穴住居）

発掘初年度､現道部を重機により掘削し､どの程度土層が残存しているかを確認しながら調査区を開削して行った。その作業の中で、A-5・6 区に残されていた基本層序のⅥ層 (Ma―b5 軽石) を下層に向け掘削したところ、Ⅶａ層下に遺構と考えられる黒褐色土の広がりと炭化木材を含む焼土が確認でき、その側にトレンチを入れ掘削したところ、床面と緩やかながら立ち上がる壁が確認できたため竪穴住居であると判断した。

遺　構 (第 8 図)

形態：平面形―道路区域外まで広がっていたと推察されるが、道路法面工事と畑地耕作により東西両端部が欠落し、遺構全体の平面形を把握できなかった。不整楕円形になるのかもしれない。規模―長軸は不明。現存部分の最大径 5.2 m(北東方向)、壁高―0.3 m。床面の起伏―やや起伏ある。掘り込み形態―皿状。柱穴―未確認。焼土―1 箇所確認。厚さは 5~10 cm である。

層位：覆土を構成する基本土壌は黒褐色土と暗褐色土、暗黄褐色土、軽石からなり、これらが混在して堆積していた。構築層―セクションおよび出土遺物から、Ⅶb-1 層中の構築であると判断する。

遺物分布状況 (第 9 図)

平面分布図―比較的ＰＩＴ中央部にまとまって分布する。垂直分布図―床面から覆土中の標高 14.7 m付近に集中する。

遺物 (第 10・11 図)

土器：第 10 図 1~3 は全て床面出土の第Ⅱ群土器破片である。1・2 は胴部破片で両者とも地文に RL と LR の羽状縄文を施している。3 は底部破片で、RL と LR の羽状縄文を施し、その上に半裁竹管状の工具で引いた縦位の沈線文を付けている。いずれも胎土に繊維を含有させている。

石器：第 11 図 1・2 とも床面出土石器である。1 は石刃を用いたＶ群ａ類ナイフである。黒曜石 (OB) 製である。2 はＸ群ｂ類たたき石で、安山岩 (AND) 製である。この他、剥片が出土している。以下、黒曜石 (OB) 製の石器が主であることから、石質の記載がないものについては黒曜石であると判断していただきたい。

その他：炭化物が出土した。

小　括　道路区域外の耕作地まで広がっていたと推察する竪穴住居跡である。不整楕円形をなすものと考えられるが、床面から焼土が確認された以外、人為的な耕作物の柱穴や貯蔵穴などは見られなかった。焼土が炉であるかは不確かである。規模は現存する長軸の径が 5m を超えているため中型の住居であるが､掘込みが皿状で浅く、しっかりとした壁をつくり出してはいない。構築時期は出土土器および構築層から判断して、縄文中期である。

PIT 3(竪穴住居)

本遺構はア -12 区に位置する竪穴住居跡である。平成 25 年度の調査の際に検出されたが、その大部分は町道の側溝によって撹乱されていたため、全貌は不明である。おそらく A-12 区に続くと思われるが平成 24 年度の調査の際には確認されていない。

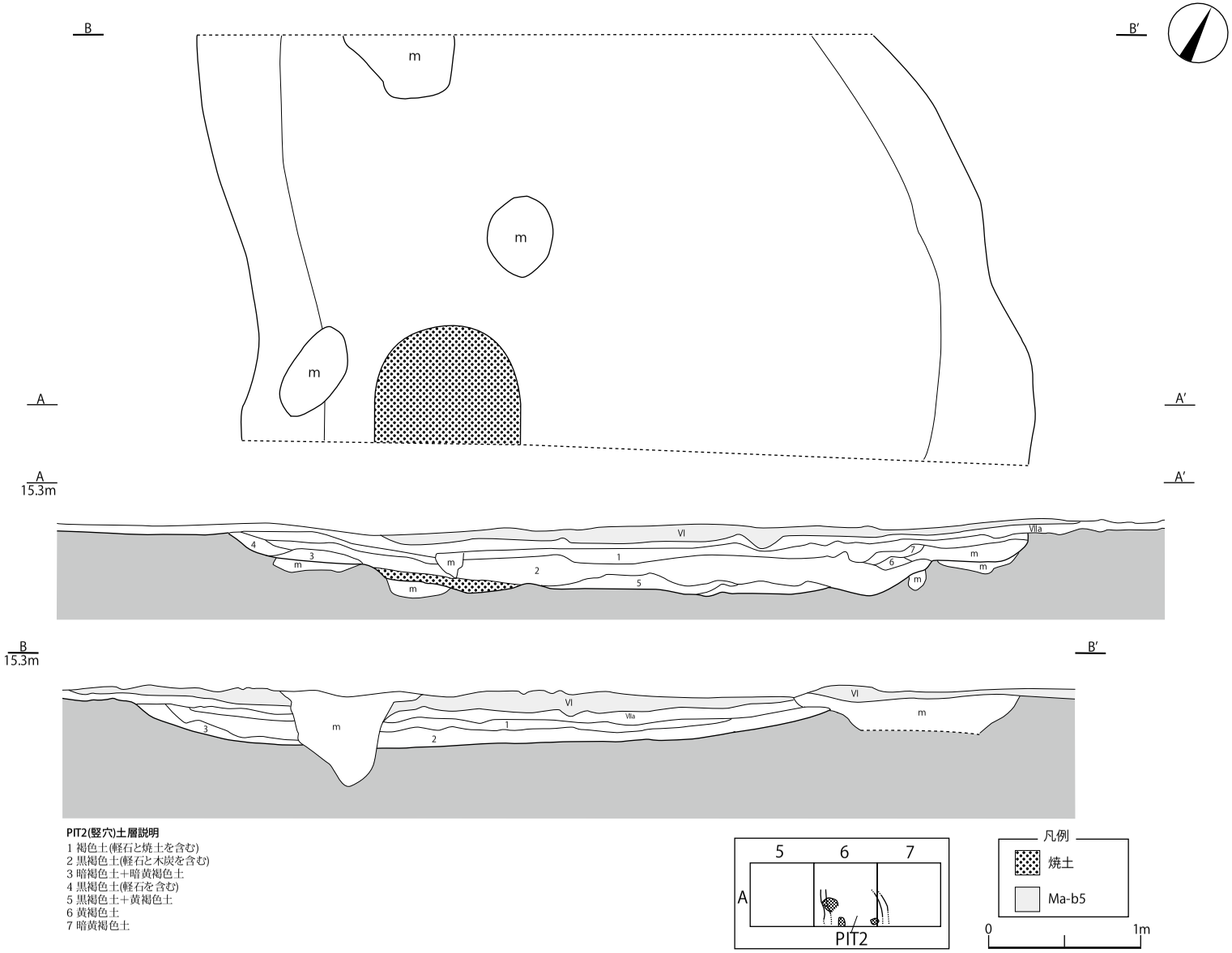
遺　構 (第 12 図)

形態：平面形―不明。規模―掘削部分の最大長は 3.5 m 以上 (東西方向)、壁高―0.25 m 前後。床面の起伏―不明。掘り込み形態―西側はしっかりと掘り込まれているが、東側では緩やかに立ち上がる。本遺構に伴う柱穴及び炉跡は確認されていない。

層位：覆土の上層にⅦb-1 層が確認されており、Ⅶb-1 下層又はⅦb-2 層中の構築と思われる。覆土を構成する基本土壌は、黒褐色土、暗褐色土、明褐色土、明赤褐色土から成り、これらが混在して堆積していた。

遺物分布図 (第 13 図)

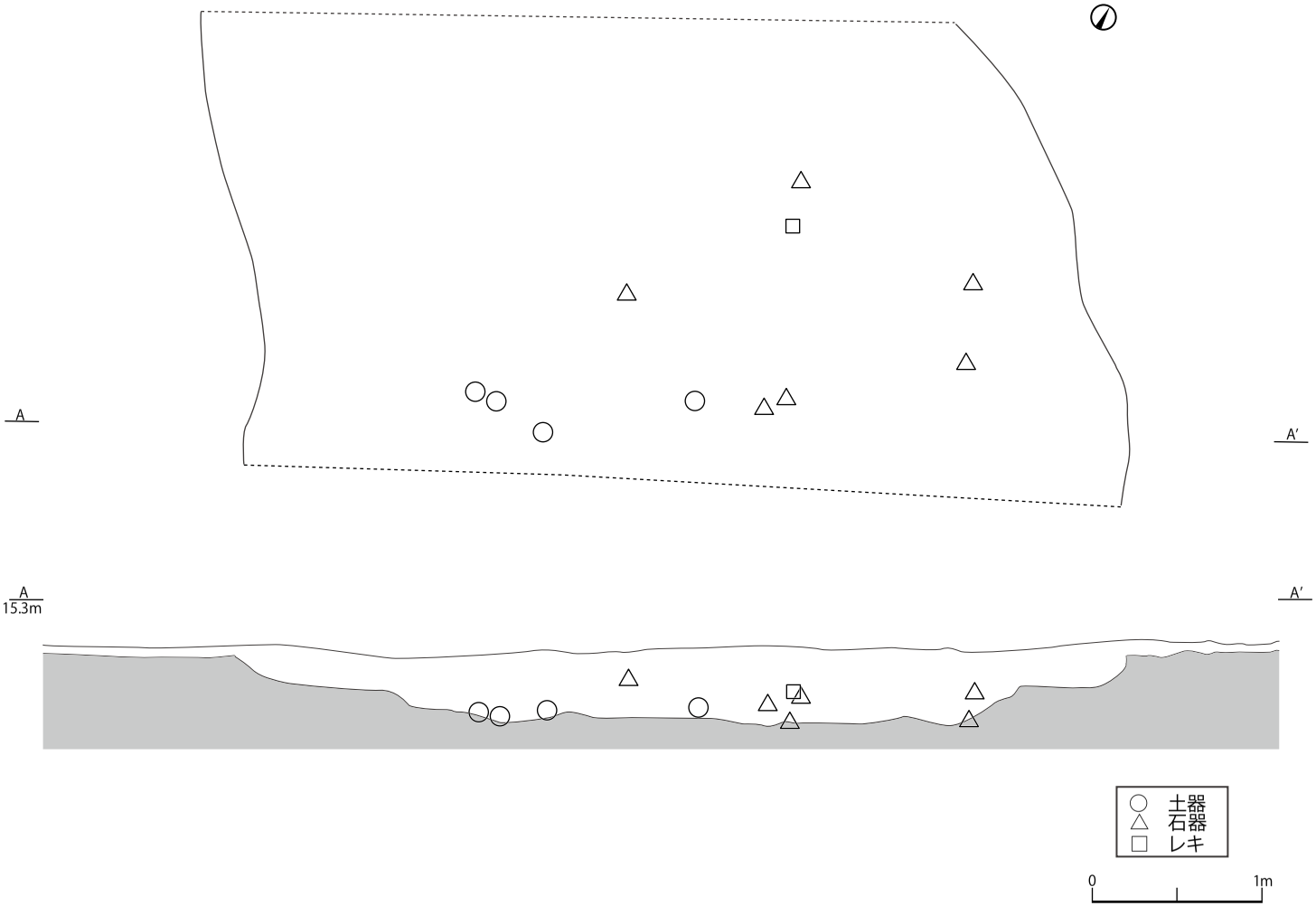
平面分布図―検出部分の南側に集中し、東壁からの出土が全くみられないという偏った分布傾向にある。垂直分布図―14.7 m 付近に分布する。種別による分布の差はみてとれない。



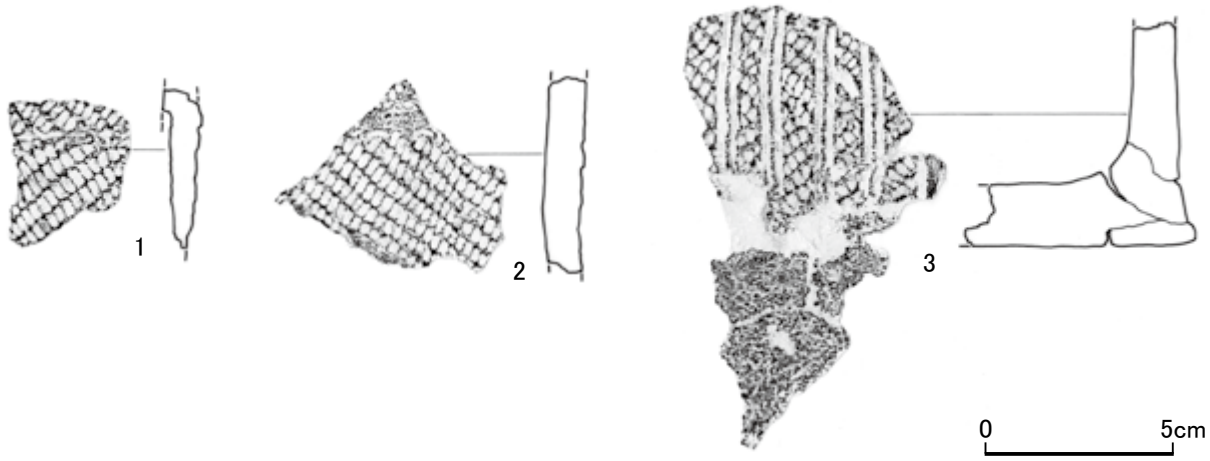
PIT2(竪穴)土層説明

1 褐色土(軽石と焼土を含む)
2 黒褐色土(軽石と木炭を含む)
3 暗褐色土＋暗黄褐色土
4 黒褐色土(軽石を含む)
5 黒褐色土＋黄褐色土
6 黄褐色土
7 暗黄褐色土

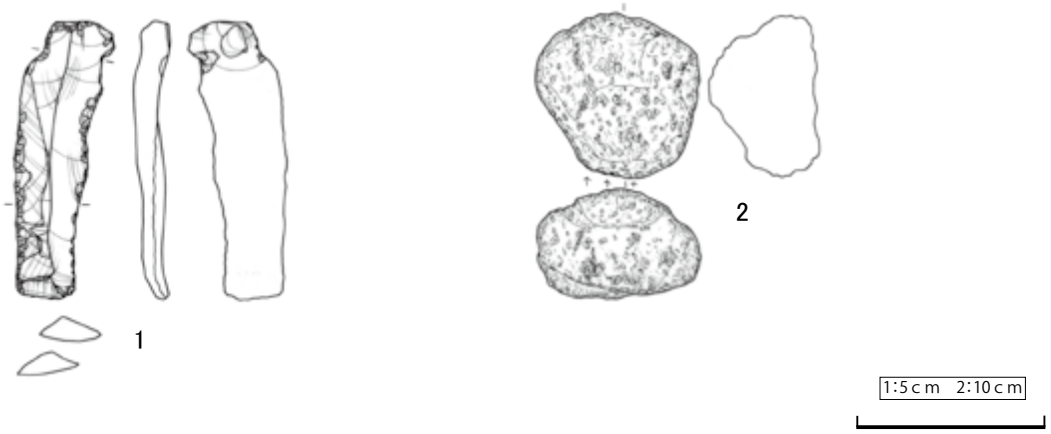
第8図　PIT 2(竪穴)



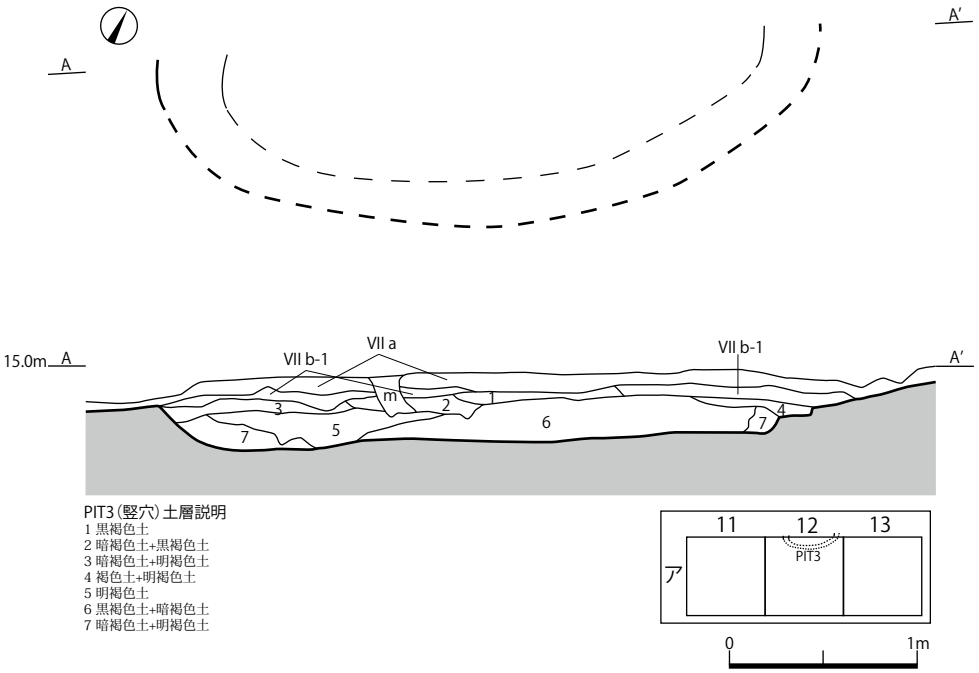
第 9 図　PIT 2 遺物平面・垂直分布図



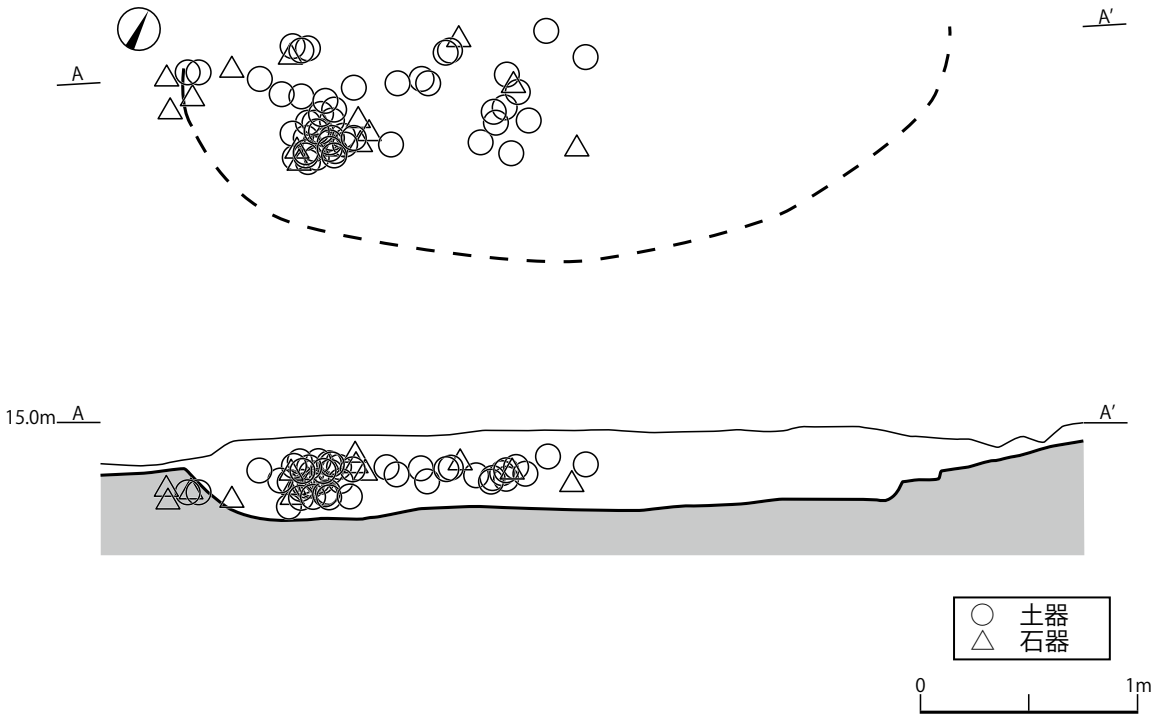
第10図　PIT2　（竪穴）　床直出土土器



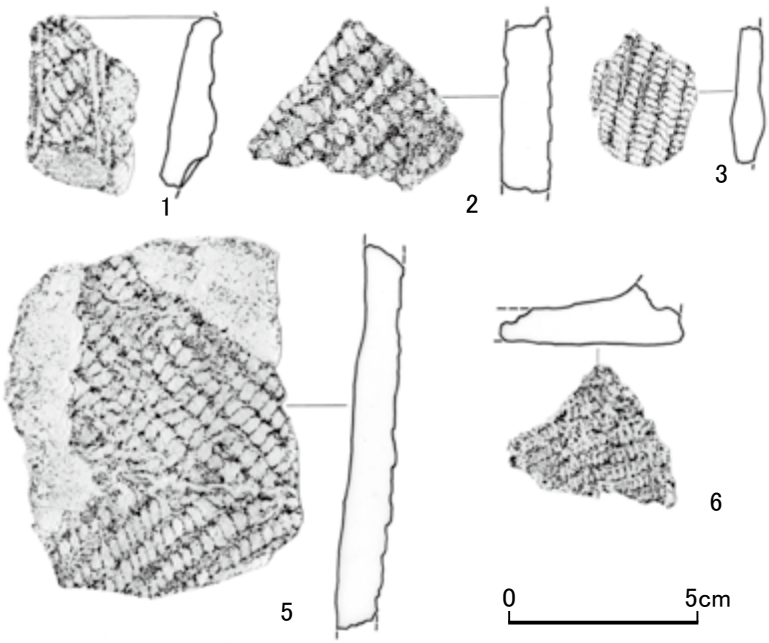
第11図　PIT2　（竪穴）　床直出土石器



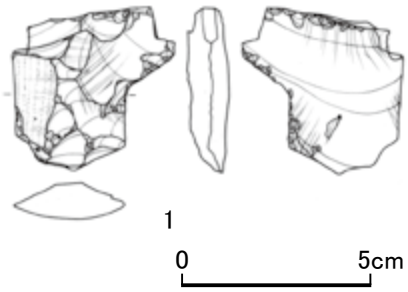
第 12 図　PIT 3（竪穴）



第 13 図　PIT 3 遺物平面・垂直分布図



第14図　PIT3　（竪穴）
覆土出土土器



第15図　PIT3　（竪穴）
覆土出土石器

遺物 (第 14・15 図)

土器：第 14 図 1~6 は覆土中からの出土であり、いずれも第Ⅱ群土器である。1 は口縁部破片であり LR 縄文を施文した後、ヘラ状工具で縦方向に刻みを入れている。2~3 は胴部破片であり LR 縄文を施文。5 は胴部破片であり RL 縄文と LR 縄文を羽状に施文。6 は底部であり、LR 縄文を施文している。いずれも焼成は良好である。

石器：第 15 図は覆土出土、第Ⅷ群 a 類で L 字形に屈曲する形状である。両面調整で、刃部先端は欠損している。

小　括　PIT 3 は、検出面及び出土遺物等から縄文時代中期に帰属すると考えられる。大部分が撹乱を受けているため詳細な内容については不明であるが、遺物出土量や遺構西側に明瞭な立ち上がりが見られる点などを考慮し、竪穴住居跡と判断した。

PIT 7(竪穴住居)

本遺構はア -3・4 区に位置する竪穴住居跡である。Ⅶb-2 層中を人力で掘削したところ黒褐色土の広がりを確認、4 ラインと平行にベルトを設定し、トレンチを掘削して層位を確認した。床面からは炉跡と思われる焼土が検出された。

遺　構(第 16 図)

形態：平面形―不整楕円形。規模―長軸 3.26 m 以上 (東西方向)、短軸 2.7 m(南北方向)。壁高―0.2~0.3 m 前後。床面の起伏―全体的に起伏あり。掘り込み形態―比較的しっかりと掘り込まれている。皿状の掘り込みである。住居跡の内外にわずかに柱穴状の掘り込みが 5 箇所確認されており、住居中央よりやや東側から炉跡と思われる痕跡が近接して 3 箇所検出された。

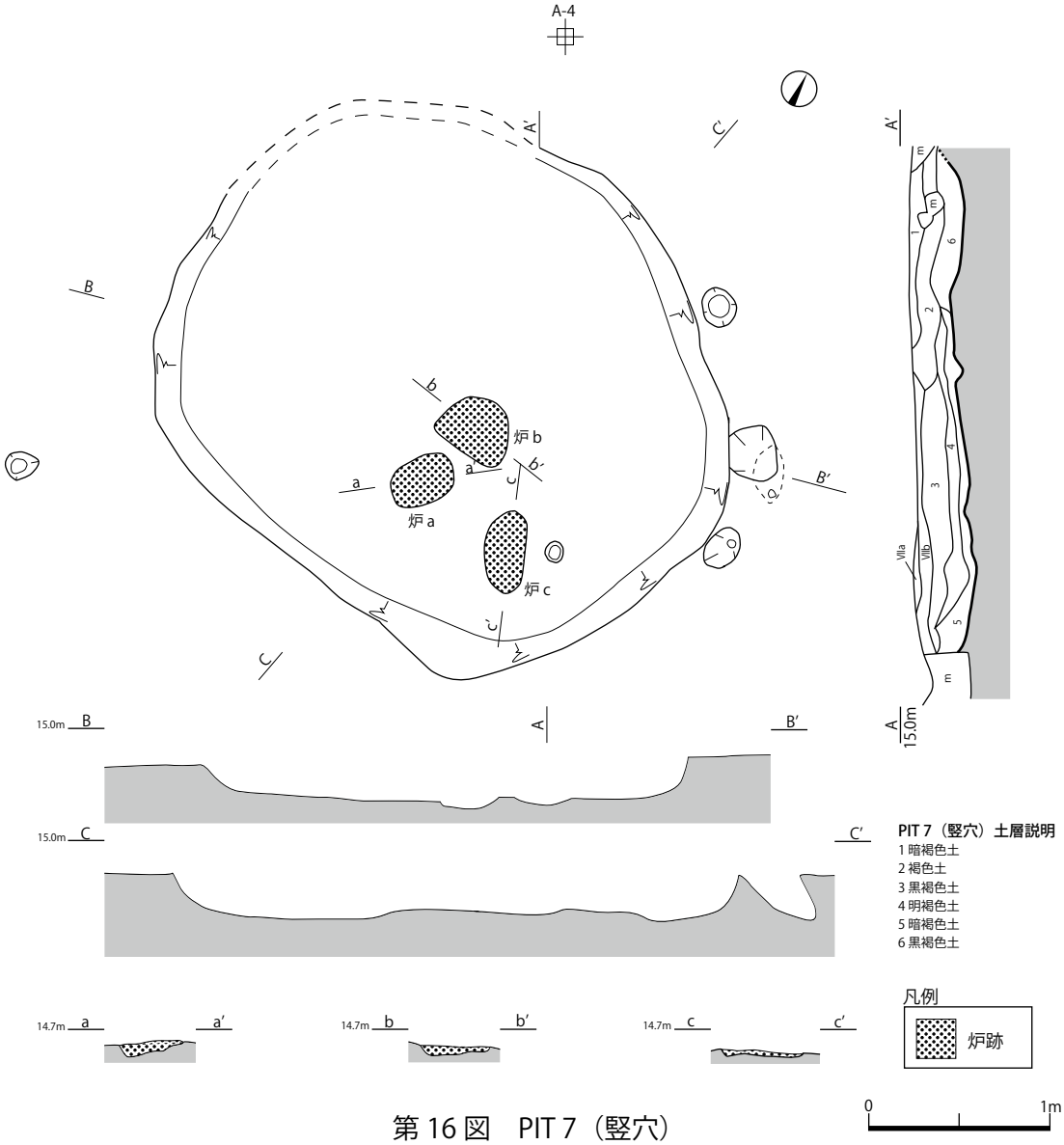
層位：覆土の上層にⅦb-2 層が確認されており、Ⅶb-2 層中の構築と思われる。覆土を構成する基本土壌は、暗褐色土、褐色土、黒褐色土、明褐色土から成り、これらが混在して堆積していた。

遺物分布図 (第 17 図)

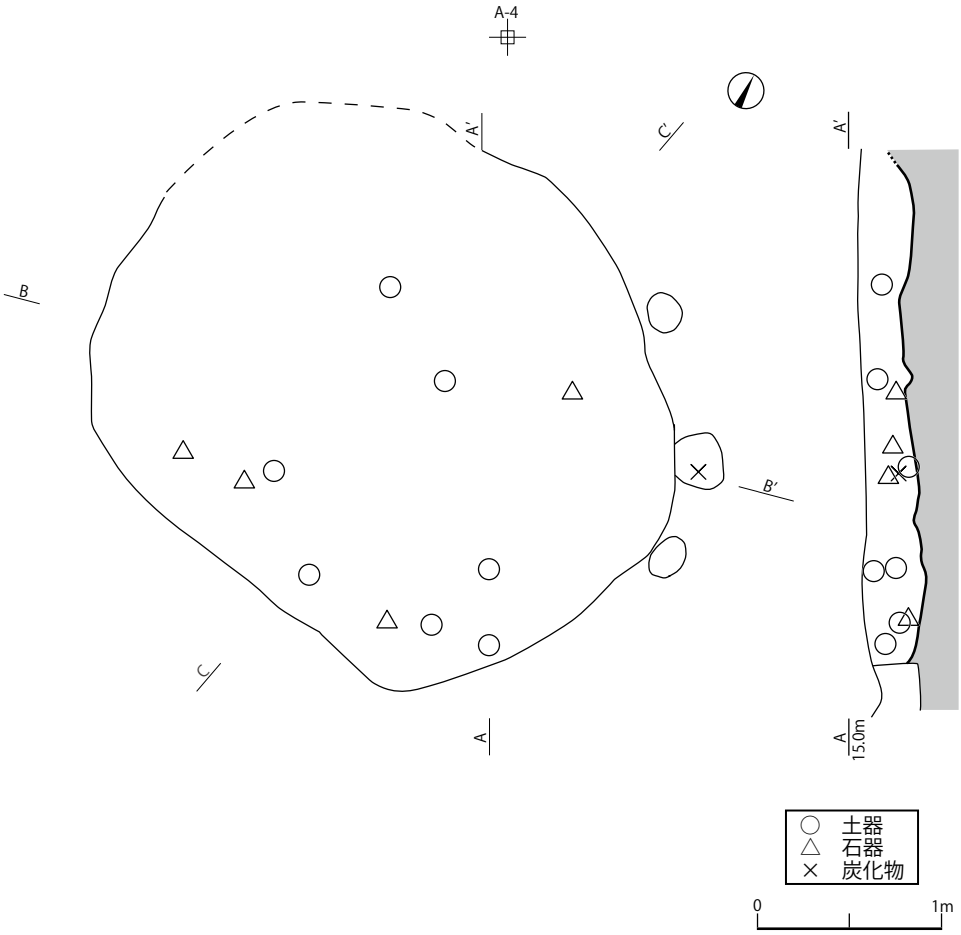
平面分布図―住居跡の南 ~ 東壁沿うような分布傾向にある。垂直分布図―多くは 14.7 m 付近に分布するが、多少ばらつきがある。種別による分布の差は見てとれない。

遺物 (第 18・19 図)

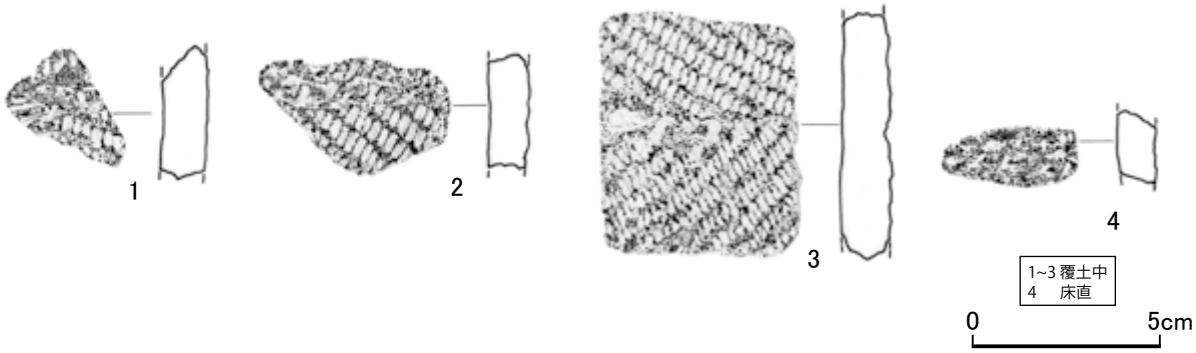
土器：第 18 図 1~3 は覆土からの出土、4 は床直からの出土である。1~4 すべて第Ⅱ群土器の胴部破片である。



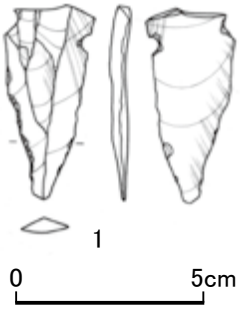
第 16 図　PIT 7（竪穴）



第 17 図　PIT 7 平面・垂直分布図



第18図　PIT7　（竪穴）　覆土出土土器



第19図　PIT7　（竪穴）覆土出土石器

1 は LR 縄文と RL 縄文を羽状に施文、2 は RL 縄文を施文、3 は RL と LR を羽状に施文。4 は外面が剥離しているため、文様は判別できない。

石器：第 19 図 1 は覆土中より出土した第Ⅷ群 a 類であり、ポジ面の左側縁に調整がみられる。黒曜石製で、被熱している。

小　括　PIT 7 は、検出面及び出土遺物等から縄文時代中期に帰属すると考えられる。規模は 3 m 程度とそれほど大きくはないが、炉が近接して 3 箇所構築されている点は特徴的である。床面は全面的に起伏があり平面形も整っていないという形態的特徴からみても、斜里における縄文中期の典型的な竪穴といえるだろう。

PIT 18(竪穴住居)

本遺構はア -36・37 区に位置する竪穴住居跡である。Ⅶb-2 層中を人力で掘削したところプランを確認、36 ライン付近とア ライン付近にトレンチを掘削して土層セクションを確認したところ 3 つの遺構が重複していることが明らかとなった。本遺構は規模や掘り込み等から平成 14 年度の発掘調査で検出された PIT 9 と同一のものと思われる。

遺　構(第 20 図)

形態：平面形―不整円形。規模―最大長は推定 4m 以上 (東西方向)、壁高―0.2~0.36 m 前後。床面の起伏―全体的に起伏あり。掘り込み形態―皿状の掘り込みである。以前の調査では柱穴が 5 箇所確認されている。住居中央部が別遺構によって破壊されているため、炉の有無については不明である。

層位：覆土の上層にⅦb-2 層が確認されているため、Ⅶb-2 層中の構築と思われる。覆土を構成する基本土壌は、黒色土、黒褐色土、暗褐色土、黄褐色ロームから成り、これらが混在して堆積していた。

遺物分布図 (第 20 図)

平面分布図―出土遺物のほぼ全てが住居中央より北側に集中するという偏った分布傾向にある。石器は土器集中箇所よりも、さらに北に分布する傾向がみてとれる。垂直分布図―14.4 m 付近に帯状に分布する。種別による分布の差は平面と同様である。

遺物 (第 21・22 図)

土器：第 21 図 1~6 はすべて覆土中からの出土であり、いずれも第Ⅱ群土器である。1 は口縁 ~ 頸部破片である。口唇は平坦で、口縁部に RL 縄文を施文した後にヘラ状工具で刻みを入れており、山形突起を 2 箇所に有する。外面には RL 縄文を施文した後、口縁肥厚部直下に竹管状工具による円形刺突文を巡らせている。内面にも RL 縄文を施文している。2 は、胴部破片である。太さの異なる原体を用いて LR 縄文と RL 縄文を羽状になるように施文している。3~6 も胴部破片である。3 は LR と RL の羽状縄文であり、4 は LR 縄文、5 は LR 縄文を施文、6 は風化により文様の判別がつかない。

石器：第 22 図 1、2 はⅤ群 a 類であり、ポジ面の側縁に調整が見られる。

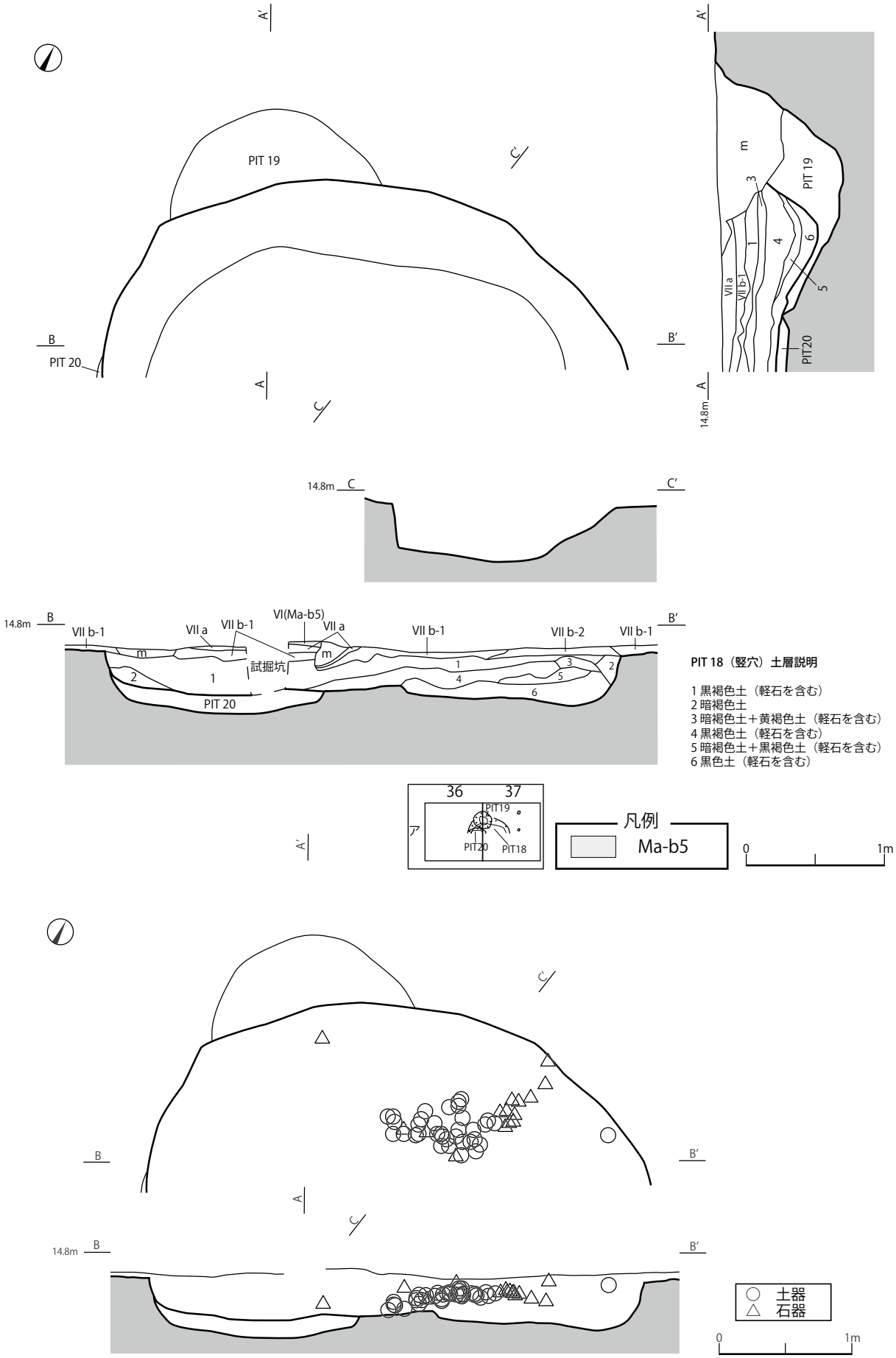
小　括　PIT 18 は、検出面及び出土遺物等から縄文時代中期に帰属すると考えられる。また、周辺には複数の遺構が重複して構築されており、過年度の遺構を含め 6 つが確認されていることから、何らかの理由によりこの場所に執着して遺構を構築していたのであろう。また本年度検出された PIT 19 と 20 を切って構築されているため、これらの遺構よりも新しい時期の構築であることは明らかである。

PIT 24(竪穴住居)

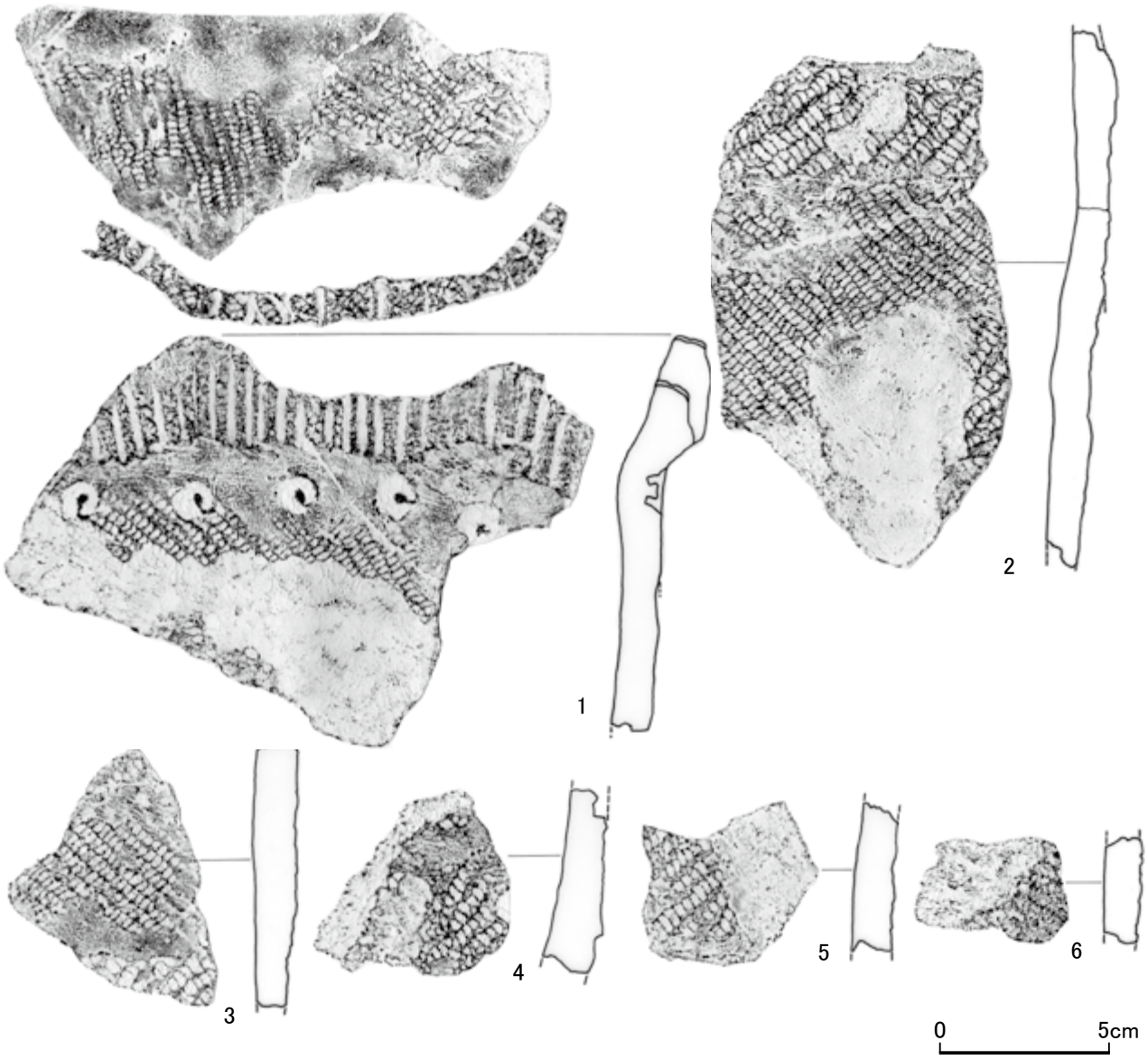
本遺構は A35・36 区に位置する竪穴住居である。

遺　構(第 23 図)

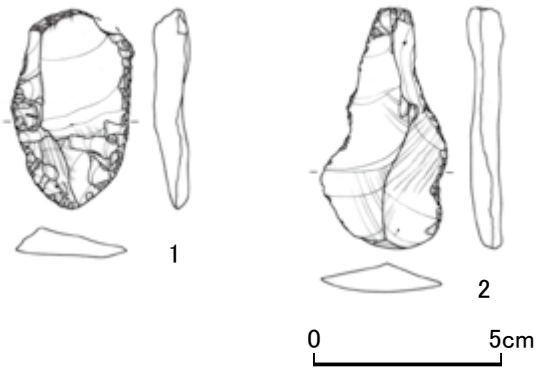
形態：平面形―不整楕円形。規模―長軸 6.0 m(北東方向)、短軸 5.41 m(北西方向)、深さ 0.22~0.24 m を測る。東側から北東側にかけて倒木による撹乱をうけているが、断面形態は凹形を呈し、床面から外傾して壁面が立ち上がる。床面は全体的に平坦である。竪穴の内部には、柱穴と推測される小穴 14 基と、覆土中から焼土 4 基、床直上から焼土 1 基が検出された。柱穴はいずれも不整楕円形を呈し、規模は最大長 0.10~0.12 m 前後、深さ



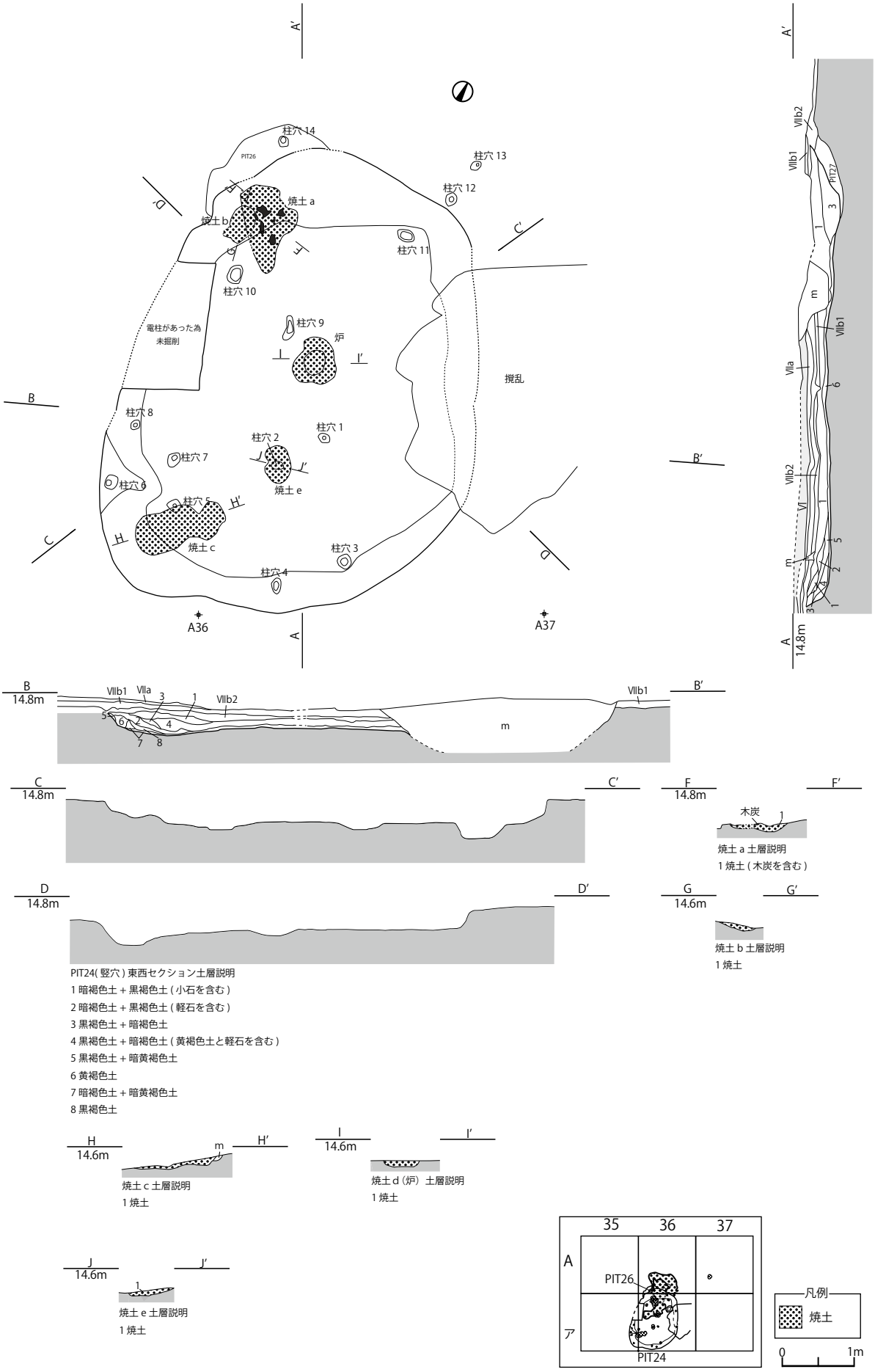
第 20 図　PIT 18（竪穴）及び遺物平面・垂直分布図



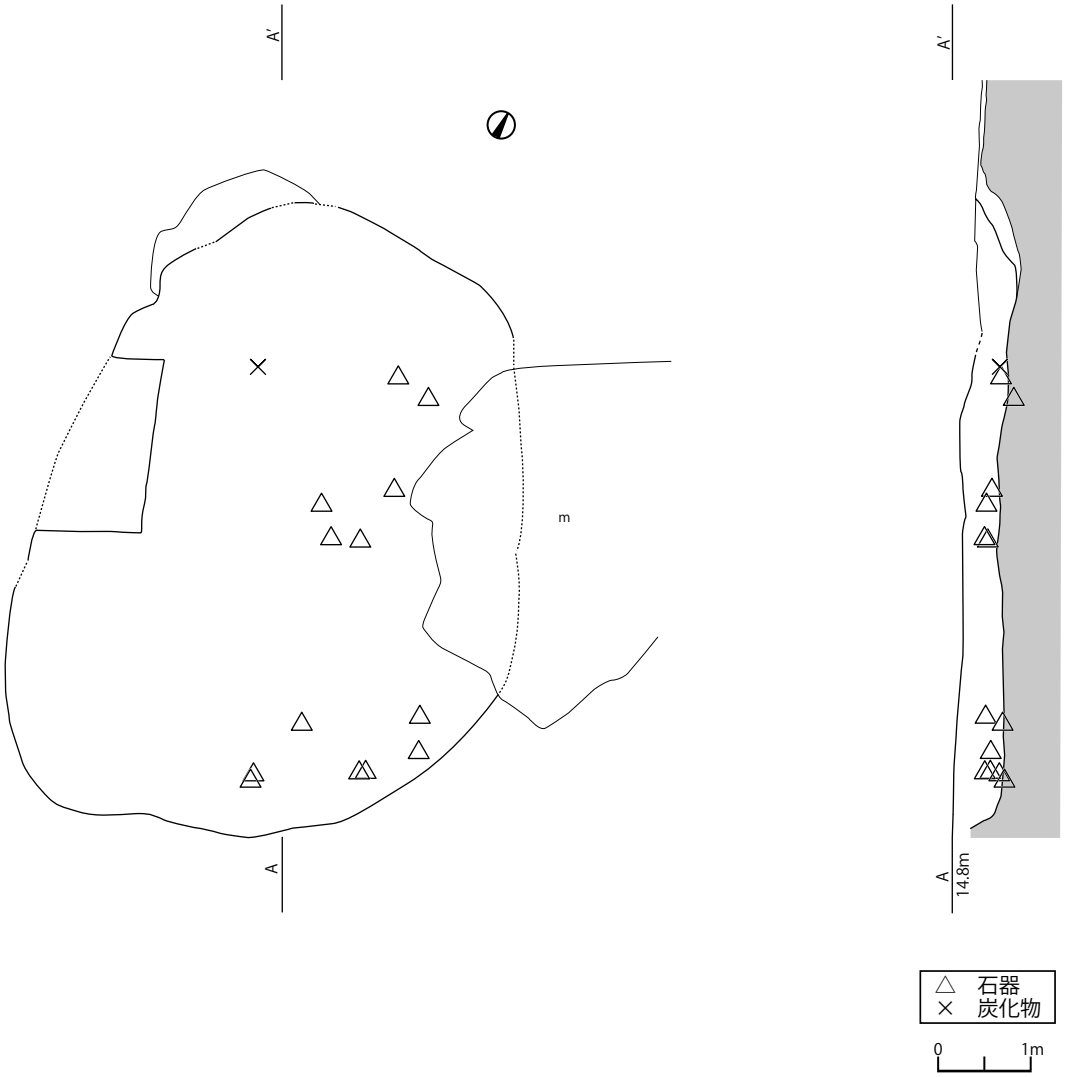
第21図　PIT18　（竪穴）　覆土出土土器



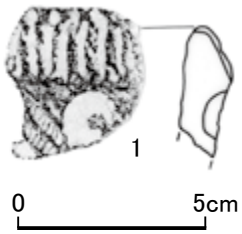
第22図　PIT18　（竪穴）　覆土出土石器



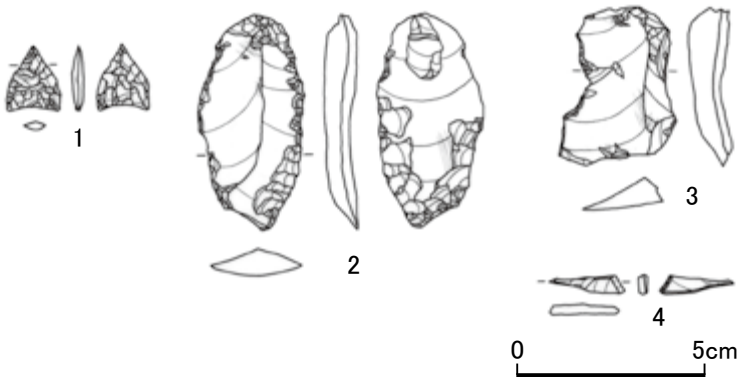
第 23 図　PIT 24（竪穴）



第 24 図　PIT 24 遺物平面・垂直分布図



第25図　PIT24　（竪穴）
覆土出土土器



第26図　PIT24　（竪穴）
覆土出土石器

0.06~0.10m 前後を測る。覆土は全て単層であり、明瞭な柱痕跡は認められない。焼土 a は 1 層中、焼土 b・c・e は 4 層中からの検出である。床直上で検出した焼土 1 基は検出位置から炉と推測される。

層位：覆土は上層 (1 層)、下層 (3・6 層)、壁際の堆積層 (2~5 層) からなる。上層は軽石が目立つ黒褐色土である。下層は床面直上土に相当する。壁際の堆積層は 1 層に似た黒褐色土で壁面のほぼ全周で確認できる。検出面はⅦb-2 層上面。

切り合い関係：PIT26 を切る。

遺物分布状況 (第 24 図)

平面分布図—PIT 中央部と南東側に集中して分布している。出土している遺物は、ほぼ全てが石器である。垂直分布図—覆土中の標高 14.4 m 付近に分布する。

遺物 (第 25・26 図)

土器：第 25 図 1 は覆土からの出土である。トコロ 6 類の口縁部片で、RL 縄文を施文した後、口縁部に縦方向の刻みと竹管状工具による円形刺突文を施文。

石器：第 26 図 1~4 は覆土からの出土である。1 は第Ⅰ群 b 類である。2 はⅤ群 a 類である。ポジ面の縁部に調整。ネガ面の上端部に調整あり。3・4 は第Ⅶ群 a 類で、3 はポジ面の側縁に調整あり、4 はネガ面の左側縁に調整あり。この他、剥片が出土している。

その他：木炭が 1 点出土した。

小　括　本遺構は、検出面及び出土遺物から、縄文時代中期に帰属すると考えられる。

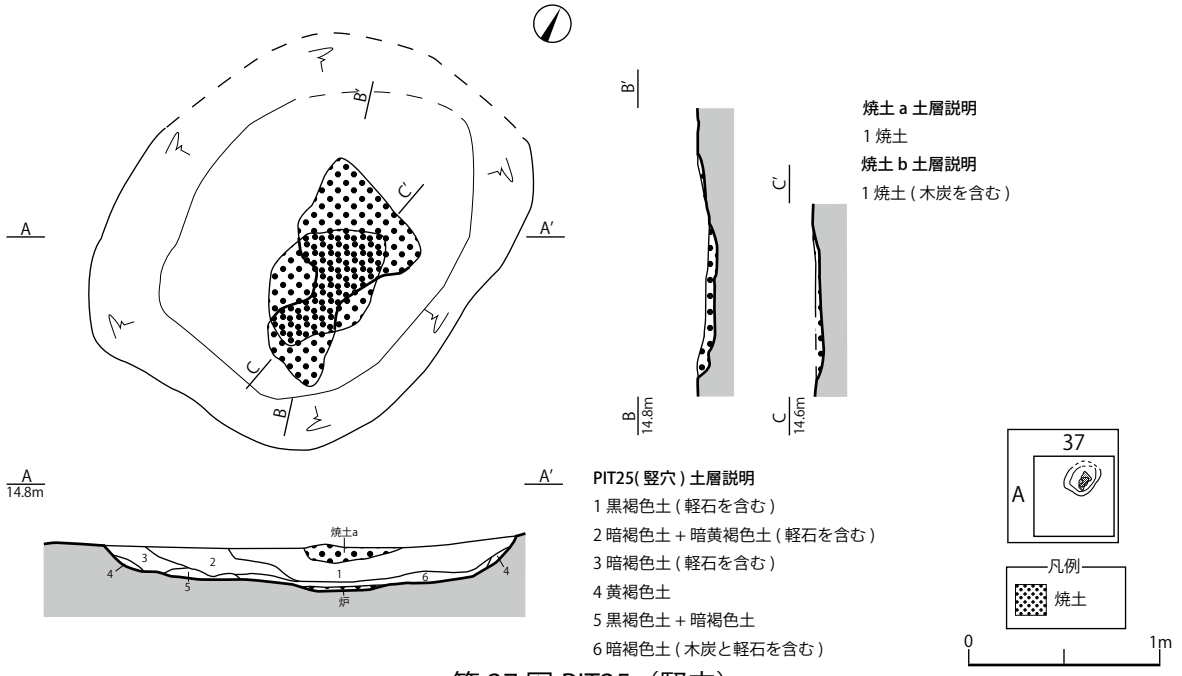
PIT25(竪穴住居)

本遺構は A37 区に位置する竪穴住居である。

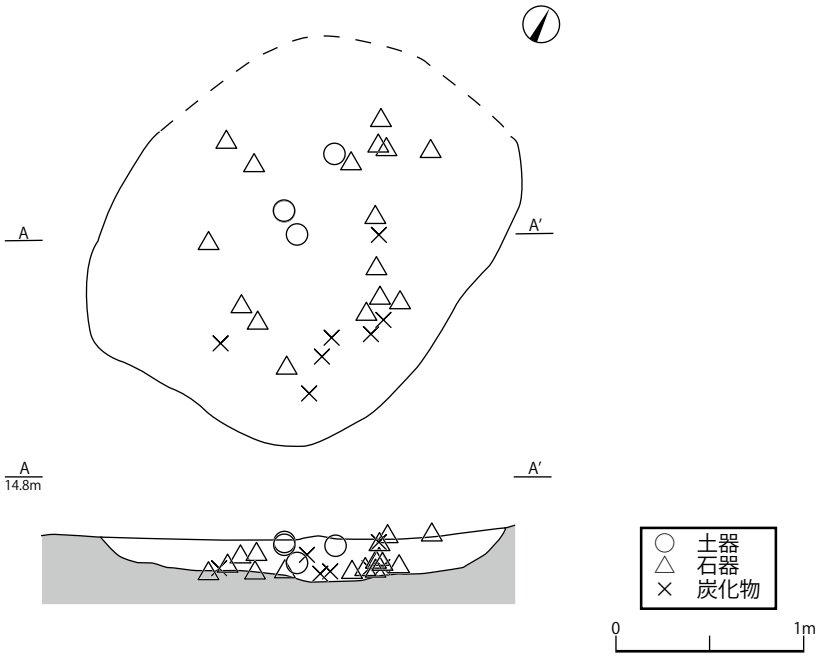
遺　構(第 27 図)

形態：平面形—楕円形。規模—長軸 2.2 m(北西方向)、短軸 1.82 m(北東方向)、深さ 0.14~0.18 m を測る。断面形態は凹形を呈し、床面から外傾して壁面が立ち上がる。床面は全体的に平坦である。竪穴の内部には柱穴と推測される小穴は検出されなかった。焼土は 1 層中からの検出である。床直上で検出した焼土 1 基は検出位置から炉と推測される。

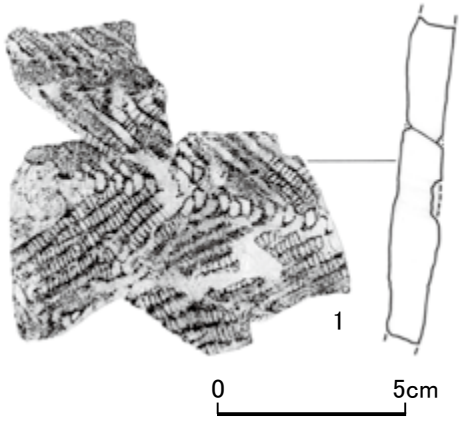
層位：覆土は上層 (1・2 層)、下層 (5・6 層)、壁際の堆積層 (3・4 層) からなる。上層は軽石が目立つ黒 ~ 褐色土である。下層は床面直上土に相当し、少量ながら木炭と軽石を含む。壁際の堆積層は 1 層に似た黒 ~ 褐



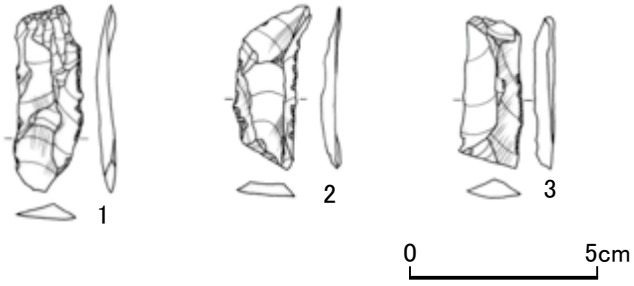
第 27 図 PIT25（竪穴）



第 28 図 PIT25 遺物平面・垂直分布図



第29図　PIT25（竪穴）
覆土出土土器



第30図　PIT25　（竪穴）
覆土出土石器

色土で北側の一部を除き、壁面のほぼ全周で確認できる。検出面は、Ⅶb-2 層上面。

遺物分布状況 (第 28 図)

平面分布図―比較的に散逸的に分布しているが、PIT25 南西側にやや集中して分布している。出土している遺物は石器が占める割合が大きい。垂直分布図―覆土中の標高 14.3~14.4 m付近に集中して分布している。

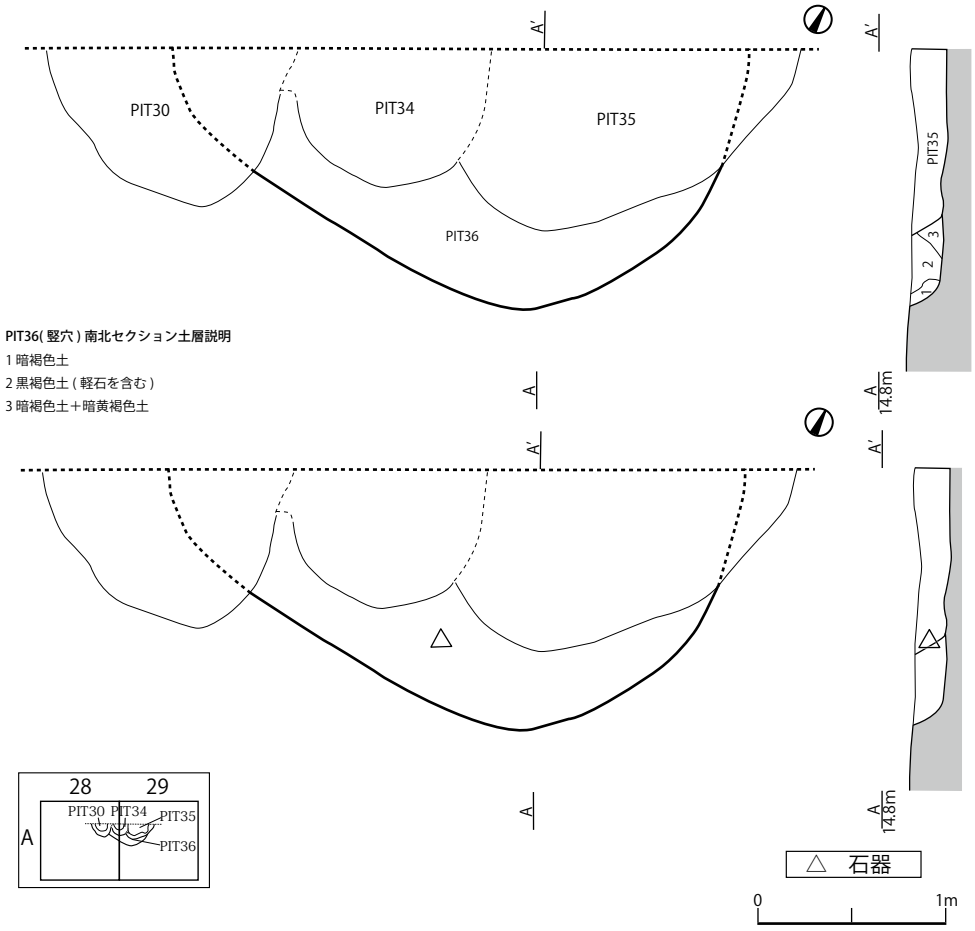
遺物 (第 29・30 図)

土器：第 29 図 1 は覆土からの出土である。第Ⅱ群の胴部片で、結束羽状縄文を施文した後、擦り消し無文帯を形成。

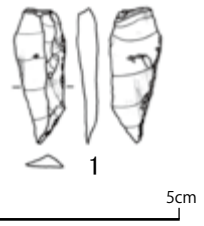
石器：第 30 図 1~3 は覆土からの出土である。1~3 は第Ⅶ群 a 類で、1・2 はポジ面の両縁部に調整あり。3 はポジ面の右側縁に調整あり。この他、剥片が出土している。

その他：覆土より木炭が 6 点、焼土 a から木炭が 1 点出土している。

小　括　本遺構は、検出面及び出土遺物から、縄文時代中期に帰属すると考えられる。



第 31 図 PIT36（竪穴）及び 遺物平面・垂直分布図



第 32 図 PIT36 出土石器

PIT 36(竪穴住居)

本遺構は A29 区に位置する竪穴住居である。

遺　構 (第 31 図)

形態：本遺構は調査範囲内につき、その一部を検出したに過ぎない。そのため、本遺構の全容は不明瞭である。平面形―不整楕円形ないし楕円形を呈するものと推測される。調査した範囲につき、最大長 2.38m 以上 (北西方向)、深さ 0.14 m 前後を測る。断面形態は凹形を呈し、床面から外傾して壁面が立ち上がる。床面は全体的に平坦である。竪穴の内部には柱穴や炉などの施設が検出されなかった。

層位：別 PIT に切られているため、本遺構の覆土は壁際の堆積層 (1~3 層) のみである。黒 ~ 褐色土を主体とし、ところにより軽石を含む。検出面はⅦ b-2 層上面。

切り合い関係：PIT30・34・35 に切られる。

遺物分布状況 (第 31 図)

平面分布図―PIT34・35 によって切られているため、全体の遺物分布傾向はわからない。出土している遺物は石器のみである。垂直分布図―覆土中の 14.5 m 付近に分布する。

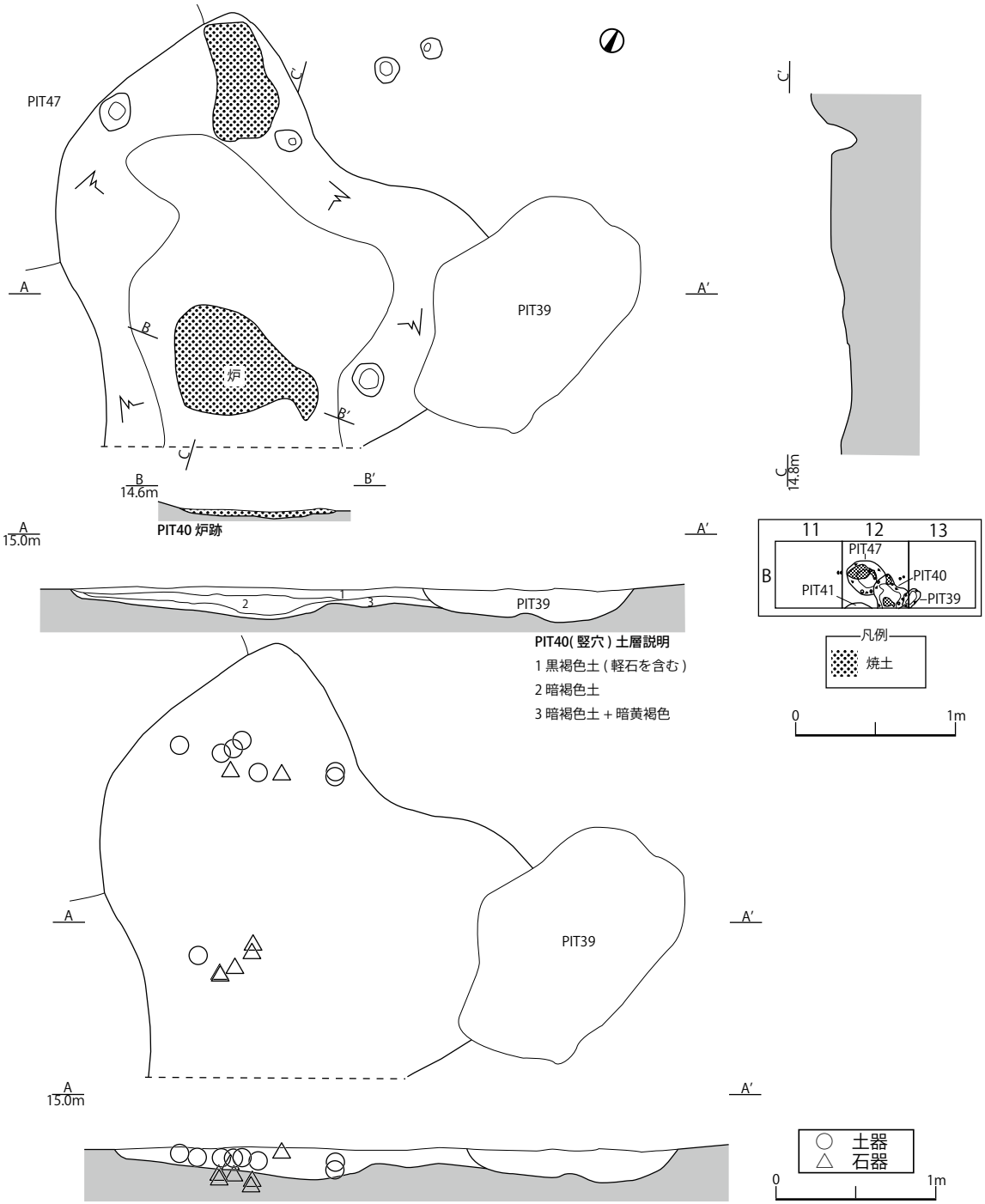
遺物 (第 32 図)

石器：第 32 図は覆土からの出土である。第Ⅶ群 a 類で、両面の縁部に調整あり。

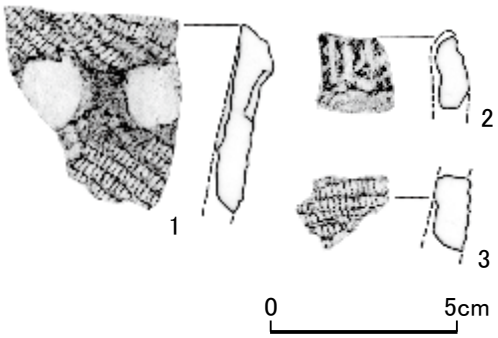
小　括　本遺構は、検出面と切り合い関係から縄文中期に帰属すると考えられる。

PIT 40(竪穴住居)

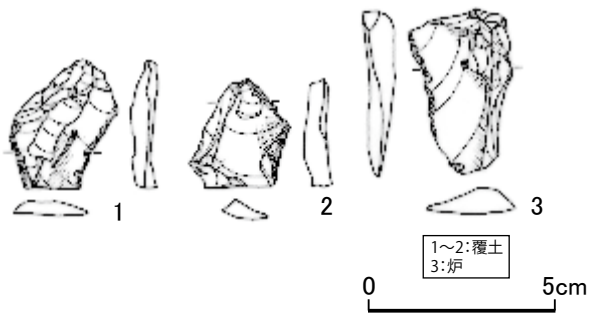
本遺構は B12 区に位置する竪穴住居である。



第33図　PIT40　（竪穴）及び遺物平面・垂直分布図



第34図　PIT40　（竪穴）
覆土出土土器



第35図　PIT40　（竪穴）
出土石器

遺　構 (第 33 図)

形態：本遺構は調査範囲内につき、その一部を検出したに過ぎない。そのため、本遺構の全容は不明瞭である。平面形―不定形を呈するものと推測する。調査した範囲につき、最大長 2.64 m 以上 (北東方向)、深さ 0.10 m 前後を掘る。断面形態は凹型を呈し、床面からゆるやかに壁面が立ち上がる。床面は緩やかな起伏がある。竪穴の内部には、柱穴と推測される小穴 5 基と、覆土中から焼土 1 基、床直上から焼土 1 基が検出された。柱穴はいずれも不整楕円形を呈し、規模は最大長 0.22~0.26 m 前後、深さ 0.11~0.12 m 前後を測る。覆土は単層であり、明瞭な柱痕跡は認められない。焼土 1 層中からの検出である。床直上で検出した焼土 1 基は検出位置から炉と推測される。

層位：覆土は上層 (1・2 層)、下層 (3 層) からなる。上層は軽石が目立つ黒～暗褐色土である。下層は床面直上土に相当する。検出面はⅦb-2 層下面。

切り合い関係：PIT39 に切られ、PIT47 を切る。

遺物分布図 (第 33 図)

平面分布図―PIT の北東側と南西側に集中して分布している。出土している遺物は土器の占める割合が大きい。垂直分布状況―覆土中の 14.4 m~14.6 m付近に分布する。

遺物 (第 34・35 図)

土器：第 34 図 1~3 は覆土からの出土である。1 はトコロ 6 類の口縁部片で、RL 縄文を施文した後、擦り消し帯を形成した後に棒状工具による四角い押し形文を施文。2 はトコロ 6 類の口縁部片で、LR 縄文を施文した後、縦方向の刻みを施文。3 は第Ⅱ群の胴部片で LR 縄文を施文。

石器：第 35 図 1・2 は覆土、3 は炉からの出土である。1・2 は第Ⅶ群 a 類で、1 はポジ面の側縁に調整あり。2 はポジ面の縁部に調整あり。3 は第Ⅶ群 a 類でネガ面の縁部に調整あり。被熱による変色等はみうけられない。

小　括　本遺構は、出土遺物から縄文時代中期に帰属すると考えられる。

PIT47(竪穴住居)

本遺構は B12 区に位置する竪穴住居である。

遺　構 (第 36 図)

形態：平面形―円形。規模―長軸 3.10 m(東西方向)、短軸 2.69 m(南北方向)、深さ 0.04~0.09 m を測る。断面形態は凹形を呈し、床面から緩やかに壁面が立ち上がる。床面は全体的に平坦である。竪穴の内部には、柱穴と推測される小穴 5 基と、覆土中から焼土 1 基が検出された。柱穴はいずれも不整楕円形を呈し、規模は最大長 0.22~0.26 m 前後、深さ 0.06~0.10 m 前後測る。覆土は単層であり、明瞭な柱痕跡は認められない。焼土は 1 層中からの検出である。

層位：覆土は上層 (1 層)、下層 (2 層) からなる。上層は軽石が目立つ黒褐色土である。下層は床面直上土に相当する。検出面は、Ⅶb-2 層下面。

切り合い関係：PIT 40 に切られる。

遺　物　図化していないが、土器片と剥片が出土している。

小　括　本遺構は、切り合い関係から縄文中期以降に帰属すると考えられる。

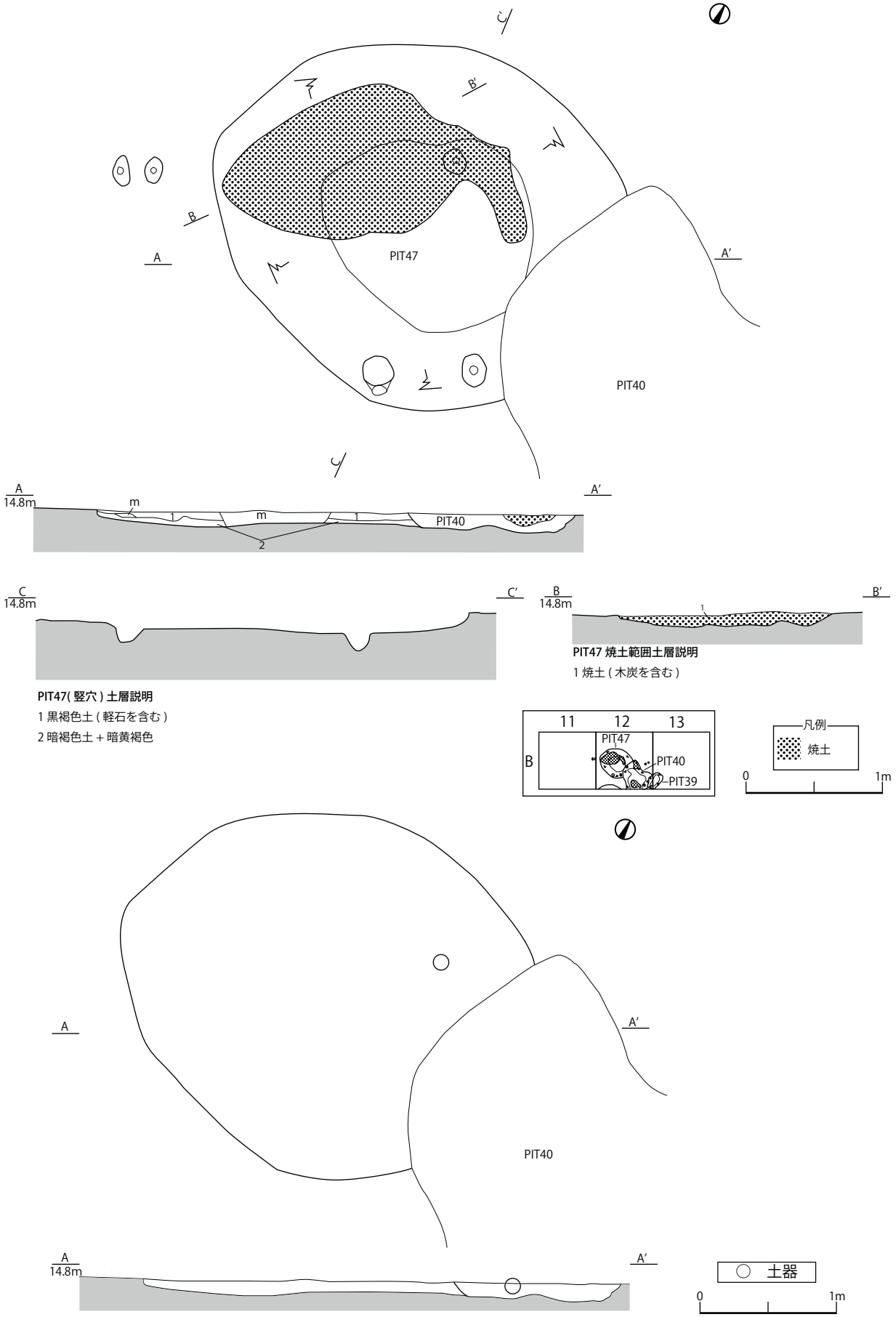
PIT 1(土坑)

現道下の A-3 区を下層に向け掘削中、Ⅶb 層面より黒褐色土の広がりを確認した。遺構確認のため短軸方向に半裁したところ、10 cm 程の落ち込みが確認できた。

遺　構 (第 37 図)

形態：平面形―楕円形。規模―長軸 0.7m(北東方向)、短軸 0.55m(北西方向)、深さ―0.1m。掘り込み形態―皿状。

層位：覆土を構成する基本土壌は黒褐色土、軽石が混在して堆積していた。構築層―覆土上層に基本層の堆積は見られなかったものの、遺構確認面よりⅦb 層中の構築であると考えられる。遺物は出土していない。



第 36 図 PIT47（竪穴）及び遺物平面・垂直分布図

小　括　遺構の規模は 1 m 未満の小規模な土坑である。性格や用途は不明である。構築時期は確認時の土層から判断して、縄文中期である。

PIT 4(土坑)

現道下の A-15 区を下層に向け掘削中、Ⅶb-1 層下面より黒褐色土の広がりを確認した。遺構確認のため短軸方向に半裁したところ、20 cm 程の落ち込みが確認できた。遺構の西側半分は撹乱により壊されていた。

遺　構 (第 37 図)

形態：平面形―不整楕円形 ?。規模―現存する最大長 0.9 m(東西方向)、深さ―0.2 m。掘り込み形態―皿状。

層位：覆土を構成する基本土壌は黒褐色土、暗黄褐色土と暗褐色土、軽石からなり、これらが混在して堆積していた。構築層―セクションよりⅥb-1~b-2 層中の構築であると考えられる。

遺　物 (第 38 図)

土器：第 38 図 1 は第Ⅱ群土器の底部と考えられるが、やや丸底で比較的小さいため判断に悩む。胎土に軽石やレキを含むため、トコロ 6 類ではないと類推する。

石器：石器はなく、レキが底から出土している。

小　括　西側半分が撹乱により壊されているため規模は不明であるが、1m を超すと思われる土坑である。遺物は縄文中期と類推する土器片が 1 点出土したのみである。構築時期は出土土器および構築層から判断して、縄文中期である。

PIT 5(土坑)

現道下の A-13 区を下層に向け掘削中、Ⅶb 層中より黒褐色土の広がりを確認した。遺構確認のため短軸方向に半裁したところ、30cm 程の落ち込みが確認できた。遺構の西側半分は道路側溝により撹乱され失われていた。

遺　構 (第 37 図)

形態：平面形―遺構のほぼ半分が消失していたが、不整楕円形であると考える。規模―現存する最大長 0.95 m(東西方向)、深さ―0.3 m。掘り込み形態―椀状。

層位：覆土を構成する基本土壌は黒褐色土、暗褐色土、軽石からなり、これらが混在して堆積していた。構築層―掘削時の確認面よりⅦb 層中の構築であると考えられる。

遺物分布図（第 37 図）

平面分布図―集中という程ではないが、石器は比較的まとまって分布している。垂直分布図―覆土中の標高 14.5 m付近に集中する。

遺　物 (第 39 図)

土器：第 39 図 1・2 は第Ⅱ群土器である。1 は口縁部、2 は胴部破片である。地文には RL を施文する。胎土に僅かに繊維を含むため、トコロ 6 類であろう。

石器：剥片と砕片が 6 点出土している。

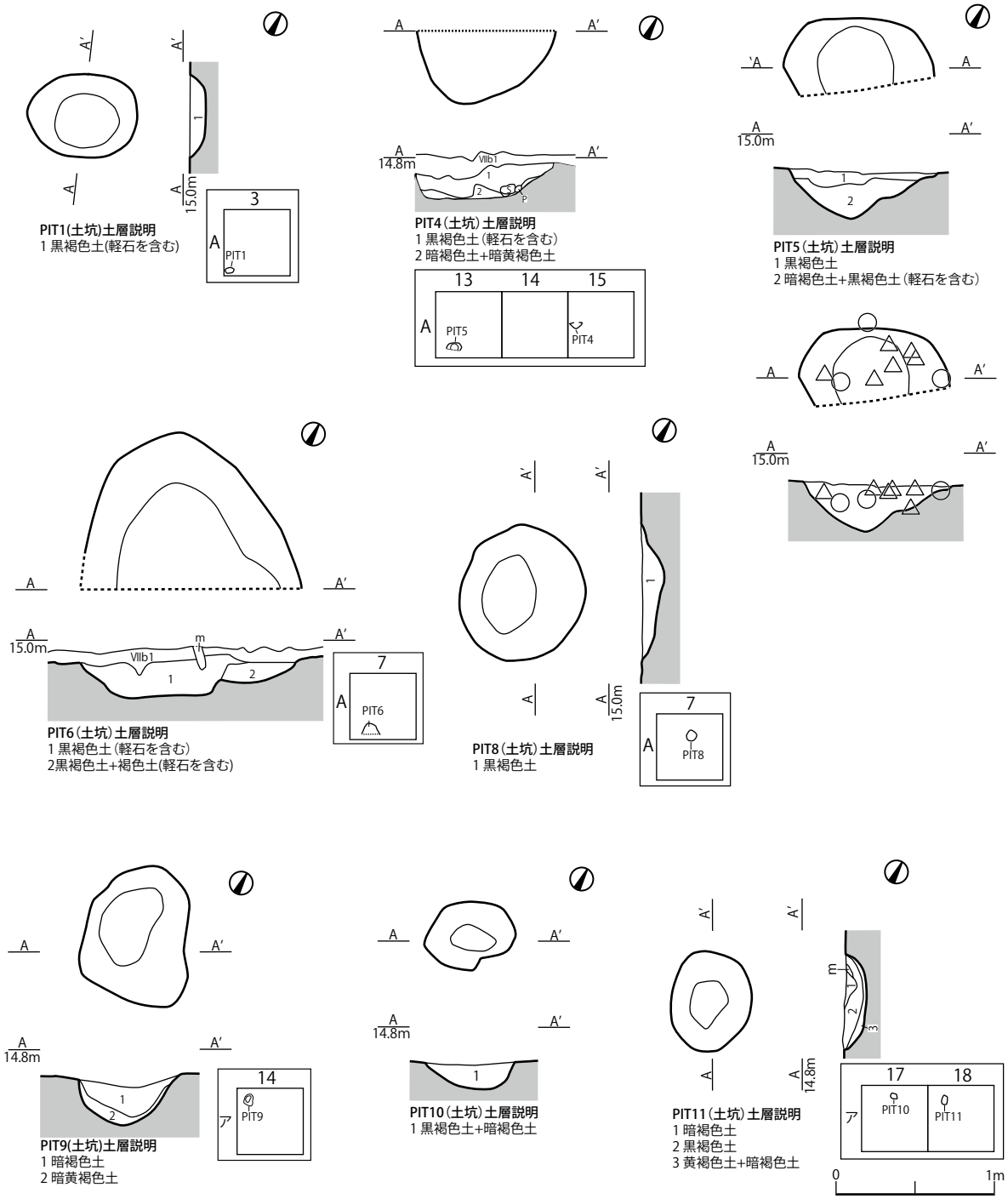
小　括　西側半分が撹乱により壊されているため規模は不明だが、不整楕円形の平面を有する土坑であろう。構築時期は、出土土器と構築層より縄文中期である。

PIT 6(土坑)

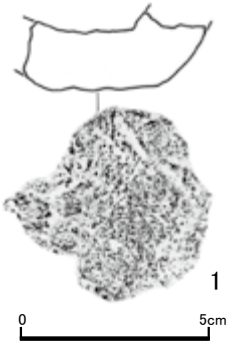
現道下の A-23 区を下層に向け掘削中、Ⅶb-1 層下より黒褐色土の広がりを確認した。遺構確認のため短軸方向に半裁したところ、25cm 程の落ち込みが確認できた。遺構の南東側半分は道路側溝により撹乱され消失していた。

遺　構 (第 37 図)

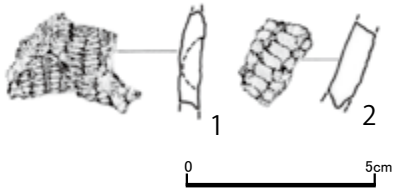
形態：平面形―遺構の南東側が道路の側溝により消失していたが、楕円形になるものと推察する。規模―現存する最大長 1.40 m(東西方向)、深さ―0.25 m。掘り込み形態―椀状。



第 37 図 PIT1,4~6,8~11（土坑）及び遺物平面・垂直分布図



第38図　PIT4(土坑)
覆土出土土器



第39図　PIT5（土坑）
覆土出土土器

層位：覆土を構成する基本土壌は黒褐色土、褐色土、軽石からなり、これらが混在して堆積していた。構築層―土層セクションよりⅥb-1~b-2 層中の構築であると考えられる。

小　括　遺構の南東側が道路側溝により消失され、規模や平面形状を特定することは難しい土坑である。遺物もなく明確な構築時期は断定できないが検出土層から判断し、縄文中期であろう。

PIT 8(土坑)

本遺構はア -8 区に位置する土坑である。Ⅶb-2 層中を人力で掘削したところ黒褐色土の広がりが検出され、半裁して断面を確認したところ遺構であることが判明した。

遺　構 (第 37 図)

形態：平面形―楕円形。規模―長軸 0.84 m(南北方向)、短軸 0.8 m(東西方向)。深さ―0.14 m 前後。掘り込み形態―浅く皿状に掘り込まれている。

層位：覆土を構成する基本土壌は、Ⅶb-2 層に起因すると思われる黒褐色土が堆積していた。構築層―Ⅶb-2 層中と思われる。

小　括　柱穴群の中心に位置する土坑である。性格や用途は不明であるが、柱穴群と関連した利用の可能性がある。遺物は出土していないため構築時期の判断は難しいが、周辺の遺構と比較して縄文中期の構築と類推する。

PIT 9(土坑)

本遺構はア -36・37 区に位置する土坑である。Ⅶb-2 層中を人力で掘削したところ暗褐色土の広がりを確認し、下層に向け掘削したところ、遺構であることが判明した。

遺　構 (第 37 図)

形態：平面形―不整楕円形。規模―長軸 0.88 m 以上 (南北方向)、短軸 0.7 m 以上 (東西方向)。深さ―0.26 m 前後。掘り込み形態―碗状に掘り込まれている。

層位：覆土を構成する基本土壌は、暗褐色土と暗黄褐色土から成り、これらが混在して堆積していた。構築層―Ⅶb-2 層中と思われる。

小　括　遺物は出土していないため構築時期の判断は難しいが、周辺の遺構と比較して縄文中期の構築と類推する。

PIT 10(土坑)

本遺構はア -17 区に位置する土坑である。Ⅶb-2 層中を人力で掘削したところ黒褐色土と暗褐色土の広がりが検出され、半裁して断面を確認したところ遺構であることが判明した。

遺　構 (第 37 図)

形態：平面形―不定形。規模―長軸 0.56 m(東西方向)、短軸 (南北方向)0.42 m。深さ―0.16 m 前後。掘り込み形態―皿状。

層位：覆土を構成する基本土壌は、黒褐色土と暗褐色土から成り、これらが混在して堆積していた。構築層―Ⅶb-2 層中と思われる。

小　括　長軸が 0.5 m 程度の比較的小型な土坑である。遺物は出土していないため構築時期の判断は難しいが、周辺の遺構と比較して縄文中期の構築と類推する。

PIT 11(土坑)

本遺構はア -18 区に位置する土坑である。Ⅶb-2 層中を人力で掘削したところ黒褐色土の広がりが検出され、半裁して断面を確認したところ遺構であることが判明した。

遺　構 (第 37 図)

形態：平面形―楕円形。規模―長軸 0.62 m(南北方向)、短軸 (東西方向)0.5 m。深さ―0.12 m 前後。掘り込

み形態―皿状。

層位:覆土を構成する基本土壌は、黒褐色土と暗褐色土と黄褐色土から成り、これらが混在して堆積していた。構築層―Ⅶb-2 層中と思われる。

小　括　長軸 0.6 m 程度の比較的小型な土坑である。遺物は出土していないため、構築時期の判断は難しいが、周辺の遺構と比較して縄文中期と類推する。

PIT 12(土坑)

本遺構はア -19 区に位置する土坑である。Ⅶb-2 層中を人力で掘削したところ暗褐色土の広がりが検出され、半裁して断面を確認したところ遺構であることが判明した。

遺　構 (第 40 図)

形態：平面形―不整円形。規模―長軸 0.53 m(東西方向) 短軸 0.5 m(南北方向)、深さ―0.14 m 前後。掘り込み形態―皿状。

層位：覆土を構成する基本土壌は、暗褐色土と暗黄褐色土から成り、これらが混在して堆積していた。構築層―Ⅶb-2 層中と思われる。

小　括　長軸が 0.5 m 程度の比較的小型の土坑であり、PIT 10・11 と同程度の規模であるが関連性は不明である。遺物は出土していないため、構築時期の判断は難しいが周辺の遺構と比較して縄文中期の構築と類推する。

PIT 13(土坑)

本遺構はア -19・20 区に位置する土坑である。Ⅶb-2 層中を人力で掘削したところ黒褐色土の広がりが検出され、半裁して断面を確認したところ遺構であることが判明した。

遺　構 (第 40 図)

形態：平面形―不定形。規模―最大長 1.7 m 以上 (南北方向)、深さ―3.6 m 前後。掘り込み形態―ゆるやかに立ち上がる。皿状。

層位：覆土を構成する基本土壌は、暗褐色土と黄褐色ロームから成り、これらが混在して堆積していた。構築層―Ⅶb-2 層中と思われる。

小　括　平面形は不定形で、一部テラスを持ち段状に深くなる土坑である。遺物は出土していないため構築時期の判断は難しいが周辺の遺構と比較して縄文中期と類推する。

PIT 14(土坑)

本遺構は A26・ア 26 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 40 図)

形態：平面形―楕円形。規模―長軸 1.11 m(北西方向)、短軸 0.86 m(南北方向)、深さ―0.24 m を測る。断面形態は凹型を呈し、壁面は外傾して緩やかに立ち上がる。底面は全体的に平坦である。

層位：覆土は軽石が目立つ黒褐色土である。検出面は、Ⅶb-2 層上面。

小　括　本遺構は、検出面から縄文中期に帰属すると考えられる。

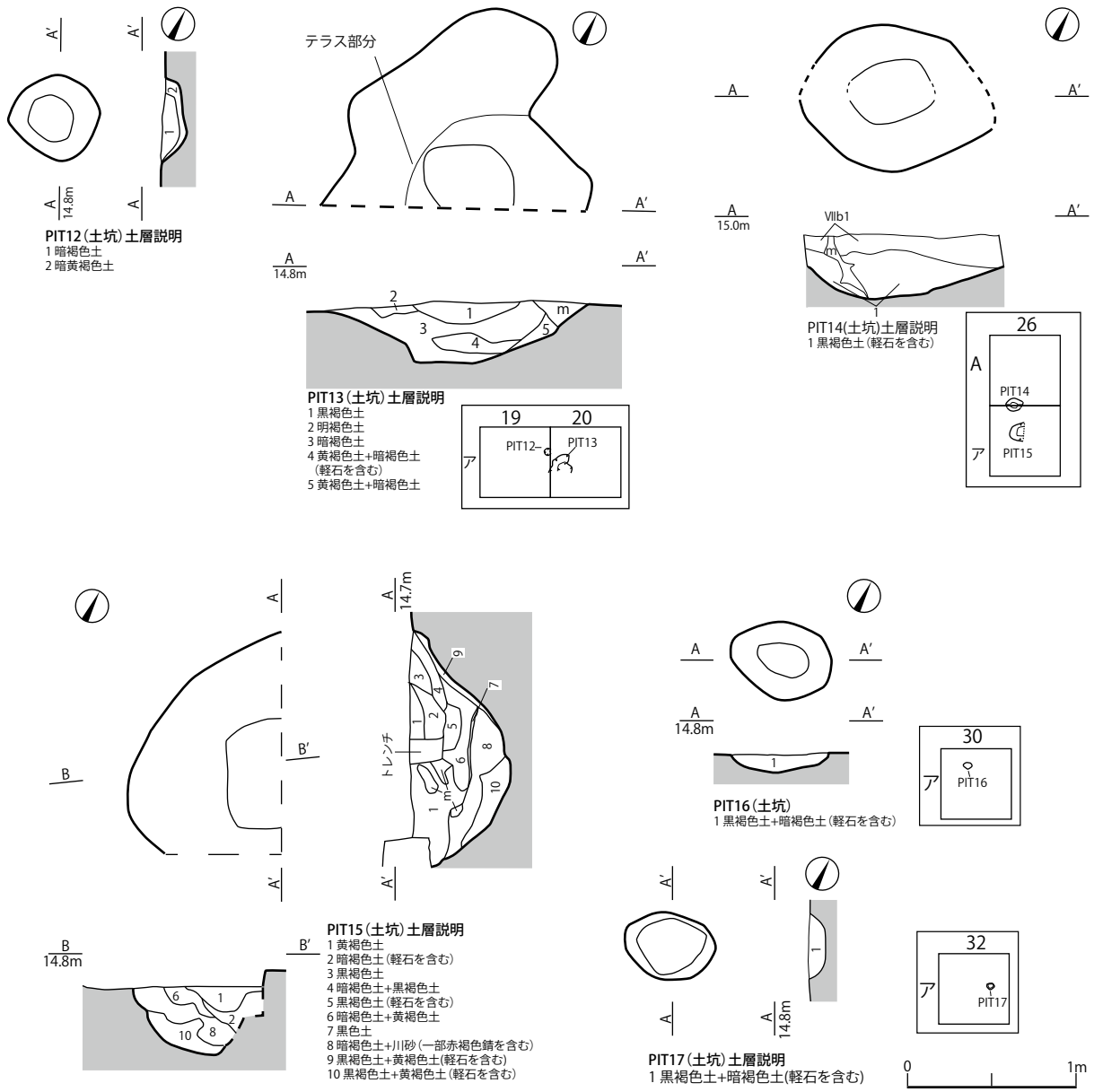
PIT 15(土坑)

本遺構はア -26 区に位置する土坑である。Ⅶb-2 層中を人力で掘削したところ黄褐色ロームと黒褐色土の広がりが検出され、トレンチを掘削して断面を確認したところ遺構であることが判明した。

遺　構 (第 40 図)

形態：平面形―楕円形と推測する。規模―最大長 1.14 m 以上 (南北方向)。深さ―0.6 m 前後。掘り込み形態―碗状。

層位：覆土を構成する基本土壌は、黄褐色ローム、暗褐色土、黒褐色土から成り、これらが混在して堆積して



第 40 図 PIT12~17（土坑）

いた。構築層―Ⅶb-2 層中と思われる。

小　括　北側と西側が暗渠により撹乱されている土坑である。遺物は出土していないため構築時期の判断は難しいが周辺の遺構と比較して縄文中期と類推する。

PIT 16(土坑)

本遺構はア -30 区に位置する土坑である。Ⅶb-2 層中を人力で掘削したところ黒褐色土の広がりが検出され、半裁して断面を確認したところ遺構であることが判明した。

遺　構 (第 40 図)

形態：平面形―楕円形。規模―長軸 0.61 m(東西方向)、短軸 0.44 m。深さ―0.11 m 前後。掘り込み形態―皿状。

層位：覆土を構成する基本土壌は、黒褐色土、暗褐色土、黄褐色ロームから成り、これらが混在して堆積していた。構築層―Ⅶb-2 層中と思われる。

小　括　長軸が 0.6 m 程度の比較的小型の土坑である。遺物は出土していないため構築時期の判断は難しいが周辺の遺構と比較して縄文中期と類推する。

PIT 17(土坑)

本遺構はア -32 区に位置する土坑である。Ⅶb-2 層中を人力で掘削したところ黒褐色土と暗褐色土の広がりが検出され、半裁して断面を確認したところ遺構であることが判明した。

遺　構 (第 40 図)

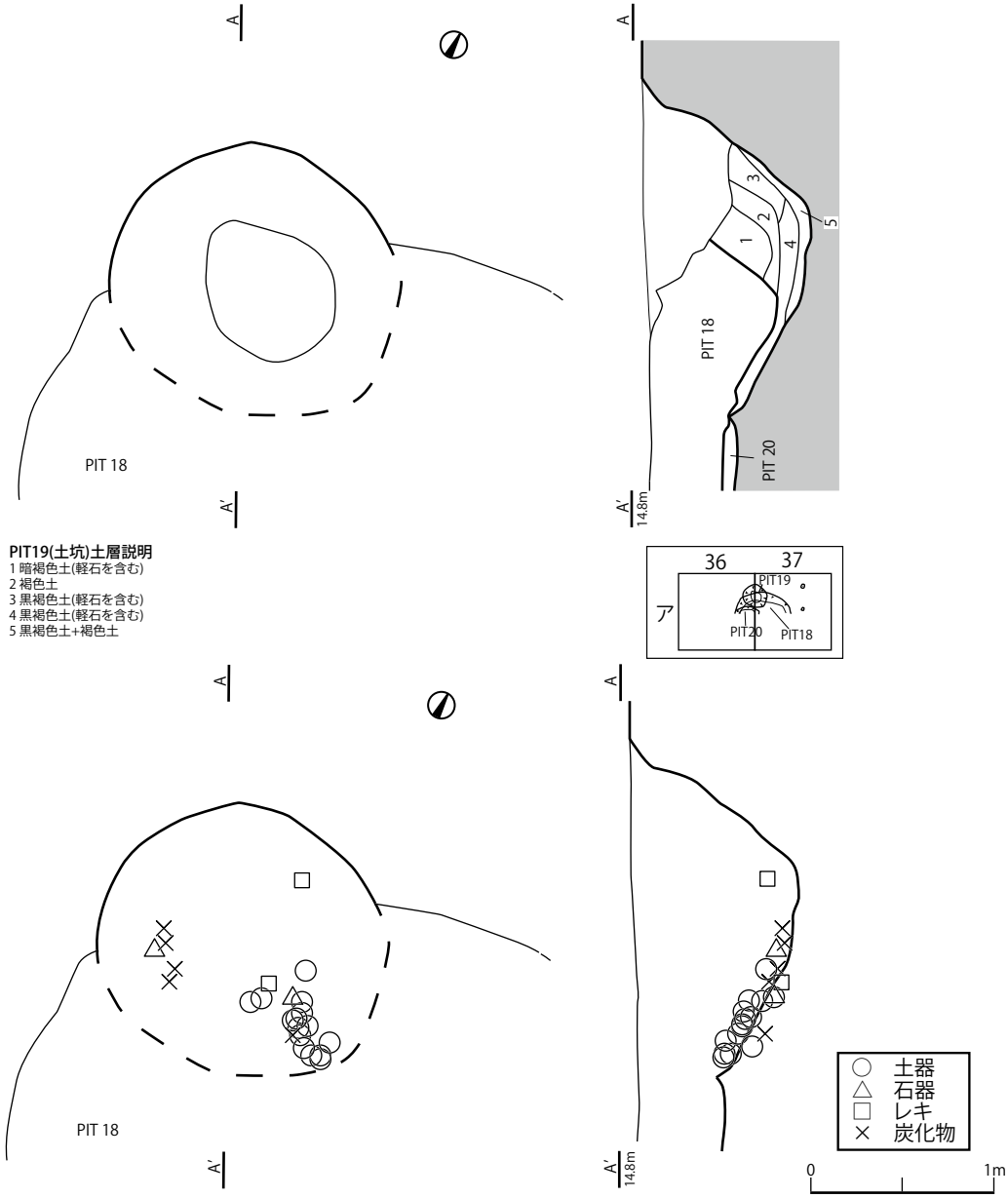
形態：平面形―楕円形。規模―長軸 0.54 m(東西方向) 短軸 0.38 m(南北方向)。深さ―0.1 m 前後。掘り込み形態―皿状。

層位：覆土を構成する基本土壌は、黒褐色土と暗褐色土から成り、これらが混在して堆積していた。構築層―Ⅶb-2 層中と思われる。

小　括　長軸が 0.6 m 程度の比較的小型の土坑である。遺物は出土していないため構築時期の判断は難しいが周辺の遺構と比較して縄文中期と類推する。

PIT 19(土坑)

本遺構はア -36・37 区に位置する土坑である。Ⅶb-2 層中を人力で掘削し 36 ライン付近にトレンチを掘削して土層セクションを確認したところ PIT 18 によって切られていることが明らかとなった。



第 41 図 PIT19（土坑）及び遺物平面・垂直分布図

遺構 (第 41 図)

形態：平面形―不整円形。規模―最大長 1.56 m 以上 (東西方向)、深さ―0.54 m 前後。掘り込み形態―碗状。

層位：覆土を構成する基本土壌は、暗褐色土、褐色土、黒褐色土、から成り、これらが混在して堆積していた。

遺物分布図 (第 41 図)

平面分布図―不規則な分布状況ではあるが、東側にやや土器の集中部があることがみてとれる。垂直分布図―ほぼ全ての遺物は掘り込みに沿うように分布しているが、遺構上部が破壊されているため全体的な分布傾向は不明である。

遺　物 (第 42・43 図)

土器:第 42 図 1~3 は覆土からの出土、4 は底面からの出土である。1~4 すべて第Ⅱ群土器の破片である。1 は口縁部破片であり、外面に LR 縄文を施文後、ヘラ状工具で縦の沈線を施文しており、山形突起を有する。2 は胴部破片であり、外面に RL 縄文を施文。3 は LR 縄文と RL 縄文を羽状に施文。4 は底部破片であり、底面に LR 縄文を施文。

石器：第 43 図 1 はⅤ群 a 類で、両面調整である。2 は第ⅩⅡ群 c 類で安山岩 (AND) 製である。

その他：覆土中と底面から木炭が数点出土している。

小　括　PIT 19 は、出土遺物等から縄文時代中期に帰属すると考えられる。遺構上部は撹乱を受け掘り込み面が不明瞭であるが、PIT 18 よりも古い時期に構築されているので、おそらく構築はⅦb-2 層中と思われる。

PIT 20(土坑)

本遺構はア -36・37 区に位置する土坑である。ア ライン付近にトレンチを掘削して土層セクションを確認したところ PIT 18 によって遺構上部が破壊されていることが明らかとなった。

遺　構 (第 44 図)

形態：平面形―楕円形と推測される。規模―最大長 1.56m 以上 (東西方向)、深さ―0.14m 以上。

層位：覆土を構成する基本土壌は、黒褐色土、褐色土から成り、これらが混在して堆積していた。

小　括　PIT 20 は、土器が出土しておらず、遺構上部が PIT 18 に破壊されているため、掘り込み面は不明である。しかし、PIT 18 よりも古い時期のものであることから縄文中期かそれ以前と思われる。

PIT 21(土坑)

本遺構は B34 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 44 図)

形態：平面形―不整円形を呈する。規模―長軸 0.60 m(北東方向)、短軸 0.52 m(北西方向)、深さ 0.22 m を測る。断面形態は凹型を呈し、底面から直立ぎみに壁面が立ち上がる。底面は丸底を呈する。

層位:覆土は上層 (1・2 層)、下層 (4 層)、壁際の堆積層 (3・5 層) からなる。上層は軽石が目立つ黒褐色土である。下層は底面直上土に相当する。壁際の堆積層は暗黄 ~ 褐色土である。Ⅷ層上面。営農活動により、包含層が撹乱され失われたために、Ⅷ層の上面から検出したものと推測される。

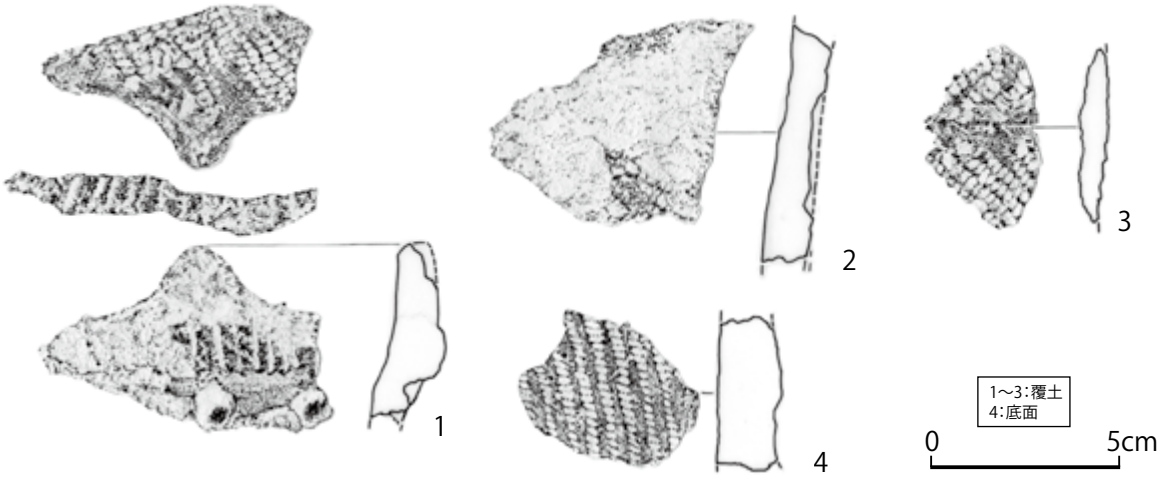
小　括　本遺構は、検出面から縄文時代早期末 ~ 中期前葉に帰属すると推測される。

PIT 22(土坑)

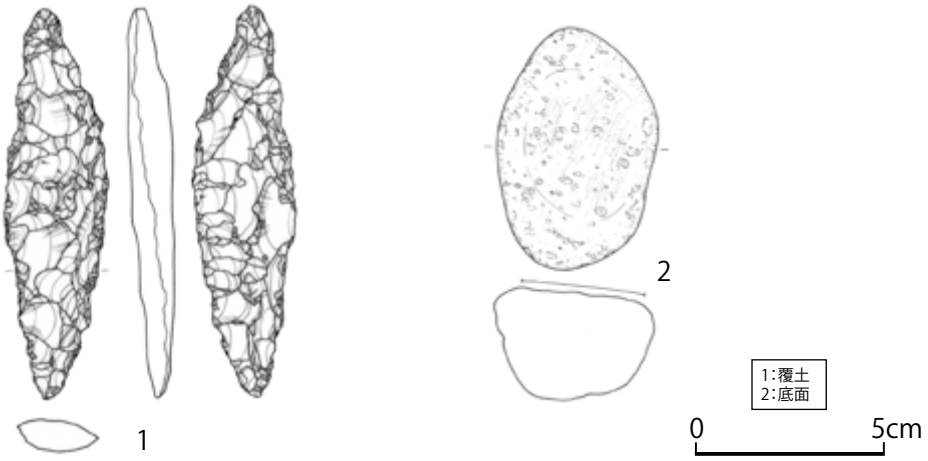
本遺構は B35 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 44 図)

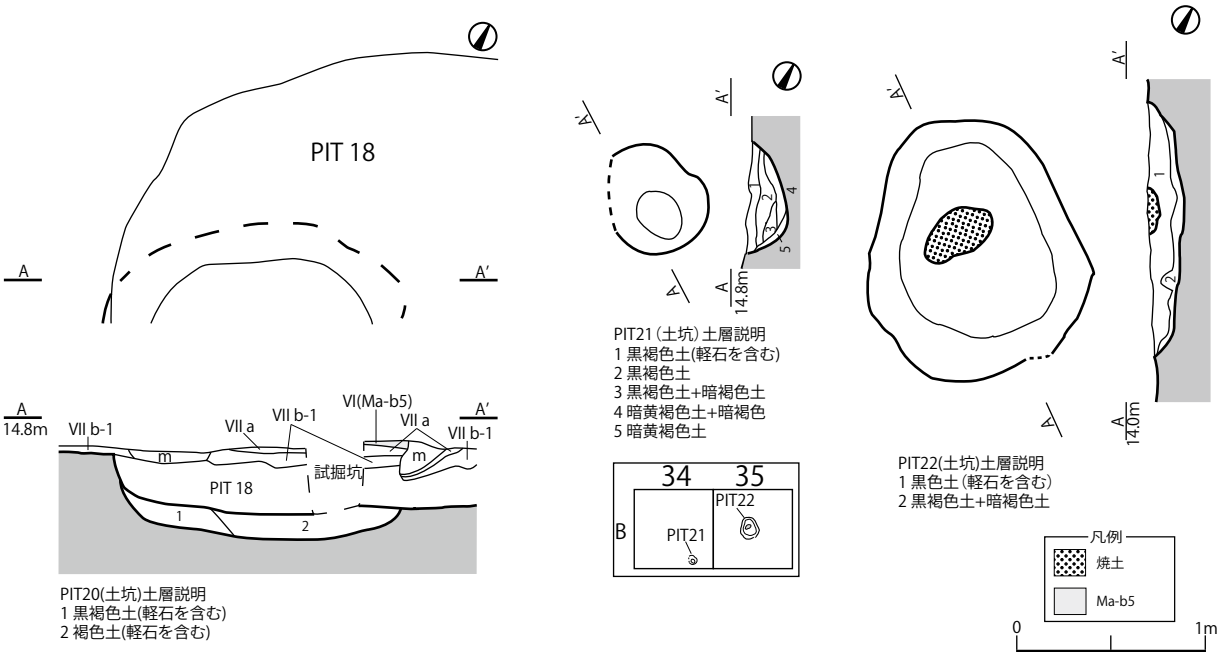
形態：平面形―不整楕円形を呈する。規模―長軸 1.34 m(北東方向)、短軸 1.24 m(北西方向)、深さ 0.16 m を測る。断面形態は凹型を呈し、底面から外傾して壁面が立ち上がる。底面は全体的に平坦である。焼土は 1



第42図　PIT19（土坑）出土土器



第43図　PIT19　（土坑）出土石器



第 44 図 PIT20~22（土坑）

層中からの検出である。土坑埋没後における、二次的な窪地利用の痕跡と考えられる。

層位：覆土は上層 (1 層)、下層 (2 層) からなる。上層は軽石を少量ふくむ黒色土である。下層は底面直上土に相当する。検出面はⅦb-2 層下面。

遺　物　木炭が 1 点出土。

小　括　本遺構は、検出面から縄文中期に帰属すると推測される。

PIT 23(土坑)

本遺構は C33・34 区に位置する土坑であると推測される。

遺構 (第 45 図)

形態：平面形―不定形を呈する。規模―長軸 2.46 m(北西方向)、短軸 1 m(北東方向)、深さ 0.05 m を測る。断面形態は凹形を呈し、底面から外傾して壁面が立ち上がる。底面は起伏がある。焼土 d は 3 層中からの検出である。土坑埋没後における、二次的な窪地利用の痕跡と考えられる。

層位：覆土は上層 (1 ～ 3・7 層)、下層 (4・6 層) からなる。上層は軽石や木炭を含む黒～褐色土である。下層は底面直上土に相当する。検出面はⅦb-2 層下面。

遺物分布状況（第 45 図）

平面分布図―PIT 中央部に比較的集中しているが。最も多いのは、中央部から少し北西側にずれたところで集中して分布している。出土している遺物は石器の占める割合が大きい。垂直分布図―覆土中の標高 14.4 m～14.8 m の付近に分布する。

遺　物 (第 46・47 図)

土器：第 46 図 1 ～ 3 は覆土からの出土である。1 はトコロ 6 類の口縁部片で、RL 縄文を施文した後、口唇部から口縁部にかけて縦方向の刻みを施文。2 ～ 3 はⅡ群の底部片で、2 は RL 縄文を施文したのちに縦方向の刻みを施文する。3 は RL 縄文を地文とし、縦方向の刻みを施文したのち棒状工具による刺突を行っている。底面に LR 縄文を施文。

石器：第 47 図 1 ～ 6 は覆土、7 は底面からの出土である。1 はⅠ群 c 類である。大部分が欠損していう。2 はⅠ群 b 類である。不整三角形を呈する刃部で、両面調整。被熱による表面の変形がみとめられる。3 ～ 5 はⅤ群 a 類の破損品である。6 はⅩⅣ群 c 類である。平坦面と側面に磨り痕あり。石質は砂岩である。7 はⅢ群 a 類で、両面調整石器である。この他、剥片が出土している。

その他：炭化物が出土した。

小　括　本遺構は、土坑内外の焼土や不定形のプランから、炉穴のような機能・性格を持っていた可能性があるが、灰原などが検出されていないことから、炉穴ではなく土坑であると判断した。また、内外に広く拡がる焼土は土坑の上層からの検出であるため、本遺構に伴わないものと判断した。帰属する時期は、検出面と出土遺物から縄文中期であると考えられる。

PIT 26(土坑)

本遺構は A36・B36 区に位置する土坑である。

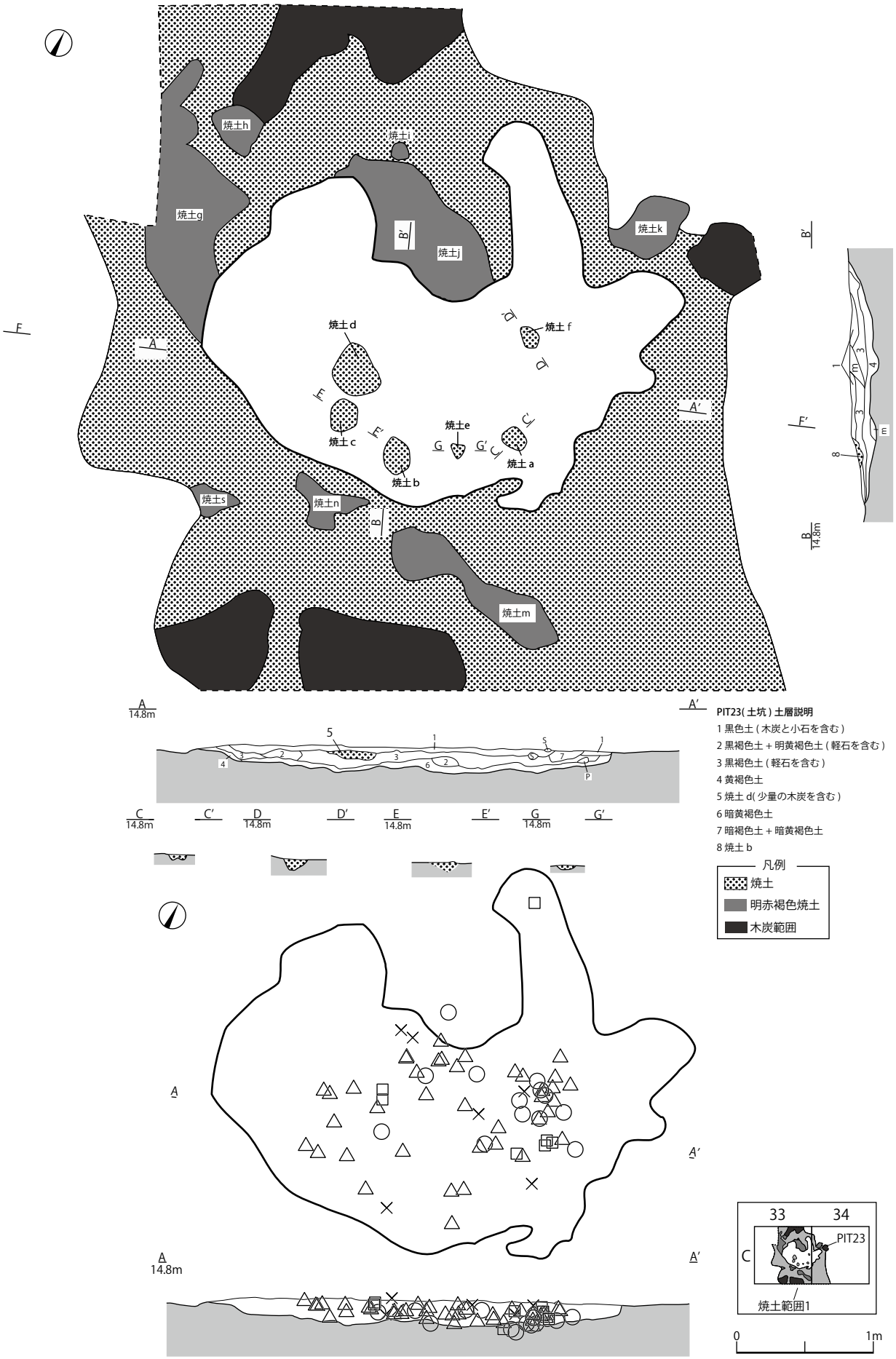
遺　構 (第 48 図)

形態：平面形―不整楕円形を呈すると考えられる。規模―最大径 1.6 m、深さ 0.22 m を測る。本遺構は PIT 24 によって切られているため、断面形態は凹型を呈し、底面は全体的に平坦と推測される。壁面は底面から外傾して立ち上がる。

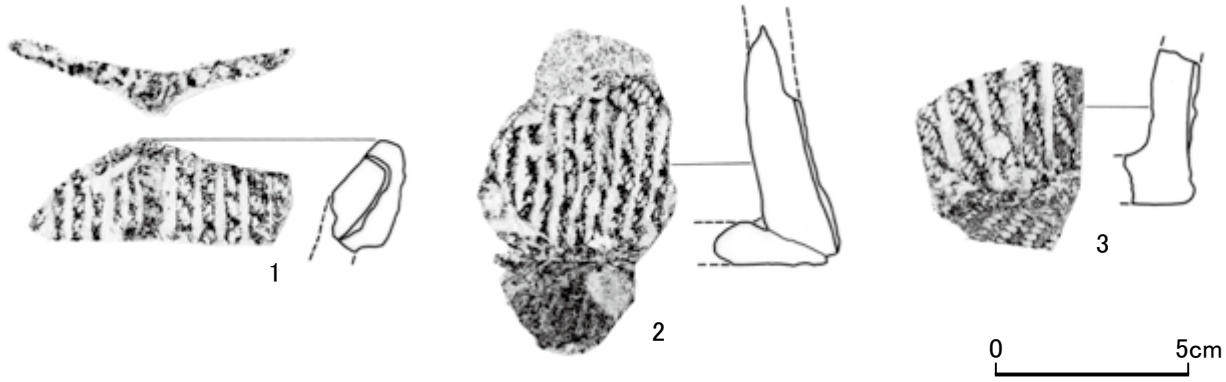
層位：覆土は、上層 (1・2 層)、下層 (4 層)、壁際の堆積層 (3 層) からなる。上層は軽石が目立つ黒～褐色土である。下層は底面直上土に相当する。壁際の堆積層は暗～黄褐色土である。検出面はⅦb-2 層上面。

切り合い関係：PIT24 に切られる。

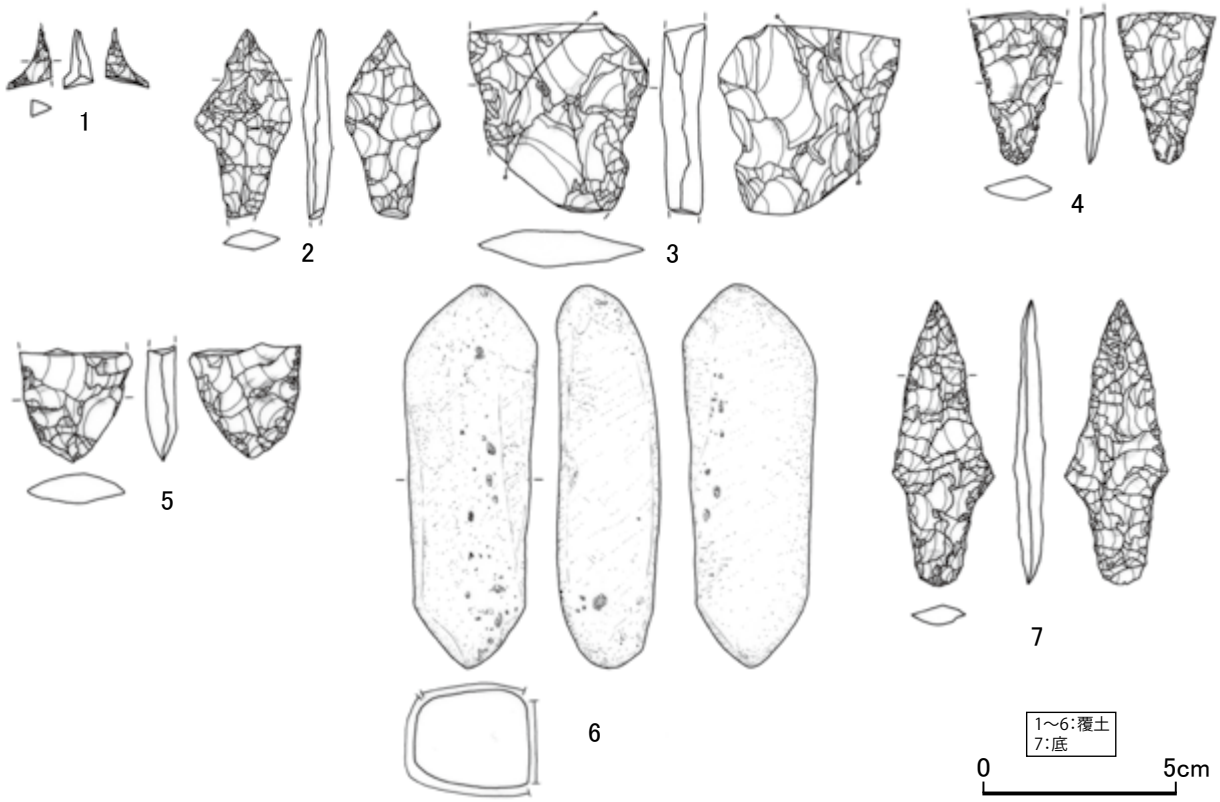
小　括　本遺構は、切り合い関係から縄文中期に帰属すると考えられる。



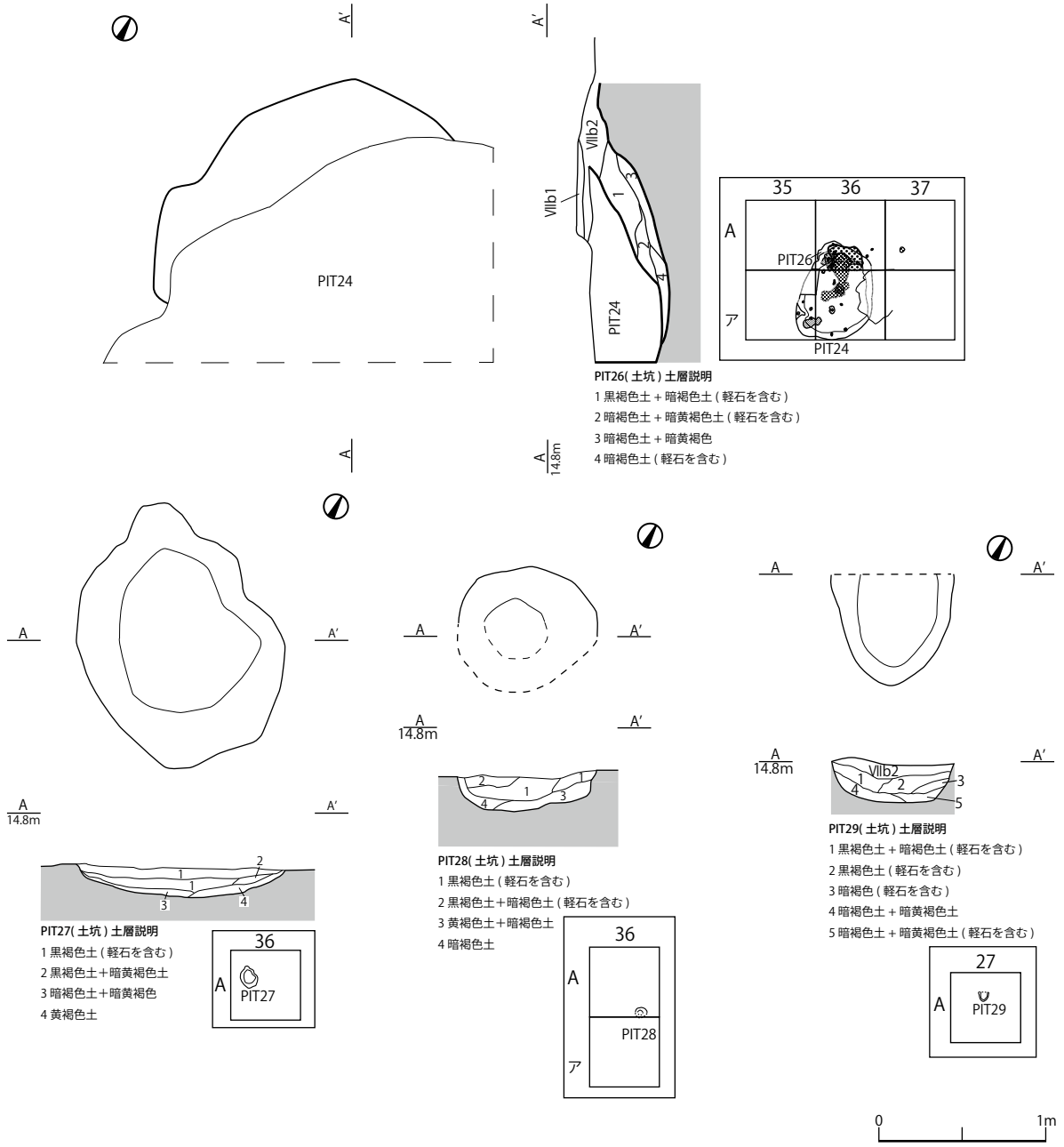
第 45 図 PIT23（土坑）及び遺物平面・垂直分布図



第46図　PIT23　（土坑）　覆土出土土器



第47図　PIT23　（土坑）　出土石器



第 48 図 PIT26~29（土坑）

PIT27(土坑)

本遺構は B36 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 48 図)

形態：平面形―不整楕円形を呈する。規模―長軸 1.57 m(北東方向)、短軸 1.24 m(北西方向)、深さ 0.16 m を測る。断面形態は凹型を呈し、底面は全体的に平坦である。壁面は底面から外傾して緩やかに立ち上がる。

層位：覆土は、上層 (1・2 層)、下層 (3・4 層) からなる。上層は軽石が目立つ黒褐色土である。下層は底面直上土に相当する。検出面はⅦb-2 層上面。

小　括　本遺構は、検出面から縄文中期に帰属すると考えられる。

PIT 28(土坑)

本遺構は A36 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 48 図)

形態：本遺構は調査した範囲内につき、その一部を検出したに過ぎない。平面形―円形を呈する推測される。

掘削部分の規模は長軸0.88 m(北西方向)、短軸0.32 m (北東方向)、深さ0.20 mを測る。断面形態は凹型を呈し、底面から直立ぎみに壁面が立ち上がる。底面は起伏がある。

層位：覆土は、上層 (1・2 層)、下層 (3・4 層) からなる。上層は軽石が目立つ黒～褐色土である。下層は底面直上土に相当する。検出面はⅦb-2 層上面。

小　括　本遺構は、検出面から縄文中期に帰属すると考えられる。

PIT 29(土坑)

本遺構は A27 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 48 図)

形態：本遺構は調査した範囲内につき、その一部を検出したに過ぎない。平面形―長楕円形を呈すると推測される。掘削部分の規模は長軸 0.75 m(北東方向)、短軸 0.66 m(北西方向)、深さ 0.24 m を測る。断面形態は凹型を呈し、壁面は底面から直立ぎみに立ち上がる。底面は平坦である。

層位：覆土は上層 (1~3 層)、下層 (4・5 層) からなる。上層は軽石が目立つ黒 ~ 褐色土である。下層は底面直上土に相当する。検出面はⅦb-2 層上面。

遺　物　木炭が 2 点出土した。

小　括　本遺構は、検出面から縄文中期に帰属すると考えられる。

PIT30(土坑)

本遺構は A28 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 49 図)

形態：本遺構は調査した範囲内につき、その一部を検出したに過ぎない。平面形―長楕円形を呈すると推測される。掘削部分の規模は長軸 1.3 m(北西方向)、短軸 0.78 m(北東方向)、深さ 0.28 m を測る。断面形態は凹型を呈し、壁面は底面から緩やかに上がったのちに直立ぎみに立ち上がる。底面は起伏がある。

層位：覆土は上層 (1~3 層)、下層 (6・8 層)、壁際の堆積層 (4・5・7 層) からなる。上層は軽石が目立つ黒～褐色土である。下層は底面直上土に相当する。壁際の堆積層は 1 層に似た黒褐色土で壁際の全周で確認できる。検出面はⅦb-2 層上面。

切り合い関係：PIT34・36 を切る。

小　括　本遺構は、検出面と切り合い関係から縄文中期末～後期前葉に帰属すると考えられる。

PIT 31(土坑)

本遺構は A27・28 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 49 図)

形態：平面形―不整楕円形。規模―長軸 0.74 m(北西方向)、短軸 0.68 m(北東方向)、深さ 0.28 m を測る。断面形態は凹型を呈し、壁面は外傾して立ち上がる。底面は丸底を呈する。

層位：覆土は上層 (1~4 層)、下層 (5 層) からなる。上層は軽石が目立つ黒 ~ 褐色土である。下層は底面直上土に相当する。検出面はⅦb-2 層上面。

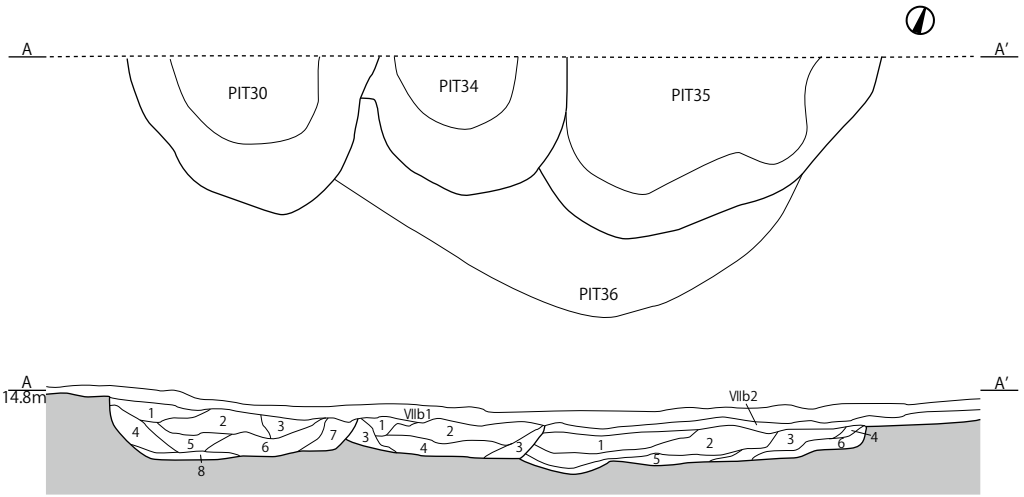
小　括　本遺構は、検出面から縄文中期に帰属すると考えられる。

PIT 32(土坑)

本遺構は A28・29 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 49 図)

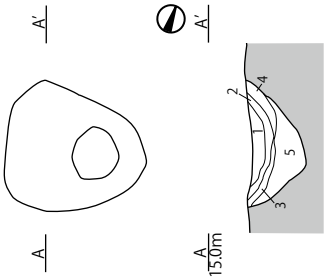
形態：平面形―円形。規模―長軸 0.63 m(北西方向)、短軸 0.54 m(北東方向)、深さ 0.20 m を測る。断面形態は凹型を呈し、壁面は外傾してやや直立ぎみに立ち上がる。底面は全体的に起伏がある。



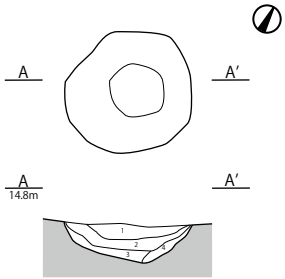
PIT30(土坑) 東西セクション土層説明
1 暗褐色土＋黒褐色土 (軽石を含む)
2 暗褐色土 (小石を含む)
3 暗褐色土＋褐色土 (軽石を含む)
4 黒褐色土 (軽石を含む)
5 明褐色土＋黄褐色土
6 黒褐色土
7 暗褐色土＋褐色土
8 暗褐色土＋黄褐色土

PIT34(土坑) 東西セクション土層説明
1 暗褐色土＋明褐色土
2 暗褐色土＋褐色土 (軽石を含む)
3 暗褐色土＋暗黄褐色
4 黒褐色土 (軽石を含む)

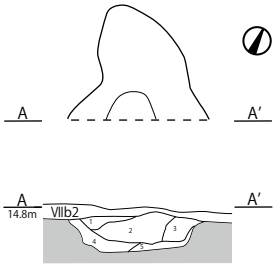
PIT35(土坑) 東西セクション土層説明
1 暗褐色土＋暗黄褐色土
2 黒褐色土 (軽石を含む)
3 暗褐色土 (軽石を含む)
4 暗黄褐色土 (軽石未分解)
5 暗黄褐色土
6 黄褐色土＋暗褐色土



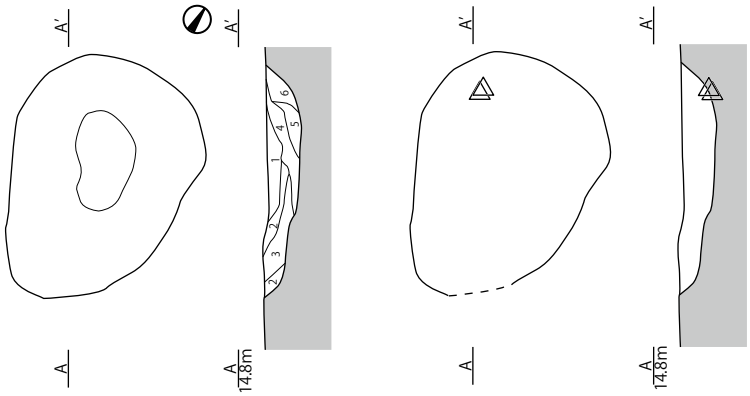
PIT31(土坑) 土層説明
1 黒褐色土 (軽石を含む)
2 黒褐色土＋暗褐色土 (小石を含む)
3 暗褐色土＋黒色土
4 暗褐色土＋暗黄褐色土
5 暗黄褐色＋明黄褐色土



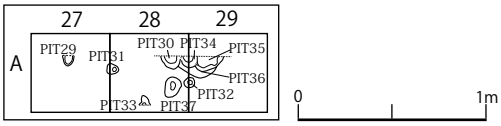
PIT32(土坑) 土層説明
1 黒褐色土 (軽石を含む)
2 黒褐色土＋暗褐色土 (軽石を含む)
3 暗褐色土＋暗黄褐色土
4 暗黄褐色土



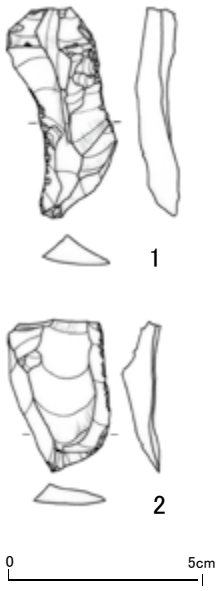
PIT33(土坑) 土層説明
1 明褐色土＋黒褐色土
2 黒褐色土
3 暗褐色土＋暗黄褐色土
4 暗褐色土
5 黄褐色土



PIT37(土坑) 土層説明
1 褐色土＋暗黄褐色
2 暗褐色土＋黒褐色土
3 黒褐色土 (軽石を含む)
4 暗褐色土＋黄褐色土 (軽石を含む)
5 暗褐色土
6 暗褐色土＋暗黄褐色土



第49図PIT30~35,37（土坑）及び遺物平面・垂直分布図



第50図　PIT37(土坑)
覆土出土石器

層位：覆土は、上層 (1・2 層)、下層 (3 層)、壁際の堆積層 (4 層) からなる。上層は軽石が目立つ黒 ~ 褐色土である。下層は底面直上土に相当する。壁際の堆積層は暗 ~ 黄褐色である。検出面はⅦb-2 層上面

小　括　本遺構は、検出面から縄文中期末～後期前葉に帰属すると考えられる。

PIT 33(土坑)

本遺構は A28 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 49 図)

形態：本遺構は調査した範囲内につき、その一部を検出したに過ぎない。平面形―不整長楕円形を呈すると推測される。掘削部分の規模は長軸 0.74 m(北東方向)、短軸 0.60 m(北西方向)、深さ 0.18 m を測る。断面形態は凹型を呈し、壁面は直立ぎみに立ち上がる。底面は全体的に平坦である。

層位：覆土は上層 (1~3 層)、下層 (3 層)、壁際の堆積層 (4 層) からなる。上層は黒 ~ 褐色土である。下層は底面直上土に相当する。壁際の堆積層は暗褐色土である。検出面はⅦb-2 層上面。

小　括　本遺構は、検出面から縄文中期末～後期前葉に帰属すると考えられる。

PIT 34(土坑)

本遺構は A29 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 49 図)

形態：平面形―円形または、楕円形を呈すると推測される。本遺構は調査した範囲内につき、その一部を検出したに過ぎない。掘削部分の規模は長軸 1 m(北西方向)、短軸 0.74 m(北東方向)、深さ 0.14 m を測る。断面形態は凹型を呈し、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。

層位：覆土は上層 (1・2 層)、下層 (4 層)、壁際の堆積層 (3 層) からなる。上層は軽石が目立つ明～褐色土である。下層は底面直上土に相当する。壁際の堆積層はⅦb-2 層に似た黒褐色土である。検出面はⅦb-2 層上面。

遺　物　剥片が 1 点出土している。

切り合い関係：PIT36 を切り、PIT30・35 に切られる。

小　括　本遺構は、検出面と切り合い関係から縄文中期末～後期前葉以前に帰属すると考えられる。

PIT 35(土坑)

本遺構は A29 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 49 図)

形態：本遺構は調査した範囲内につき、その一部を検出したに過ぎない。掘削部分の規模は長軸 1.81 m(北西方向)、短軸 0.70 m(北東方向)、深さ 0.18 m を測る。平面形―楕円形を呈すると推測され、断面形態は凹型を呈し、壁面は直立ぎみに立ち上がる。底面は起伏がある。

層位：覆土は上層 (1・2 層)、下層 (5 層)、壁際の堆積層 (3・4・6 層) からなる。上層は軽石が目立つ黒～褐色土である。下層は底面直上土に相当する。壁際の堆積層は暗褐～黄褐色度である。検出面はⅦb-2 層上面。

切り合い関係：PIT34・36 を切る。

小　括　本遺構は、検出面と切り合い関係から縄文中期末～後期前葉に帰属すると考えられる。

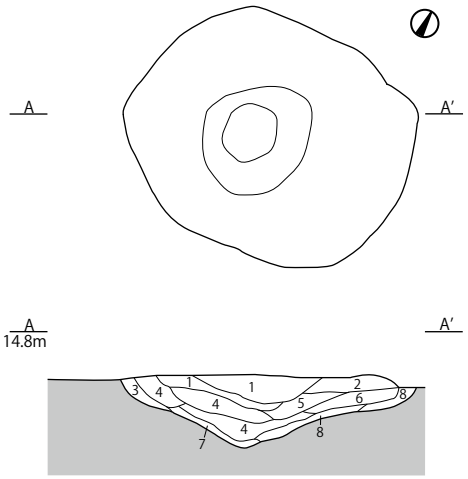
PIT 37(土坑)

本遺構は A28 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 49 図)

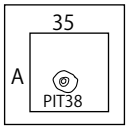
形態：平面形―楕円形。規模―長軸 1.33 m(北東方向)、短軸 0.99 m(北西方向)、深さ 0.16 m を測る。断面形態は凹型を呈し、壁面は外傾して緩やかに立ち上がる。底面は全体的に平坦である。

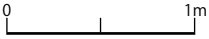
層位：覆土は黒褐色土と暗褐色土からなる。検出面はⅦb-2 層上面。

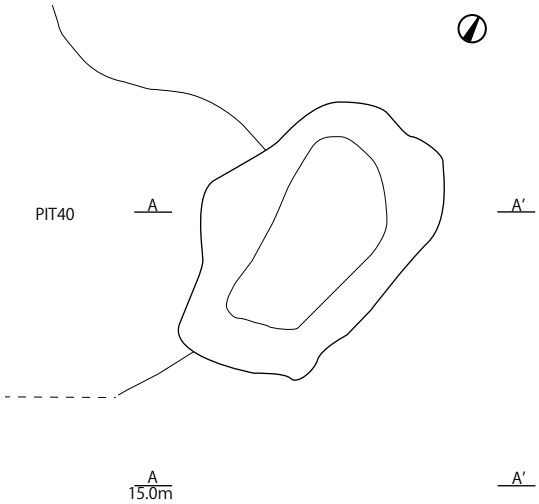


PIT38(土坑) 土層説明

1 黒褐色土 (軽石を含む)
2 暗褐色土 (軽石を含む)
3 黒褐色土＋明黄褐色土
4 暗褐色土＋黒褐色土 (軽石を含む)
5 暗褐色土 (1mm程の軽石がごま塩状に入る)
6 暗褐色土＋暗黄褐色土 (軽石を含む)
7 黒褐色土＋暗黄褐色土 (軽石を含む)
8 黒褐色土＋暗黄褐色土

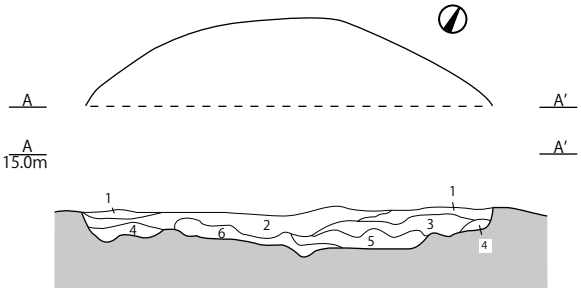






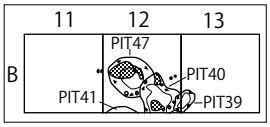
PIT39(土坑) 土層説明

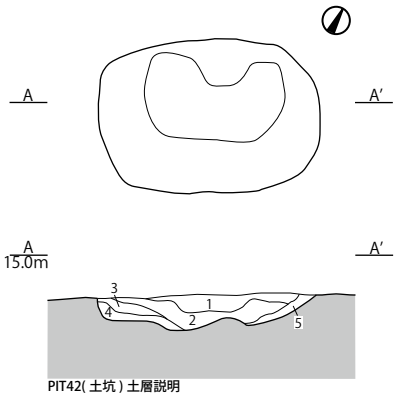
1 暗褐色土
2 黒褐色土 (軽石を含む)
3 暗褐色土 + 暗黄褐色
4 明褐色土 + 暗褐色土



PIT41(土坑) 土層説明

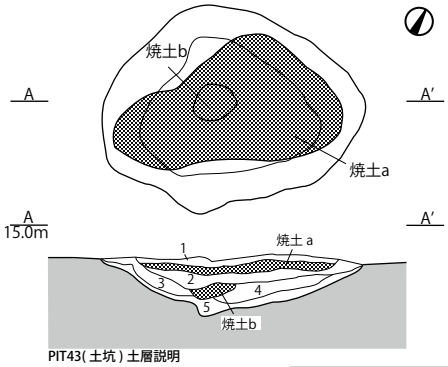
1 黒褐色土
2 黒褐色土 + 暗褐色土 (軽石を含む)
3 暗褐色土 + 明褐色土 (軽石を含む)
4 暗褐色 + 暗黄褐色
5 暗褐色土
6 暗褐色土 + 暗黄褐色 (軽石を含む)





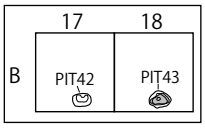
PIT42(土坑) 土層説明

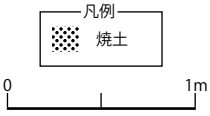
1 暗褐色土＋黒褐色土
2 黒褐色土 (軽石を含む)
3 暗褐色土＋暗黄褐色土
4 暗黄褐色土
5 暗黄褐色土＋暗褐色土



PIT43(土坑) 土層説明

1 黒褐色土 (木炭を含む)
2 暗褐色土 (木炭を含む)
3 黒褐色土＋暗褐色土 (軽石を含む)
4 黒褐色土
5 暗褐色土＋暗黄褐色土 (軽石を含む)





第 51 図 PIT38 ～ 43（土坑）

遺物分布図（第 49 図）

平面分布状況—PIT の北東側に遺物が集中して分布している。出土している遺物は石器のみである。垂直分布状況—覆土中の 14.5 m 付近に分布する。

遺物 (第 50 図)

石器：第 49 図 1~2 は覆土からの出土である。1・2 は第Ⅶ群 a 類である。1 はポジ面の両縁部に調整あり。2 はネガ面の縁部に調整あり。

小　括　本遺構は、検出面から縄文中期に帰属すると考えられる。

PIT 38(土坑)

本遺構は A35 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 51 図)

形態：平面形—不整円形。規模—長軸 1.46 m(北西方向)、短軸 1.28 m(北東方向)、深さ 0.36 m を測る。断面形態は凹型を呈し、壁面は外傾して立ち上がる。底面はテラス状を呈する。

層位：覆土は上層 (1・2・4・5・6 層)、下層 (7・8 層)、壁際の堆積層 (3 層) である。上層は軽石が目立つ黒 ~ 褐色土である。下層は底面直上土に相当する。壁際の堆積層は黒 ~ 明黄褐色土である。検出面はⅧ層上面。

小　括　本遺構は、検出面から縄文早期に帰属すると考えられる。

PIT 39(土坑)

本遺構は B12・13 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 51 図)

形態：平面形—不整楕円形。規模—長軸 1.60 m(南北方向)、短軸 1.09 m(東西方向)、深さ 0.20 m を測る。断面形態は凹型を呈し、壁面は外傾して立ち上がる。

層位：覆土は黒褐色土と暗黄褐色土である。検出面はⅦ b-2 層下面。

遺　物　剥片が 1 点出土している。

切り合い関係：PIT40 を切る。

小　括　本遺構は、切り合い関係から縄文中期末～後期前葉以降に帰属すると考えられる。

PIT 41(土坑)

本遺構は B12 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 51 図)

形態：本遺構は調査した範囲内につき、その一部を検出したに過ぎない。平面形—円形ないし楕円形を呈すると推測される。掘削部分の規模は長軸 1.65 m(北西方向)、短軸 0.46 m(北東方向)、深さ 0.24 m を測ると推測される。断面形態は凹型を呈し、壁面はやや直立ぎみに立ち上がる。底面は複数の起伏があり、平坦ではない。

層位：覆土は上層 (1・2・3 層)、下層 (4・5・6 層) からなる。上層は軽石が目立つ黒 ~ 褐色土である。下層は底面直上土に相当する。検出面はⅦ b-2 層下面。

小　括　本遺構は、検出面から縄文中期に帰属すると考えられる。

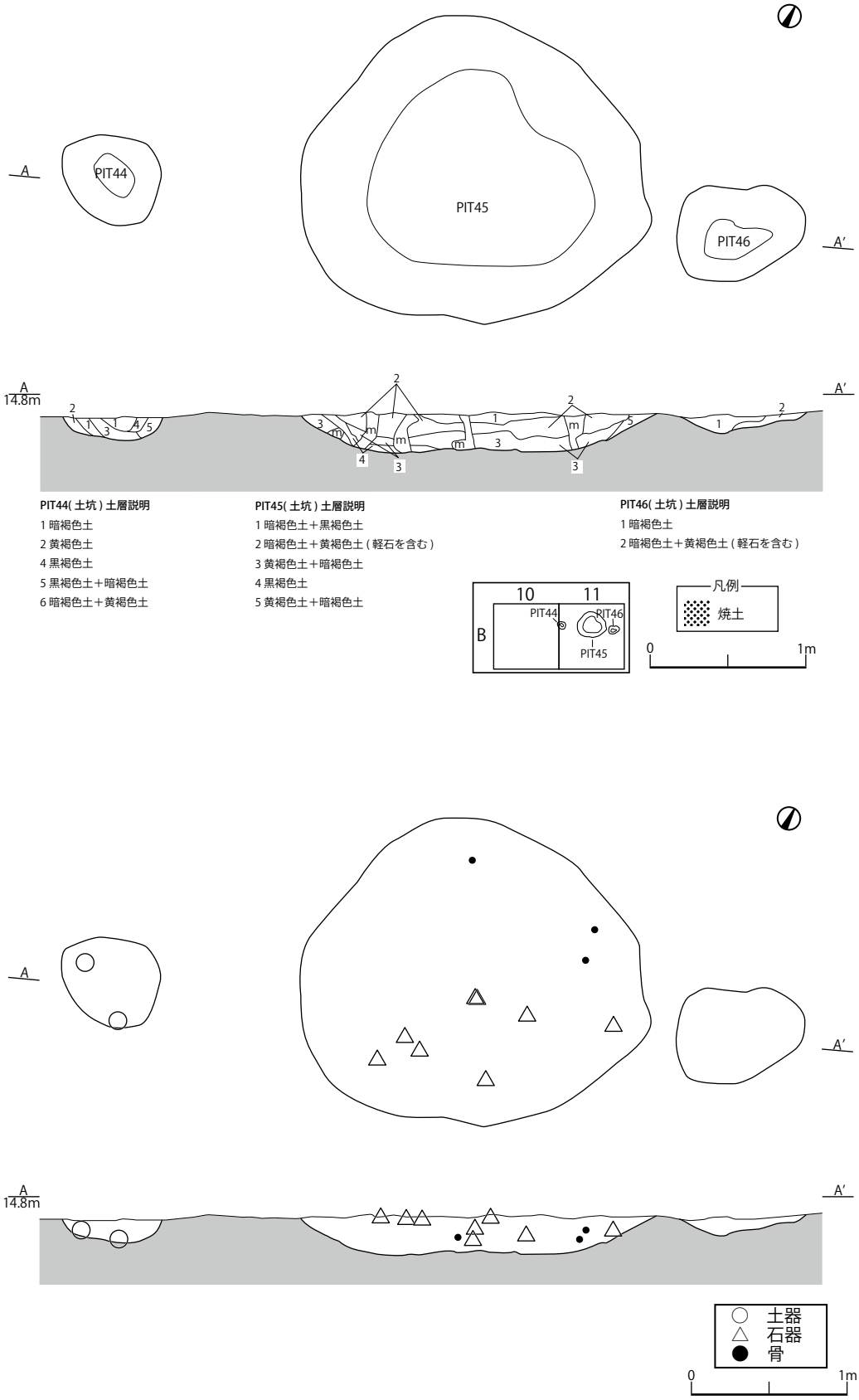
PIT 42(土坑)

本遺構は B17 区に位置する土坑である。

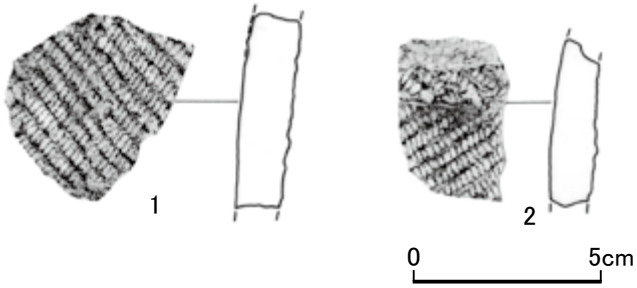
遺　構 (第 51 図)

形態：規模は長軸 1.16 m(北西方向)、短軸 0.83 m(北東方向)、深さ 0.18 m を測る。平面形—楕円形。断面形態—凹型を呈し、壁面は外傾して立ち上がる。底面は起伏があり、平坦ではない。

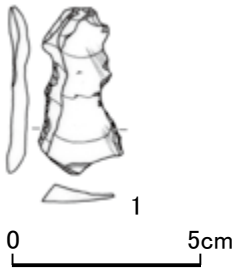
層位：覆土は黒 ~ 褐色度と暗黄褐色土からなる。検出面はⅦ b-2 層下面。



第 52 図 PIT44~46（土坑）及び遺物平面・垂直分布図



第53図　PIT44　（土坑）
覆土出土土器



第54図　PIT45　（土坑）
覆土出土石器

遺　物　木炭が 1 点出土。

小　括　本遺構は、検出面から縄文中期に帰属すると考えられる。

PIT 43(土坑)

本遺構は B13 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 51 図)

形態：平面形―不整楕円形。規模―長軸 1.39 m(北西方向)、短軸 1.10 m(北東方向)、深さ 0.28 m を測る。断面形態は凹型を呈し、壁面は外傾し緩やかに立ち上がる。底面は起伏があり、平坦ではない。覆土中から焼土 2 基が検出。焼土 a は 1 層中。焼土 b は 4 層からの検出である。いずれも土坑埋没後における、二次的な窪地利用の痕跡と考えられる。

層位：覆土は上層 (1~4 層)、下層 (5 層) からなる。上層の 1・2 層は木炭が目立つ黒 ~ 褐色土である。3・4 層は軽石が目立つ黒～褐色土である。下層は底面直上土に相当する。検出面はⅦ b-2 層下面。

遺　物　木炭が 1 点出土している。

小　括　本遺構は、検出面から縄文中期に帰属すると考えられる。

PIT 44(土坑)

遺構は B11 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 52 図)

形態：平面形―不整円形。規模―長軸 0.62 m(東西方向)、短軸 0.59 m(南北方向)、深さ 0.12 m を測る。断面形態は凹型を呈し、壁面はやや直立ぎみに立ち上がる。底面は全体的に平坦である。

層位：覆土は黒 ~ 褐色土と黄褐色土からなる。検出面はⅦ b-2 層下面。

遺物分布図 (第 52 図)

PIT34・35 によって切られているため、全体の遺物分布傾向はわからない。出土している遺物は土器のみである。垂直分布状況―覆土中の 14.6 m 付近に分布する。

遺　物(第 53 図)

土器：第 53 図は覆土出土である。1 は第Ⅱ群土器の胴部片で、RL 縄文を施文。2 は第Ⅱ群土器の胴部片で RL 縄文を施文した後、半折した縄を用いた LR 縄文を施文し、羽状縄文を形成。

小　括　本遺構は、検出面と出土遺物から縄文中期に帰属すると考えられる。

PIT 45(土坑)

本遺構は B11 区に位置する土坑である。

遺　構(第 52 図)

形態：平面形―不整円形。規模―長軸 2.20 m(南北方向)、短軸 1.94 m(東西方向)、深さ 0.24 m を測る。断面形態―凹型を呈し、壁面は外傾して緩やかに立ち上がる。底面は全体的に平坦である。

層位：覆土は黒～暗褐色土と暗黄褐色土である。検出面はⅦb-2 層下面。

遺物分布図 (第 52 図)

平面分布図―散逸的で目立った特徴はない。出土している遺物は石器の占める割合が大きい。垂直分布図―覆土中の 14.5 m ~14.6 m付近に分布する。

遺　物 (第 54 図)

石器：第 54 図は覆土からの出土である。第Ⅶ群 a 類で、ネガ面の両縁部に調整あり。図化はしていないが、剥片が 7 点出土している。その他：骨片が 3 点出土しているが、撹乱による混入と考えられる。

小　括　本遺構は、検出面と出土遺物から縄文中期に帰属すると考えられる。

PIT 46(土坑)

本遺構は B11 区に位置する土坑である。

遺　構 (第 52 図)

形態：平面形―不整楕円形。規模―長軸 0.62 m(北西方向)、短軸 0.59 m(北東方向)、深さ 0.12 m を測る。断面形態は凹型を呈し、壁面は外傾して緩やかに立ち上がる。底面は全体的に平坦である。

層位：覆土は暗褐色土と黄褐色土である。検出面はⅦb-2 層下面。

小　括　本遺構は、検出面から縄文中期に帰属すると考えられる。

柱穴群

本遺構はア -6~9 区に位置する土坑である。Ⅶb-2 層中を人力で掘削したところ黒褐色の円形の広がりが 15 箇所検出された。

遺　構 (第 55 図)

規模：東西約 13m に列状に広く分布する。

層位：Ⅶb 層中

小　括　合計 15 基もの柱穴が PIT 8 を境に東西に広く分布していた。周辺には竪穴住居のような掘り込みはなく、土坑が 1 基あるのみである。何かを区画するための柵跡なのか、また掘り込みを伴わない建物跡等、様々な可能性が考えられるが検出状況のみで用途を判断するのは難しい。また、遺物は出土していないため構築時期の判断は難しいが周辺の遺構と比較して縄文中期と類推する。

焼土範囲・木炭範囲遺構

竪穴住居跡などと同様、基本は 3 ヵ年分のものを焼土範囲並びに木炭範囲に分け、構築時期、規模の大小、グリッドの順に整理し解説した。確認時期はⅦb-2 層～Ⅶa 層中である。Ⅷ層の時期のものは確認できなかった。以下、焼土範囲、木炭範囲の順で説明する。

Ⅶb-2 層

焼土範囲 1

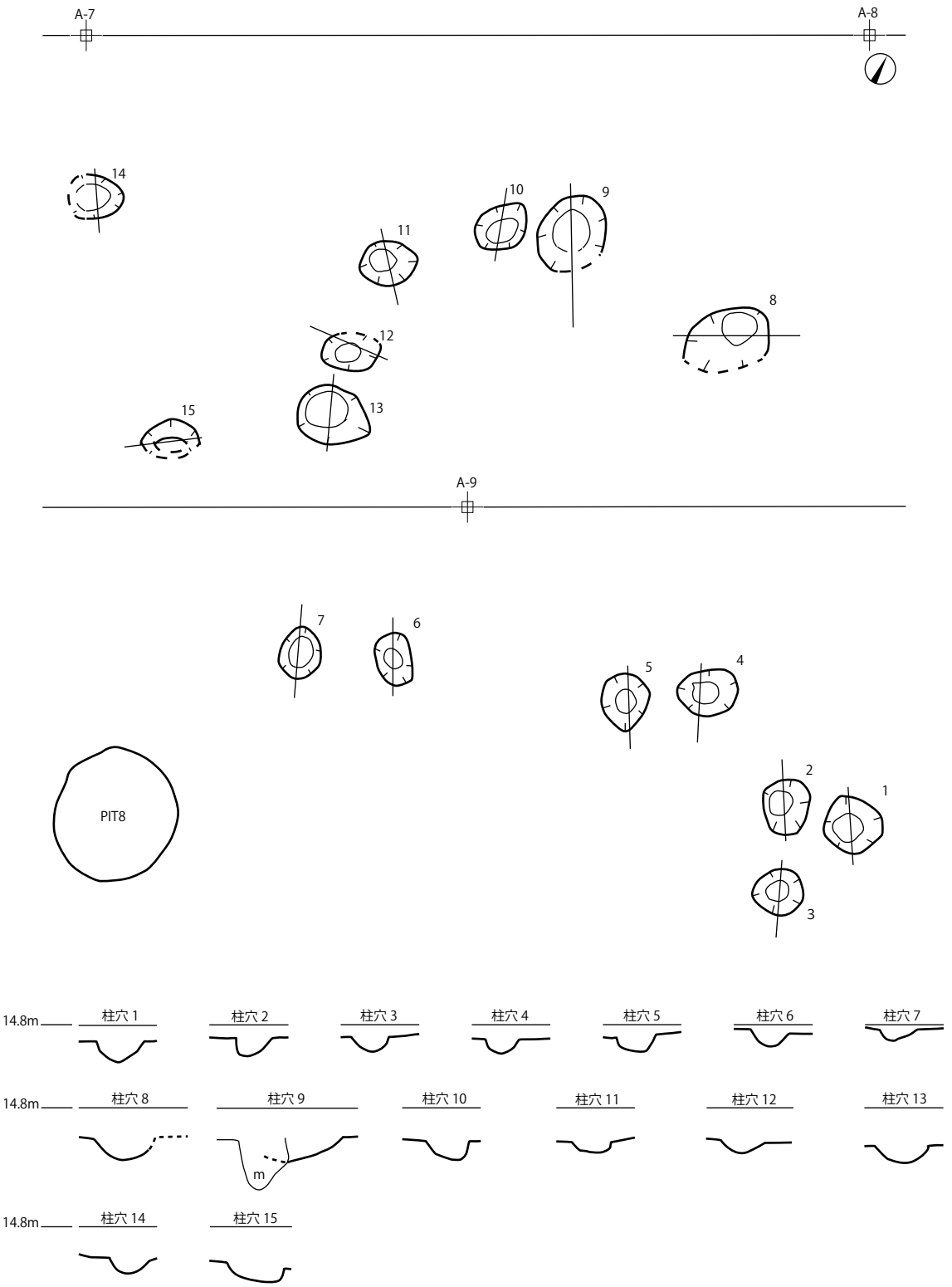
本遺構は C33・34 区に位置する焼土である。PIT23 の上面より検出した。

遺　構 (第 56 図)

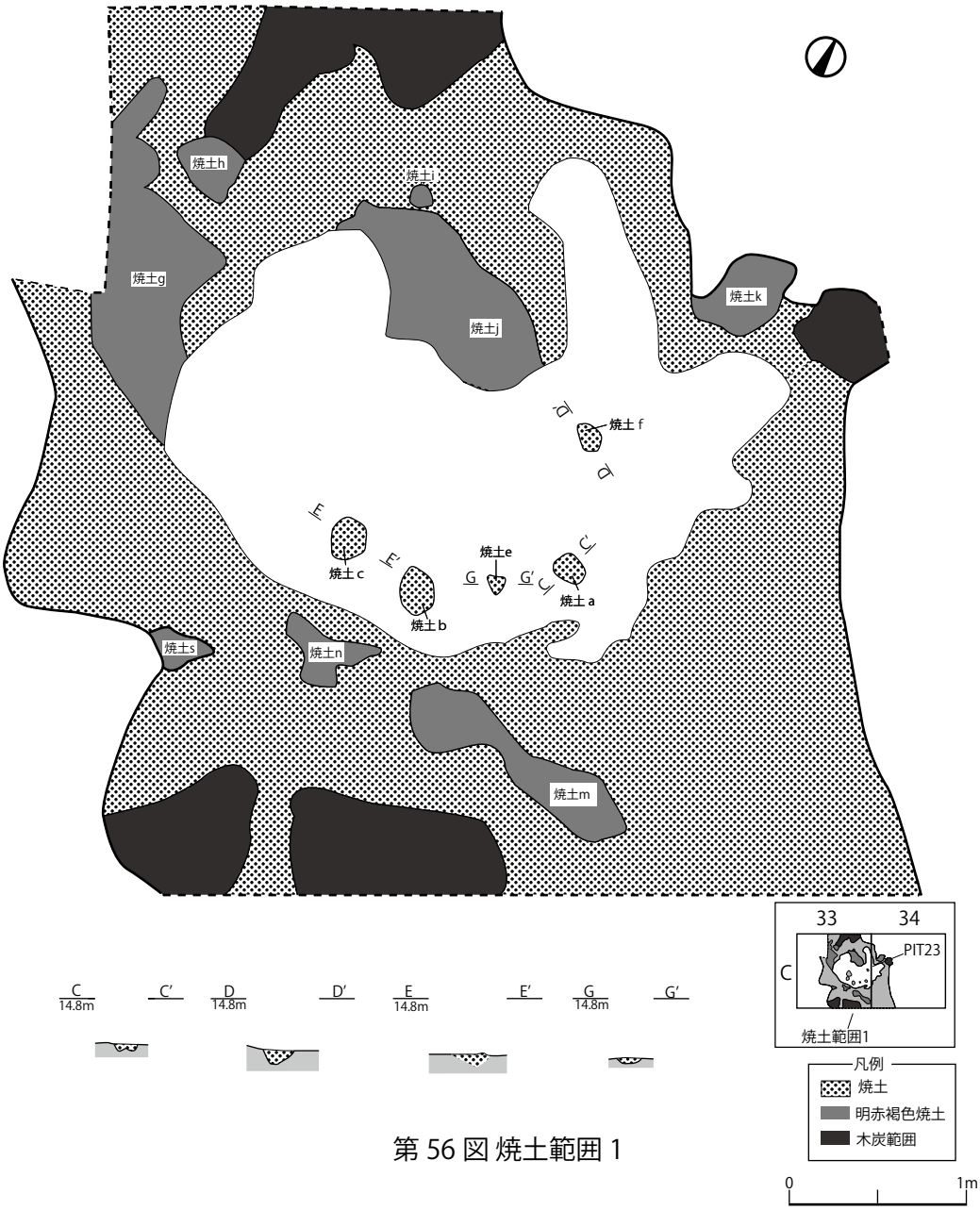
形態：焼土範囲 1 は調査区を一部拡張して調査を進めたが、広がりが予想以上に広く、全容を確認するまでには至らなかった。規模調査範囲の中で検出した最大径―5.0 m、短軸 4.73 mを測る。

層位：構築層―Ⅶb2 層中。

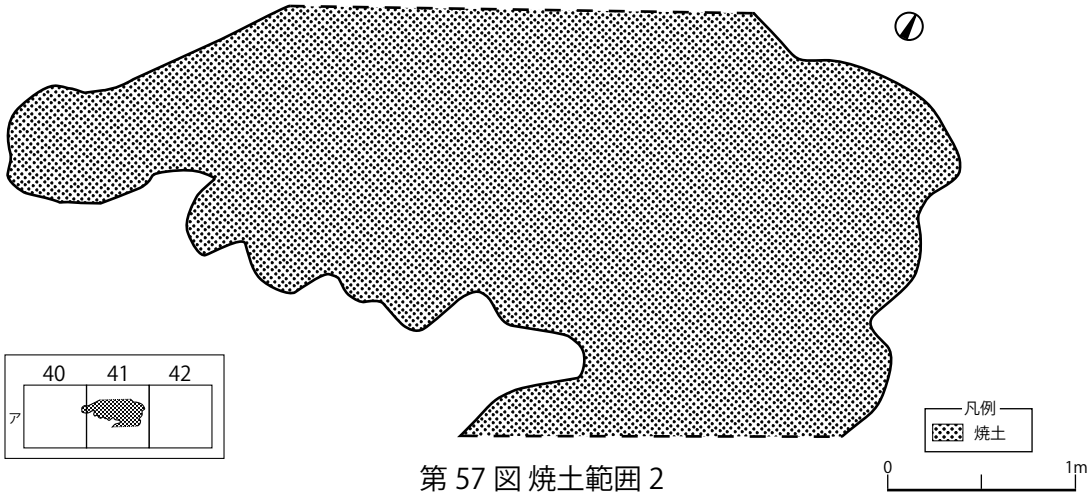
小　括　焼土粒が少なく、大きく広がる焼土範囲の中に、焼土粒が多い焼土が 13 ヶ所と 4 カ所の木炭範囲から構成される大型の焼土である。検出面から縄文中期に帰属するものと考えられるが、PIT23 よりは新しい構築で


A-7
A-8
14
10
9
11
8
12
13
15
A-9
7
6
5
4
PIT8
2
1
3
14.8m
柱穴 1
柱穴 2
柱穴 3
柱穴 4
柱穴 5
柱穴 6
柱穴 7
14.8m
柱穴 8
柱穴 9
柱穴 10
柱穴 11
柱穴 12
柱穴 13
m
14.8m
柱穴 14
柱穴 15

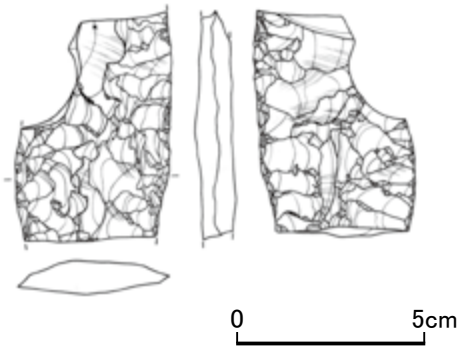
第 55 図 柱穴群



第 56 図 焼土範囲 1



第 57 図 焼土範囲 2



第58図　焼土範囲 2 出土石器

ある。

焼土範囲 2

本遺構はア -41 区に位置する焼土である。Ⅶb-2 層を人力で掘削したところ赤褐色土が広い範囲に確認されたため、焼土範囲として認定した。北側は道路の側溝により一部撹乱を受けていた。

遺　構(第 57 図)

形態：平面形―不定形。規模―最大長 5.0 m 以上 (東西方向)

層位：構築層―Ⅶb-2 層中。

遺　物(第 58 図)

石器：第 58 図は、第Ⅴ群 a 類であり、両面調整である。黒曜石（OB）製である。

小　括　規模が 5 m に及ぶ焼土範囲である。掘り込みは持たず、平坦面に広く焼土が分布している。限定された範囲に焼土が分布することから、何らかの人工物が消失した痕跡と考えられる。焼けた平地住居跡の可能性も検討したが、柱穴や盛土などがまったく見られないため可能性は低いと思われる。また、焼土中からの出土遺物は石器 1 点のみであり、構築時期の判断は難しいが構築層と遺構周辺の出土遺物から縄文中期と類推する。

焼土 1

本遺構はア -4 区に位置する焼土である。Ⅶb-2 層下層を人力で掘削したところを焼土の広がりが確認された。

遺　構 (第 59 図)

形態：平面形―不整楕円形。規模―最大長 0.72 m(東西方向)、深さ―0.1 m 前後。

層位：構築層―Ⅶb-2 層中。

小　括　直径 1m に満たない比較的小さな焼土である。竪穴住居跡が 2 軒近接して存在するため関連した利用が考えられる。遺物は出土していないため構築時期の判断は難しいが、周辺の遺構の時期と比較して縄文中期と類推する。

焼土 2

B-8 区に位置する。

遺　構 (第 59 図)

形態：規模は長軸 0.88m、短軸 0.60 m、深さ 0.16 m を測る。平面形は不整楕円形を呈する。

層位：Ⅶb-2 層中の構築である。

遺　物　木炭が 1 点出土している。

小　括　本遺構の時期は検出面から判断して、縄文中期である。

焼土 3a・3b 及び木炭範囲 2a・2b

本遺構はア -13 区に位置する焼土と木炭範囲である。Ⅶb-2 層下層を人力で掘削したところ木炭を多く含む黒

褐色土と焼土の広がりが確認された。

遺　構 (第 59 図)

形態：平面形―いずれも不定形。焼土規模―最大長 0.3~0.65 m 前後、焼土層厚―4~10 ㎝前後。

層位：構築層―Ⅶb-2 層中。

小　括　2 m 程度の範囲内に焼土と木炭範囲が集中して検出された。遺物は出土していないため構築時期の判断は難しいが、周辺の遺構と比較して縄文中期と類推する。

焼土 4

B-17 区に位置する。

遺　構 (第 59 図)

形態：平面形―不定形を呈する。規模―長軸 1.74 m、短軸 1.60 m、深さ 0.25 m を測る。

層位：Ⅶb-2 層中の構築である。

小　括　本遺構の時期は検出面から判断して、縄文中期である。

焼土 5

A-19 区より出土。

遺　構 (第 59 図)

形態：平面形―道路側溝により消失しており不明。規模―現存部の最大径 1.1m(北東方向)、層厚―9cm。

層位：Ⅶb-2 層中の構築である。

遺　物　焼土に伴う遺物は炭化種子と木炭が 5 点出土した。種子については同定していない。

小　括　道路側溝により南東側が消失している。構築時期は構築層から判断して、縄文中期である。

焼土 6

A-22 区より出土。

遺　構 (第 59 図)

形態：平面形―楕円形。規模―長軸 0.8 m(北西方向)、短軸 0.5 m(北東方向)、層厚―12 cm。

層位：Ⅶb-2 層中の構築である。

遺　物　焼土に伴う遺物は炭化種子と木炭が出土した。種子については同定していない。

小　括　平面は楕円形になる。構築時期は構築層から判断して、縄文中期である。

焼土 7

本遺構はア -23 区に位置する焼土である。Ⅶb-2 層下層を人力で掘削したところ赤褐色土の広がりが確認されたため、焼土として認定した。

遺　構 (第 59 図)

形態：平面形―楕円形。規模―最大長 0.28 m 以上 (南北方向)、深さ―0.1 m 前後。

層位：構築層―Ⅶb-2 層中。

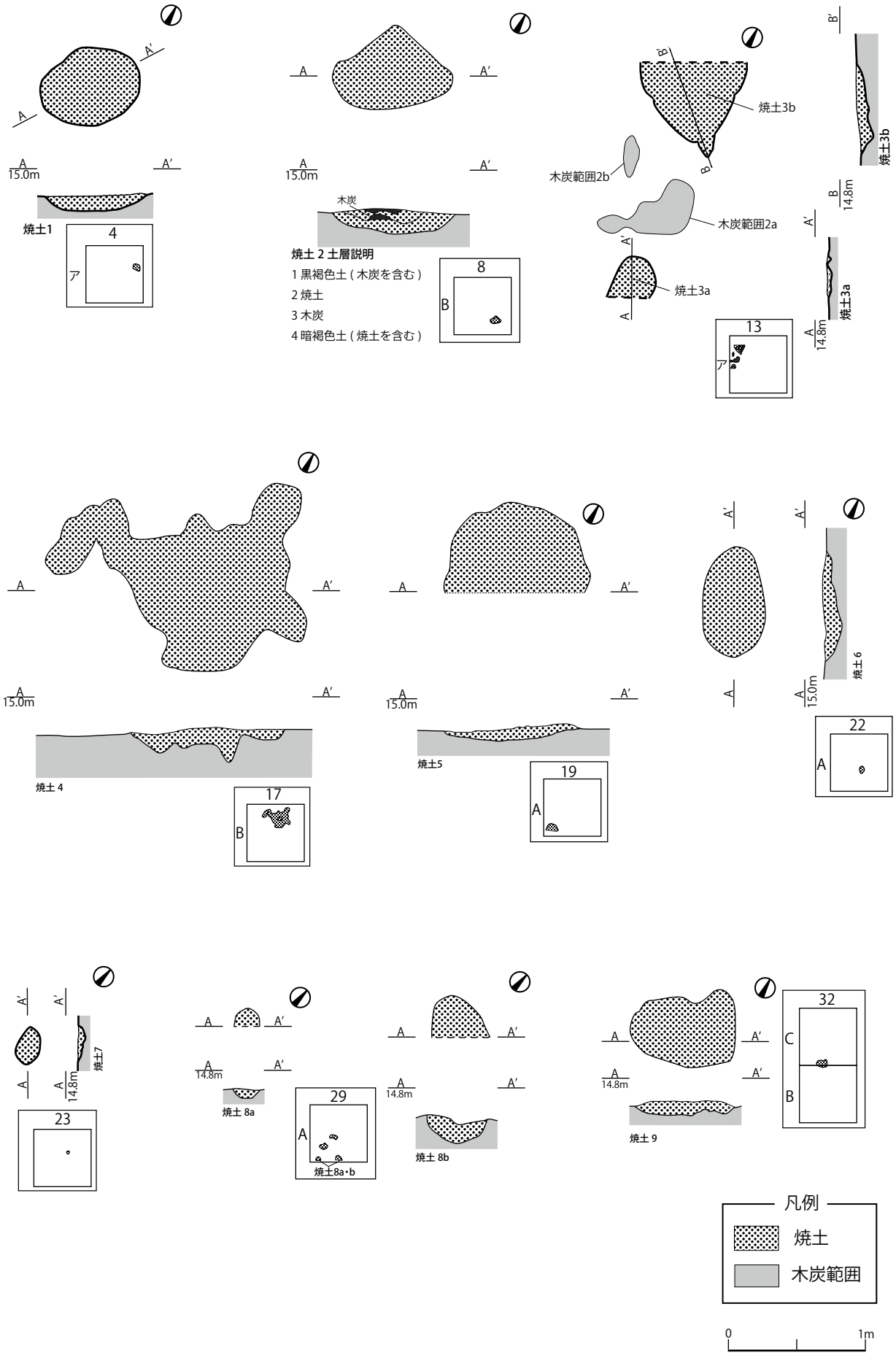
小　括　楕円形の比較的小さな焼土である。遺物は出土していないため構築時期の判断は難しいが、周辺の土坑の時期と比較して縄文中期と類推する。

焼土 9

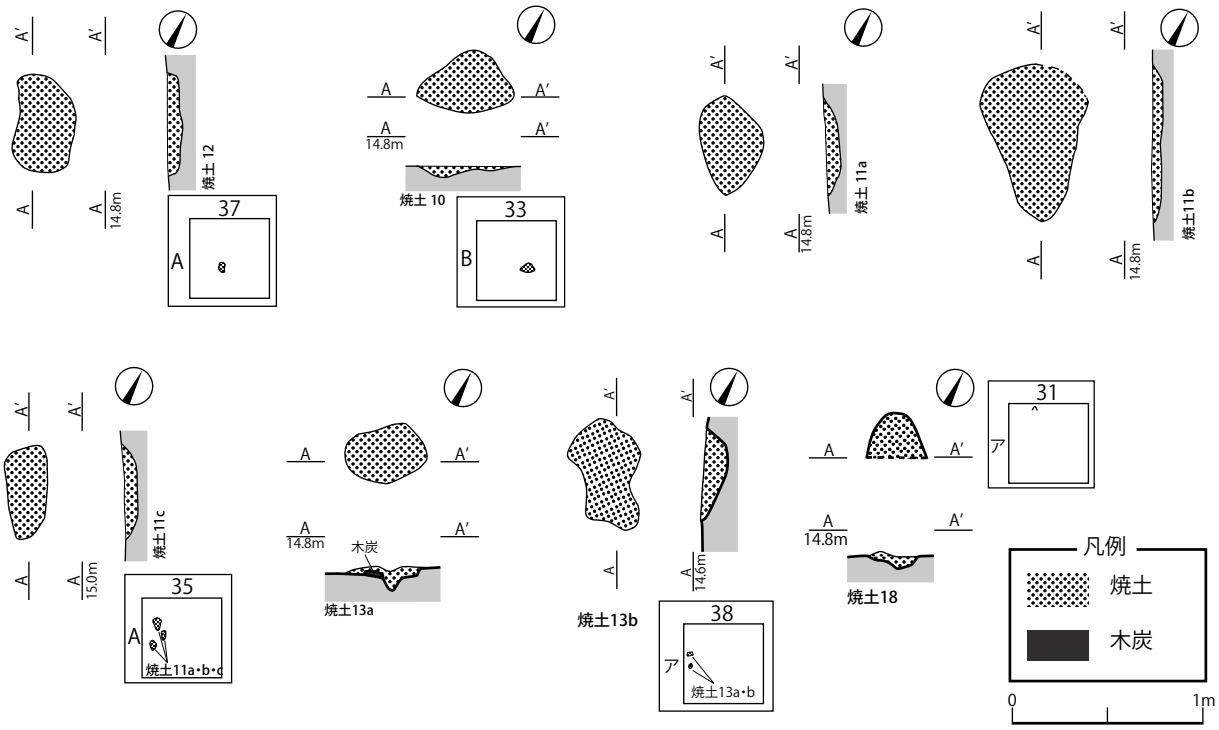
C―32・B-32 区に位置する。

遺　構 (第 59 図)

形態：平面形―不整楕円形を呈する。規模―長軸 0.75 m、短軸 0.52 m、深さ 0.14 m を測る。



第 59 図 焼土 1~9 及び木炭範囲 2a・2b



第 60 図 焼土 10~11,13,18

層位：Ⅶb-2 層中の構築である。

小　括　本遺構の時期は検出面から判断して、縄文中期である。

焼土 10

B-33 区に位置する。

遺　構 (第 60 図)

形態：平面形―不整円形を呈する。規模―長軸 0.50 m、短軸 0.32 m、深さ 0.8 m を測る。

層位：Ⅶb-2 層中の構築である。

小　括　本遺構の時期は検出面から判断して、縄文中期である。

焼土 11a・11b・11c

A-35 区に位置する。

遺　構 (第 60 図)

形態：11a の規模―長軸 0.50 m、短軸 0.22 m、深さ 0.08 m、11b―長軸 0.54 m、短軸 0.12 m、深さ 0.07m、11c―長軸 0.82 m、短軸 0.56 m、深さ 0.06 m を測る。11a・11b・11c の平面形は不整楕円形を呈する。

層位：Ⅶb-2 層中の構築である。

遺　物　11a から木炭が 1 点出土。

小　括　本遺構の時期は検出面から判断して、縄文中期である。

焼土 12

A-37 区に位置する。

遺　構 (第 60 図)

形態：平面形―不整楕円形を呈する。規模―長軸 0.50 m、短軸 0.30 m、深さ 0.20 m を測る。

層位：Ⅶb-2 層中の構築である。

小　括　本遺構の時期は検出面から判断して、縄文中期である。

焼土 13a

本遺構はア -38 区に位置する焼土である。Ⅶb-2 層を人力で掘削したところ赤褐色土の広がりが確認されたため、焼土として認定した。

遺　構 (第 60 図)

形態：平面形―不整楕円形。規模―最大長 0.43 m 以上 (東西方向)、深さ―0.1 m 前後。

層位：構築層―Ⅶb-2 層中。

遺　物　焼土に伴う遺物は骨 1 点と木炭が 17 点出土した。

小　括　直径 0.5 m に満たない比較的小さな焼土である。焼土中に一部木炭を含む。遺物は出土していないため構築時期の判断は難しいが、周辺の土坑の時期と比較して縄文中期と類推する。

焼土 13b

本遺構はア -38 及び A-38 区に位置する焼土である。Ⅶb-2 層を人力で掘削したところ赤褐色土の広がりが確認されたため、焼土として認定した。

遺　構 (第 60 図)

形態：平面形―不定形。規模―最大長 0.60 m 以上 (東西方向)、深さ―0.12 m 前後。

層位：構築層―Ⅶb-2 層中。

小　括　直径 1 m に満たない比較的小さな焼土である。遺物は出土していないため構築時期の判断は難しいが、周辺の土坑の時期と比較して縄文中期と類推する。

焼土 18

本遺構はア -31 区に位置する焼土である。Ⅶb-2 層を人力で掘削したところ木炭と赤褐色土が検出されたため、焼土として認定した。南側は道路の側溝により撹乱を受け破壊されていた。

遺　構 (第 60 図)

形態：平面形―楕円形と推測する。規模―最大長 0.3m 以上 (残存部分)、焼土層厚―0.06m

層位：構築層―Ⅶb-2 層中。

遺　物　焼土に伴う遺物は木炭が 1 点のみである。

小　括　直径 0.5m に満たない小さな焼土である。焼土中に細かな木炭を含む。焼土中より遺物は出土していないため構築時期の判断は難しいが、構築層と遺構周辺の出土遺物から縄文中期と類推する。

Ⅶb-1 層

焼土 14

A-1 区より出土。

遺　構 (第 61 図)

形態：平面形―不定形。規模―長軸 0.6m(北東方向)、短軸 0.3m(北西方向)、層厚―4cm。

層位：Ⅶb-1 層中の構築と考えられる。

小　括　平面は不定形。構築時期は構築層から判断して、縄文中期である。

焼土 15a・15b

A-5 区より出土。

遺　構 (第 61 図)

形態：平面形―15a・b 両者とも PIT2(竪穴) の上層で確認されている。15a は類楕円形、15b は楕円形。規模―15a は長軸 1.3 m(東西方向)、短軸 1.1 m(南北方向)、層厚―12 cm。15b は長軸 0.75 m(北東方向)、短軸 0.5 m(北西方向)、層厚―12 cm。

層位：両者ともⅦb-1 層中の構築と考えられる。15a の上部には形の明瞭な炭化物が残されていた。焼土に伴う遺物は木炭以外出土していない。

小　括　15a・b とも PIT2(竪穴) の上層で確認された焼土である。木炭以外、遺物は出土していない。構築時期は構築層から判断して、縄文中期である。

焼土 16

A-10 区より出土。

遺　構 (第 61 図)

形態：平面形―不整楕円形。規模―長軸 0.26 m(南北方向)、短軸 0.2 m(東西方向)、層厚―6 cm。

層位：Ⅶb-1 層中の構築と考えられる。遺物は出土していない。

小　括　平面は不整楕円形。構築時期は構築層から判断して、縄文中期である。

焼土 17a・17b

A-29 区に位置する。

遺　構 (第 61 図)

形態：17a・17b の平面形は不整楕円形を呈する。17a―長軸 0.38 m、短軸 0.32m、深さ 0.09 m、17b―長軸 0.50 m、短軸 0.25 m、深さ 0.04 m を測る。

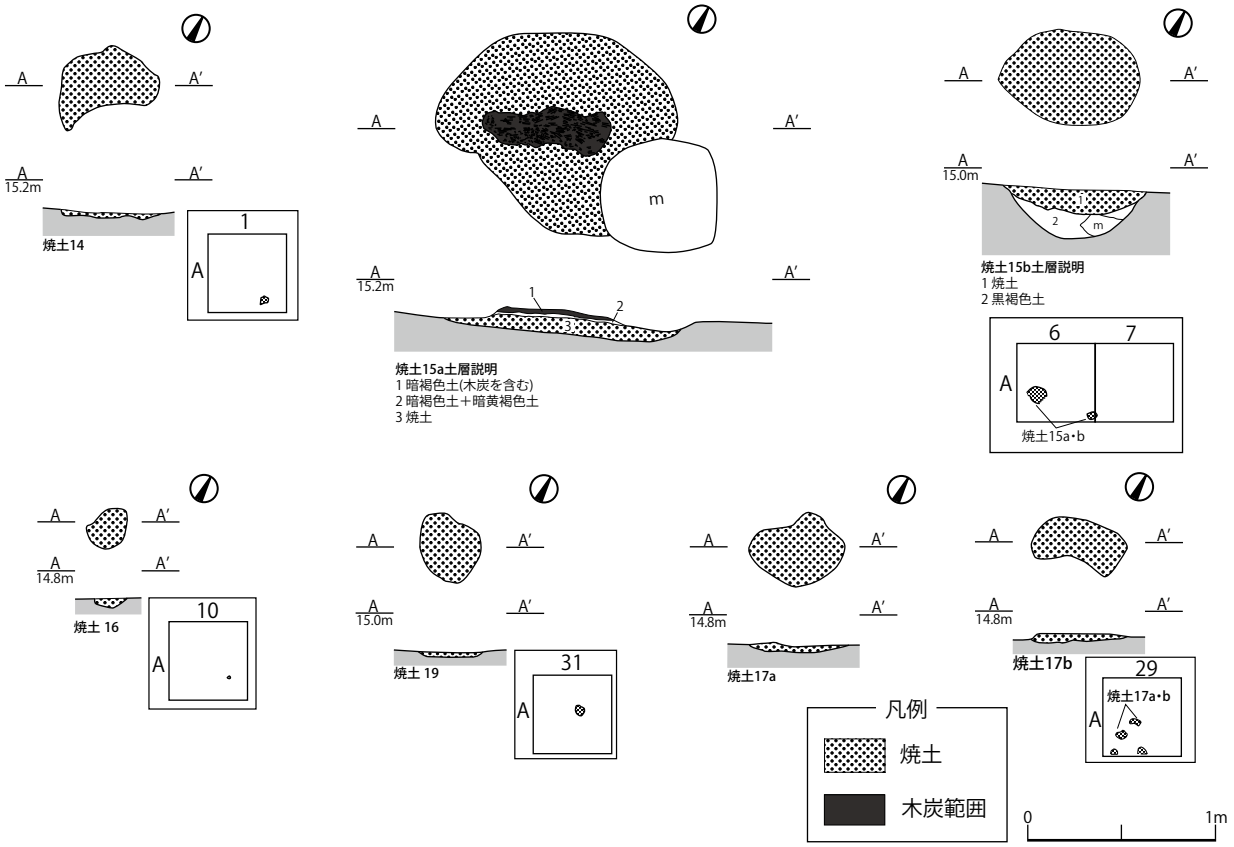
層位：Ⅶb-1 層中の構築である。

遺　物　17a より木炭が 1 点出土している。

小　括　本遺構の時期は検出面から判断して、縄文中期である。

焼土 19

A-31 区に位置する。



第 61 図 焼土 12,14~17,19

遺　構 (第 61 図)

形態：平面形―不整円形を呈する。規模―長軸 0.39 m、短軸 0.29 m、深さ 0.02 m を測る。

層位：Ⅶb-1 層中の構築である。

小　括　本遺構の時期は検出面から判断して、縄文中期である。

焼土 20

A-32 区に位置する。

遺　構 (第 62 図)

形態：平面形―不整楕円形を呈する。規模―長軸 1.37 m、短軸 0.68 m、深さ 0.16 m を測る。

層位：Ⅶb-1 層中の構築である。

小　括　本遺構の時期は検出面から判断して、縄文中期である。

焼土 23a・23b・23c

B-36・B-37 区に位置する。

遺　構 (第 62 図)

形態：23a の平面形は不定形、23b・23c は楕円形を呈する。23a―長軸 3.40 m、短軸 2.09 m、深さ 0.10 m、23b―長軸 0.52 m、短軸 0.40 m、深さ 0.08 m、23c―長軸 0.31 m 、短軸 0.28 m、深さ 0.10 m を測る。

層位：Ⅶb-1 層中の構築である。

遺　物

石器：焼土 23a から剥片 1 点出土。

その他：焼土 a から木炭 1 点出土。

小　括　本遺構の時期は検出面から判断して、縄文中期である。

焼土 24

A-37 区に位置する。

遺　構 (第 62 図)

形態：平面形―不整楕円形を呈する。規模―長軸 1.18 m、短軸 0.97 m、深さ 0.15 m である。

層位：Ⅶb-1 層中の構築である。

小　括　本遺構の時期は検出面から判断して、縄文中期である。

Ⅶa 層

焼土 25a・25b

A-2 区より出土。

遺　構 (第 62 図)

形態：平面形―25a・b とも不定形。規模―25a は長軸 0.5 m(東西方向)、短軸 0.4 m(南北方向)、層厚―0.3 m。25b は長軸 0.7 m(北東方向)、短軸 0.4 m(北西方向)、層厚―5 cm。

層位：両者ともⅦa 層中の構築と考えられる。遺物は出土していない。

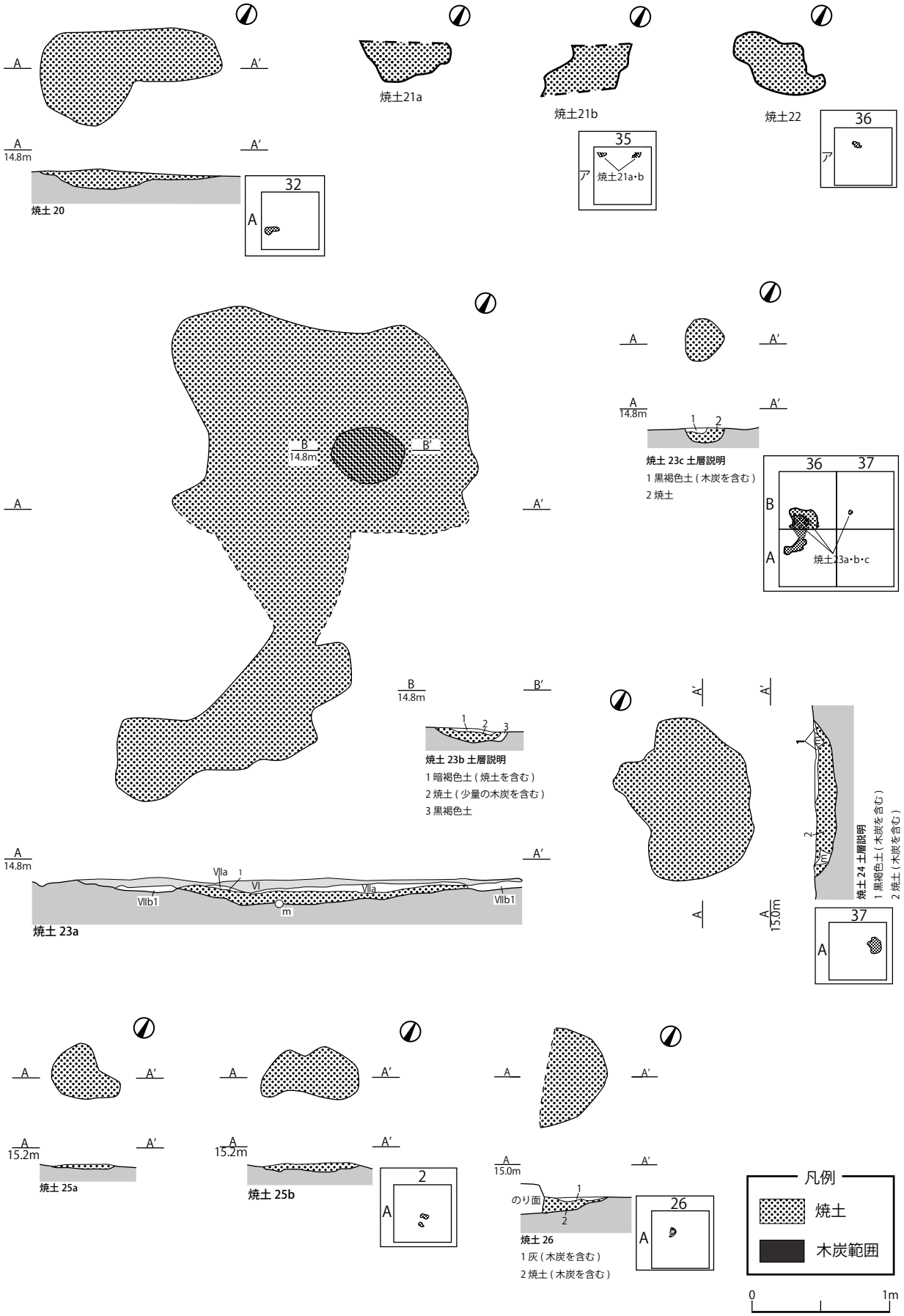
小　括　25a・b とも平面形は不定形である。構築時期は構築層より判断して、縄文晩期 ~ 中期である。

焼土 26

A-26 区に位置する。

遺　構 (第 62 図)

形態：焼土全体の掘削には至らず、平面形は不明。掘削部分の規模は長軸 0.72 m、短軸 0.43 m、深さ 0.10


焼土 20
焼土21a
焼土21b
焼土22
焼土21a・b
焼土 23c 土層説明
1 黒褐色土 (木炭を含む)
2 焼土
焼土23a・b・c
焼土 23b 土層説明
1 暗褐色土 (焼土を含む)
2 焼土 (少量の木炭を含む)
3 黒褐色土
焼土 23a
焼土 24 土層説明
1 黒褐色土 (木炭を含む)
2 焼土 (木炭を含む)
焼土 25a
焼土 25b
焼土 26
1 灰 (木炭を含む)
2 焼土 (木炭を含む)
のり面
凡例
焼土
木炭範囲
0
1m

第 62 図 焼土 20~26

m である。

層位：Ⅶa 層中の構築である。

小　括　本遺構の時期は検出面から判断して、縄文晩期である。

Ⅶb-2 層

木炭範囲 1a・1b・1c

A-13 区より出土。

遺　構 (第 63 図)

形態：平面形―1a・b は不整楕円形、1c は道路側溝で消失しており形状は不明。規模―1a は長軸 0.78 m(北西方向)、短軸 0.7 m(北東方向)、層厚―10 cm。1b は長軸 0.6 m(南北方向)、短軸 0.4 m(東西方向)、層厚―4 cm。1c は長軸 0.4 m(北東方向)、短軸 0.3 m(北西方向)、層厚―5 cm。

層位：Ⅶb-2 層中の構築と考えられる。

小　括　木炭範囲の平面形は多様であり、当範囲も同様不定形である。構築時期は構築層から判断して、縄文中期である。

木炭範囲 6

本遺構はア -27 区に位置する長軸 1 m を超す木炭範囲である。Ⅶb-2 層下層を人力で掘削したところ木炭を多く含む黒褐色土の広がりが確認された。

遺　構 (第 63 図)

形態：平面形―不定形。規模―最大長 1.42 m 以上 (東西方向)、深さ―0.1 m 前後。

層位：構築層―Ⅶb-2 層中。

小　括　検出された木炭は形になるような大きなものはなく、黒褐色土に細かな木炭が混ざっている状態であった。また、周辺に焼土は見られなかった。遺物は出土していないため構築時期の判断は難しいが、周辺の土坑の時期と比較して縄文中期と類推する。

Ⅶb-1 層

木炭範囲 3

A-1 区より出土。

遺　構 (第 63 図)

形態：平面形―不定形。規模―長軸 0.5 m(東西方向)、短軸 0.15 m(南北方向)、炭化材が中心。厚さ―5cm。

層位：Ⅶb-1 層中の構築と考えられる。遺物は木炭以外出土していない。

小　括　炭化材の状態で出土しており、材の状態は良好であった。構築時期は構築層より判断して、縄文中期である。

木炭範囲 4a・4b

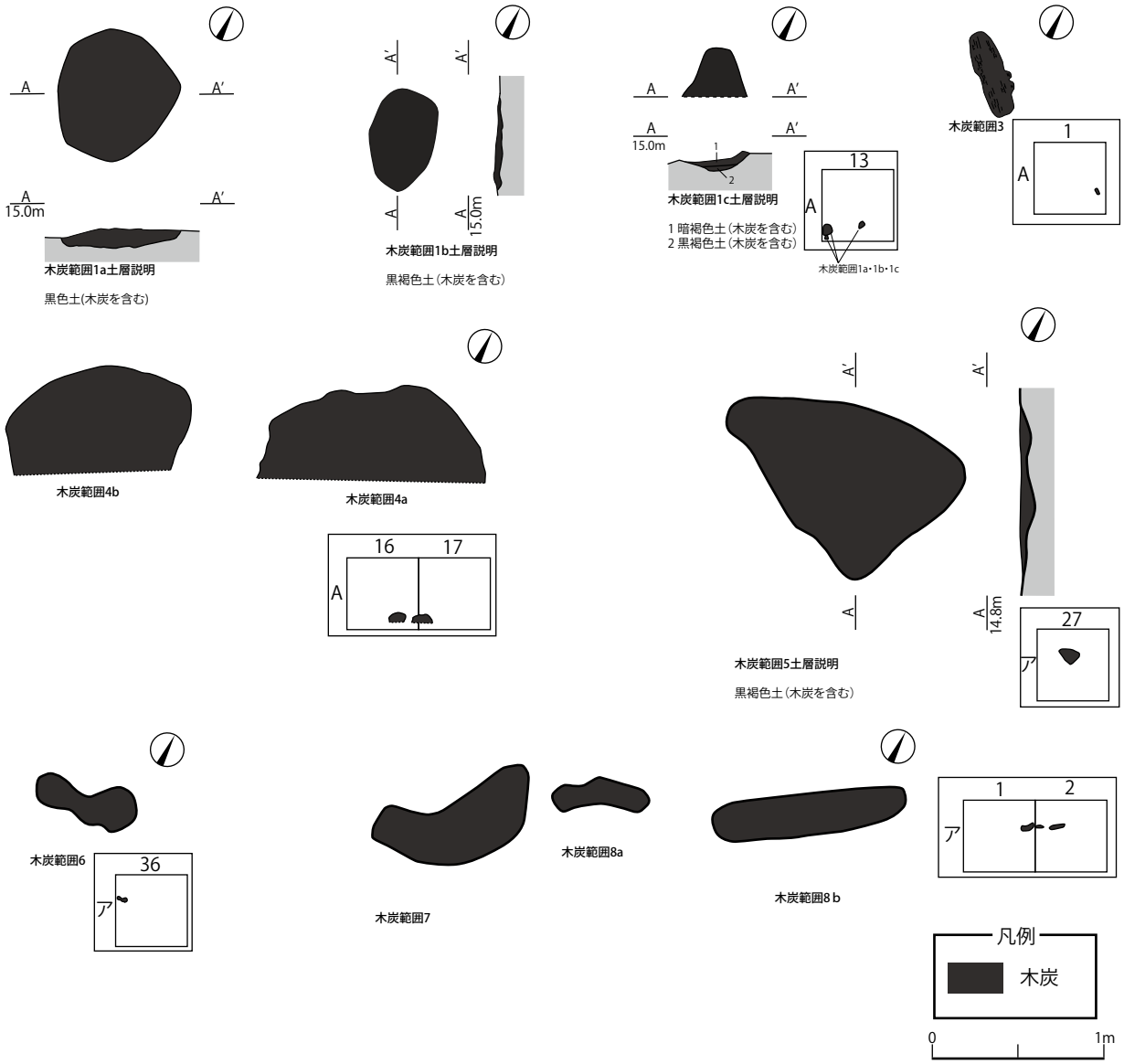
遺　構 (第 63 図)

形態：平面形―4a・b とも道路側溝により消失しており不明。規模―規模―4a は長軸 1.3 m(北東方向)、短軸 0.55 m(北西方向)、層厚―数センチ。1b は長軸 1.1 m(東西方向)、短軸 0.6 m(南北方向)、層厚―数センチ。

層位：両者ともⅦb-1 層中の構築と考えられる。

遺物は両者とも木炭以外出土していない。

小　括　炭化物とそれが土壌化したものが散在した状態で出土していた。構築時期は両者とも構築層から判断して、縄文中期である。



第 63 図 木炭範囲 1,3~8

木炭範囲 7

ア -1 区に位置する。

遺　構 (第 63 図)

形態：平面形―不整楕円形。規模―最大径 0.93 m である。

層位：Ⅶ a 層中の構築である。

小　括　本遺構の時期は検出面から判断して、縄文晩期である。

木炭範囲 8a・8b

ア -2 区に位置する。

遺　構 (第 63 図)

形態：平面形―8a は不整楕円形。8b は楕円形。規模―8a は最大径 0.55 m、8b は最大径 1.12 m である。

層位：Ⅶ a 層中の構築である。

小　括　本遺構の時期は検出面から判断して、縄文晩期である。

第 3 章　遺構外出土遺物

当遺跡の遺物包含層は現道下で多くが保存されていたが、耕作地に及ぶ区域ではそのほとんどが営農活動により消失していた。以下、古い時期の下層から上層に向け、各層ごとに土器、石器の順で説明する。遺物の分類基準は第 1 章遺跡の概要・遺物の分類の項を参照し、石器の石質略記号は例言に掲載しているのでそちらを参照されたい。

Ⅶ層 (第 64 図)

土器：第 64 図 1・2 は第Ⅰ群の東釧路Ⅲ式の口縁部片と胴部片である。1 は口縁部片である。口縁部に絡条体圧痕文を施文した後、撚糸文を施文。2 は胴部片である。絡条体圧痕文を施文。3 ～ 7 は第Ⅱ群のトコロ 6 類の口縁部片。5・6 は同一個体である。3 は LR 縄文を施文した後、擦り消し無文帯を形成した後、縦方向の刻みと棒状工具による刺突文を施文。4 は LR 縄文を施文した後、擦り消し無文帯を形成した後、縦方向の刻みと棒状工具による刺突文を施文。5・6 は LR 縄文を内外面に施文。7 は RL 縄文を施文したのち、棒状工具による刺突文を施文。8 ～ 11 は第Ⅱ群土器の胴部片である。8・9 は結束羽状縄文を施文。10 は半折した縄を用いた RL 縄文を施文。11 は LR 縄文を施文。12 は第Ⅲ群の小型鉢形土器で、サイズは口径 8.5 cm、胴径 8.1 cm、器壁厚 0.6 mm。無文で、口縁部・口唇部・底部にナデ調整。（工藤　大）

石器：第 65 図 1・2 は第Ⅰ群であり、1 は a 類、2 は c 類である。3~5 はⅤ群 a 類であり、両面調整である。5 は被熱している。6・7 は第Ⅵ群 b 類である。8~16 は第Ⅷ群 a 類である。14 は、ブーメラン形をしており、両面からの調整により鋸歯状の刃部を有する石器である。17~19 はⅧ群 b 類である。20 は第Ⅹ群 b 類で、石材は緑色片岩 (GR-SCH) である。21・22 はⅩⅢ群 c 類であり、いずれも砂岩製 (SS) である。（平河内　毅）

Ⅶ b 層 (第 66 ～ 69 図)

土器：第 66 図 1・2 は第Ⅰ群東釧路Ⅲ式土器の胴部破片であり、R の縄の絡条体圧痕文を施文後、L の縄を 2 つ横並びに巻き付けた撚糸文を転がして施文している。焼成は良好である。3 は第Ⅱ群 a 類土器であり、形状は底部から口縁にかけてほぼストレートに開く筒形である。サイズは、高さ 22.6 ㎝以上、器壁厚 1.2~1.4 ㎝、口径 17.8 ㎝。色調は褐色 ~ 黒褐色。繊維を含む。焼成は良好。口縁内面には爪形文が横 1 列施文されている。外面には LR 縄文と RL 縄文を羽状に施文。縄端の結束痕が明瞭である。施文順序としては縄文施文後、口縁部にヘラ状工具により軸が右に傾いた斜めの刻みを施し、その後軸が左に傾いた斜めの刻みを入れ、最後に口縁部直下に直径 1.2 ㎝の円形文を施文している。4 は第Ⅱ群 a 類の筒形土器である。サイズは、高さ 29 ㎝以上、器壁高 1.4 ㎝、口径 17.6 ㎝。色調は褐色 ~ 黒褐色。繊維を含む。焼成は良好。口縁部には吹きこぼれ痕と思われる炭化物が付着している。外面には LR 縄文と RL 縄文を施文しており、羽状になる部分もあるが胴部中央には RL が 3 段続けて施文されている。縄端の結束痕が明瞭である。内面は無文。円形文は直径 1.2 ㎝で指頭状の丸みを持ち、口縁部直下に連続して施文されている。5 は第Ⅱ群 a 類の筒形土器である。サイズは、高さ 30.4 ㎝以上、器壁厚 1.0 ㎝、口径 17.2 ㎝。色調は褐色 ~ 黒褐色。焼成は良好。口縁に山形突起を有し、6~7 個程度存在したと思われる。口縁部には羽状縄文施文後に縦の沈線を施し、直下に直径 1.1 ㎝の円形文を施文。内面には一部に RL 縄文を施文。外面には LR 縄文と RL 縄文の羽状縄文を底部から順に口縁部まで施文しており、縄端の結束痕は明瞭である。原体を転がした方向は LR が図の左から右へ、RL は右から左へ転がして施文したものと思われる。底部は欠損しているが全体の形態が把握できる土器である。6 は第Ⅱ群土器であるが口縁部と底部を欠損しているため、詳細な形式については不明である。サイズは、高さ 26 ㎝以上、器壁高 1.4 ㎝。色調は褐色 ~ 黒褐色。焼成は良好。繊維を含む。胴部外面には、LR 縄文と RL 縄文の結束羽状縄文を施文している。7~11 は第Ⅱ群土器の口縁部破片である。7 は口縁部にヘラ状工具により右方向から刻みを入れられており、その刻みと互い違いとなるように口唇端面にも同様な刻みが施されている。口縁部直下には、棒状工具による円形文が施文されている。10 は、LR 縄文を施文した後に 7 と同様の互い違いの刻みを施している。11 は、内外面に LR 縄文を施文し、ヘラ状工具により右方向から刻みを入れている。

第 67 図 1 は第Ⅱ群 a 類土器の口縁部から胴部にかけての破片である。外面には LR と RL の結束羽状縄文を施文し、内面にも同様の原体を縦方向に転がして施文している。口唇上端にも一部 LR 縄文を施文。口縁部には山形突起がある。円形文は、張り出した口縁部を挟むように上下に施文されている。繊維を多く含む。

第 68 図 1 は第Ⅱ群 (トコロ 6 類) 土器の口縁部破片である。外面には縄文 LR と RL の結束斜行縄文を施文、一部に線対称となるように施文している箇所も見られる。内面にも縄文 LR と RL の結束羽状縄文を縦方向に施文している。口唇端面は平坦で、縄文 LR が施文されている。口縁部には貼付けによる山形突起が 1 箇所あり、突起上部には先の尖った工具で上から刺突されている。円形文は、張り出した口縁部を挟むように上下に施文されており、左右に数回ひねるようにして施文されたと推測される。2 は第Ⅱ群土器の口縁部破片であり、縄文 LR を施文。3~10 は、第Ⅱ群土器の胴部破片である。10 は第Ⅱ群土器の胴部破片である。文様は、R 縄文を巻いた棒軸の絡縄帯を回転施文させた後に上から RL 縄文を施文している。11~13 は第Ⅱ群土器の底部破片である。12・13 は縄文 LR 施文後、ヘラ状工具により左方向から刻みを入れている。

第 69 図 1~8 はすべて第Ⅱ群土器の底部破片であり、7・8 以外は地文の上に縦の刻文を施文している。1 は LR 縄文施文後、ヘラ状工具により右方向から刻みを入れられている。3~6 は、地文の上にヘラ状工具により左方向から刻みを入れられている。8 は若干上げ底であり、文様は外面と底面に LR 縄文を施文している。

（平河内　毅）

石器：第 70 図 1・2 は第Ⅰ群 c 類である。1・2 ともに基部を欠損。1 は三角形の刃部で両面調整。2 は五角形の刃部で両面調整石質は黒曜石である。4・5 はⅣ群 c 類である。4 は先細りの縦長剥片の加工途中の未成品。5 は縦長剥片を加工し、つまみ部のみを形成している未成品。6 は第Ⅳ群 a 類である。突端部が摩耗。7 ～ 20 は第Ⅴ群 a 類のである。7 ～ 10、12 ～ 20 は破損品である。いずれも両面調整。11 は大型の縦長剥片を使用したもの。21・22 は第Ⅳ群 b 類である。21 は片側調整。22 は両面調整。23 ～ 26 は第Ⅶ群 a 類である。23 ～ 25 はポジ面の縁部に調整あり。26 はネガ面に微細な調整あり。

第 71 図 1 ～ 24 は第Ⅶ群 a 類である。1 は両面の縁部に調整あり。2・4・7・17 はネガ面の両縁部に調整あり、3 はポジ面の縁部に調整あり。5・15 はネガ面の縁部に調整あり。6・8・12・14・24 は両面の両縁部に調整あり。9 ～ 11 はポジ面の縁部に調整あり。13・16・18 はポジ面の両縁部に調整あり。19 はネガ面の両縁部に調整あり。20 ～ 22 はポジ面の両縁部に調整あり。23 はポジ面の縁部に調整あり。25・26 はⅦ群 b 類である。25・26 はポジ面の両縁部に調整あり。27・28 はⅨ群 b 類である。27 は上端部と刃部の一部が欠損したもの。石質は凝灰岩（TF）である。28 は上端部を欠損したもの。石質は安山岩（AND）である。29 はⅩ群 c 類である。上端部と下端部に敲打痕あり。石質は安山岩 (AND) である。

第 72 図 1・6 は第ⅩⅣ群 c 類である。1・6 は平坦面と側面に磨り痕あり。2 は第ⅩⅣ群 a 類平坦面と両側面に磨り痕あり。溝状の磨り痕あり。3・4・5・7~10 は第ⅩⅣ群 b 類である。3・4・5・7 は側面に磨り痕あり。8・9・10 は平坦面に磨り痕あり。石質はすべて砂岩（SS）である。（工藤　大）

Ⅶ b-2 層 (第 73・74 図)

土器：第 73 図 1 は第Ⅲ群土器の口縁破片である。口縁上部には内面から円形の工具で刺突され突瘤を形成、外面には RL 縄文と LR 縄文を羽状になるように施文している。2 は第Ⅱ群土器である。口縁部に、指頭状の丸みを持つ円形文を施文。外面には LR 縄文と RL 縄文を羽状となるように交互に施文している。3 は第Ⅱ群土器の口縁部破片である。RL 縄文施文後にヘラ状工具により右方向から刻みを入れられている。口縁部直下には竹管状工具による円形文を施文している。4~6 は第Ⅱ群土器の胴部破片である。4 は RL 縄文と別の原体による結束羽状縄文を施文している。5 は LR 縄文を、6 は RL 縄文をそれぞれ施文している。7・8 は、第Ⅱ群土器の底部破片である。7 は LR 縄文と RL 縄文を施文後、半裁竹管状工具により縦の沈線を施文している。8 は LR 縄文施文後に半裁竹管状工具により縦の沈線を施文している。（平河内　毅）

石器：第 74 図 1・3 は第Ⅰ群 a 類である。三角形を呈する刃部で両面調整。3 は五角形の刃部に舌状の基部をもつもので両面調整。石質は黒曜石である。2 は第Ⅰ群 c 類である。三角形を呈する刃部で両面に調整があり、基部が欠損。石質は黒曜石である。4 は第Ⅳ群 b 類である。突端部の摩耗。5・6・7・9・10 は第Ⅴ群 a 類である。いずれも破損品で、両面調整。石質はすべて黒曜石である。8 は第Ⅴ群 b 類である。主にポジ面の側縁に調整があるもので、ネガ面のつまみ部と先端部にも調整あり。被熱による変色が著しい。石質はメノウ（AG）である。

11 ～ 27 は第Ⅶ群 a 類である。11 はネガ面の両縁部に調整あり。12 ～ 14 はポジ面の両縁部に調整あり。15 ～ 18 はポジ面の縁部に調整あり。19 ～ 22 はネガ面の縁部に調整あり。23･24 はネガ面の両縁部に調整あり。25 はネガ面の縁部に微細な調整あり。26 はポジ面の縁部に微細な調整あり。27 はポジ面の両縁部に調整あり。石質はすべて黒曜石である。28 は第Ⅷ群 a 類である。礫面が残る。石質は黒曜石である。29 は第Ⅷ群 c 類である。礫面が残る。石質は黒曜石である。（工藤　大）

Ⅶ a 層 (第 75・76 図)

土器：第 75 図 1 ～ 6 は第Ⅱ群土器の胴部片である。1・2 は LR 縄文を施文。3 は RL 縄文を施文。4 は LR 縄文を施文。5 は半折した縄を用いた LR 縄文を施文した後、棒状工具による刺突文を施文。6 は RL 縄文を施文した後、その上から LR 縄文を施文。擦り消し無文帯を形成した後、半折した縄を用いた LR 縄文を施文。

石器：第 76 図 1 は第Ⅰ群 a 類であり、両面調整の二等辺三角形状有茎石鏃である。2 は第Ⅴ群 a 類であり、両面調整である。基部と先端部をそれぞれ欠損している。3 は第Ⅷ群 a 類であり、ポジ面の左側縁に細かな調整が見られる。4･5 は第Ⅷ群 b 類石器であり、ポジ面の一部に使用痕が見られる。1~5 はいずれも黒曜石製である。

（工藤　大）

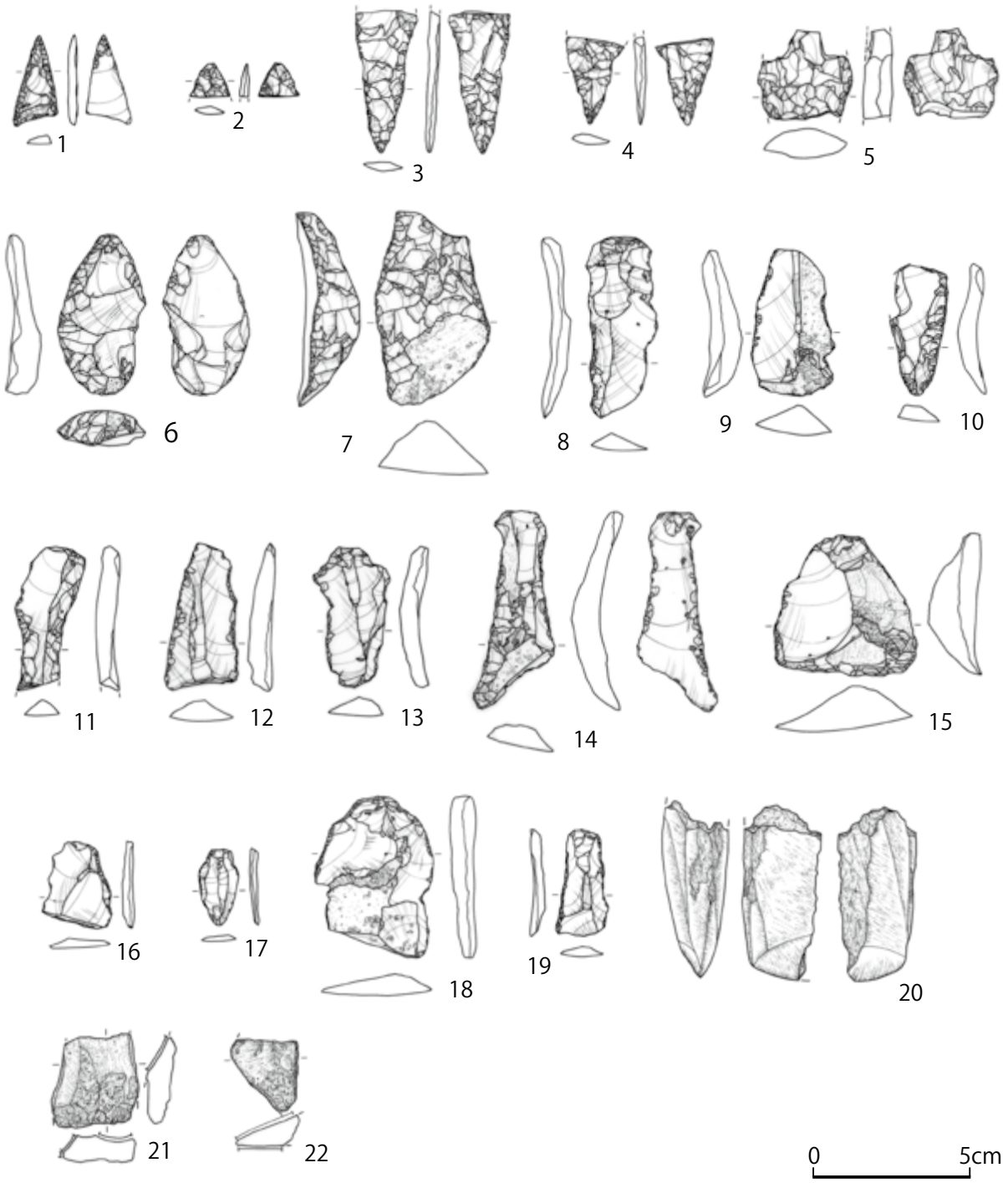
表土層・Ⅰ層 (第 77 ～ 79 図)

土器：第 77 図 1 は第Ⅲ群土器の胴部片である。LR 縄文を先に施文した後、RL 縄文を施文。2 はトコロ 6 類の口縁部片である。LR 縄文を地文とし、擦り消し無文帯を形成した後、縦方向の刻みと棒状工具による刺突文を施文。3 ～ 16 は第Ⅱ群土器の胴部片である。3 は LR 縄文を施文。4 は LR 縄文を施文。5 は RL 縄文を施文。6 ～ 8 は結束羽状縄文を施文。6・7 は胎土に繊維を含む。9 は胎土に繊維を含み、LR 縄文を施文。10 は RL 縄文を施文。11 は LR 縄文を施文。12 は胎土に繊維を含み、LR 縄文を施文した後、横走する沈線で区画。13 は胎土に繊維を含み、LR 縄文を施文。14 ～ 16 は結束羽状縄文を施文。17・18 はⅡ群土器の底部片である。17 は地文を持たず、縦方向の刻みを施文。18 は LR 縄文を施文。

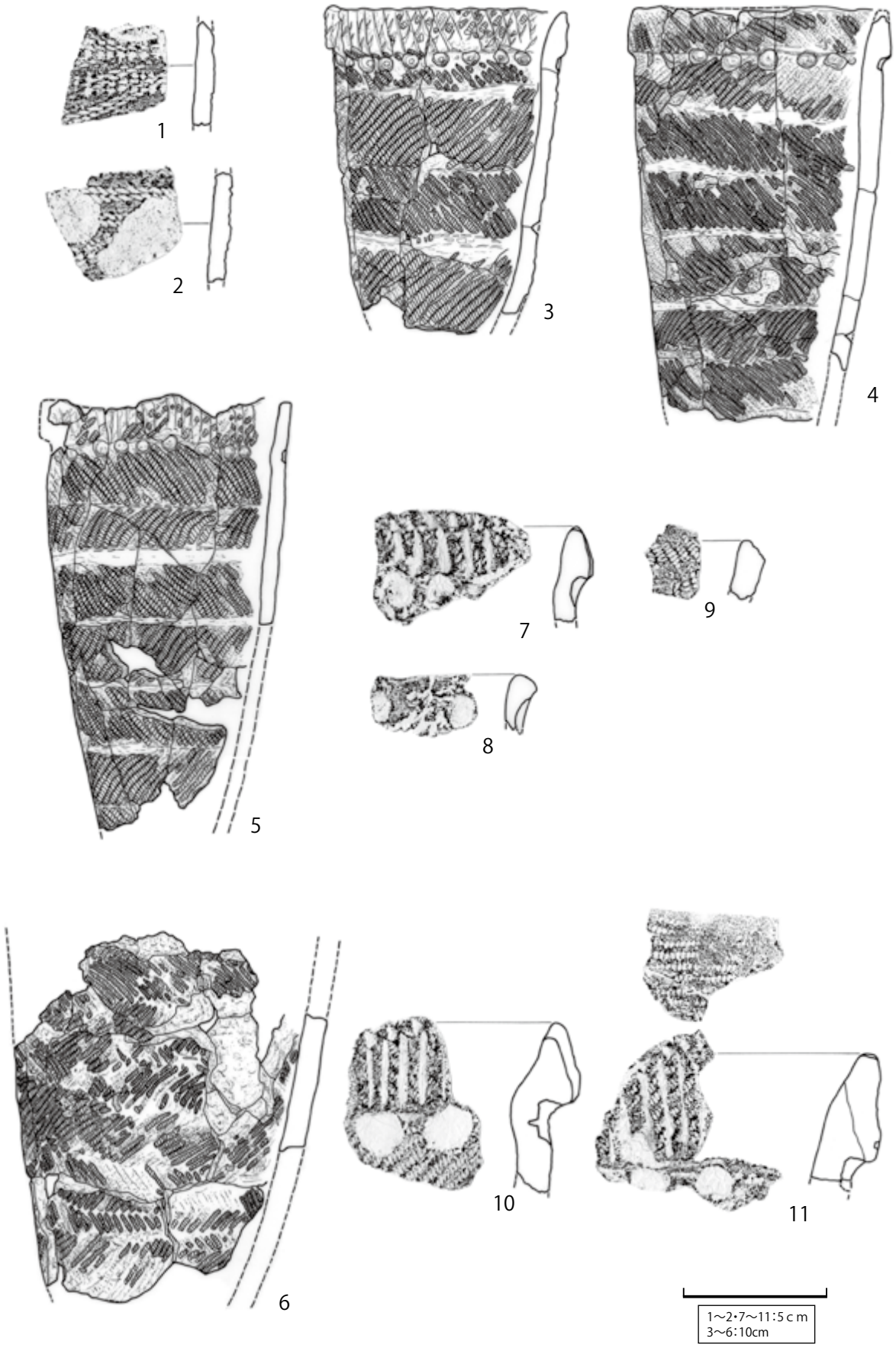
石器：第 78 図 1 ～ 23、第 79 図 1~8 は表土・Ⅰ層より出土した石器である。第 78 図 1・2・4・5 は第Ⅰ群 a 類有茎石鏃。3 は c 類欠損品である。6・7 は第Ⅱ群 a 類有茎石銛で、6 は返しが明瞭ではない。8 は先端部が欠損した第Ⅲ群 a 類有茎石槍で、茎部にノッチを入れている。9~11 は第Ⅴ群削器の欠損品で、11 はつまみ部分が欠損したものとである。いずれも両面刃部に細部調整が見られる。

第 78 図 12・13、第 79 図 7 は第Ⅵ群 d 類の刃部を複数有するもので断面半円状を呈す。第 78 図 14~23、第 79 図 8 は第Ⅶ群 a 類 R フレイク。縦長剥片を利用するものが多い。第 79 図 2 は第Ⅷ群 b 類プラットフォームを持たない石核である。四方面から敲打している。第 79 図 1 は第Ⅸ群 b 類の磨かれた石斧刃部破片である。石質は黒色の AMP 製である。第 79 図 3~5 は第ⅩⅣ群 c 類研磨面を 4 面有し、断面が四角形になる砥石である。細粒目の SS 製である。第 79 図 6 は第ⅩⅤ群 PU 製の矢柄研磨器である。溝は 1 条である。（松田　功）

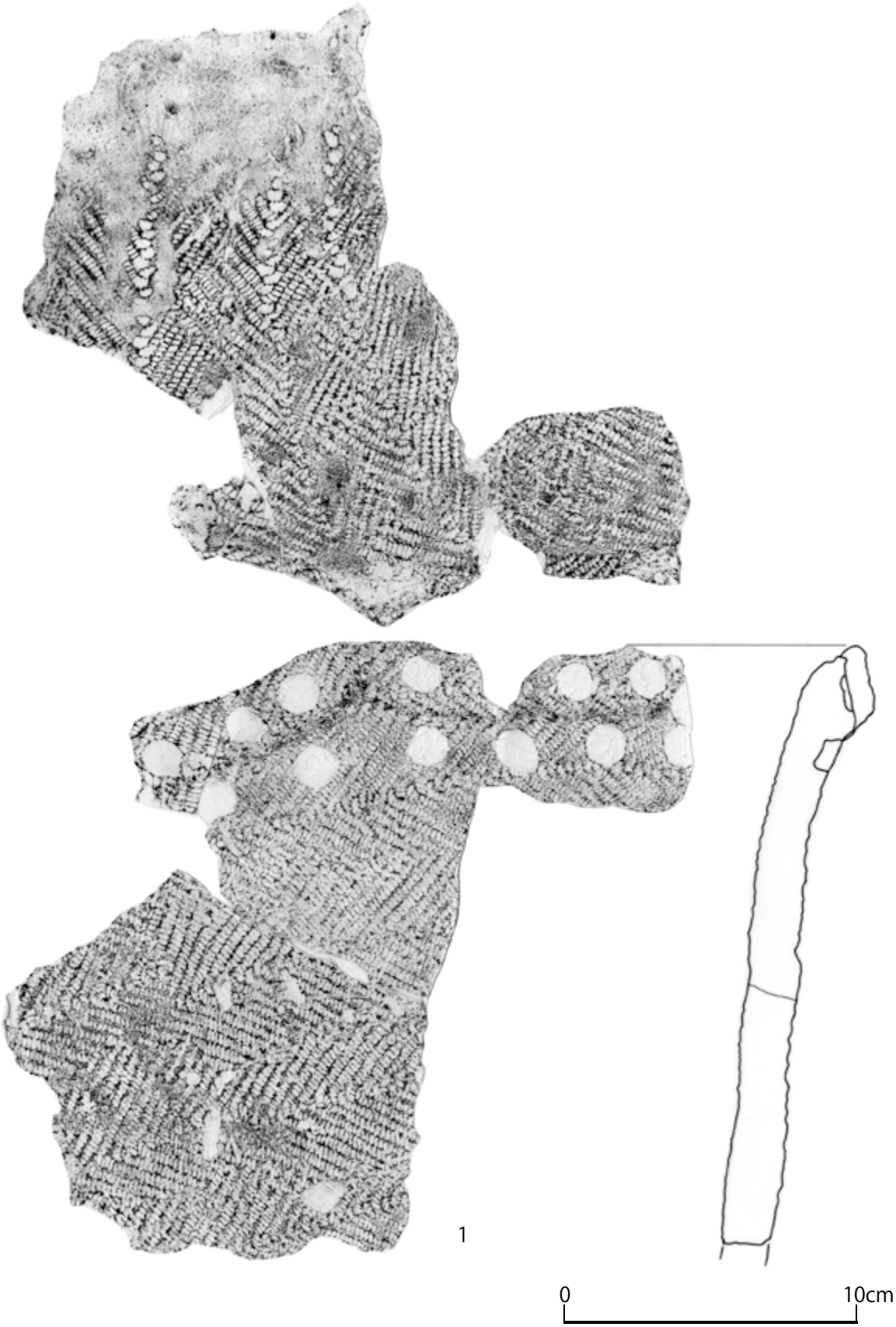
第64図　遺構外出土土器　Ⅶ層



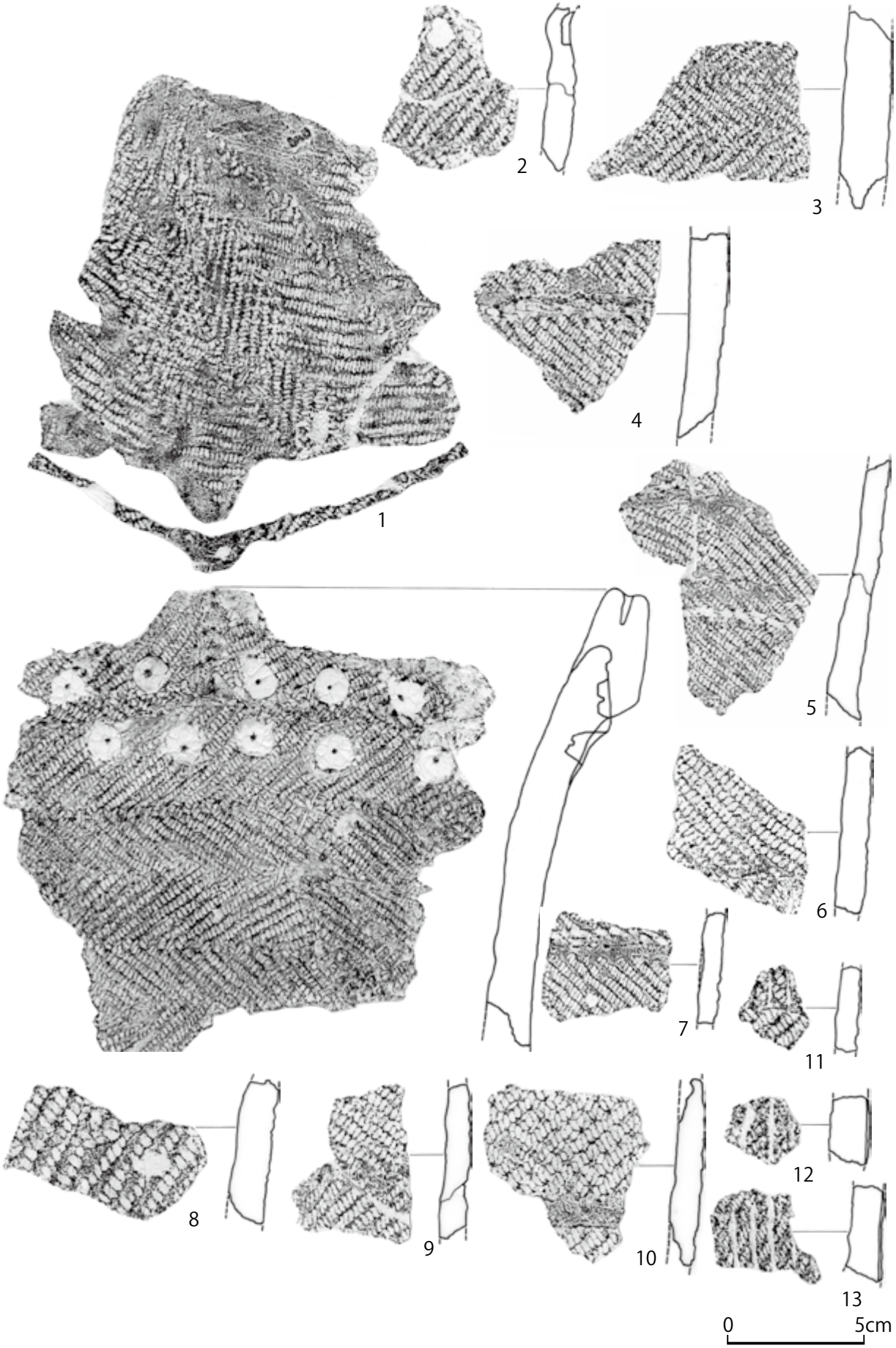
第65図　遺構外出土石器　Ⅶ層



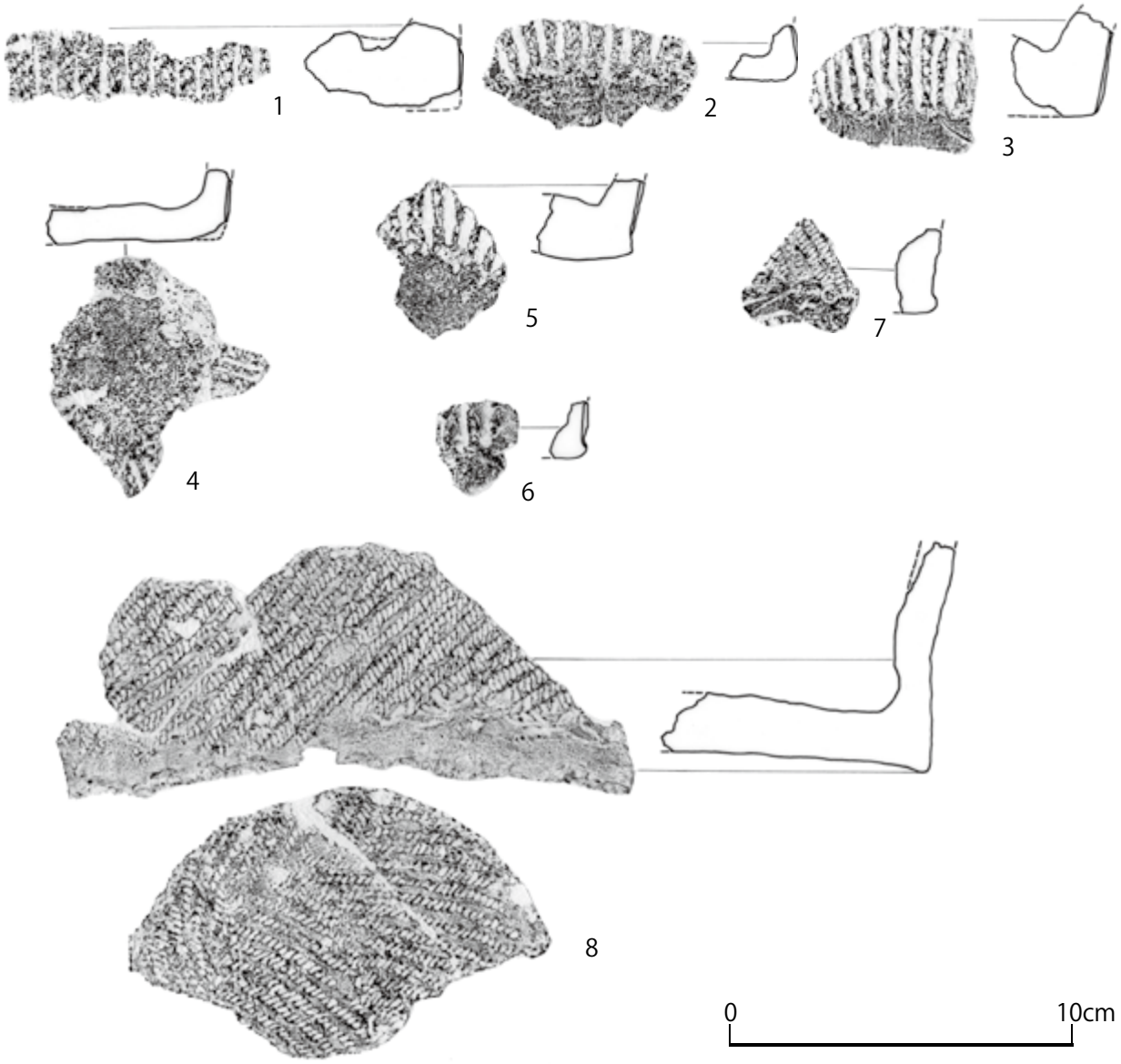
第６６図　遺構外出土土器　Ⅶｂ層（1）



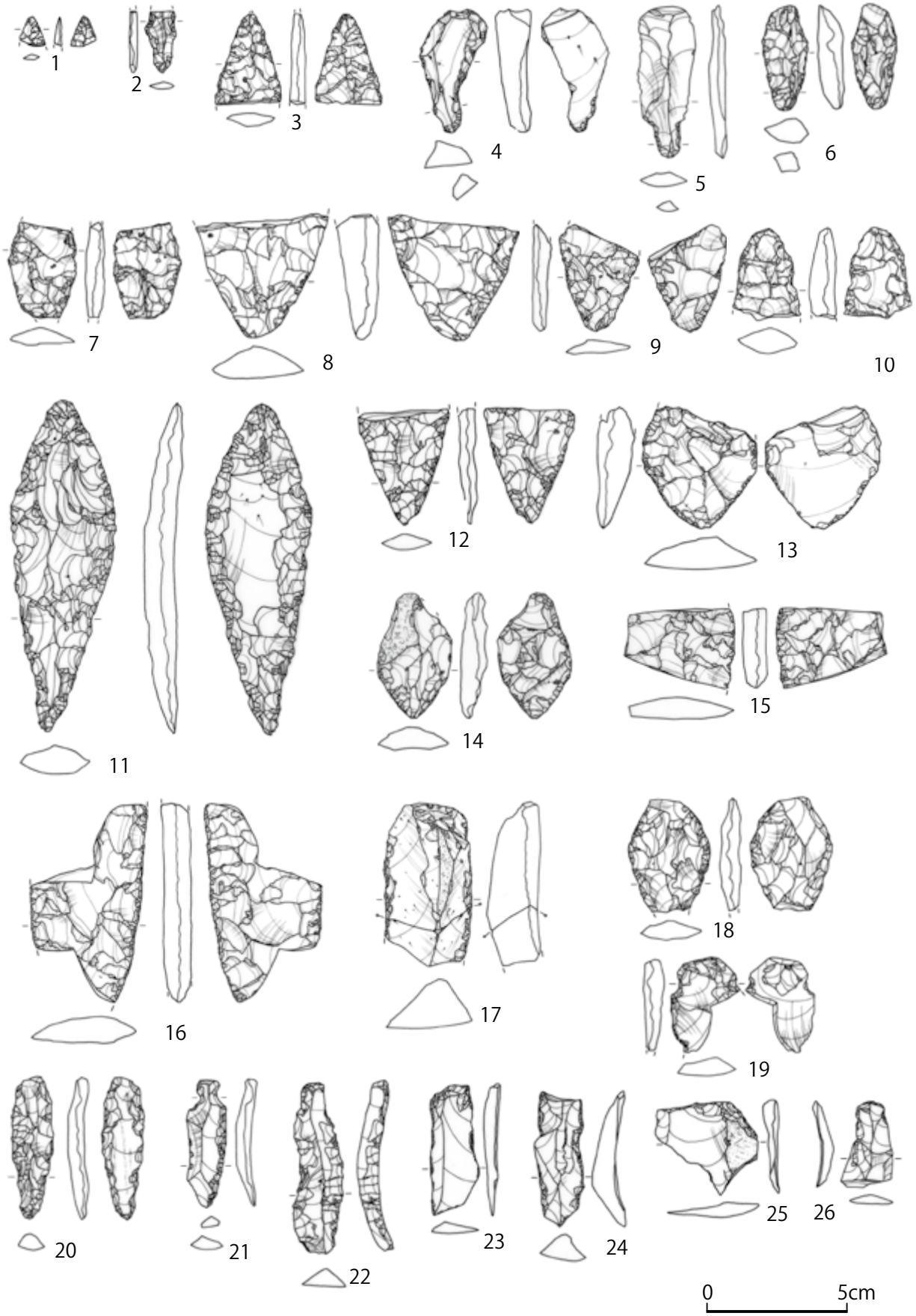
第６７図　遺構外出土土器　Ⅶｂ層（2）



第６８図　遺構外出土土器　Ⅶｂ層（3）

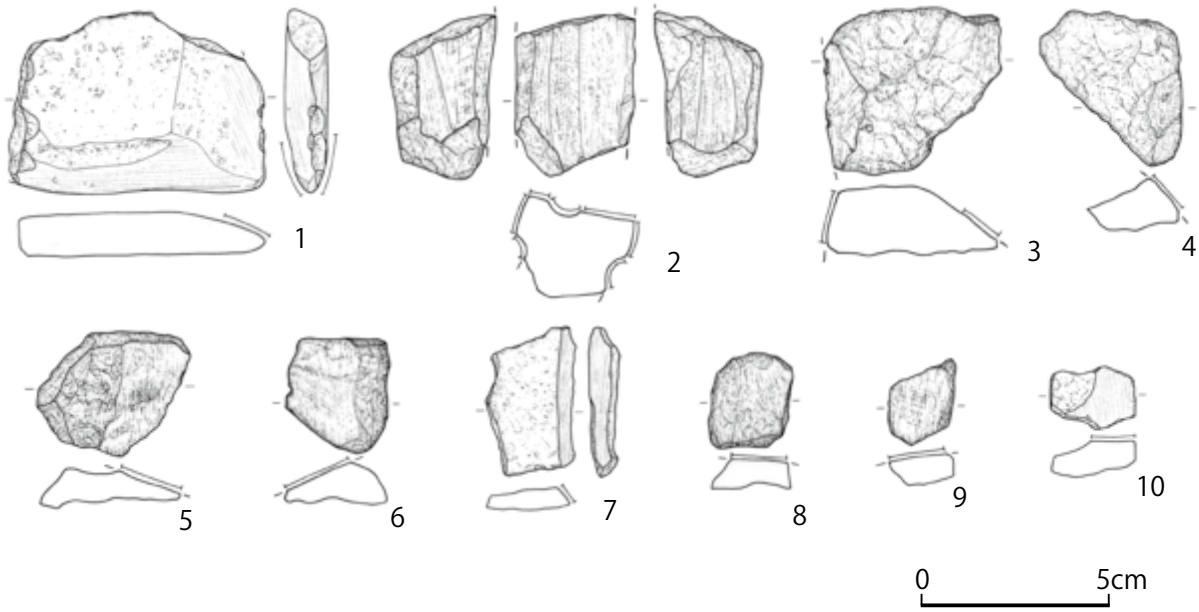


第６９図　遺構外出土土器　Ⅶｂ層（４）

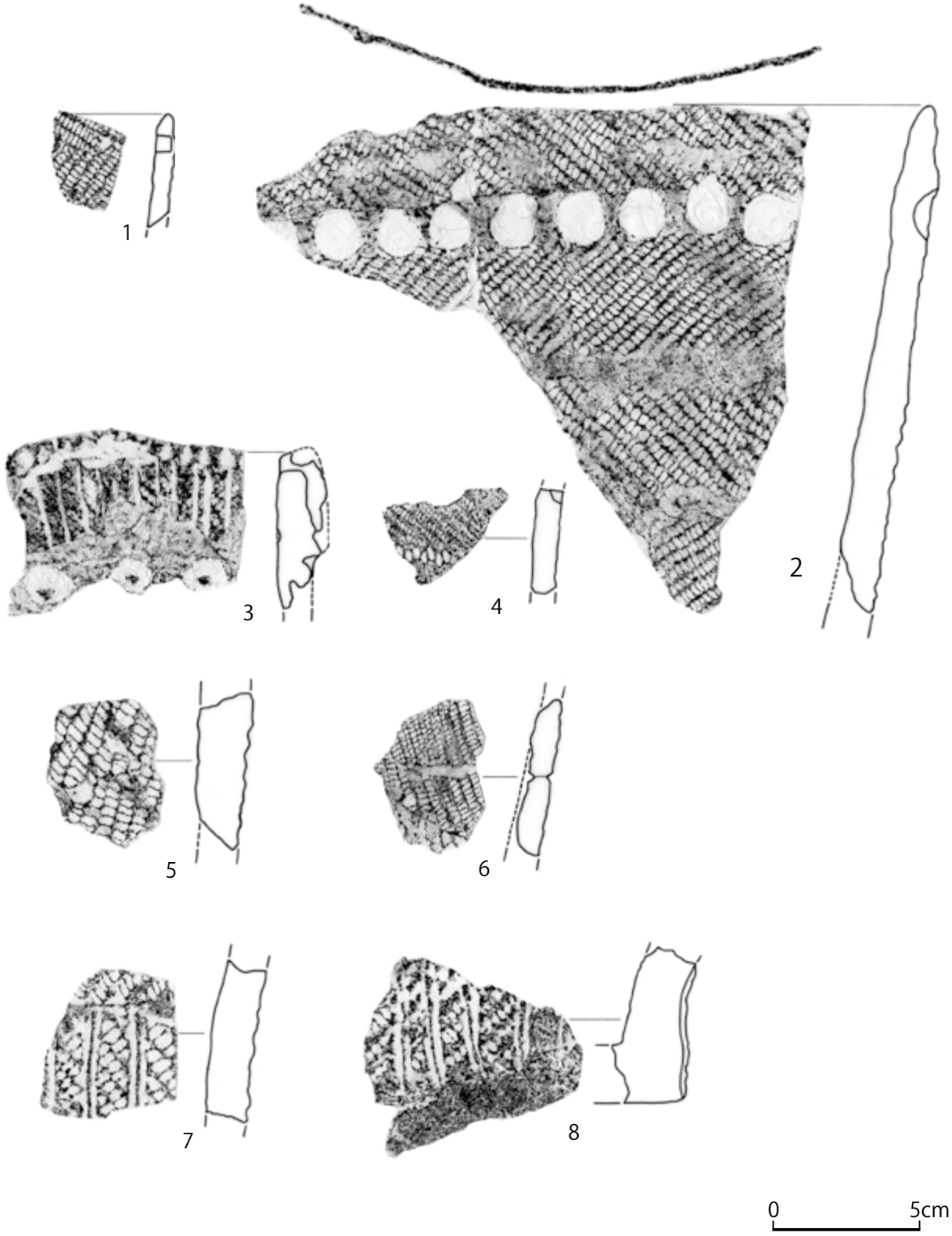


第70図　遺構外出土石器　Ⅶb 層　(1)

第71図　遺構外出土石器　Ⅶb 層　(2)

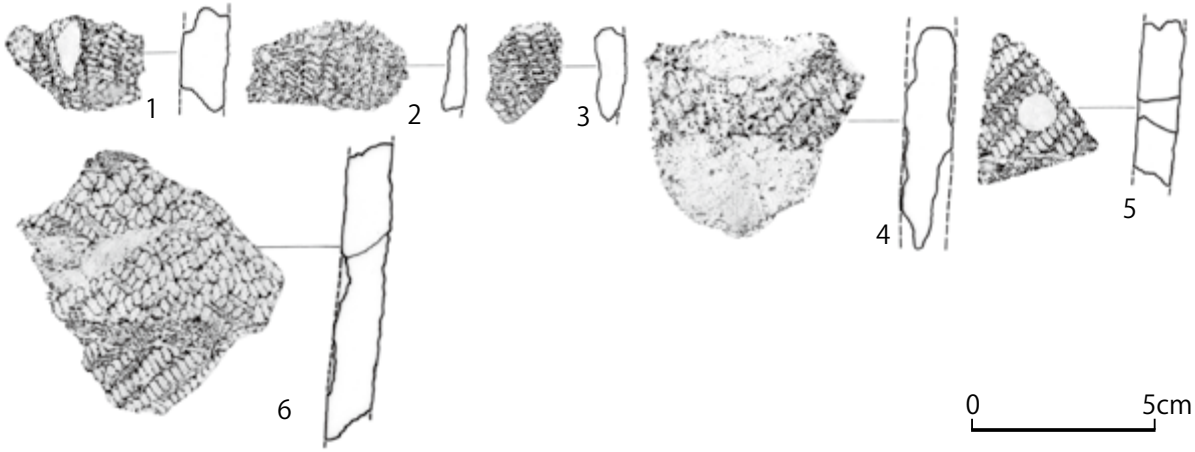


第7 2 図　遺構外出土石器　Ⅶb 層　（3）

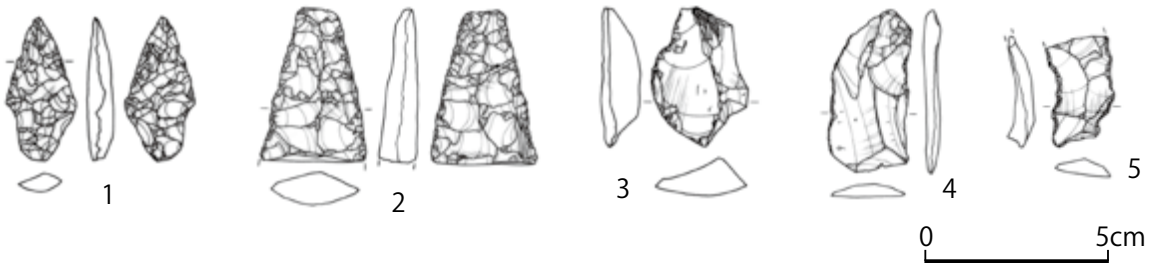


第7 3 図　遺構外出土土器　Ⅶb-2層

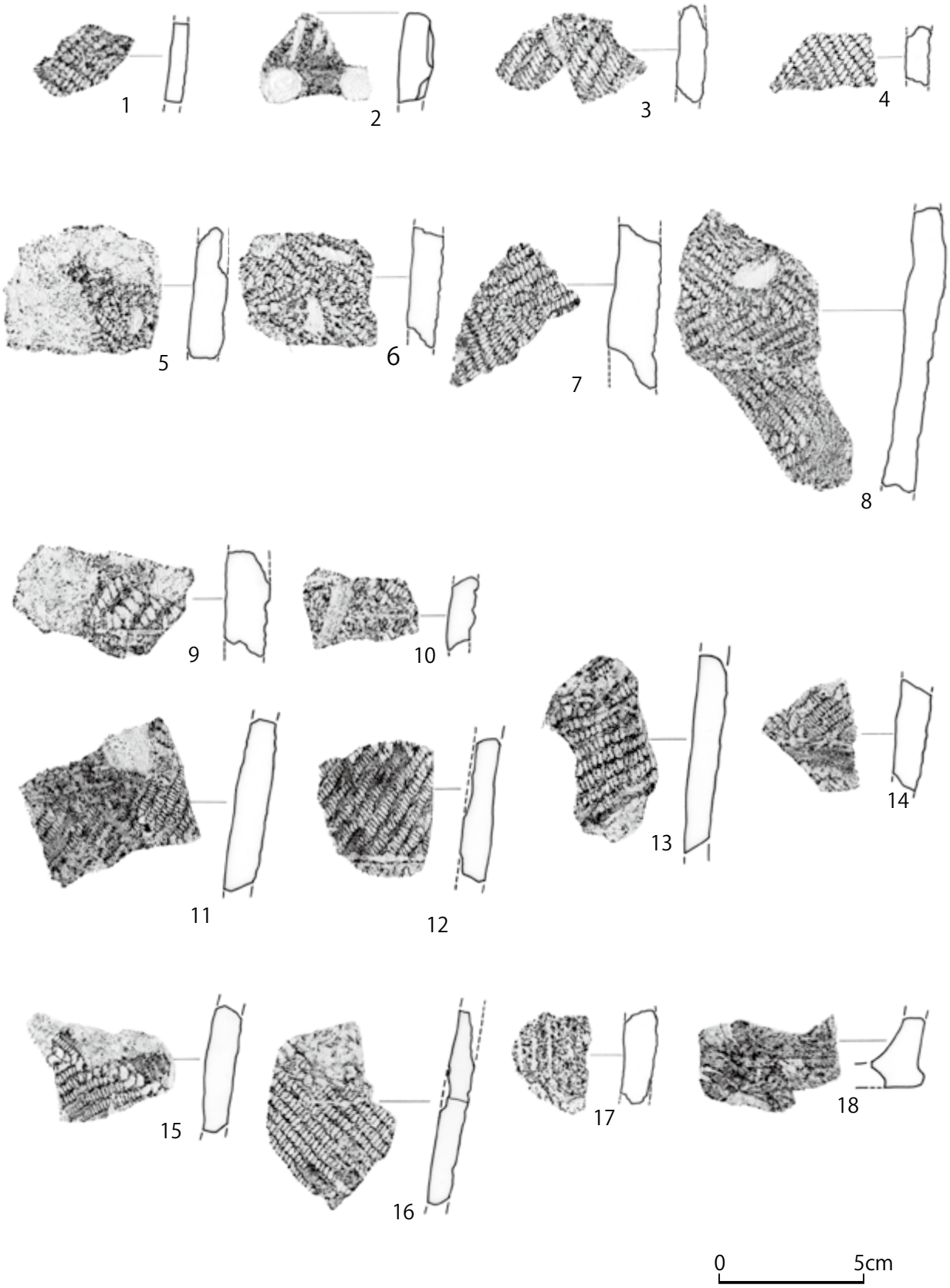
第7 4 図　遺構外出土石器　Ⅶb-2 層



第7 5 図　遺構外出土土器　Ⅶa 層



第7 6 図　遺構外出土石器　Ⅶa 層



第77図　遺構外出土土器　表土

第78図　遺構外出土石器　表土　(1)

第79図　遺構外出土石器　表土　(2)

まとめと考察

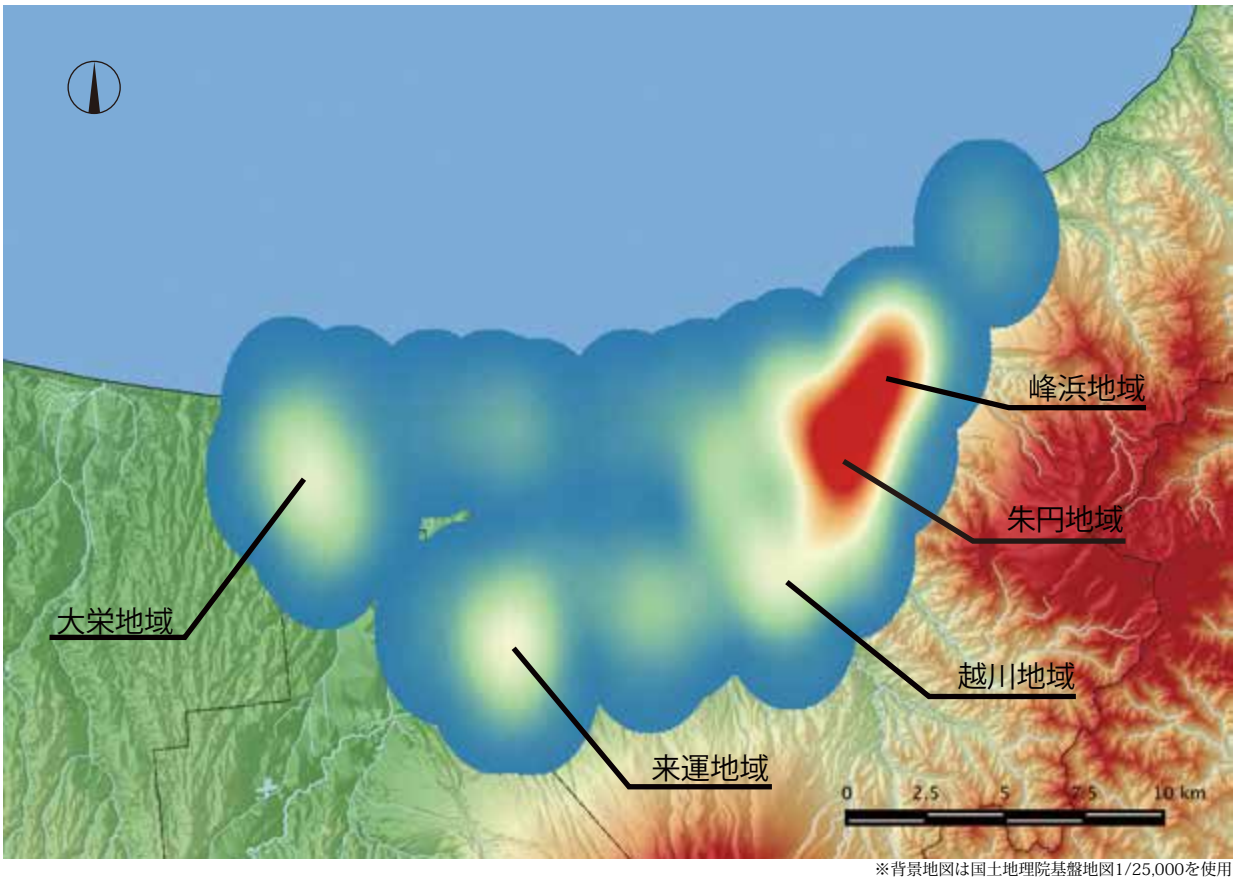
斜里町内における縄文中期の竪穴住居形態にみる地域集団について

平河内　毅

斜里町内の遺跡を概観すると、縄文中期が他時期に比べ最も遺跡数が多い。遺跡数の増加は、単純に考えれば人口が増加したと考えるのが妥当であり、人口が爆発的に増加すれば当然に食料の確保が深刻な問題となるであろう。この時期の遺跡分布を見ると、広範囲に遺跡が点々と広がり、食料の供給源を求めてそれぞれが主要な河川沿いに山間まで拡散していたという印象を受ける。食料は植物資源をはじめ、水辺に集まる動物や鳥、サケ・マス等が想定され、こうした資源を獲得でき、なおかつ地理的に安定したスポットにそれぞれが住居を構え集落を築いている。

一方で、河川氾濫の影響を受ける不安定な場所や砂丘部にも遺跡は点在しており、これらは台地や丘陵上といった安定した集落とは対象的に一時的な利用を目的とした仮の集落として捉えられる。こうした仮の集落は、長期間の居住を目的としないキャンプサイト的役割のため、地域の中心となる集落に構築される竪穴住居跡とは形態に差があると推察される。

まず、地域集団のまとまりを遺跡の分布傾向から捉えた上で、地域ごとの竪穴住居の形態的特徴から共通性や特異性を探り、対象とした遺跡の性格を吟味した上で川上 1 遺跡の位置づけについて考察してみる。



※背景地図は国土地理院基盤地図1/25,000を使用

第80図　斜里平野における縄文中期の遺跡密度分布図（検索半径3,000km）

第 80 図は縄文中期の遺跡密度分布を示しており、地域ごとに一定のまとまりを視覚的に捉えることができる。これより、河川沿いに生活圏を展開するグループはおおよそ 5 地域に大別した。

1. トーツル沼へと注ぐ小河川沿いや安定した丘陵地上に集落を築く大栄地域
2. 猿間川及びその支流を生活圏とし、川湯方向へと抜ける中継地としての利用を窺わせる来運地域
3. アッカンベツ川上流部に一定のまとまりをみせる越川地域
4. 奥藜別川及び海別川の流路沿いに広く生活拠点を構える朱円地域
5. シュマトカリ川とマクシベツ川流域を中心に、海と陸の両方から食料資源を調達できる峰浜地域

川上 1 遺跡は上記のいずれの地域にも属しておらず、斜里川の右岸段丘面上に立地している。以下、地域ごとの様相を順にみていく。

来運地域

当地域に位置する来運 1・5 遺跡は、猿間川左岸の標高約 38 ～ 47m の段丘面上に立地している。川上 1 遺跡に距離的に近いだけでなく、竪穴の特徴にもある程度共通性が見られる。来運 1 遺跡では 7 軒、来運 5 遺跡で 2 軒の合計 9 軒の竪穴が調査されており、竪穴の特徴を整理すると以下のようになる。

ⅰ）時期 / 北筒Ⅲ式期住居が主体である。

ⅱ）規模 /2 ～ 3m 弱の小型主体であるが、5m 弱の中型も 2 軒ほど見られる。

ⅲ）平面形 / 楕円～不整楕円が主体であり、規模と平面形からみれば川上 1 遺跡とよく似ている。

ⅳ）掘り込み / 平均 0.44 m と比較的しっかりと掘り込まれている。

ⅴ）柱穴数 /5 m 弱規模の竪穴以外は柱穴は僅かである。

ⅵ）炉跡 / 基本的に住居内に炉を有さない。

傾　向

小型と大型の組み合わせから成り、比較的しっかりと掘り込まれている。平面形は均整がとれておらず柱穴も僅かである。

形態的には、仮小屋のイメージと重なるため、来運 1・5 遺跡は狩猟のための一時的な集落として利用されていた可能性が考えられる。また、来運地域は他の集中区よりも内陸に位置しており川湯方向へと抜ける要衝ともなり得る。他地域への中継地と考えるのであれば、長期間の居住を目的としないため、不整形で小型主体な点も説明がつく。

大栄地域

大栄地区では、トーツル沼の周辺とトーツル沼へと注ぐ小河川沿いに主に遺跡が分布している。近くにはウエンベツ川が流れている。海にもほど近く、河川や沼などの水辺に隣接しているため集落を築くには絶好の場所であると思われる。同地域の大栄 11 遺跡は、小河川沿いの標高 4 ～ 6 m 程の丘陵上に位置している。2002 年の調査では合計 18 軒の竪穴が検出されている。竪穴の特徴は以下の通りであり、他地域とはやや異なる様相を示している。

ⅰ）時期 / 北筒Ⅱ式期の竪穴である。

ⅱ）規模 /2m クラスが 2 軒、3m が 7 軒、4m が 4 軒、5m が 4 軒と 3m クラスの小型住居が主体である。

ⅲ）平面形 / 規模に関係なく、不整楕円形・楕円形・不定形のバリエーションがある。

ⅳ）掘り込み / 平均 0.37 m と比較的浅く、5 m クラスの住居を除けば明瞭な柱穴はほとんどみられない。

ⅴ）柱穴数 / 中～大型竪穴は 10 ～ 30 箇所程度有するが、それ以外は僅かである。

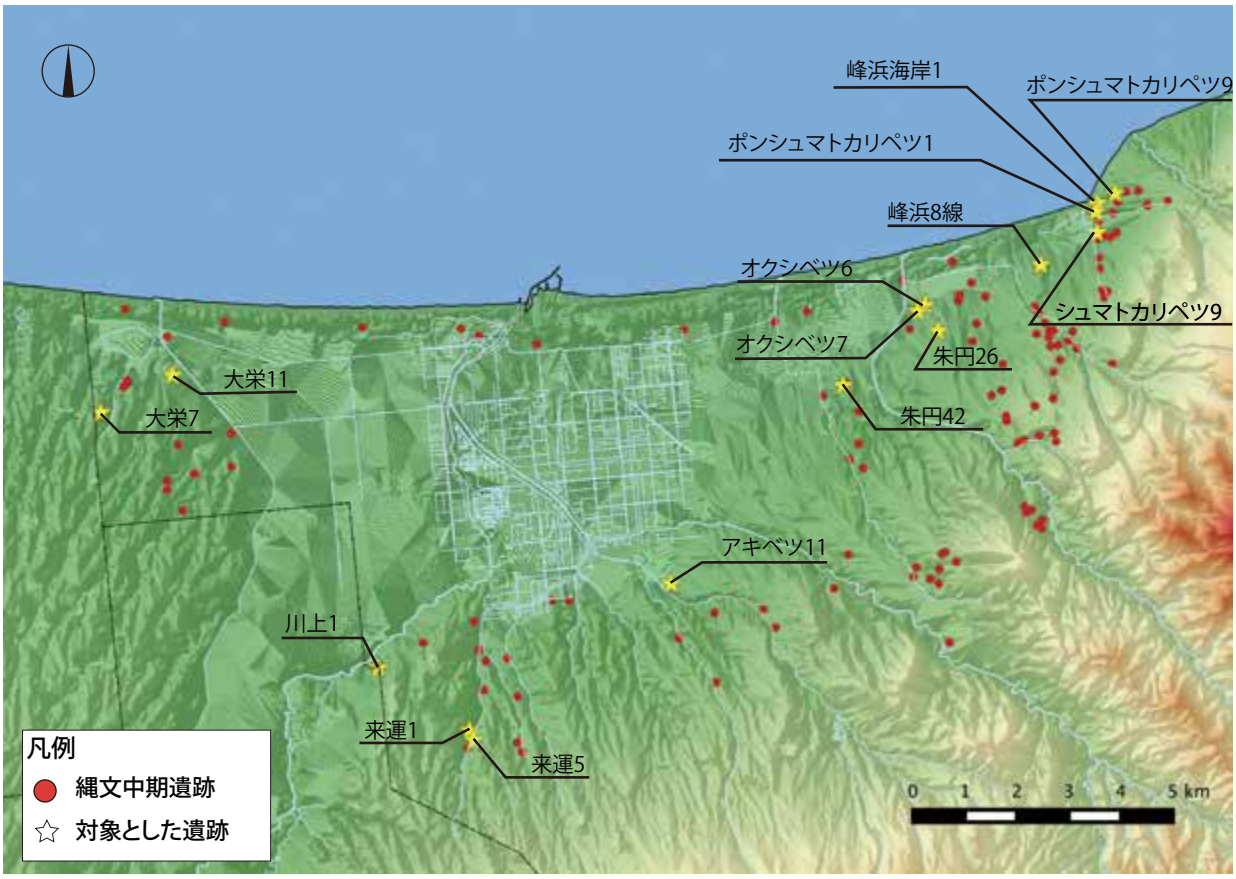
ⅵ）炉跡 / 有するものと有さないものに分かれる。

傾　向

特徴的なのは、住居の一部がくびれた形状を成すものが多い点と、報告にもあるように長軸が北東方向を向き、その長軸方向の北側に浅い Pit を 1 つ程度設けている点である。これらの特徴より集落内の竪穴構築に関してはある一定認識の元に築かれている可能性が考えられる。

しかし、来運のように小型と大型の組み合わせから成ること、不整形で掘り込みが浅く、明瞭な柱穴を持たないこと等を考慮すると一時的な仮の集落として捉えざるを得ない。すなわち、同地域の中心となる集落は別に存在し、大栄 11 遺跡は一時的な利用であったと思われる。

また、大栄 7 遺跡で確認された 2 軒の竪穴も同時期のものであり、おおよそ大栄 11 遺跡と同様な特徴を有するが、その全貌は不明である。



※背景地図は国土地理院基盤地図 1/25,000 を使用

第 81 図　斜里平野における縄文中期の遺跡分布図

越川地域

越川地域は、アッカンベツ川の右岸段丘面上や、アッカンベツ川へ注ぐ小河川沿いの丘陵地上などにまとまって遺跡が分布している。発掘調査が行われていないため竪穴形態は不明であるが、同地域は標津方面を視野に入れた、来運地域と同様な中継地として捉えておく。

朱円地域

朱円地域では、朱円 26･42、オクシベツ 6･7 等で調査が行われており、各遺跡で竪穴住居跡が検出されている。遺跡が多く点在するのは海別川と奥蘂別川沿いであり、下流から上流部まで幅広い生活圏を持つ集団が存在した

ものと思われる。一方で、朱円 42 遺跡のように奥藻別川とアッカンベツ川に挟まれた範囲にも点々と遺跡が見られる。

朱円 42 遺跡

奥藻別川左岸の標高約 10 ～ 16 m の丘陵地上に位置し、合計 6 軒の竪穴が検出されている。

ⅰ）時期 / 北筒Ⅱ～Ⅲ式期のもの。

ⅱ）規模 /3 ～ 4 m 規模の中小型 4 軒と、6 ～ 8 m 弱の大型 2 軒である。

ⅲ）平面形 / ほぼ全てが不整楕円形であり、軸方向に統一性は見られない。

ⅳ）掘り込み / 平均 0.24 m と浅い。

ⅴ）柱穴数 / 中小型で 0 ～ 10、大型で 15 ～ 17 程度である。

ⅵ）炉跡 / 炉を有する竪穴は確認されていない。

朱円 26 遺跡

奥藻別川右岸側の標高約 13 ～ 15 m の平坦地上に位置しており、合計 7 軒の竪穴が検出されている。

ⅰ）時期 / 北筒Ⅲ式期の竪穴が主体である。

ⅱ）規模 /4 ～ 5 m の中型主体であるが、8 m 弱の大型も 1 軒検出されている。

ⅲ）平面形 / 基本的に楕円形を成し、長軸はおおよそ東西方向を向く傾向にある。

ⅳ）掘り込み / 平均 0.23 m と非常に浅いが、耕作により上層部が消失していたためである。

ⅴ）柱穴数 / 中型も大型も僅かであり、多くて 10 程度である。

ⅵ）炉跡 / 基本的に屋内に炉を有さない。

オクシベツ 6 遺跡

奥藻別川の支流と思われる旧無名小河川の氾濫原地上に位置する。竪穴状遺構ないし大型土坑も検出されているが、竪穴住居跡と報告書に記載のあるものは 4 軒である。

ⅰ）時期 / すべて北筒Ⅱ式期のものである。

ⅱ）規模 /3.5 m 程度の比較的小型が主体である。

ⅲ）平面形 / 不整円形～不整楕円形を成す。

ⅳ）掘り込み /0.2 m 程度の浅いものと、0.4 m、0.8 m の深いものに分かれる。

ⅴ）柱穴数 / 多くとも 10 箇所程度であり、それ以外は浅く配列に規則性のないものばかりである。

ⅵ）炉跡 / 基本的に屋内に炉を有さない。

オクシベツ 7 遺跡

奥藻別川右岸の微高地上に位置し、竪穴住居跡 6 軒が検出されているが、調査区外へ広がるものや、撹乱されているものがある。

ⅰ）時期 / 北筒Ⅲ式期のものが主体である。

ⅱ）規模 /3 ～ 4 m の中小型数軒と長軸 6 m の大型が 1 軒である。

ⅲ）平面形 / 統一性がなく多様である。

ⅳ）掘り込み / 平均 0.3 m 程度と比較的浅いものが多い。

ⅴ）柱穴数 / 明瞭な掘り込みのものは確認されていない。

ⅵ）炉跡 / 基本的に屋内に炉を有さない。

傾　向

遺跡が点在する海別川の流路沿いが発掘されていないため、同地域において竪穴の形態的特徴を捉えるのは困難であった。対象とした 4 遺跡のうち 3 遺跡は奥藻別川の下流域に位置し、中小型主体でいずれも掘り込みが

浅く、明瞭な柱穴を伴わないといった仮の集落的な特徴を示す竪穴であった。やや離れた場所に位置する朱円42遺跡も同様の竪穴形態であった。また、基本的に屋内に炉を有さないという点は、暖を取る必要のない夏場の利用を連想させるが、屋内炉の有無だけで利用時期を確定させることは困難である。

以上より、同地域の生活圏の中心部は海別川の流路沿いであり、周辺に点在する小規模な遺跡は季節的な狩りのスポットであった可能性が考えられる。しかし、大規模な集落跡が見つかっていないため現段階では同地域の位置づけについては明言できない。

峰浜地域

縄文中期の遺跡が多く分布する峰浜地域において、多数竪穴住居跡が検出されている遺跡は、以下の5遺跡である。当地域はシュマトカリ川とマクシベツ川流域を中心に、海岸沿いにも遺跡が分布しており、海と陸の両方から食料資源を調達できる地域である。

シュマトカリペツ9遺跡

シュマトカリ川右岸の標高4～5mの沖積低地上に位置し、5軒の竪穴が検出されている。

ⅰ）時期 / 全て北筒Ⅱ式期である。

ⅱ）規模 /5軒の竪穴は3～4mの小型住居に限られる。

ⅲ）平面形 / 多様であり、くびれひょうたん型等いびつな形状のものがみられる。

ⅳ）掘り込み /0.4～0.5mとしっかり掘り込まれている。

ⅴ）柱穴数 / 少数だがいずれも柱穴を伴う。

ⅵ）炉跡 / 有するものと有さないものに分かれる。

ポンシュマトカリペツ9遺跡

糠真布川とマクシベツ川とに挟まれた暖斜面上に位置し、7軒の竪穴住居跡が検出されている。

ⅰ）時期 / 全て北筒Ⅱ式期のものである。

ⅱ）規模 /3mの小型1軒（北筒Ⅲ）、4.5m程度の中型3軒（北筒Ⅱ）、6～7mの大型3軒（北筒Ⅱ）から成る。

※3m規模のものは時期が他と異なるのに加え、住居でない可能性もある。

ⅲ）平面形 /7mクラスの大型は隅丸多角形を呈する。軸方向に統一性は見られない。

ⅳ）掘り込み /0.5～0.6mとしっかりと掘り込まれている。

ⅴ）柱穴数 /3mの小型竪穴は柱穴が未確認。それ以外は10～40程度の柱穴を伴う。

ⅵ）炉跡 / ほとんどの竪穴が炉を有する。

ポンシュマトカリペツ1遺跡

糠真布川とマクシベツ川とに挟まれた暖斜面上に位置し、5軒の竪穴住居跡が検出されている。

ⅰ）時期 / 北筒Ⅱ～Ⅲ式期のものである。

ⅱ）規模 / ばらつきがあり、2m程度の小型2軒、4～5m弱の中型2軒、9mの大型1軒から成る。

ⅲ）平面形 / 不整円形～不整楕円形に限られ、軸方向に統一性は無い。

ⅳ）掘り込み / 平均0.3～0.4mと浅い。

ⅴ）柱穴数 / 住居の大小に関係なく柱穴は僅かである。

ⅵ）炉跡 / ほとんどが屋内に炉を持たない。

峰浜海岸1遺跡

糠真布川とマクシベツ川とに挟まれた暖斜面上に位置し、3軒の竪穴住居跡が検出されている。

ⅰ）時期 / 全て北筒Ⅱ式期のものである。

ⅱ）規模 /3～4mの小型2軒と、6mの大型1軒に分けられる。

ⅲ）平面形 / 小型は楕円形、大型は変形四角～菱形を成す。軸方向に統一性は見られない。

ⅳ）掘り込み / 平均 0.4 m 程度と浅くも深くもない。

ⅴ）柱穴数 / 小型は僅かだが、大型は 30 以上の柱穴を伴う。

ⅵ）炉跡 / 有するものと有さないものに分かれる。

峰浜 8 線遺跡

海別川とシュマトカリ川に挟まれ、埋没した潟湖に面する南西斜面に立地する。9 軒の竪穴住居跡が検出されている。

ⅰ）時期 / 北筒Ⅱ～Ⅲ式期のものである。

ⅱ）規模 /2 ～ 4m 程度の中小型が主体、6m 程度の大型が 1 軒検出されている。

ⅲ）平面形 / すべて不整楕円形。軸方向は南北方向に一定の統一性が見られる。

ⅳ）掘り込み /0.4 ～ 0.6 m としっかりと掘り込まれている。

ⅴ）柱穴数 / 伴わないものが大半を占めるが、僅かに見られるものもある。

ⅵ）炉跡 / 屋内に炉を持たない。

傾　向

峰浜地域で注目すべきはポンシュマトカリペツ 9 遺跡である。竪穴の規模は中～大型のみであり、平面形も均整のとれたものが多い。掘り込みも深く、床面もほぼ平坦で炉を持つものが一般的である。このようなしっかりとした竪穴形態を示す遺跡は他に見つかっておらず、地域の中心集落であった可能性が高い。

その他の遺跡は、中小型が主体を占めるが大型が 1 ～ 2 軒伴うという組み合わせ、不整形で掘り込みが浅く、柱穴が僅かという一時的な仮の集落的要素を有する竪穴形態のものばかりであった。

その他の地域

集中区ではないが発掘調査に伴い竪穴が検出されている遺跡のうち、アキベツ 11 遺跡から一定量の竪穴が検出されているため参考としたい。同遺跡は秋の川と以久科川に挟まれた扇状地上の緩やかな丘陵地に立地し、合計 7 軒の竪穴が検出されている。

ⅰ）時期 / 北筒Ⅱ～Ⅲ式期のものである。

ⅱ）規模 /2 ～ 4 m の中小型 6 軒と、長軸 7 m 弱の大型 1 軒に分けられる。

ⅲ）平面形 / 不整楕円形から隅丸方形まで多様であり、集落内での統一性は感じられない。

ⅳ）掘り込み / 平均 0.36 m と規模に関係なく全て浅い。

ⅴ）柱穴数 /1 軒当たり 11 ～ 18 箇所程度である。

ⅵ）炉跡 / ほとんどが屋内に炉を有さない。

傾　向

上記の形態的特徴のうち、中小型主体であり大型も 1 軒有するという組み合わせ、不整形で掘り込みの浅い点など、一時的な仮の集落的と考えられる特徴を示している。柱穴は、他地域の中小型竪穴と比べるとやや多い傾向にある。

報告によると出土土器に完形個体が少なく、石器も欠損品が目立つこと等から一時的な生活の場であったことが推測されており、竪穴形態から推察される利用目的とも合致する。

川上 1 遺跡

2012 ～ 2014 年度に行われた羅萠町道道路改良工事に伴う川上 1 遺跡の発掘調査では、合計 9 軒の竪穴住居跡が検出された。平成 14 年度に行われた国営畑地帯総合土地改良パイロット事業に伴う発掘調査で検出された

1 軒と合わせて合計 10 軒の竪穴住居跡が確認されており、全て北筒Ⅱ式期(トコロ 6 類期)の竪穴住居であった。

竪穴の特徴を整理すると、以下のようになる。

ⅰ）時期 / すべて北筒Ⅱ式期の竪穴である。

ⅱ）規模 /2 ～ 5 m の中小型 9 軒、6 m の大型 1 軒に分けられる。

ⅲ）平面形 / 不整楕円形が多く、均整のとれたものはない。

ⅳ）掘り込み / 遺構上部が消失しているものが多いため平均 0.22 m と浅い。

ⅴ）柱穴数 / 中小型は 0 ～ 7、大型でも 14 程度である。

ⅵ）炉跡 / 有するものと有さないものに分かれる。

傾　向

中小型が主体であり、大型も 1 軒検出されている。大型竪穴は近接せず 100 m 以上間隔をおいて建てられている。不整形な平面形、比較的浅い掘り込み形態、柱穴の数量などから長期間の居住を考えてしっかりと構築した竪穴という印象を受けない。形態を見る限りでは、一時的な利用目的の仮の集落であった可能性が高い。

まとめと課題

地域ごとの竪穴住居跡の特徴を見てきたが、竪穴の形態を見る限りではポンシュマトカリペツ 9 遺跡以外に地域の中心となる集落と捉えられるものはなかった。峰浜は、海と陸の両方から資源を調達できるという利点もあるため、縄文早期から断続的に遺跡が確認されておりポンシュマトカリペツ 9 遺跡のような中心集落が築かれても何ら不思議ではない。

それ以外の遺跡は、一時的な利用を目的として築かれた仮の集落と考えられ、これらの遺跡の竪穴住居形態にはある一定の共通性があることが明らかとなった。竪穴の規模に着目すると、主体となる中小型竪穴数軒に対し、必ずといって良いほど約 6 m 以上の大型竪穴 1 ～ 2 軒がセットで検出されている。この構造が一時的な利用を目的とした仮の集落の基本構造と推察する。

大型竪穴の果たす役割については推測の域を出ないが、おそらくは住居というより情報共有などを行うコミュニティーセンター的な役割であろう。一方、来運 1 遺跡やオクシベツ 6 遺跡など大型竪穴が見つかっていない遺跡も存在している。これらの遺跡では平地住居が検出されており、大型竪穴の代替的な役割を担っていたと考えられる。北筒Ⅱ式からⅢ式の時期に移行するにつれて住居形態の変化や平地住居出現に伴う集落構造の変化が起こると想定されるが、斜里町内には北筒Ⅲ式期の遺跡数が少ないため変遷過程を追うことは困難である。

以上を踏まえた上で川上 1 遺跡を観察すると、一時的な利用を目的とした仮集落の基本構造に合致することがわかる。来運地域と距離が近く行き来が可能であることから同一地域内とも捉えられるが、遺跡の主体となる時期に若干の差がある。そのため同地域には含まれず、斜里川流域を生活圏とした人々の一時的な仮の集落であると捉えておく。

今後、町内の別地域で縄文中期の集落が明らかになった際は、以上のような縄文中期の竪穴住居形態が道東の各地域においても同様な様相を示すのかを再度考察したい。

地域	遺跡名	番号（pit）	規模（m）	平面形	軸方向	柱穴	炉跡	床の起伏	壁高（m）	時期
川上	川上 1 遺跡	2	現存部で 5.2	不整楕円形か	北西	未確認	無	やや起伏あり	0.3	北筒Ⅱ
		3	掘削部分最大径 3.5	不明	不明	未確認	不明	不明	0.2 ～ 0.3	北筒Ⅱ
		7	3.26 × 2.7	不整楕円形	東西	5	有	起伏あり	0.2 ～ 0.3	北筒Ⅱ
		18	4.0 以上（推定）	不整円形	東西	5	不明	起伏あり	0.2 ～ 0.36	北筒Ⅱ
		24	6.0 × 5.4	不整楕円形	北東	14	有	起伏あり	0.2	北筒Ⅱ
		25	2.2 × 1.8	楕円形	北東	未確認	有	ほぼ平坦	0.2	北筒Ⅱ
		36	現存部で 2.38	不整楕円形ないし楕円形	北西	未確認	無	ほぼ平坦	0.14	北筒Ⅱ
		40	現存部で 2.64	不定形	北東	5	有	起伏あり	0.1	北筒Ⅱ
		47	3.1 × 2.7	不整円形	東西	5	無	ほぼ平坦	0.1	北筒Ⅱ
		8	掘削部分最大径 3.65	多角形	東西	7	不明	ほぼ平坦	0.2	北筒Ⅱ
来運	来運 1 遺跡	2	掘削部分最大径 4.7	長楕円形	南北	23	無	緩い起伏	0.3	北筒Ⅲ
		4	掘削部分最大径 2.1	楕円形	北東	未確認	無	ほぼ平坦	0.35 ～ 0.4	北筒Ⅲ
		5	掘削部分最大径 3.4	円形又は楕円形	北東	4	無？	緩い傾斜	0.35 ～ 0.55	北筒Ⅲ
		9	掘削部分最大径 4.8	円形又は楕円形	北東	6	無	ほぼ平坦	0.15 ～ 0.2	北筒Ⅱ・Ⅲ
		10	掘削部分最大径 2.8	不整楕円形	北東	7	無	起伏あり	0.2 ～ 0.35	北筒Ⅱ
		14	掘削部分最大径 2.4	不整楕円形	北東	未確認	無？	ほぼ平坦	0.5 ～ 0.55	北筒Ⅲか
		18	掘削部分最大径 2.0	不整楕円形	南北	3	不明	ほぼ平坦	0.4	―
	来運 5 遺跡	1	掘削部分最大径 4.65	不整楕円形	東西	5	無？	緩い傾斜	0.5	北筒Ⅱ・Ⅲ
		2	掘削部分最大径 2.7	楕円形	東西	未確認	無	起伏あり	0.5 ～ 0.7	北筒Ⅲ
大栄	大栄 11 遺跡	1	5.6 × 5.1	不整楕円形	南北	33	有	平坦	0.3	―
		2	5.7 以上× 5.7	楕円形	南北	19	有	平坦	0.3 ～ 0.4	―
		8	4.6 × 2.5	不整楕円形	東西	未確認	有	ほぼ平坦	0.2 ～ 0.3	北筒Ⅱ
		9	3.5 × 2.1	不整楕円形	南北	未確認	有	ほぼ平坦	0.3	北筒Ⅱ
		11	4.0 × 2.8	不整楕円形	北東	僅か	有	ほぼ平坦	0.2 ～ 0.3	北筒Ⅱ
		13	2.6 × 2.2	不定形	南北	未確認	無	やや起伏あり	0.2	北筒Ⅱ
		14	4.3 × 2.3	不整楕円形	南北	未確認	無	平坦	0.2	北筒Ⅱ
		18	3.6 × 3.0	不整楕円形	南北	2	有	平坦	0.3	北筒Ⅱ
		19	4.2 × 3.4	楕円形	北東	2	有	平坦	0.1	微小破片
		20	3.65 × 2.4	不整楕円形	東西	未確認	無	東側テラス状	0.6	北筒Ⅱ
		28	3.0 × 2.1	不定形	北東	未確認	有？	ほぼ平坦	0.4	北筒Ⅱ
		38	3.6 × 2.6	不整楕円形	北西	3	無	平坦	0.2	北筒Ⅱ
		39	5.5 × 2.8	不定形	北西	5	無	平坦	0.2	北筒Ⅱ
		40	3.0 × 2.45	楕円形	東西	未確認	無	ほぼ平坦	0.5	北筒Ⅱ
		41	5.2 × 4.8	不定形	南北	13	有	起伏あり	0.6	北筒Ⅱ
		42	3.35 × 2.4	楕円形	東西	7	無	起伏あり	0.7	北筒Ⅱ
		44	4.7 × 3.3	不定形	北西	10	無	起伏あり	0.5	―
		45	2.2 × 1.8	不定形	東西	未確認	無	起伏あり	0.5	北筒Ⅱ

第 1 表　竪穴住居跡形態観察表（1）

地域	遺跡名	番号（Pit）	規模（m）	平面形	軸方向	柱穴	炉跡	床の起伏	壁高（m）	時期
大栄	大栄 7 遺跡	1	掘削部分最大径 3.85	不定形	東西	2	無	ほぼ平坦	0.15	北筒Ⅱ
		4	掘削部分最大径 2.85 × 2.8	不整楕円形	南北	未確認	有	やや起伏あり	0.15	北筒Ⅱ
朱円	朱円 26 遺跡	1	掘削部分最大径 5.2	楕円形	東西	3	無	起伏あり	0.2	北筒Ⅱ・Ⅲ
		7	掘削部分最大径 4.3	楕円形	東西	5	不明	起伏あり	0.2	北筒Ⅲ
		10	掘削部分最大径 5.5	不定形	東西か	10	無	起伏あり	0.2	北筒Ⅲ
		11	掘削部分最大径 5.3	楕円形	東西	5	無	起伏あり	0.2	北筒Ⅲ
		12	掘削部分最大径 3.5	長楕円	東西	未確認	無	平坦	0.2~0.3	北筒
		13	掘削部分最大径 4.0	円形または楕円形	東西	未確認	無	平坦	0.3	北筒Ⅲ
		15	掘削部分最大径 7.9	円形または楕円形	東西	6	無	平坦	0.2	北筒Ⅱ
	朱円 42 遺跡	1	掘削部分最大径 4.0	不整楕円形	南北	未確認	無？	ほぼ平坦	0.3	北筒Ⅱ
		2A	掘削部分最大径 5.75	不整楕円形	南北	17	無	やや起伏あり	0.3	―
		2B	掘削部分最大径 2.8	不整楕円形	南北	5	無	ほぼ平坦	0.15	―
		2C	掘削部分最大径 2.8	不定形	東西	10	無	ほぼ平坦	0.15	―
		5	掘削部分最大径 7.8	不整楕円形	北西	15	無	ほぼ平坦	0.25	北筒Ⅱ
		7	掘削部分最大径 4.8	不整楕円形	南北	7	無	ほぼ平坦	0.3	北筒Ⅱ・Ⅲ
	オクシベツ 6 遺跡	1	掘削部分最大径 3.4	不明	不明	9	不明	やや起伏あり	0.2	―
		4	掘削部分最大径 3.6	不整形	東西	僅か	無	起伏あり	0.2	北筒Ⅱ
		13	掘削部分最大径 3.2	不整楕円	不明	未確認	無	起伏あり	0.4	北筒Ⅱ
		15	掘削部分最大径 3.6	不整円形	不明	10	無	平坦	0.8	北筒Ⅱ
	オクシベツ 7 遺跡	10	不明	不明	不明	未確認	無	ほぼ平坦	0.3 ～ 0.4	北筒Ⅲ
		12	不明	不整楕円形か	不明	未確認	無	緩い傾斜	0.2	北筒Ⅲ
		13	長軸 6.0 × 3.0	隅丸長方形	東西	未確認	有	ほぼ平坦	0.2 ～ 0.3	北筒Ⅱ・Ⅲ
		23	掘削部分最大径 3.2	楕円形	北西	未確認	無	起伏あり	0.2 ～ 0.4	北筒Ⅱ・Ⅲ
		33	掘削部分最大径 3.8	円形または楕円形	北西	未確認	無	起伏あり	0.1 ～ 0.2	北筒Ⅲ
		34	長軸 4.0 以上× 3.5	楕円形または不整円形	北東	未確認	無	起伏あり	0.2 ～ 0.3	北筒Ⅲ
峰浜	シュマトカリペツ 9 遺跡	8	3.7 × 3.5	隅丸多角形	東西	僅か	有	平坦	0.4~0.5	北筒Ⅱ
		10	3.7 × 3.3	多角形	南北	13	有	平坦	0.3~0.4	北筒Ⅱ
		16	4.2 × 2.9	隅丸多角又は四角	北西	8	無	平坦	0.2~0.3	北筒Ⅱ
		17	3.4 × 2.4	くびれひょうたん形	東西	2	無	テラス状	0.4~0.6	北筒Ⅱ
		20	長軸 4.0 × 3.3	いびつな隅丸多角形	東西	僅か	無	平坦	0.3~0.4	北筒Ⅱ
	ポンシュマトカリペツ 9 遺跡	24	5.7 × 5.3	類円形	東西	34	有	ほぼ平坦	0.3 ～ 0.5	北筒Ⅱ
		26	直径 4.3	円形	―	41	有	ほぼ平坦	0.3 ～ 0.45	北筒Ⅱ
		33	現存部で 4.5 × 3.6	楕円形	南北か	15	不明	起伏あり	0.3 ～ 0.45	北筒Ⅱか
		40	直径 3.0 前後	類円形	―	未確認	不明	ほぼ平坦	0.35 ～ 0.6	北筒Ⅲ
		43	4.65 × 3.1	不整楕円形	東西	9	有	ほぼ平坦	0.25 ～ 0.4	北筒Ⅱ

第 1 表　竪穴住居跡形態観察表（2）

地域	遺跡名	番号（Pit）	規模（m）	平面形	軸方向	柱穴	炉跡	床の起伏	壁高（m）	時期
峰浜	ポンシュマトカリペツ 9 遺跡	44	7.35 × 6.5	隅丸 8 角形	東西	22	有	ほぼ平坦	0.4 ～ 0.55	北筒Ⅱ
		54	7.1 × 6.6	隅丸 7・8 角形	南北	27	無	ほぼ平坦	0.4 ～ 0.55	北筒Ⅱ
	ポンシュマトカリペツ 1 遺跡	2	3.76 以上× 1.36 以上	不整円形	南北	2	無	平坦	0.3	北筒Ⅱ
		21	4.70 × 2.46	不整楕円形	東西か	5	有	平坦	0.3	北筒Ⅱ・Ⅲ
		30	掘削部最大径 1.1	不明	南北か	僅か	無	平坦	0.4	北筒Ⅱ
		1	9.0 × 7.4	不整円形	東西	3	無	やや起伏あり	0.4	北筒Ⅱ・Ⅲ
		3	2.5 × 2.1	不整円形	南北か	2	無	やや起伏あり	0.2 ～ 0.3	北筒Ⅱ
	峰浜海岸 1 遺跡	40	6.1 × 6.0	変形四角～菱形	南北	35	無	ほぼ平坦	0.4 ～ 0.5	北筒Ⅱ
		56	4.3 × 2.65	楕円形	南北	1	無	ほぼ平坦	0.3 ～ 0.4	北筒Ⅱ
		57	現存部で 3.7 × 1.0	楕円形？	北東	4	有	ほぼ平坦	0.3	北筒Ⅱ
	峰浜 8 線	6	掘削部分最大長 3.12	多角形ないし不整楕円形	南北か	未確認	無	平坦	0.58	北筒Ⅱ～Ⅲ
		8	掘削部分最大長 1.90	不整楕円形	不明	未確認	無	平坦	0.42	北筒Ⅱ～Ⅲ
		11	3.0 × 2.0	不整楕円形	南北	5	無	平坦	0.28	北筒Ⅱ～Ⅲ
		12	掘削部分最大長 5.10	不整楕円形	南北	11	無	平坦	0.33	北筒Ⅱ～Ⅲ
		13	掘削部分最大長 6.12	不整楕円形	南北	未確認	無	やや起伏あり	0.66	北筒Ⅱ～Ⅲ
		14	掘削部分最大長 2.40	不整楕円形	南北	未確認	無	平坦	0.4	北筒Ⅱ～Ⅲ
		31	掘削部分最大長 3.34	不整楕円形	南北	未確認	無	平坦	0.58	－
		33	掘削部分最大長 4.40	不整楕円形	南北	未確認	無	やや起伏あり	0.66	北筒Ⅱ～Ⅲ
		41	掘削部分最大長 4.00	不整楕円形	東西	未確認	無	不明	0.4	－
その他	アキベツ 11 遺跡	2	2.3 × 1.8	不整楕円形	東西	4	無	やや起伏あり	0.3	－
		3	現存部で 3.4 × 2.6	円形ないし楕円形	南北	14	無	ほぼ平坦	0.35	北筒Ⅱか
		4	4.2 × 3.7	隅丸方形	北西	16	無	ほぼ平坦	0.4	微小破片
		5	3.8 × 2.6	不整楕円形	南北	11	無	ほぼ平坦	0.35	－
		6	4.6 × 3.6	楕円形	南北	18	無	ほぼ平坦	0.4	－
		7	残存部で 6.8 × 2.4	長楕円形ないし不定形	南北	15	不明	ほぼ平坦	0.35	微小破片
		8	3.8 × 2.4	不整楕円形	南北	12	有	ほぼ平坦	0.4	北筒Ⅲ

第 1 表　竪穴住居跡形態観察表（3）

斜里町における縄文中期の焼土についての一考察

工藤　大

2015 年現在、斜里町で発見されている埋蔵文化財包蔵地は 367 遺跡を数える。その内、縄文中期に帰属する遺跡は約半数を占めており、多くの遺跡では焼土が検出されている。焼土の検出状況を概観すると、常用的に使用されたものが主体であり、儀礼に使用したと考えられるものも僅かにある。これらの利用を形態面から探るべく、本稿では焼土が単独か複数、規模、周辺の遺構状況の 3 点から検出例を分類し検討を行った。その結果から川上 1 遺跡の焼土利用について考察する。

(1) 斜里町における焼土検出例

分類の対象としたのは、町内ですでに発掘調査が行われている 15 遺跡 (※ 1) である。また、同時期の遺構に限定するために、構築層が同じものだけを扱った。(※ 2)

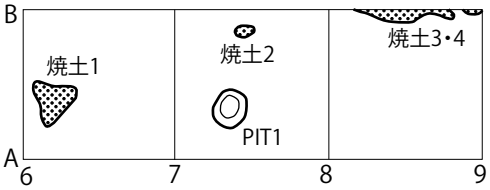
A 群 (小規模 1cm ～ 1m 未満)
a 類 1：小規模の焼土が単独で位置し、周辺に遺構がないもの。
a 類 2：小規模の焼土が単独で位置し、近くに遺構が位置するもの。
b 類 1：小規模の焼土が群を形成して、周辺に遺構がないもの。
b 類 2：小規模の焼土が群を形成し、近くに遺構が位置するもの。

B 群 (中規模 1m ～ 3m 未満)
a 類 1：中規模の焼土が単独で位置し、周辺に遺構がないもの。
a 類 2：中規模の焼土の近くに遺構があるもの。

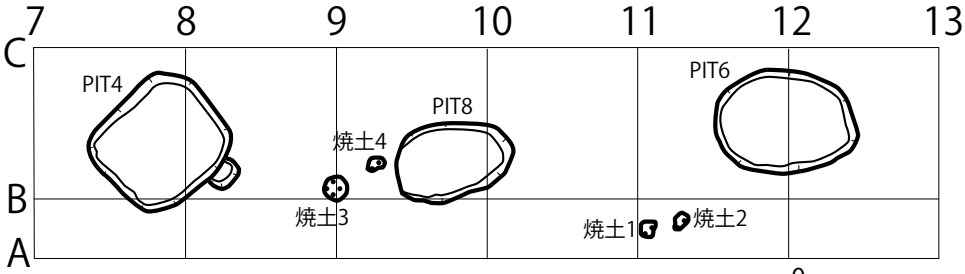
C 群 (大規模 3m 以上)
a 類 1：大規模の焼土が単独で位置し、周辺に遺構がないもの。
a 類 2：大規模の焼土の近くに遺構があるもの。

焼土ないし焼土群が単独で存在するもの、遺構に伴うもの（竪穴・土坑）、遺跡内にそれらのどちらも存在するものという 3 つのパターンがあるようである。以下にそれぞれに該当する遺跡と傾向をまとめた。

① 遺構に伴って検出するもの (第 82 図)
・朱円 42 遺跡、峰浜 8 線、ポンシュマトカリペツ 1 遺跡、アキベツ 11 遺跡の 4 遺跡。
・分布領域は南部に 1 遺跡、東部に 3 遺跡と、東部に多く分布する傾向にある。
・竪穴に伴うものは常用的な利用と考えられる。



第 82図　土坑に伴う焼土　朱円20遺跡　0　10m

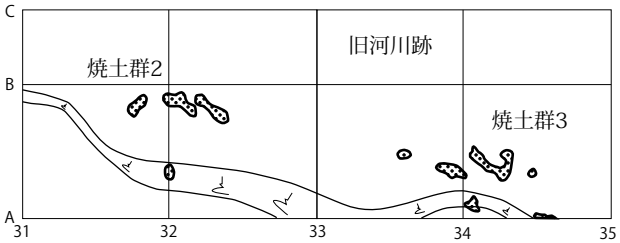


第83図　竪穴に伴う焼土　アキベツ11遺跡　0　10

② 焼土ないし焼土群が単独で検出されるもの (第 84 図)

・朱円 2 遺跡、朱円 19 遺跡、朱円 26 遺跡、ウナベツ 11 遺跡、ポンシュマトカリペツ 11 遺跡の 5 遺跡。

・5 遺跡全てが東部に集中する傾向にある。

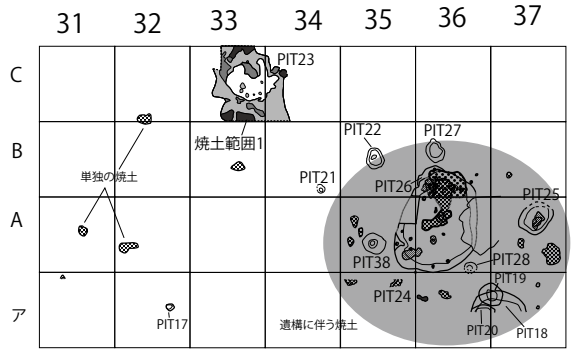


第 84図　焼土群が単独で検出　ポンシュマトカリペツ11遺跡

③ ①、②ともに検出されるもの (第 85 図)

・朱円 20 遺跡、ポンシュマトカリペツ 13 遺跡、来運 1 遺跡、大栄 11 遺跡、川上 1 遺跡、オクシベツ 7 遺跡の 6 遺跡が該当。

・分布領域は広く、斜里町内の西部で 1 遺跡、南部で 2 遺跡、東部で 3 遺跡となっている。



第 85図　2パターンの焼土　川上1遺跡

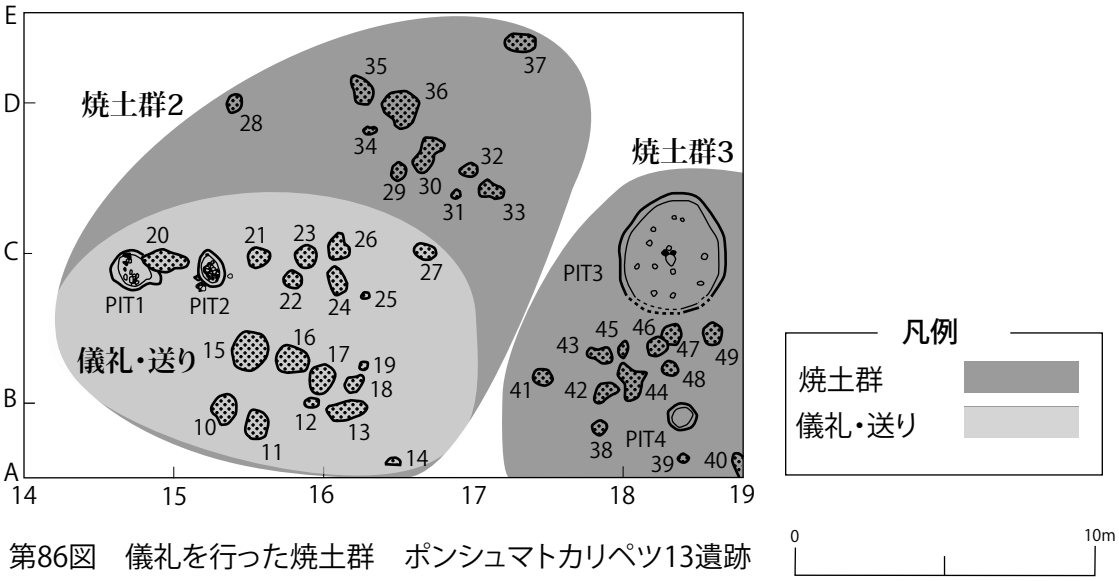
以上より、①②が検出される遺跡は東部に集中し、③が検出される遺跡は町内に広く分布する傾向が明らかになった。川上 1 遺跡は上記の③に該当し、A 群～ C 群までの全てが検出されている。これらをふまえた上で川上 1 遺跡の焼土利用について検討してみる。

(2) 川上 1 遺跡の焼土利用

先に示した①のうち、アキベツ 11 遺跡（焼土 1~4）の竪穴に伴うものは常用的な利用と判断され、川上 1 遺跡の竪穴に伴う焼土も同様な形態を示している。さらに焼土 1 ～ 24 の出土遺物は木炭に限られることからも、これらは儀礼ではなく常用的な利用と捉えられる。

一方､焼土範囲 1･2 (C 群 a 類 1) や､オクシベツ 7 遺跡･ポンシュマトカリペツ 1 遺跡 (C 群 a 類 2) の焼土は、その規模から日常的な利用を目的とした焼土とは捉え難い。しかし、出土遺物や周辺状況などだけでは儀礼利用と断定することは困難である。

現段階で儀礼利用が想定されるのはポンシュマトカリペツ 13 遺跡のみである (第○図)。分類は A 群 b 類 2 で、出土遺物は石器の破損品や未成品が出土している。また、周辺にある PIT1・2 から集石と被熱したレキが出土していることから、送り儀礼が行われたと推察する。しかしながら、焼土群 2 の全ての焼土が一様に同じ性質であったとは言い難い。破損品や未製品が出土しているのは焼土群 2 のなかでも､10 ～ 27 までの焼土で、28 ～ 37 のような A 群 b 類 1 の焼土は出土遺物は剥片などは出土しているが破損品などは出土していない。また 28 ～ 37 は PIT1・2 の周辺に位置しないことから判断して、儀礼利用はなされなかったと想定される。



第86図　儀礼を行った焼土群　ポンシュマトカリペツ13遺跡

儀礼利用の例として、ポンシュマトカリ 13 遺跡をみてきたが、これをふまえ再度川上 1 遺跡の焼土範囲 1 をみてみると、遺構集中部からほど近い場所に位置し、PIT23の埋没過程の窪地を利用して大規模な焼土を形成している。集落内に同様な焼土が存在しないため、ポンシュマトカリペツ13遺跡とは規模・出土遺物ともに異なるが、なんらかの祭事を行っていた可能性が高いと考えられる。一方で、焼土範囲2は、周辺に遺構がないことから焼土範囲1とは異なる利用がされていたと考えられる。

(3) まとめ

遺跡毎にみていくと①、②が検出される遺跡は東部に集中し、③が検出される遺跡は広く分布する傾向があることが分類結果から明らかになった。

川上 1 遺跡は③に該当する遺跡で、小・中・大規模のすべてが検出されている特異な例である。利用目的は、常用的なものが主体であるが、焼土範囲 1 のように儀礼が行われていた可能性もある。下層に土坑伴う窪地を利用している焼土範囲 1 のような検出例は他にみられないため、本遺跡の焼土における特徴として捉えることができる。

以上、川上 1 遺跡における焼土利用の検討を行ってきたが、儀礼利用と思われる焼土の検出数は圧倒的に少ない。そのため、縄文中期の人々の火を利用した儀礼行為というのは一般的なものではなかったものと思われる。しかし、明言するにはあまりにも資料が少ないため、今後の資料の増加を待っての考察を今後の課題としたい。

註釈

※ 1　検討に用いた遺跡は朱円 2・19・20・26・42 遺跡、ウナベツ 11 遺跡、ポンシュマトカリペツ 1・11・13 遺跡、峰浜 8 線遺跡、来運 1 遺跡、大栄 11 遺跡、アキベツ 11 遺跡、オクシベツ 7 遺跡、川上 1 遺跡の 15 遺跡である。また、報告されている遺跡で焼土の規模や時期が提示されていない遺跡については今回は使用しなかった。

※ 2　竪穴や土坑の内部に位置する焼土は検討に用いなかったが、竪穴の上層に位置するものは検討に用いた。

第 2 表　縄文中期遺跡焼土検出データ（1）

遺跡名	焼土名	最大径	周辺の遺構	検出例
朱円 2 遺跡	焼土 1	1.3m	周囲に遺構はなく、単独で位置する。	B 群 a 類 1
朱円 19 遺跡	焼土 11	0.6m	周囲に遺構はなく、単独で位置する。	A 群 b 類 1
	焼土 12	0.35 m		
	焼土 13	0.4 m		
	焼土 14	0.4m		
	焼土 15	0.4 m		
	焼土 16	0.8 m		
	焼土 17	0・6 m		
	焼土 18	0.15 m		
朱円 20 遺跡	焼土 1	2 m	PIT1(土坑)、焼土 2 が位置する。	B 群 a 類 2
	焼土 2	0.5m	PIT1(土坑)、焼土 3 が位置する。	A 群 a 類 2
	焼土 3	3.5 m	PIT1(土坑)、焼土 2・4 が位置する。	B 群 a 類 2
	焼土 4	0.8 m	PIT1(土坑)、焼土 2・3 が位置する。	A 群 a 類 2
	焼土 5	1.5 m	周囲に遺構はなく、単独で位置する。	B 群 a 類 1
	焼土 6	2.3 m		
	焼土 7	0.6m		A 群 a 類 1
	焼土 8	0.8m		
	焼土 9	0.6m		
	焼土 10	1 m		B 群 a 類 1
朱円 26 遺跡	焼土群 1a	1.7 m	周囲に遺構はなく、単独で位置する。	A 群 b 類 1
	焼土群 1b	0.7m		
	焼土群 1c	0.45m		
	焼土群 1 木炭範囲	1.4m		
	焼土群 2a	0.20m		
	焼土群 2b	0.20 m		
	焼土群 3c	2.1 m		
朱円 42	焼土 1	0.7 m	小規模の焼土 3 基が群を形成。周囲に PIT6(土坑) が位置する。	A 群 b 類 2
	焼土 2	0.55 m		
	焼土 3	0.35 m		
ウナベツ 11 遺跡	焼土群	1m	焼土 11 基によって群を形成。周囲に遺構はなく、単独。	A 群 b 類 1
ポンシュマトカリペツ 13 遺跡	焼土 1	0.55m	周囲に焼土 2 が位置する。	A 群 a 類 1
	焼土 2	0.8m	周囲に焼土 1 が位置する。	A 群 a 類 1
	焼土 3	0.75m	周囲に遺構はなく、単独で位置する。	A 群 a 類 1
	焼土群 1 焼土 4	0.4m	焼土 5 基で群を形成。周囲に遺構はなく、単独で位置する。	A 群 b 類 1
	焼土群 1 焼土 5	1m		
	焼土群 1 焼土 6	0.85m		
	焼土群 1 焼土 7	0.85m		
	焼土群 1 焼土 8	1m		
	焼土 9	0.9m	周囲に遺構はなく、単独。	A 群 a 類 1
	焼土群 2 焼土 10	1.05m	周辺に焼土が数多くあり、周囲に PIT1・2 が位置する。	A 群 b 類 2
	焼土群 2 焼土 12	0.55m	周辺に焼土が数多く位置する。周囲に PIT1・2 が位置する。	A 群 b 類 2
	焼土群 2 焼土 13	1.35m		
	焼土群 2 焼土 14	0.5m		
	焼土群 2 焼土 15	1.3 m		
	焼土群 2 焼土 16	1.2m		
	焼土群 2 焼土 17	1m		
	焼土群 2 焼土 18	0.7m		
	焼土群 2 焼土 19	0.3m		
	焼土群 2 焼土 20	1.45m	周辺に焼土が数多く位置する。PIT1・2 に隣接している。	
	焼土群 2 焼土 21	0.7m	周辺に焼土が数多く位置する。PIT2 に隣接している。	

第 2 表　縄文中期遺跡焼土検出データ（2）

遺跡名	焼土名	最大径	周辺の遺構	検出例
ポンシュマトカリペツ 13 遺跡	焼土群 2 焼土 22	0.6m	周辺に焼土が数多く位置する。周囲に PIT1・2 が位置する。	A 群 b 類 2
	焼土群 2 焼土 23	0.75m		
	焼土群 2 焼土 24	0.9m		
	焼土群 2 焼土 25	0.4m		
	焼土群 2 焼土 26	0.95m		
	焼土群 2 焼土 27	0.75m		
	焼土群 2 焼土 28	0.55m	周囲に多くの焼土が位置する。	A 群 b 類 1
	焼土群 2 焼土 29	0.65m		
	焼土群 2 焼土 30	1.1m		
	焼土群 2 焼土 31	0.35m		
	焼土群 2 焼土 32	0.6m		
	焼土群 2 焼土 33	0.85m		
	焼土群 2 焼土 34	0.45m		
	焼土群 2 焼土 35	1m		
	焼土群 2 焼土 36	1.25m		
	焼土群 2 焼土 37	0.95m		
	焼土群 3 焼土 38	0.5 m	周辺に焼土が数多く位置する。周囲に PIT3(竪穴)・PIT4(土坑)が位置する。	A 群 b 類 2
	焼土群 3 焼土 39	0.4m		
	焼土群 3 焼土 40	0.8m		
	焼土群 3 焼土 41	0.55m		
	焼土群 3 焼土 42	0.9m		
	焼土群 3 焼土 43	1m		
	焼土群 3 焼土 44	1.2m		
	焼土群 3 焼土 45	0.55m		
	焼土群 3 焼土 46	0.8m		
	焼土群 3 焼土 47	0.65m		
	焼土群 3 焼土 48	0.55m		
	焼土群 3 焼土 49	0.75m		
ポンシュマトカリペツ 11 遺跡	焼土 1	0.6m	周囲に遺構はなく、単独で位置する。	A 群 a 類 1
	焼土 2	0.9m		
	焼土 3	0.35m	周囲に遺構はなく、単独。	A 群 a 類 1
	焼土 4	1.35m		B 群 a 類 1
	焼土 5	0.8m		A 群 a 類 1
	焼土群 1 焼土 6	3.1m	焼土 5 基で群を形成。周囲に遺構はなく、単独。	A 群 b 類 1
	焼土群 1 焼土 7	3.05m		
	焼土群 1 焼土 8	3.15m		
	焼土群 1 焼土 9	0.55m		
	焼土群 1 焼土 10	0.55 m		
	焼土 11	0.75m	周辺に遺構はなく、単独。	A 群 a 類 1
	焼土 12	0.7m		
	焼土群 2 焼土 13	0.8m	小・中規模の焼土 4 基が群を形成。周囲に遺構はなく、単独。	D 群 c 類 1
	焼土群 2 焼土 14	1.3m		
	焼土群 2 焼土 15	1.45m		
	焼土群 2 焼土 16	0.4m		
	焼土群 3 焼土 17	0.45m	焼土 6 基が群を形成。周囲に遺構はなく、単独。	A 群 b 類 1
	焼土群 3 焼土 18	1.05m		
	焼土群 3 焼土 19	1.5m		
	焼土群 3 焼土 20	0.15m		
	焼土群 3 焼土 21	0.5m		
	焼土群 3 焼土 22	0.75m		
	焼土 23	0.45m	周囲に遺構はなく、単独で位置する。	A 群 a 類 1
峰浜 8 線	焼土群 1a	0.68 m	小規模の焼土 3 基が群を形成し、PIT31(竪穴)・PIT35(土坑)・PIT36(土坑)・PIT38(土坑)が近くに位置する。	A 群 b 類 2
	焼土群 1b	0.42 m		
	焼土群 1c	0.32 m		
来運 1 遺跡	焼土 1	2.35 m	周囲に PIT7(土坑)が位置する。	B 群 a 類 2
	焼土 2	0.85 m	PIT3(竪穴)の上層より検出。	A 群 a 類 1
	焼土 3	1 m	周囲に遺構はなく、単独で位置する。	B 群 a 類 1

第 2 表　縄文中期遺跡焼土検出データ（3）

遺跡名	焼土名	最大径	周辺の遺構	検出例
大栄 11 遺跡	焼土 2	1.05 m	周囲に PIT2(竪穴)、PIT3(土坑) が位置する。	B 群 a 類 2
	焼土 3	0.35 m	周囲に遺構はなく、単独で位置する。	A 群 a 類 1
ポンシュマトカリペツ 1 遺跡	焼土 1	5 m前後	焼土の上面から石器集中 1 基が検出。周囲に PIT6(土坑) が 1 基検出。	C 群 a 類 2
アキベツ 11 遺跡	焼土 1	0.5m	焼土 1･2 が隣接､周囲に PIT6･8(竪穴) が位置する。	A 群 b 類 2
	焼土 2	0.55m		
	焼土 3	0.8m	焼土 3･4 が隣接､周囲に PIT4･8(竪穴) が位置する。	
	焼土 4	0.55m		
オクシベツ 7 遺跡	焼土	3.5 m	周囲に PIT5(土坑) が位置する。	C 群 a 類 2
	A24 区焼土	0.52m	周囲に遺構はなく、単独で位置する。	A 群 a 類 1
	A43 区焼土	0.22m		
	A44 区焼土	0.4m		
	A45 焼土 1	0.6m	焼土が隣接して位置する。	A 群 b 類 1
	A45 焼土 2	0.16m		
川上 1 遺跡 (2004)	焼土群 1a	2.2 m	焼土 4 基が群を形成。周囲に PIT10(土坑) がある。	A 群 b 類 2
	焼土群 1b	2.7 m	焼土 4 基が群を形成。周囲に PIT10(土坑) がある。	A 群 b 類 2
	焼土群 1c	0.6 m		
	焼土群 1 d	1.0 m		
川上 1 遺跡 (2014)	焼土範囲 1	5m	PIT23(土坑) の上面より検出。周囲に遺構はなく、単独で位置する。	C 群 a 類 1
	焼土範囲 2	5m	周囲に遺構はなく、単独で位置する。	
	焼土 1	0.72m	周囲に PIT2・7(竪穴) が位置する。	A 群 a 類 2
	焼土 2	0.88m	周囲に遺構はなく、単独で位置する。	A 群 a 類 1
	焼土 3a	0.3m	周囲に PIT3(竪穴)・PIT5・9(土坑)・木炭範囲 1abc が位置する。	A 群 b 類 2
	焼土 3b	0.65m		
	木炭範囲 2a	0.68 m		
	木炭範囲 2b	0.28m		
	焼土 4	1.74m	周囲に PIT42・43(土坑) が位置している。	B 群 a 類 2
	焼土 5	1.1m	周囲に PIT11・12・13(土坑) が位置する。	
	焼土 6	0.8m	周囲に PIT6(土坑) が位置する。	A 群 a 類 2
	焼土 7	0.28m	周囲に PIT6(土坑) が位置する。	
	焼土 8a	0.18m	周辺に遺構 (土坑・竪穴) が集中する。	A 群 b 類 2
	焼土 8b	0.4m		
	焼土 9	0.75m	周囲に遺構はなく、単独で位置する。	A 群 a 類 1
	焼土 10	0.5m	焼土範囲 1 が周囲に広がる。	
	焼土 11a	0.5m	周囲に PIT24(竪穴)・PIT21・22・38(土坑) が位置する。	A 群 b 類 2
	焼土 11b	0.54m		
	焼土 11c	0.82m		
	焼土 12	0.5m	周囲に PIT(土坑・竪穴) が多く位置する。	A 群 a 類 2
	焼土 13a	0.43m	周囲に PIT18(竪穴)･PIT19･20(土坑) が位置する。	A 群 b 類 2
	焼土 13b	0.6m		
	焼土 14	0.6m	周囲に木炭範囲 3・7・8a・8b が位置する。	A 群 a 類 1
	焼土 15a	1.3m	PIT2(竪穴) の上層で検出。	A 群 a 類 1
	焼土 15b	0.75m		
	焼土 16	0.26m	周囲に遺構はなく、単独で位置する。	A 群 a 類 1
	焼土 17a	0.38m	周囲に遺構があるが構築層が違う。	A 群 a 類 1
	焼土 17b	0.5m		
	焼土 18	0.3m	周囲に遺構はなく、単独で位置する。	A 群 a 類 1
	焼土 19	0.39m	2 組の焼土が単独で位置する。	A 群 a 類 1
	焼土 20	1.37m		
	焼土 21a	0.64m	周囲に遺構があるが構築層が違う。	A 群 a 類 1
	焼土 21b	0.56m		
	焼土 22	0.72m		
	焼土 23a	3.40m		A 群 b 類 1
	焼土 23b	0.52m		
	焼土 23c	0.31m		
	焼土 24	1.18m		A 群 a 類 1

引用・参考文献

斜里町教育委員会

1994 『シュマトカリペツ 9 遺跡発掘調査報告書』

1999 『ポンシュマトカリペツ 13 遺跡 ポンシュマトカリペツ 11 遺跡 峰浜海岸 1 遺跡 ポンシュマトカリペツ 9 遺跡発掘調査報告書』

2000 『オクシベツ 4 遺跡 朱円 19・20・21 遺跡 ウナベツ 3・11 遺跡 朱円 24 遺跡発掘調査報告書』

2003 『大栄 11 遺跡発掘調査報告書』

2004 『大栄 7 遺跡発掘調査報告書』

2004 『川上 1 遺跡発掘調査報告書』

2004 『アキベツ 11 遺跡発掘調査報告書』

2004 『アッカンベツ 22 遺跡発掘調査報告書』

2004 『朱円 2 遺跡発掘調査報告書』

2004 『朱円 42 遺跡発掘調査報告書』

2005 『来運 1 遺跡 来運 5 遺跡発掘調査報告書』

2007 『峰浜海岸 1 遺跡発掘調査報告書』

2010 『オライネコタン 3・4 遺跡』

2012 『道営畑総緊急発掘調査報告書』

2013 『峰浜 8 線遺跡発掘調査報告書』

斜里町・斜里町知床博物館

2009 『しれとこライブラリー 9　知床の考古』

報　告　書　抄　録

ふりがな	かわかみ１いせき
書名	川上１遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	斜里町文化財調査報告
シリーズ番号	ＸＸＸⅨ
編著者名	松田 功、平河内　毅、工藤　大
編集機関	斜里町教育委員会
所在地	〒099-4113 北海道斜里郡斜里町本町 12 番地 TEL01522-3-3131
発行年月日	平成 27（西暦 2015）年３月 25 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
川上１遺跡	斜里郡斜里町字川上190番地道路敷地内	01545	190	43 51 18	144 37 24	発掘 2012.9.1～10.31 2013.5.23～8.31 2014.5.20～8.27 整理 2013.1.11～2013.3.22 2013.9.1～2014.3.25 2014.10.1～2015.3.25	380㎡ 820㎡ 1,281㎡	町道羅萠道路改良工事に伴う埋蔵文化財保護のための緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川上１遺跡	集落 遺物包含地	縄文早期、縄文中期、縄文晩期	縄文中期 竪穴住居跡９軒 土坑 38 基 焼土・木炭範囲遺構 58 ヵ所	縄文早期（東釧路Ⅲ式）、中期（トコロ６類）・晩期土器 石器	縄文中期を主とした集落遺跡

川上1遺跡　遠景

川上1遺跡　近景

発掘前風景

発掘体験学習(1)

発掘体験学習(2)

調査風景(1)

調査風景(2)

ｱ-3 ～ｱ-9 区　完掘状況　SW→

ｱ-35 ～ｱ-40 区　完掘状況　NE→

A-6 ～ A-9 区　完掘状況　NE→

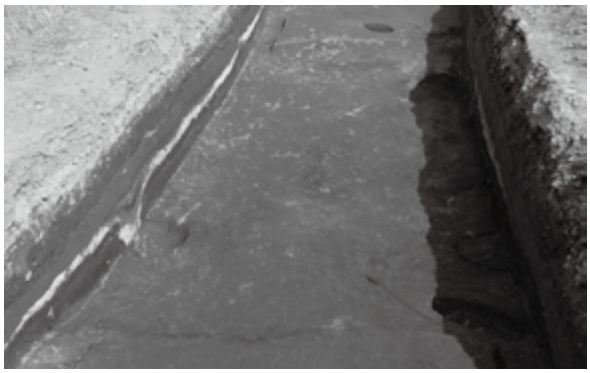
A-10 ～ A-14 区　完掘状況　NE→

B-11 ～ B-13 区　完掘状況　NE→

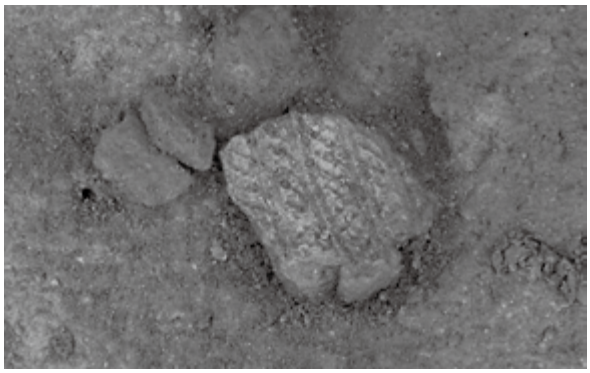
B-35 ～ B-36　C-36 区　完掘状況　SW→

B-36 ～ B-38 区　完掘状況　NE→

C-32 ～ C-34 区　完掘状況　SW→



PIT2（竪穴）完掘状況　W→

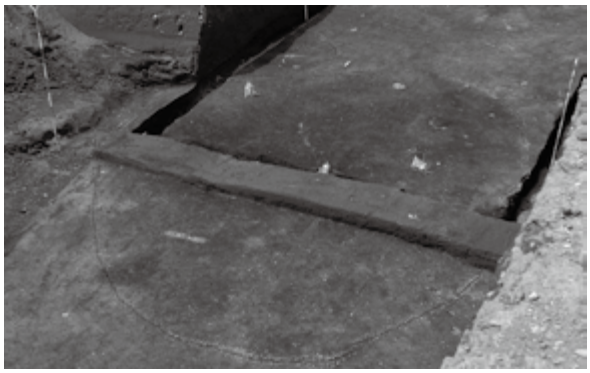


PIT2（竪穴）床直　土器出土状況

PIT2（竪穴）床直　石器出土状況

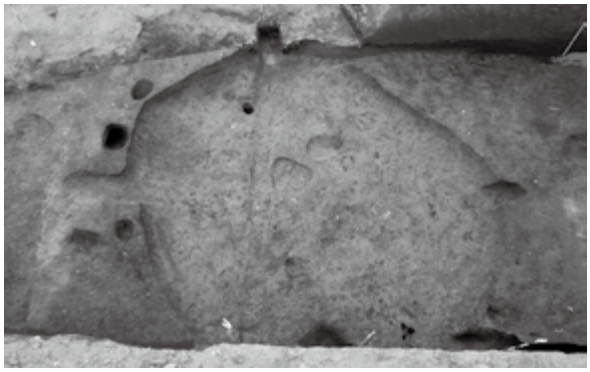
PIT2（竪穴）南壁セクション

PIT3（竪穴）完掘状況　SW→

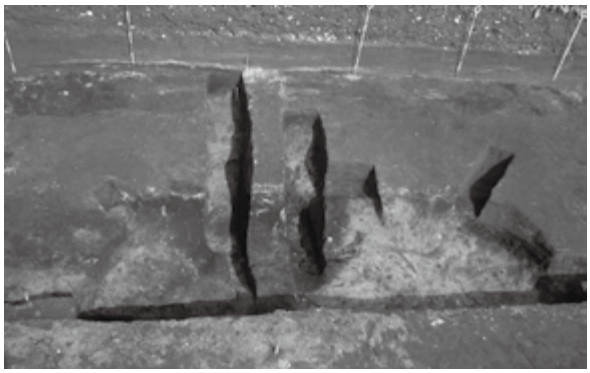


PIT7（竪穴）検出状況　NE→

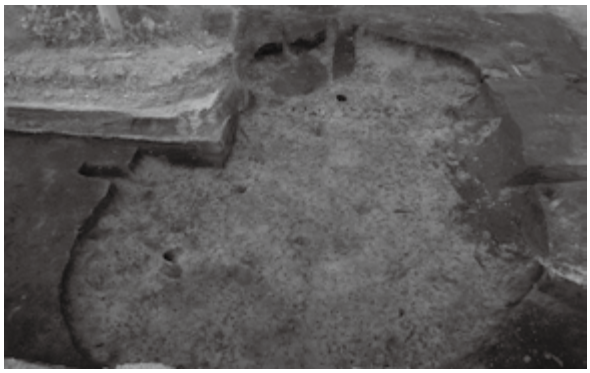
PIT7（竪穴）測量調査風景



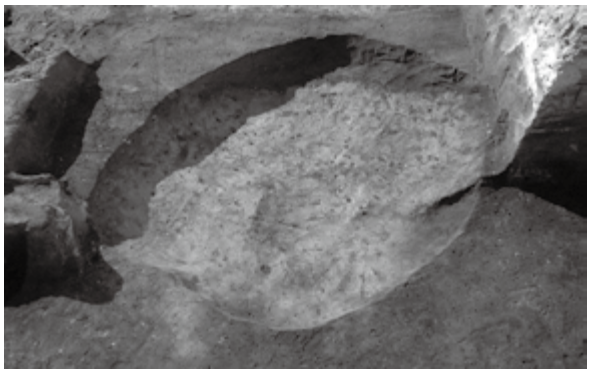
PIT7（竪穴）完掘状況　NW→



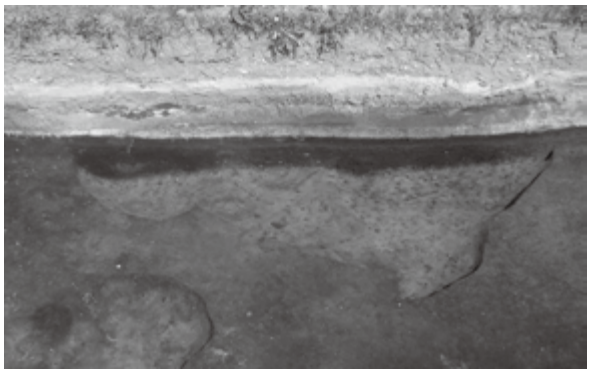
PIT18（竪穴）完掘状況　S→



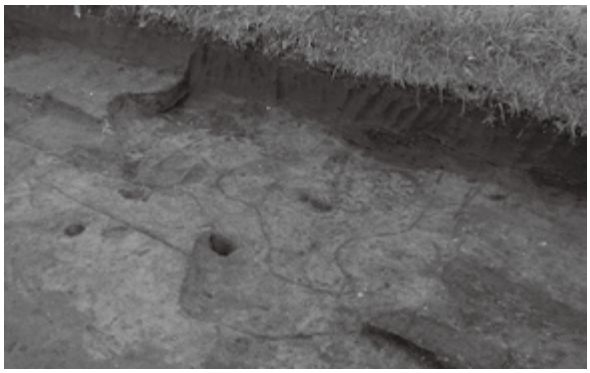
PIT24（竪穴）完掘状況　S→



PIT25（竪穴）完掘状況　SE→

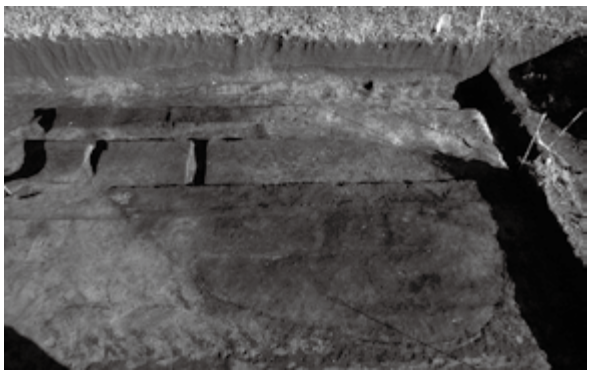


PIT36（竪穴）完掘状況　SE→

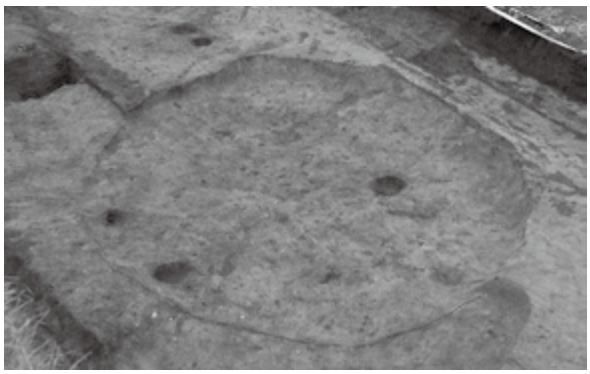


PIT40（竪穴）完掘状況　NW→

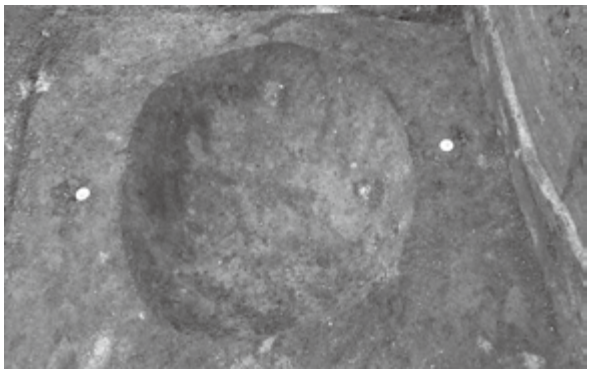
PIT40（竪穴）南壁セクション



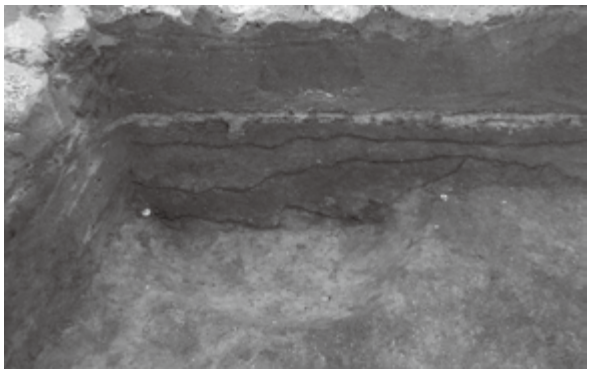
PIT47（竪穴）検出状況 NW→



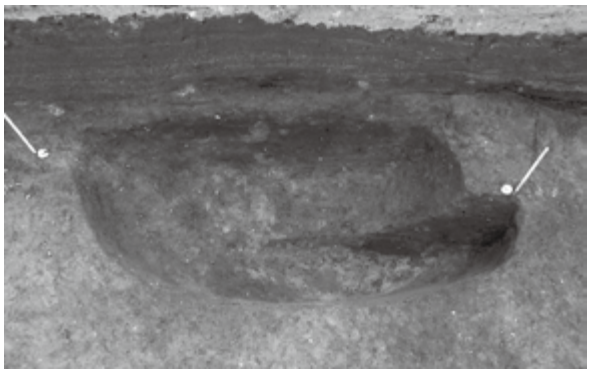
PIT47（竪穴）完掘状況　NE→



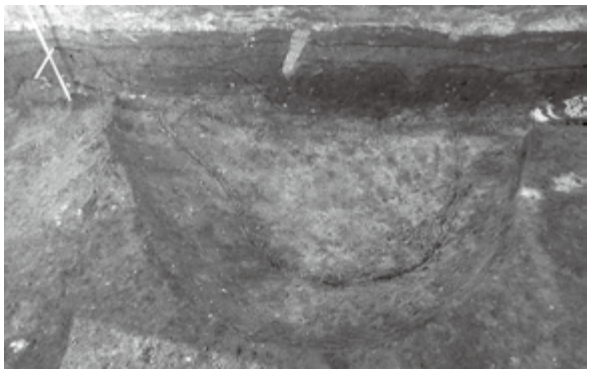
PIT1（土坑）完掘状況　W→



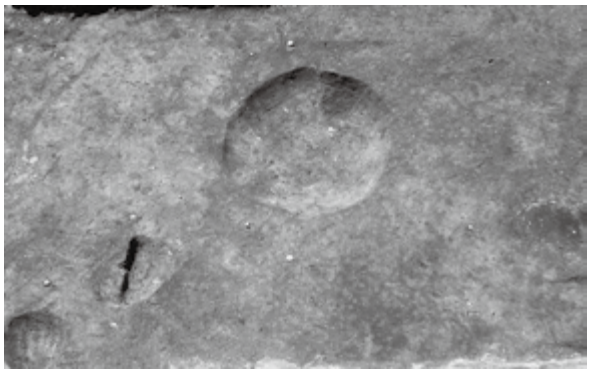
PIT4（土坑）完掘状況　S→



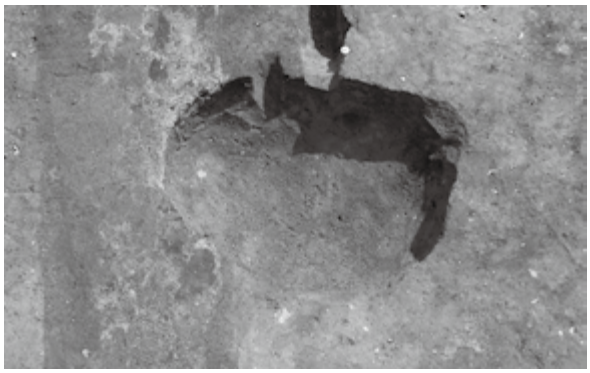
PIT5（土坑）完掘状況　N→



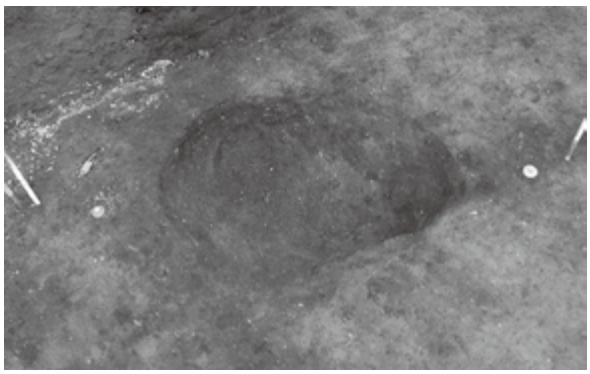
PIT6（土坑）完掘状況　W→



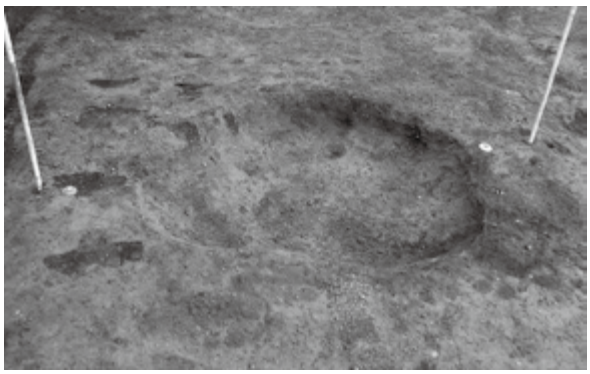
PIT8（土坑）完掘状況　W→



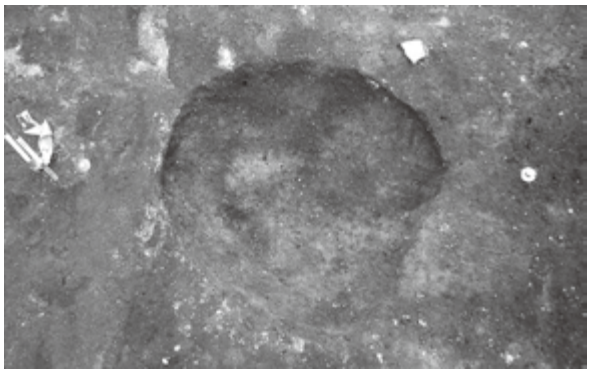
PIT9（土坑）完掘状況　W→



PIT10（土坑）完掘状況　S→

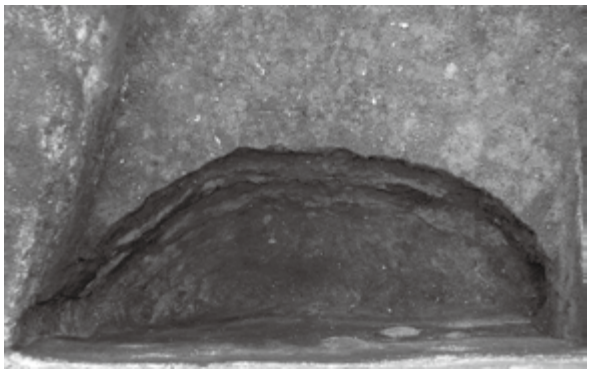


PIT11（土坑）完掘状況　W→



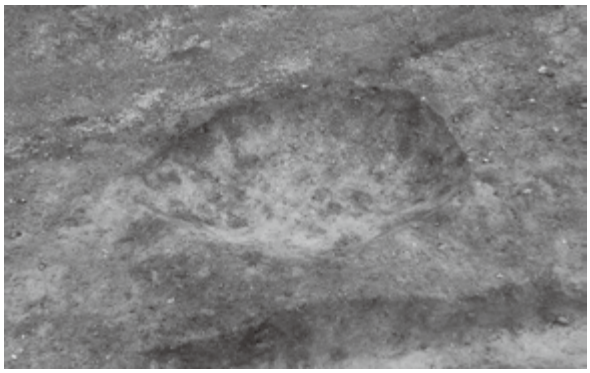
PIT12（土坑）完掘状況　W→

PIT13（土坑）完掘状況　N→

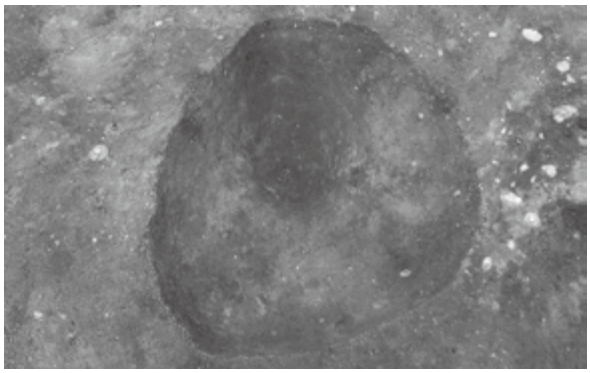


PIT14（土坑）完掘状況　N→

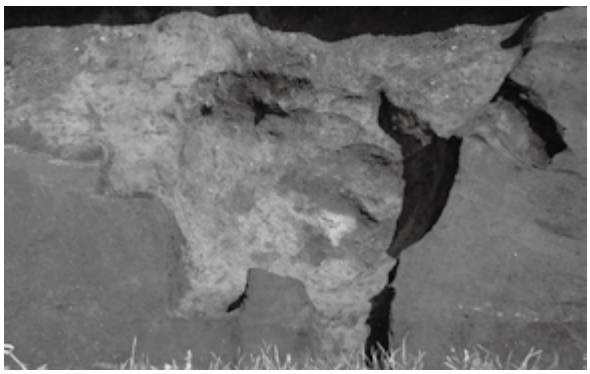
PIT15（土坑）完掘状況　W→



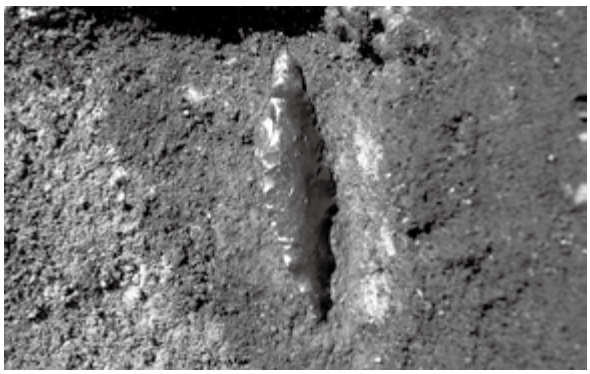
PIT16（土坑）完掘状況　S→



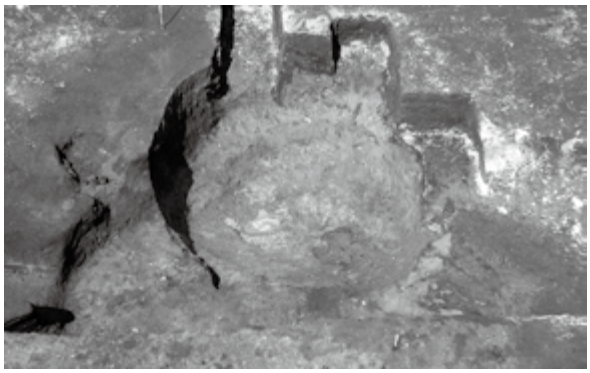
PIT17（土坑）完掘状況　W→



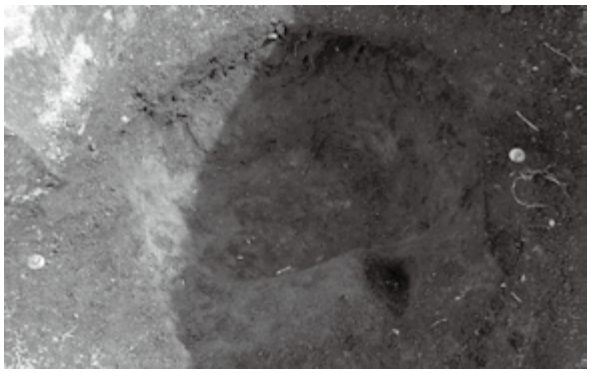
PIT19（土坑）完掘状況　N→



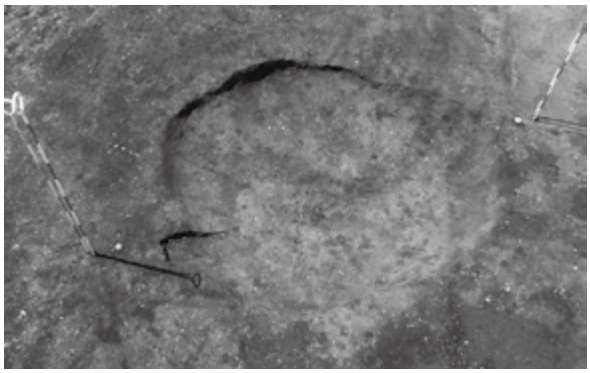
PIT19（土坑）出土石器



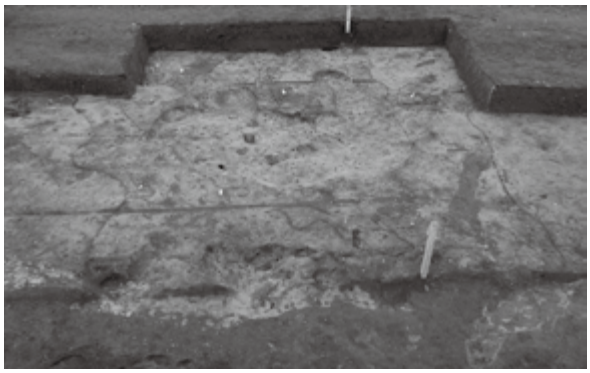
PIT20（土坑）完掘状況　S→



PIT21（土坑）完掘状況　W→



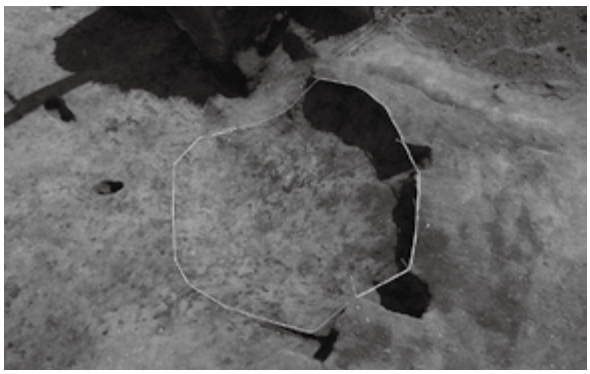
PIT22（土坑）完掘状況　E→



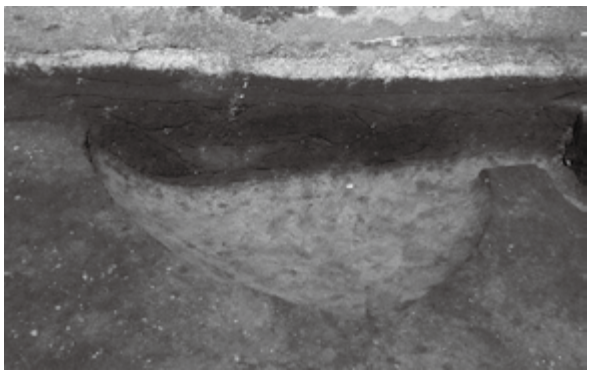
PIT23（土坑）完掘状況　SE→

PIT23（土坑）出土石器

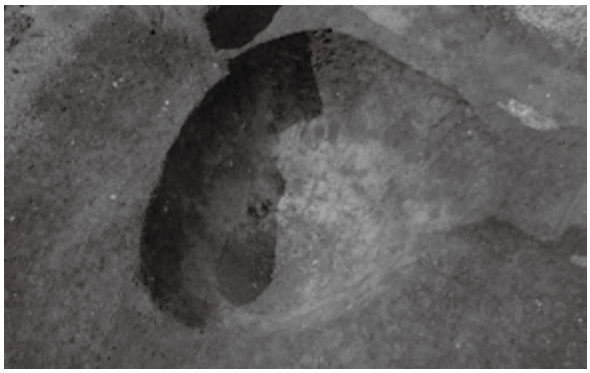
PIT23（土坑）出土石器



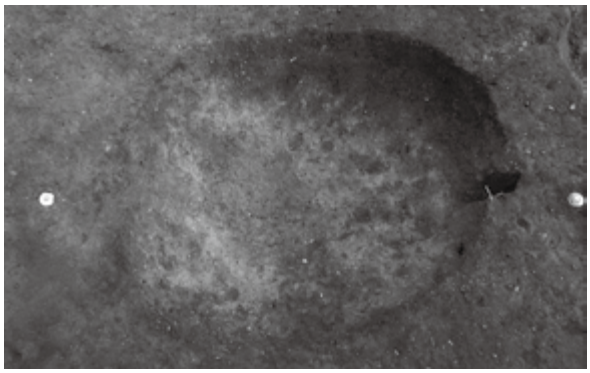
PIT26（土坑）完掘状況　NE→



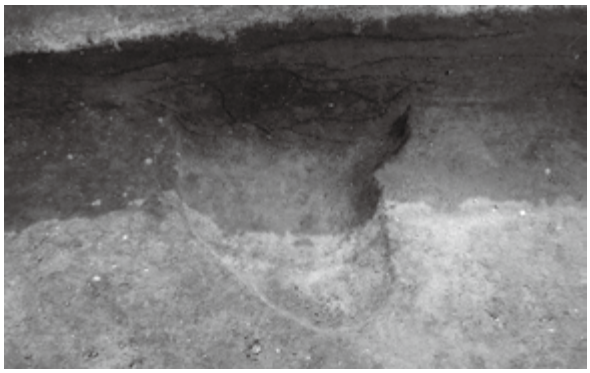
PIT30（土坑）完掘状況　S→



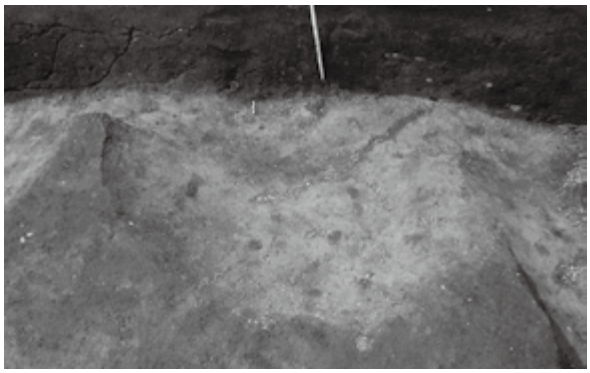
PIT31（土坑）完掘状況　E→



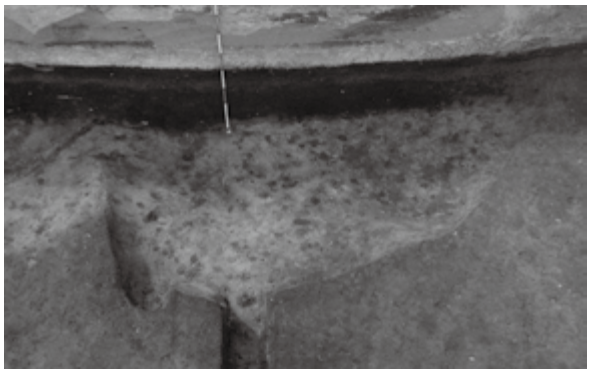
PIT32（土坑）完掘状況　S→



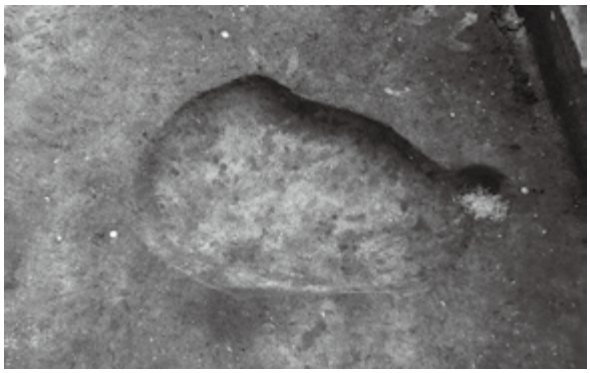
PIT33（土坑）完掘状況　SE→



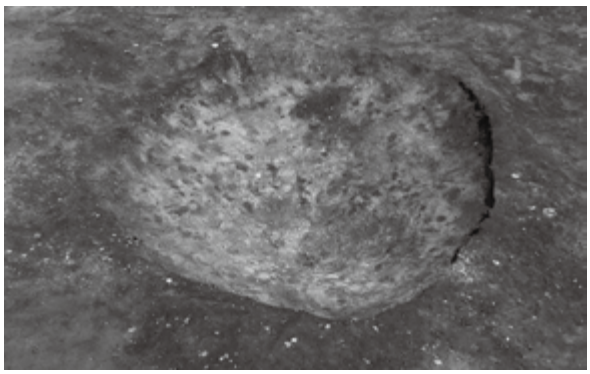
PIT34（土坑）完掘状況　S→



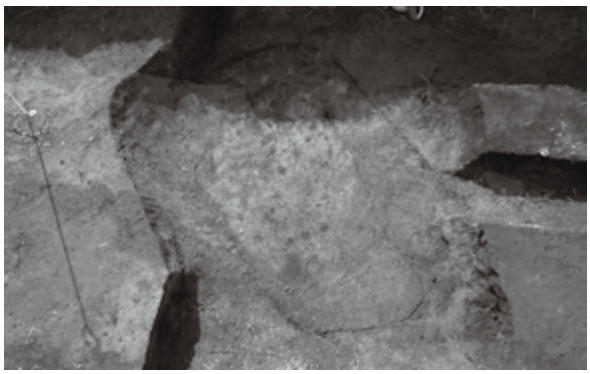
PIT35（土坑）完掘状況　SE→



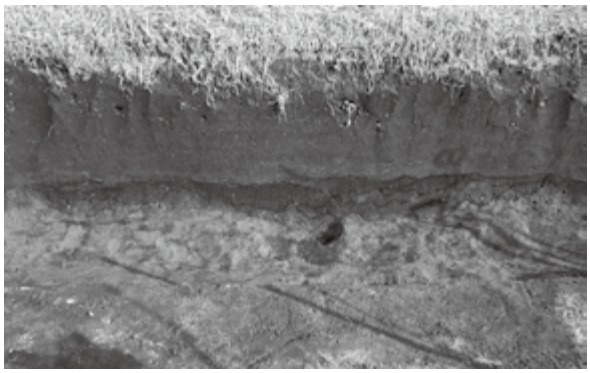
PIT37（土坑）完掘状況　SW→



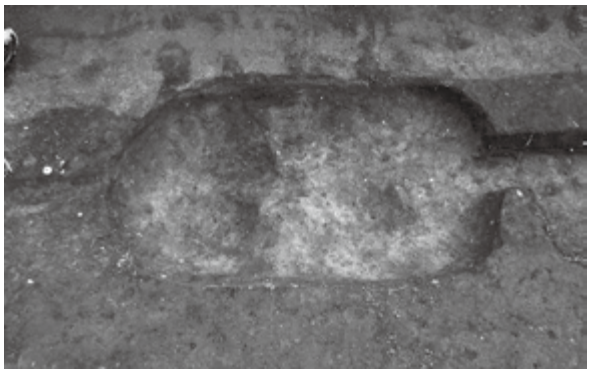
PIT38（土坑）完掘状況　S→



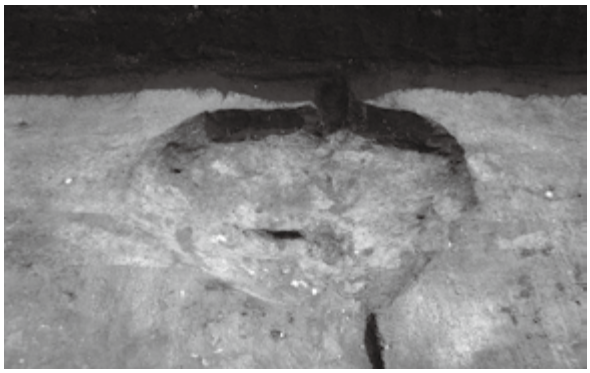
PIT39（土坑）完掘状況　N→



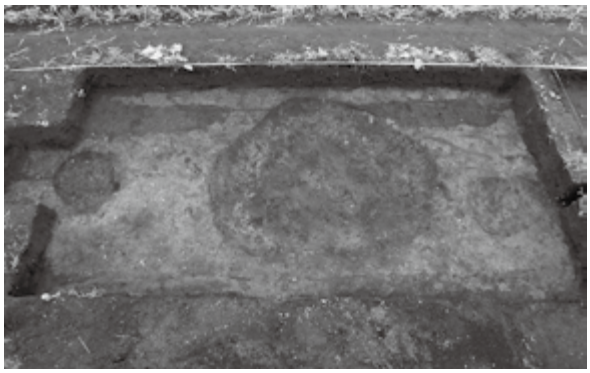
PIT41（土坑）セクション



PIT42（土坑）完掘状況　N→



PIT43（土坑）完掘状況　N→



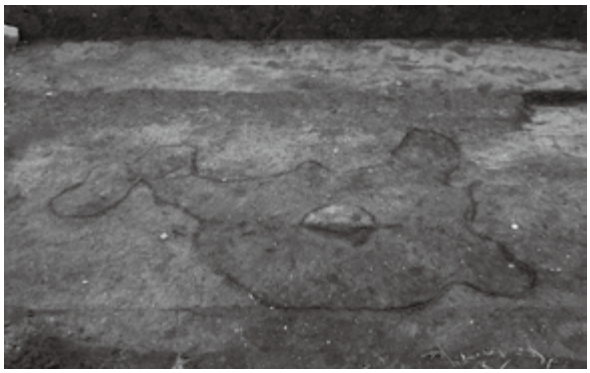
PIT44・45・46（土坑）完掘状況　SE→

ｱ-7 区　柱穴列　検出状況　N→

ｱ-8・9 区　柱穴列　検出状況　W→

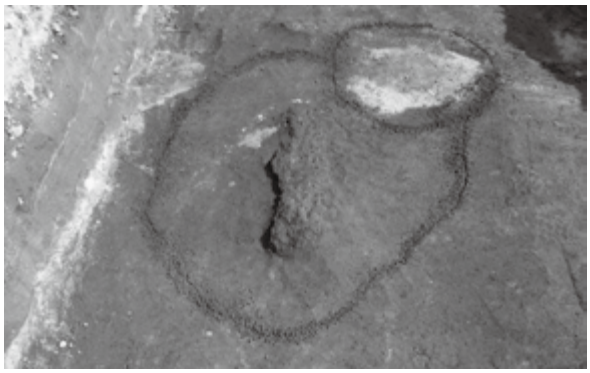
焼土範囲 1　検出状況　S→

焼土範囲 2　検出状況　S→

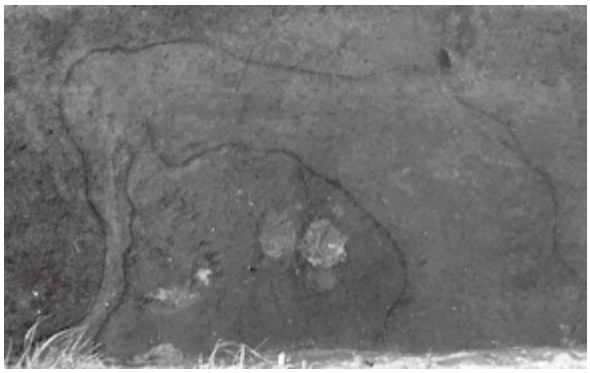


焼土 4a・4b（Ⅶb2 層）　検出状況　S→

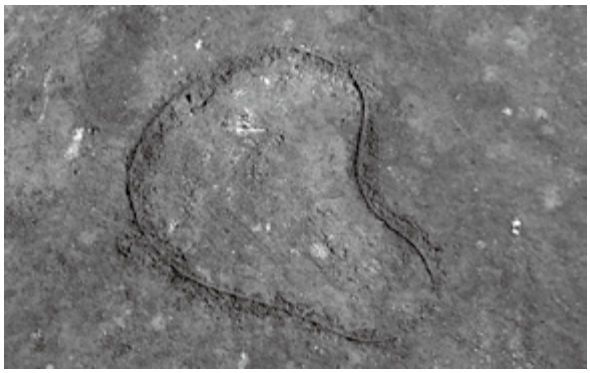
焼土 5（Ⅶb2 層）　検出状況　N→



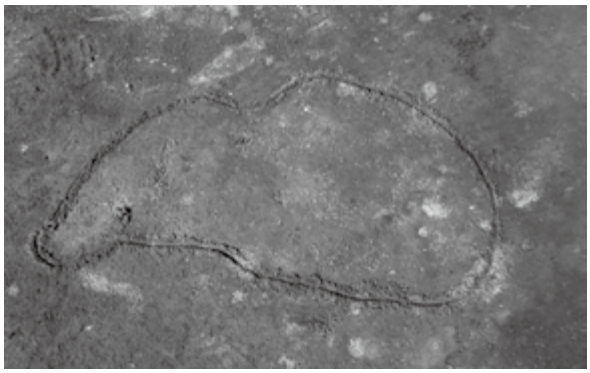
焼土 15a（Ⅶb1 層）　検出状況　S→



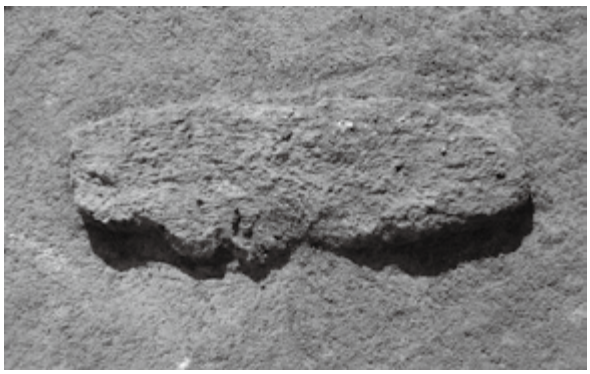
焼土 23a・23b（Ⅶb1 層）検出状況 NE→



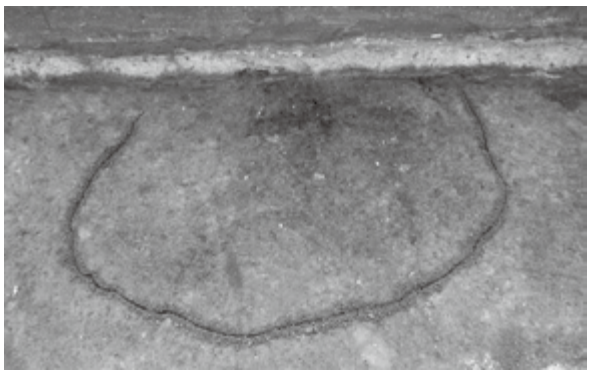
焼土 25a（Ⅶa 層）　検出状況　S→



焼土 25b（Ⅶa 層）　検出状況　S→

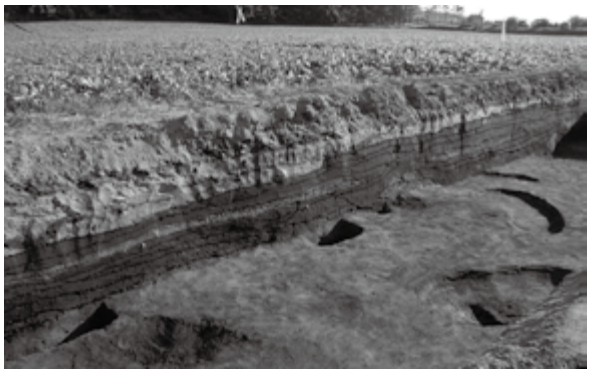


木炭範囲 3（Ⅶb1 層）　検出状況　E→

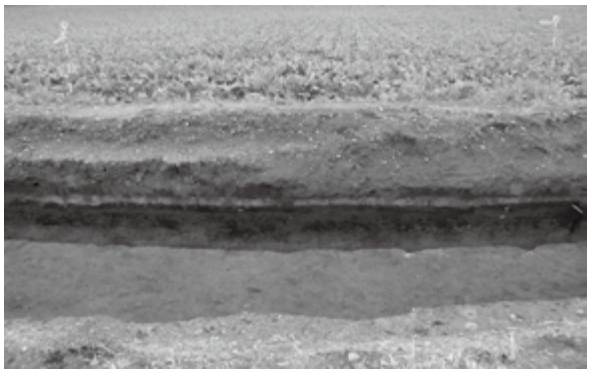


木炭範囲 4a（Ⅶb1 層）　検出状況　N→

A-6 ～ A-9区　セクション　N→



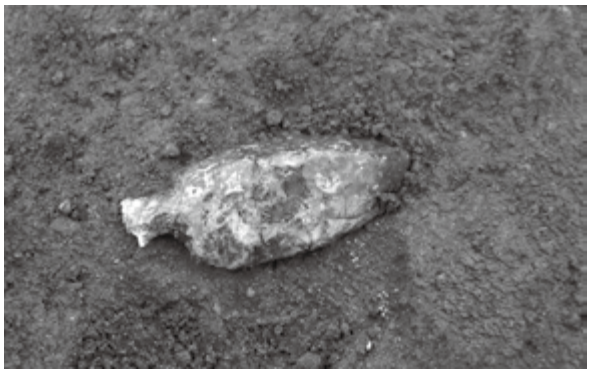
A-18・19区　セクション　N→



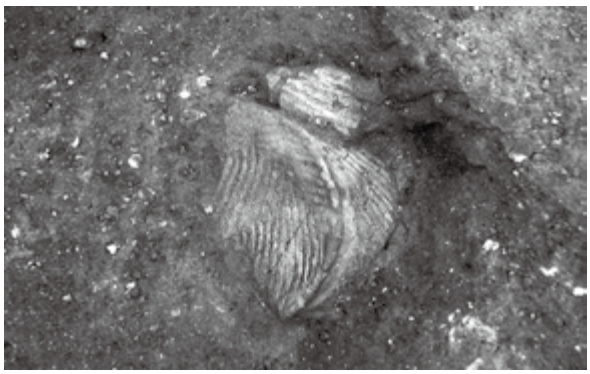
A-20 ～ A-21 区 セクション W→

Ma-b5　検出状況　W→

石器（VIIb2 層）出土状況



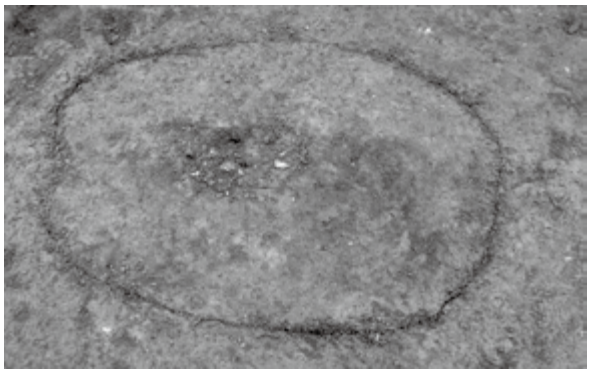
石器（VIIb2 層）出土状況



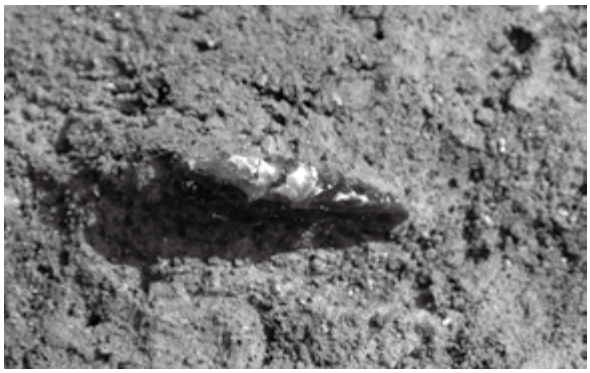
土器（VIIb 層）出土状況

土器（VIIb 層）出土状況

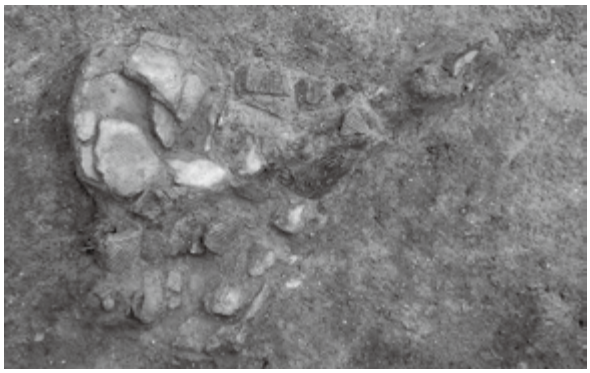
遺物（VIIb 層）出土状況



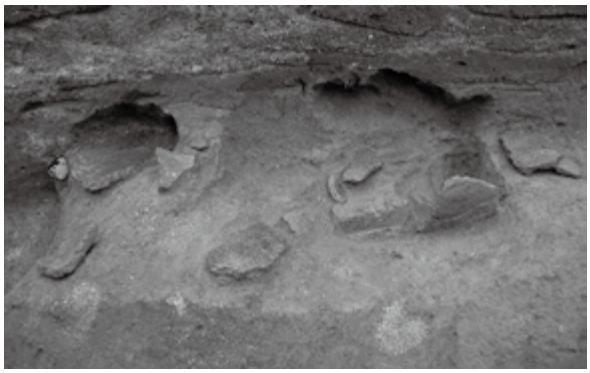
石器集中（VIIb 層）出土状況



石器（VIIb 層）出土状況



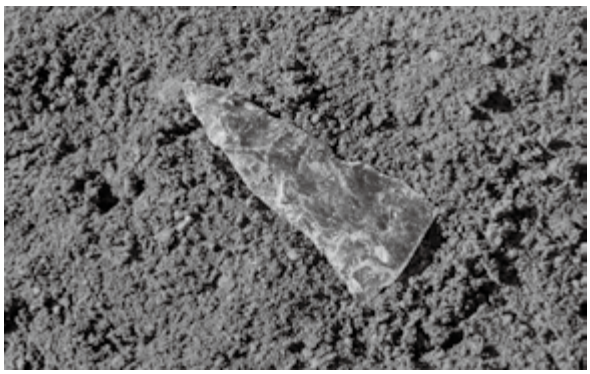
土器（VIIb 層）出土状況



土器（VIIb 層）出土状況

石器（VIIb 層）出土状況

石器（VIIa 層）出土状況



石器（VII層）出土状況

作業風景（1）

作業風景（2）

作業風景（3）

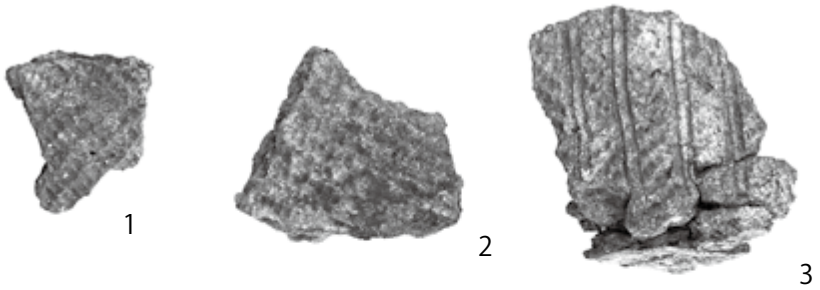
作業風景（4）

作業風景（5）

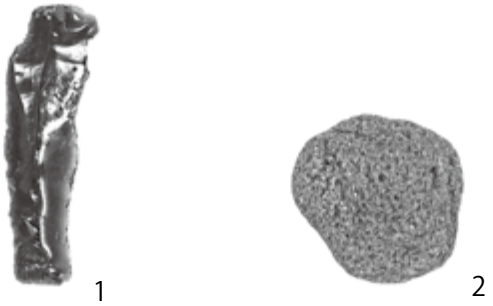
作業風景（6）

作業風景（7）

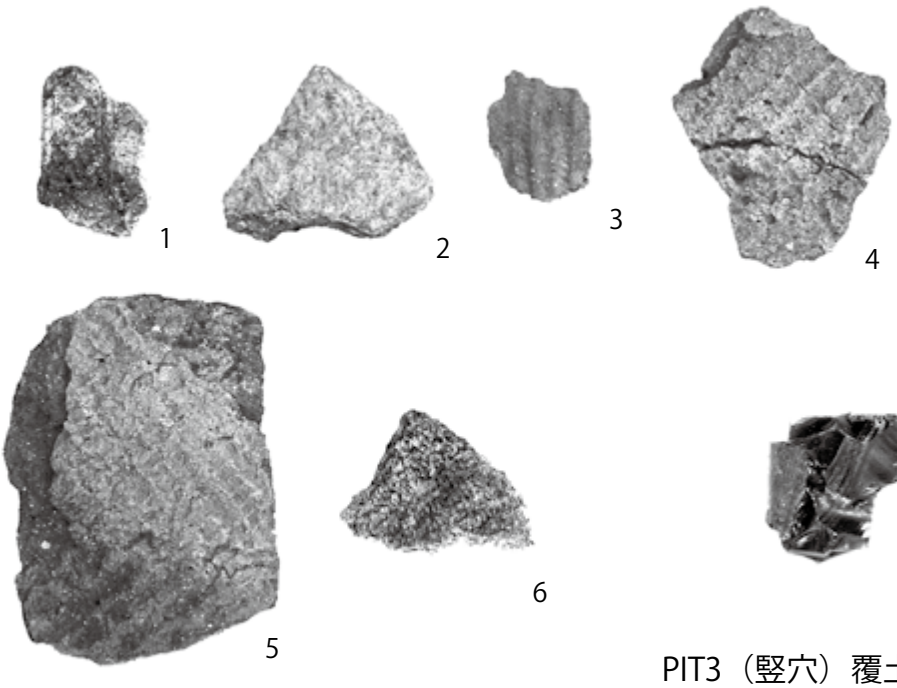
作業風景（8）



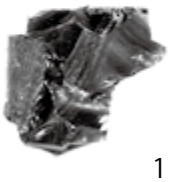
PIT2（竪穴）床直出土土器



PIT2（竪穴）床直出土石器



PIT3（竪穴）覆土出土土器

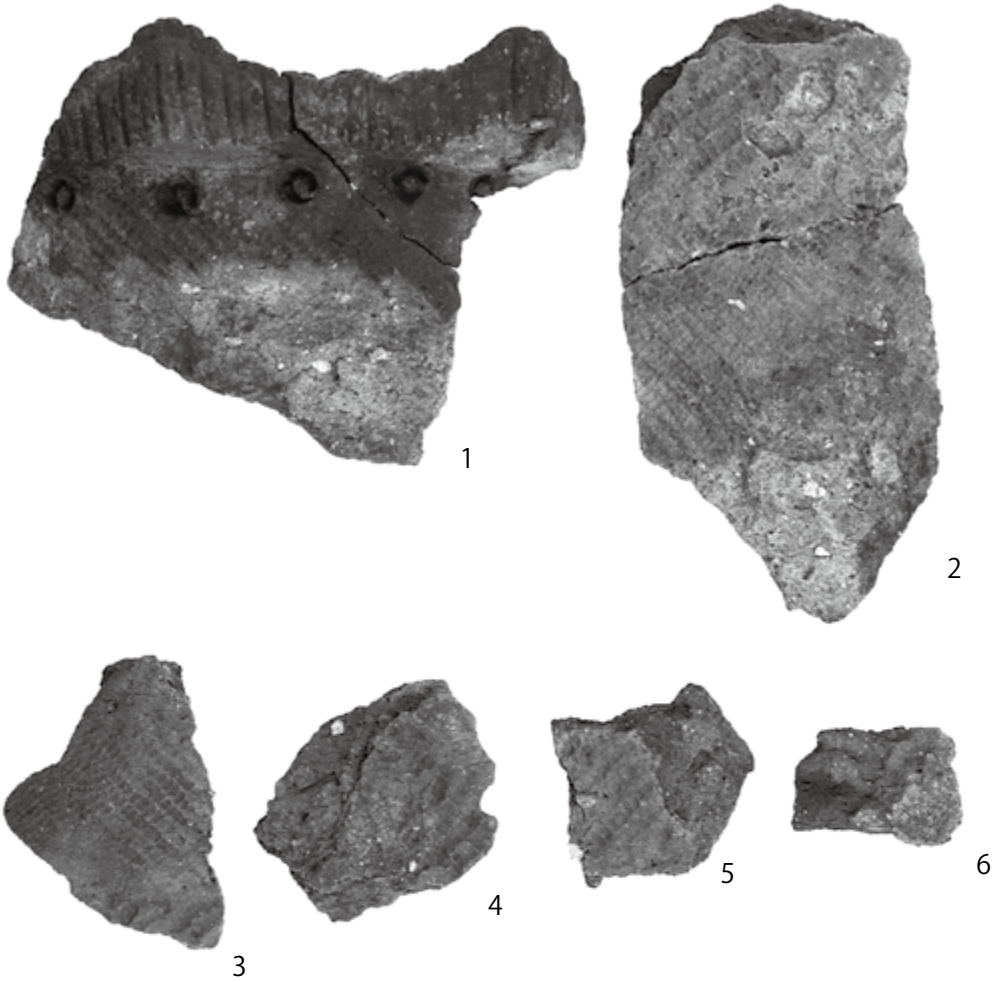


PIT3（竪穴）覆土出土石器

PIT7（竪穴）出土土器

PIT7（竪穴）覆土出土石器

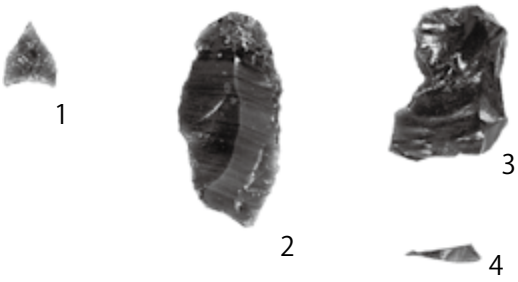
作業風景



PIT18（竪穴）覆土出土土器

PIT18（竪穴）覆土出土石器

PIT24（竪穴）覆土出土土器



PIT24（竪穴）覆土出土石器

PIT25（竪穴）覆土出土土器

PIT25（竪穴）覆土出土石器

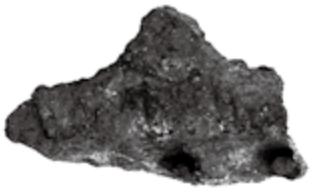
PIT36（竪穴）覆土出土石器

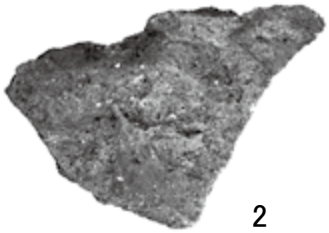
PIT40（竪穴）覆土出土土器

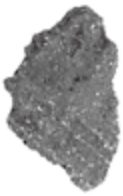
PIT40（竪穴）出土石器

PIT4（土坑）覆土出土土器

PIT5（土坑）覆土出土土器







PIT19（土坑）出土土器

PIT19（土坑）出土石器

PIT23（土坑）覆土出土土器

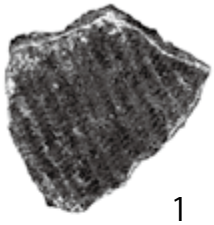
PIT23（土坑）出土石器

作業風景

1

2

PIT37 （土坑） 覆土出土石器


1

2

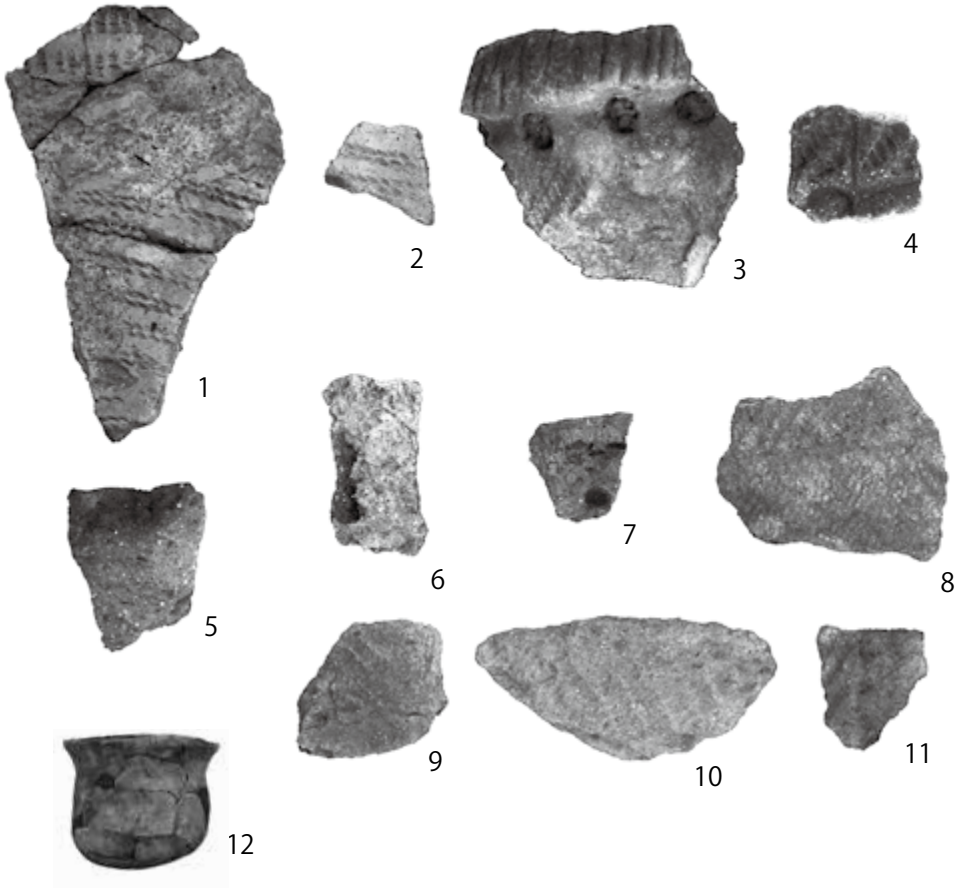
PIT44 （土坑） 覆土出土土器

1

PIT45 （土坑） 覆土出土石器

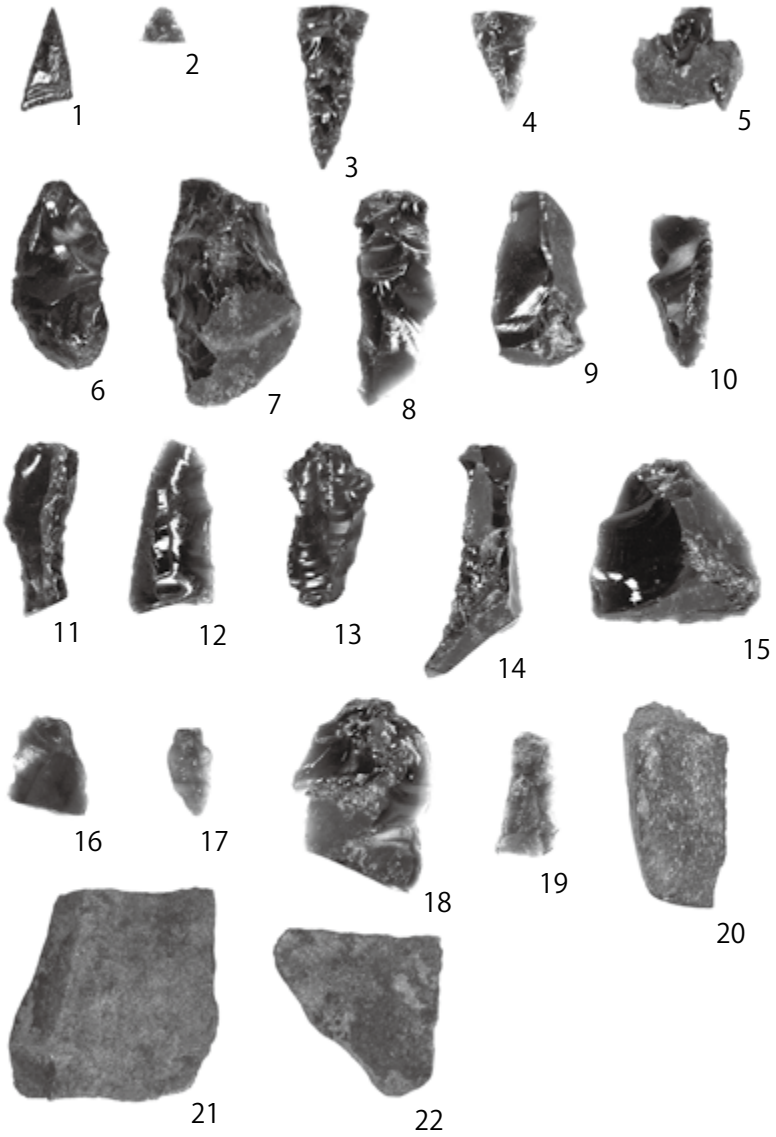
1

焼土範囲 2 出土石器

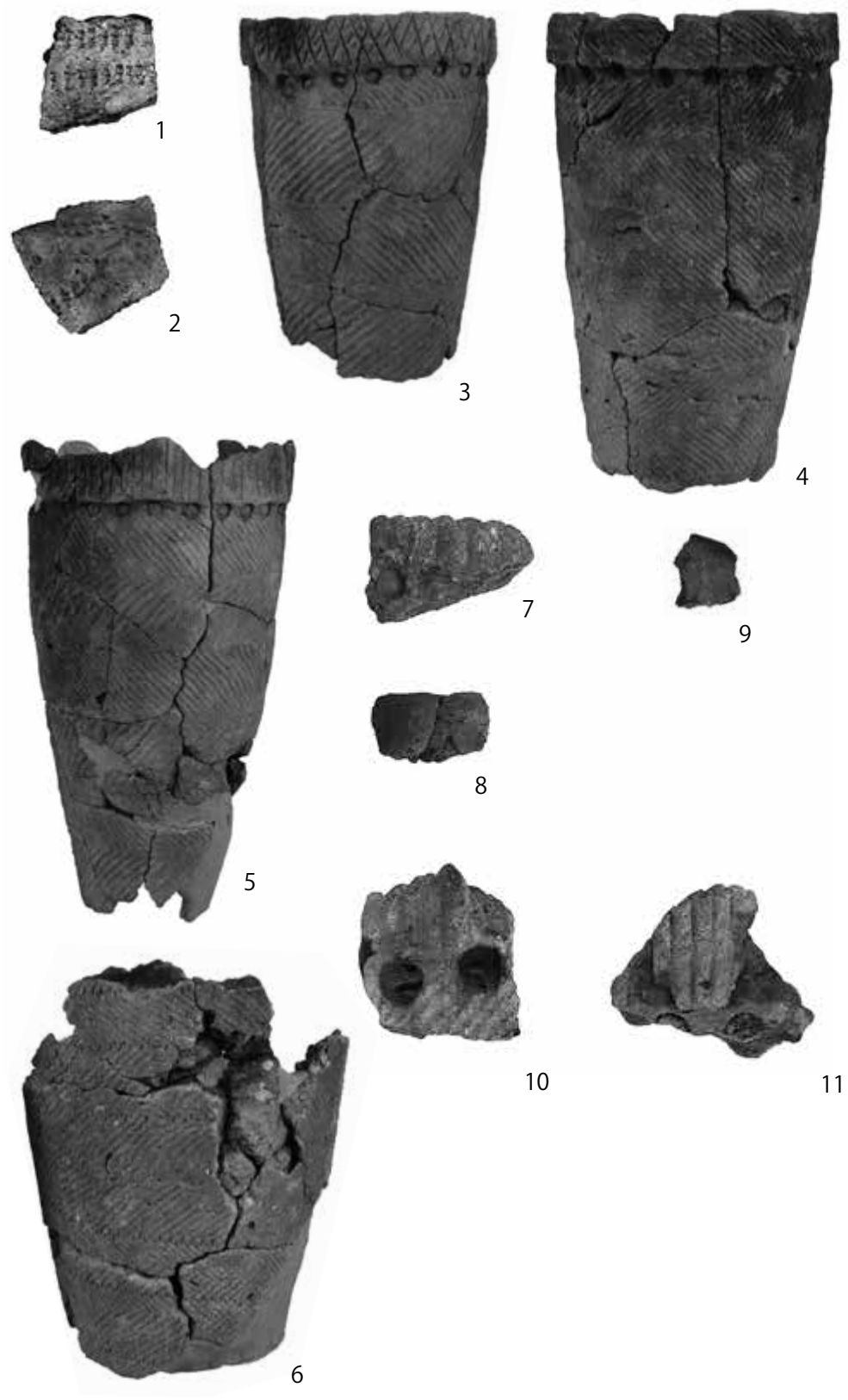


遺構外出土土器　Ⅶ層

作業風景



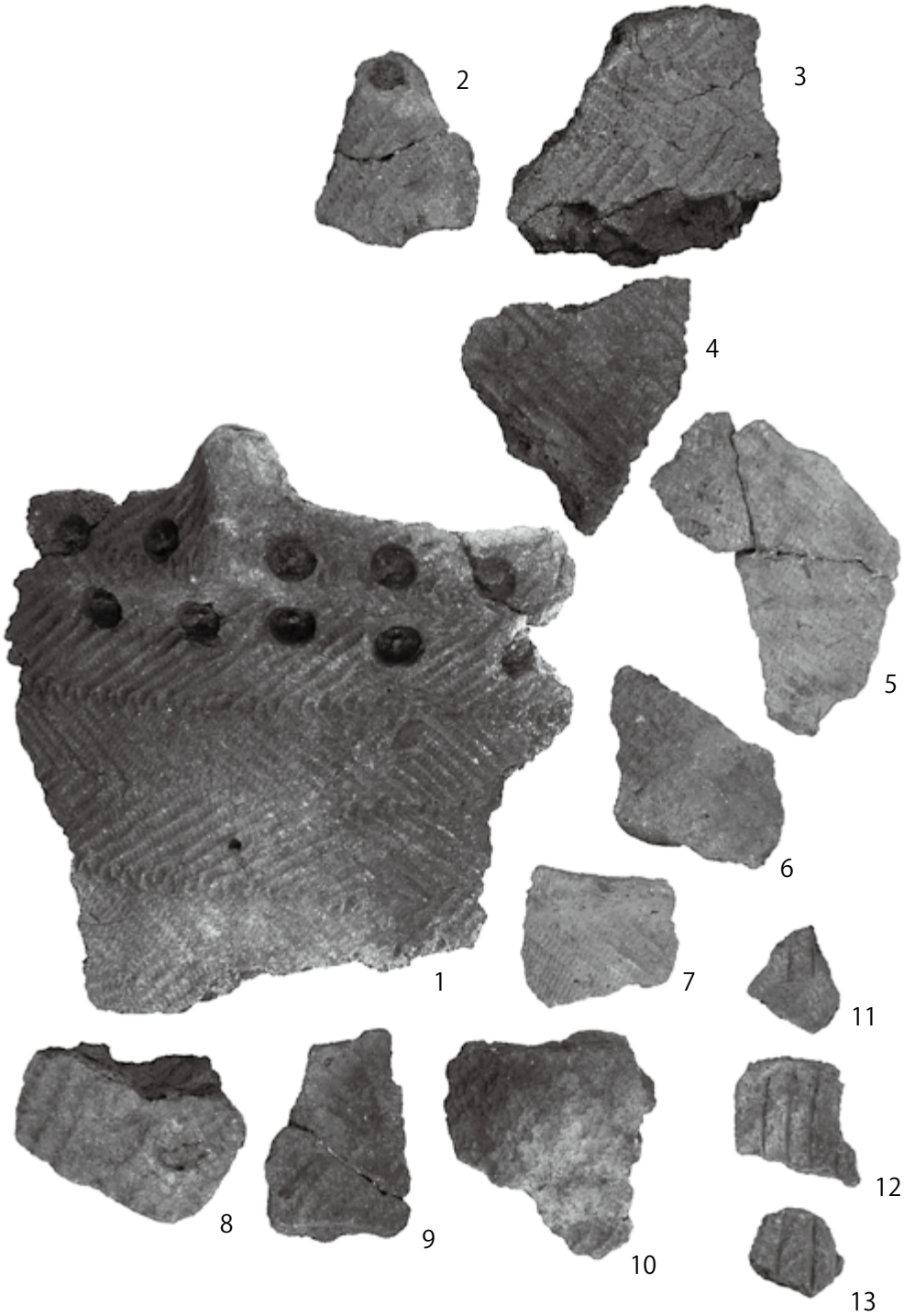
遺構外出土石器　Ⅶ層



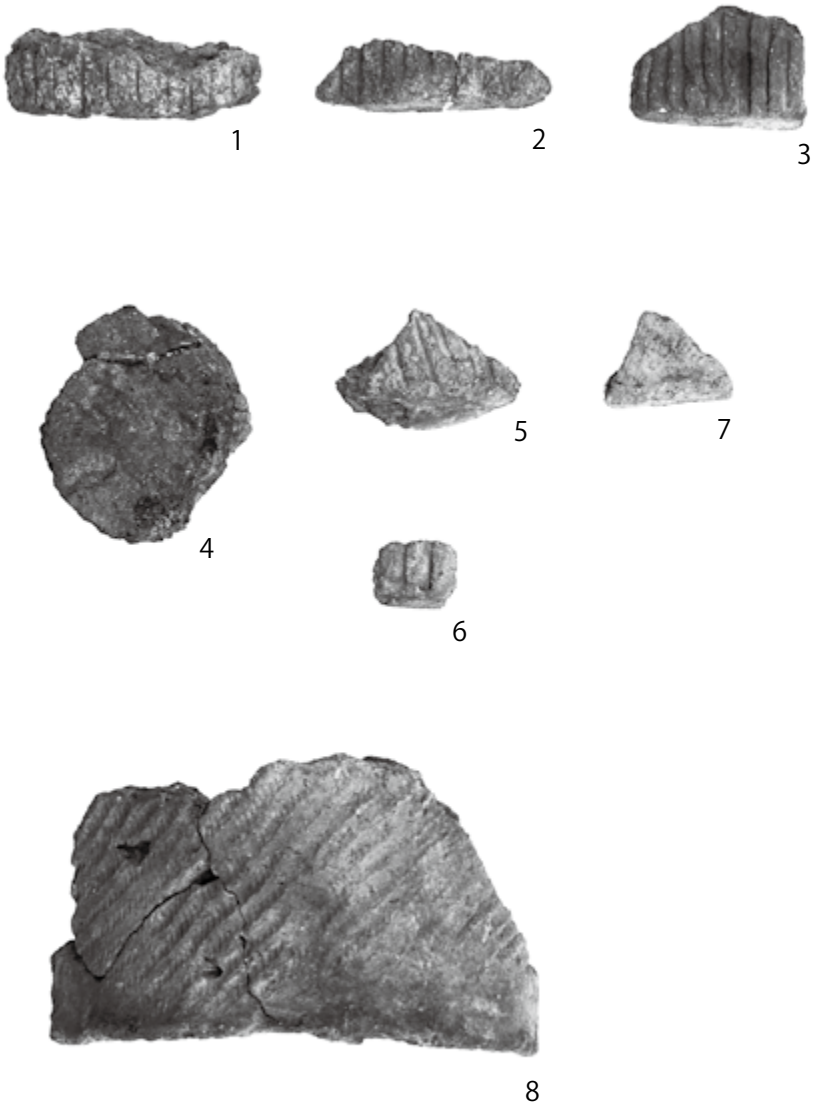
遺構外出土土器　Ⅶb 層（1）

遺構外出土土器　Ⅶb 層（2）

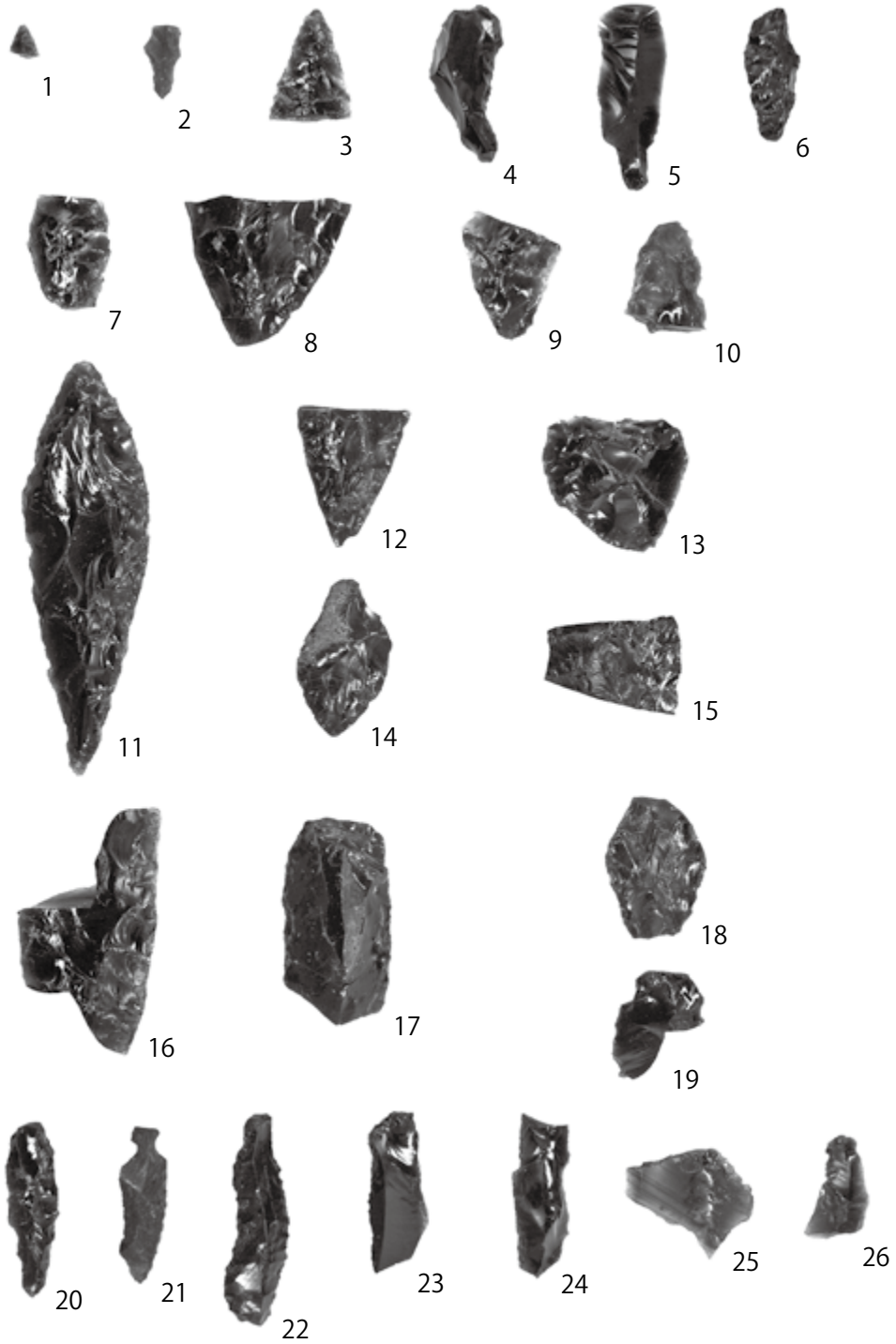
作業風景



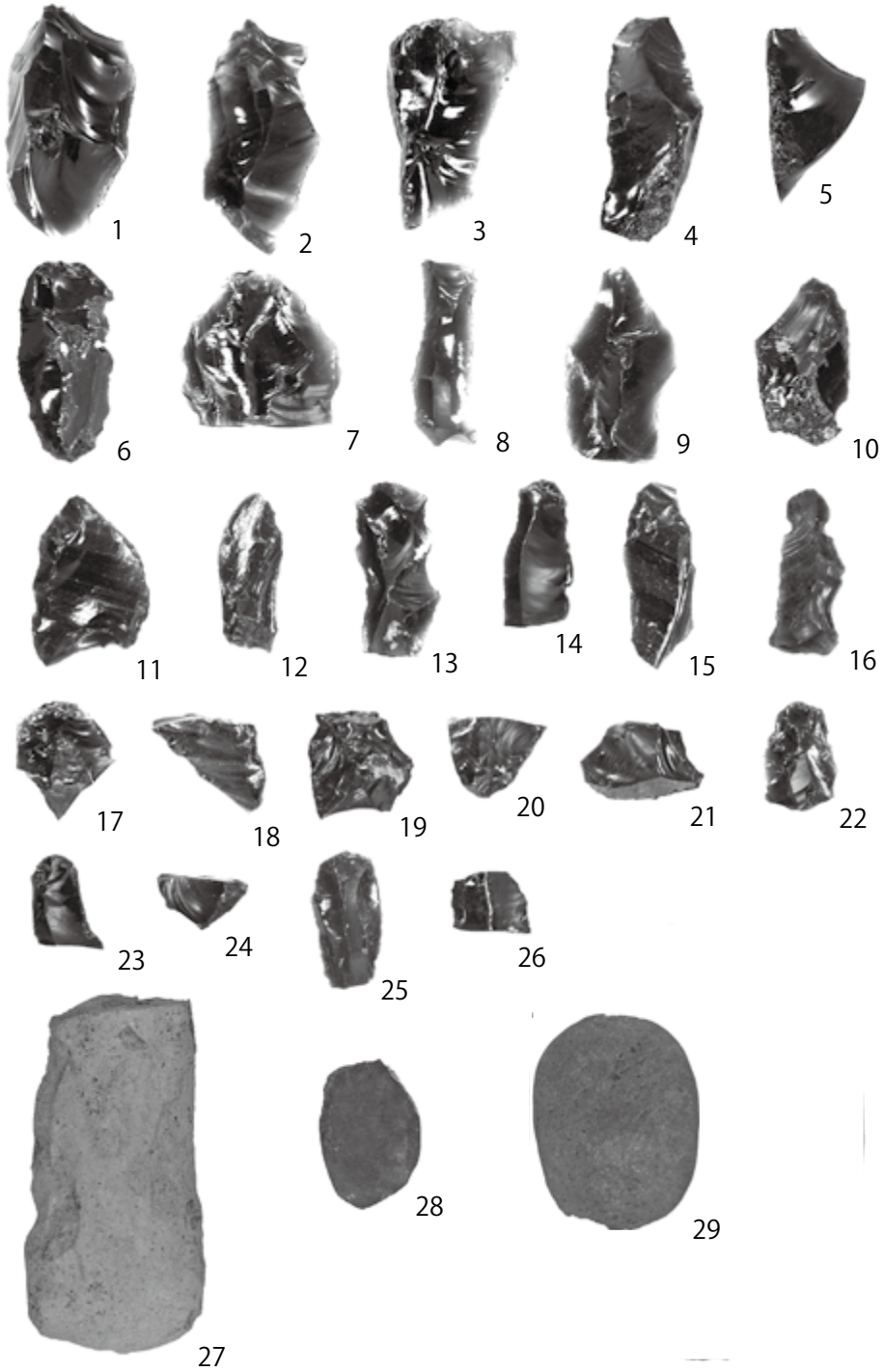
遺構外出土土器　Ⅶb 層（3）



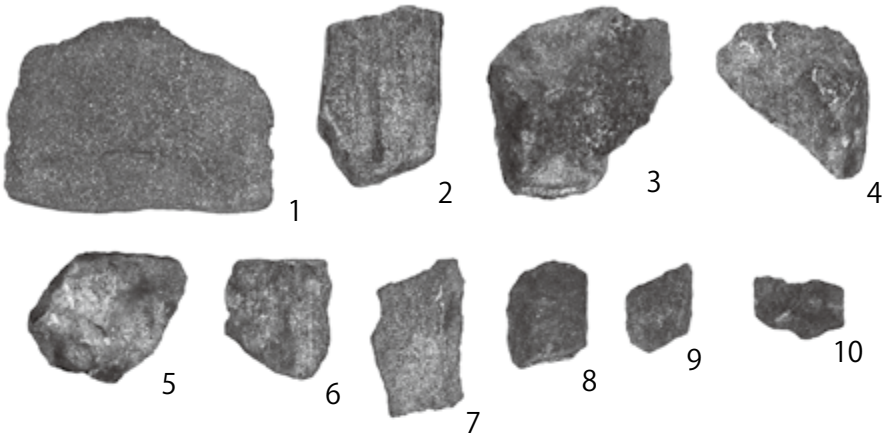
遺構外出土土器　Ⅶb 層（4）



遺構外出土石器　Ⅶb 層（1）

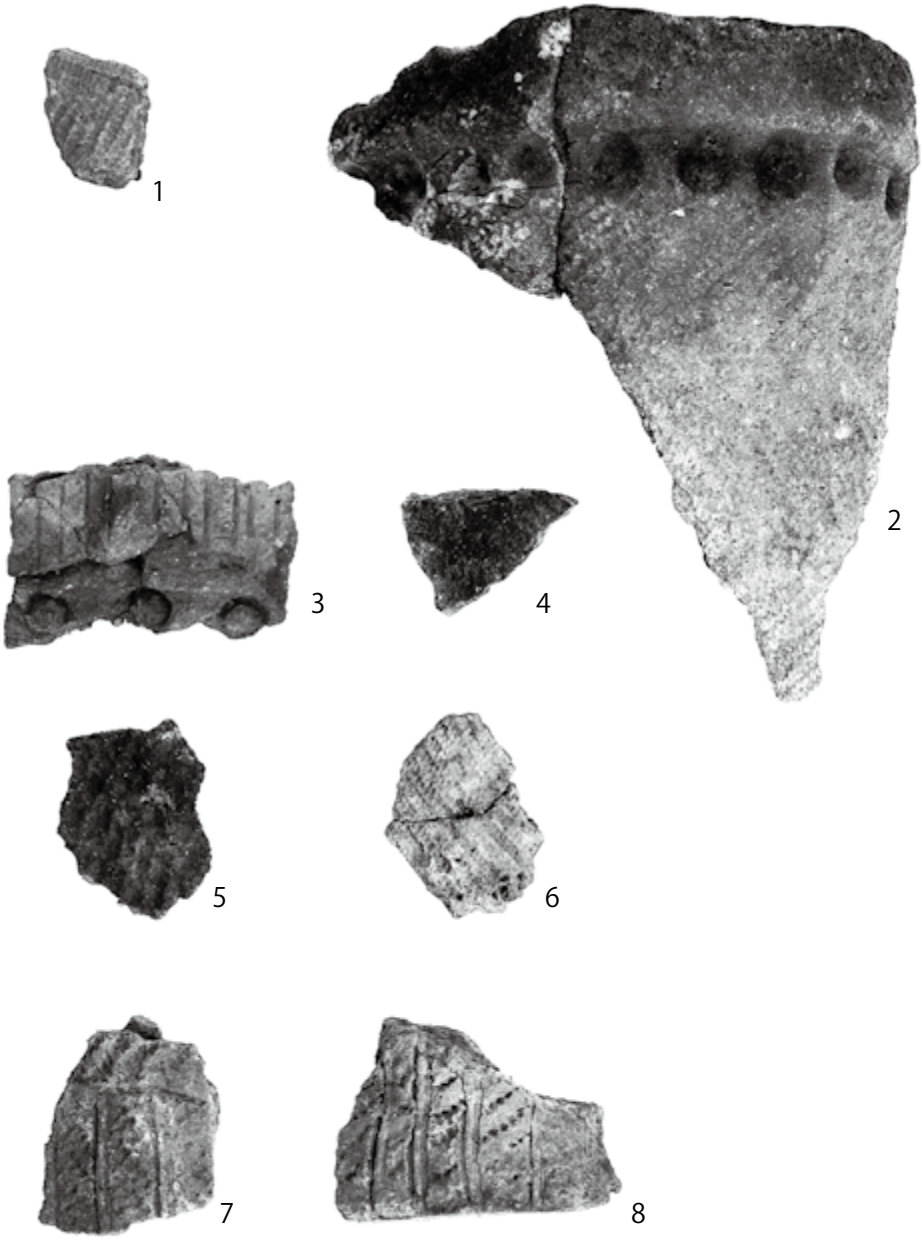


遺構外出土石器　Ⅶb 層（2）

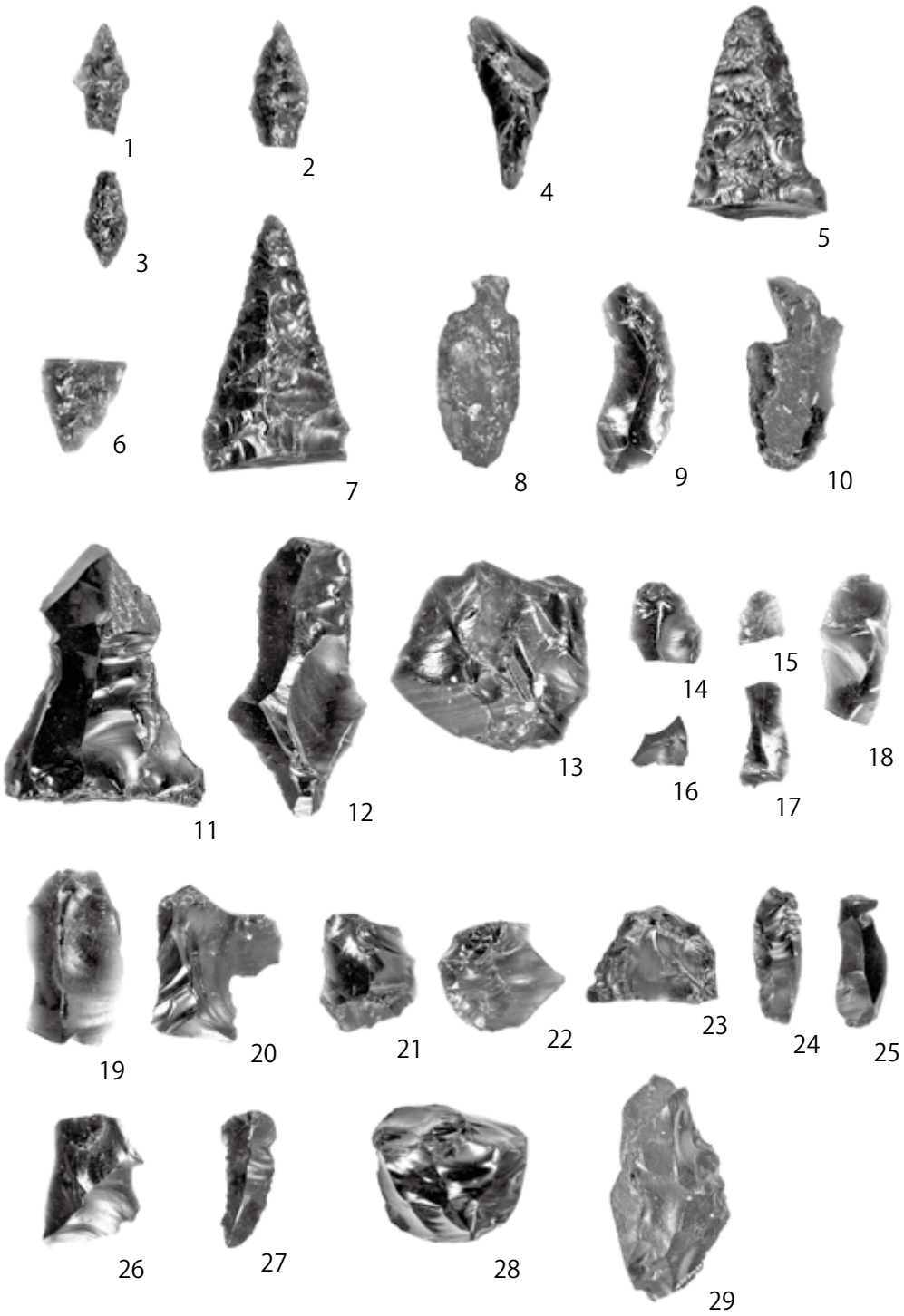


遺構外出土石器　Ⅶb層（3）

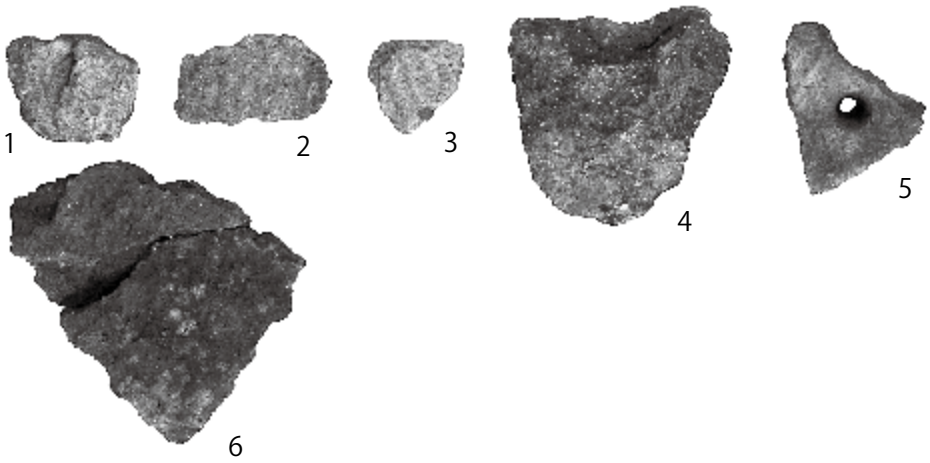
作業風景



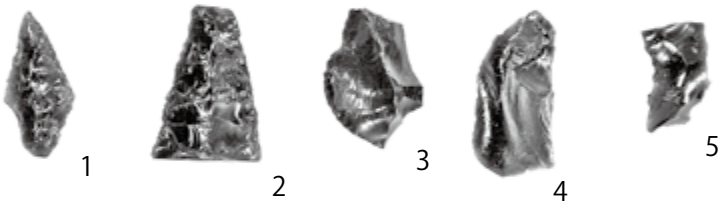
遺構外出土土器　Ⅶb2 層



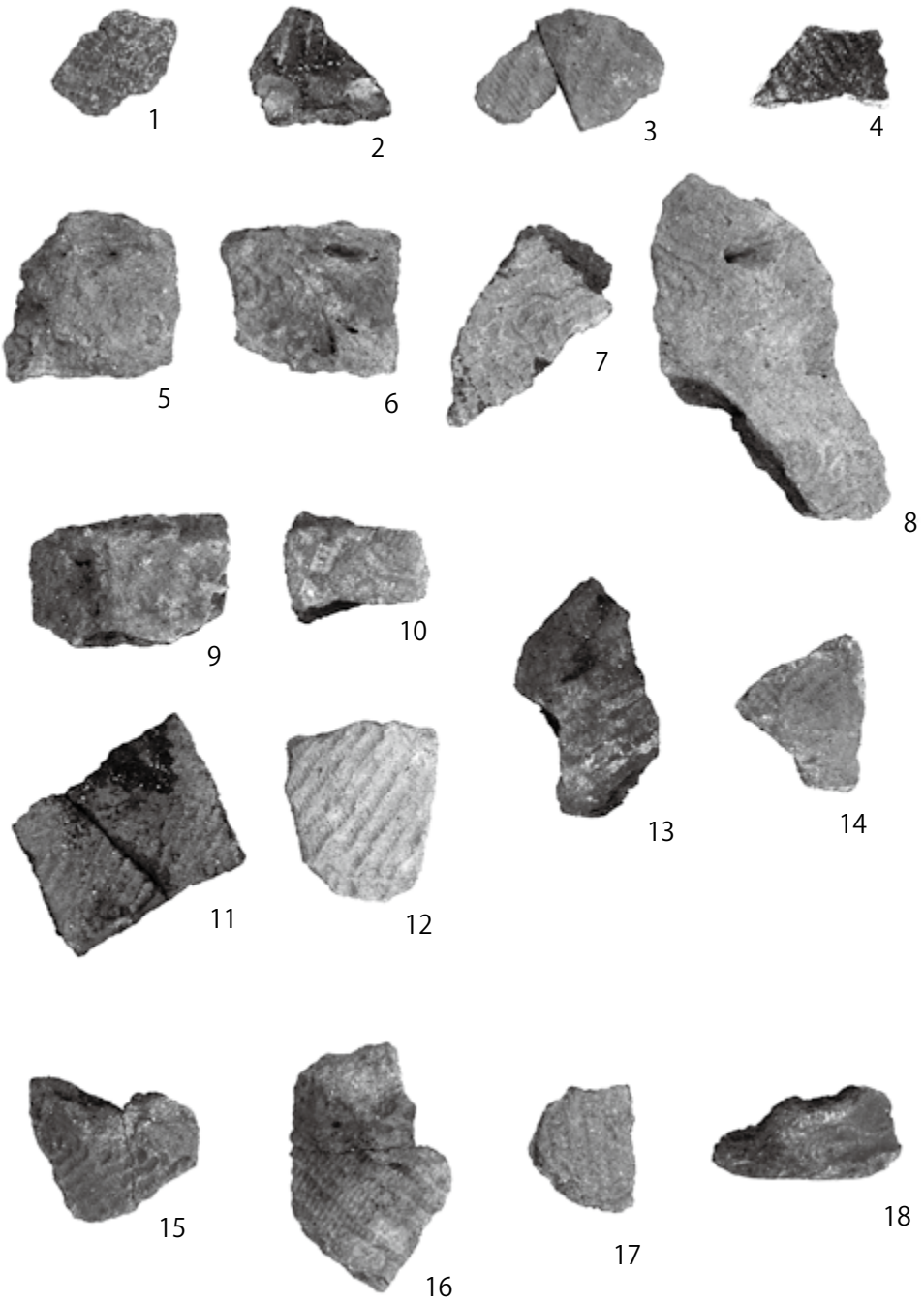
遺構外出土石器　Ⅶb2 層



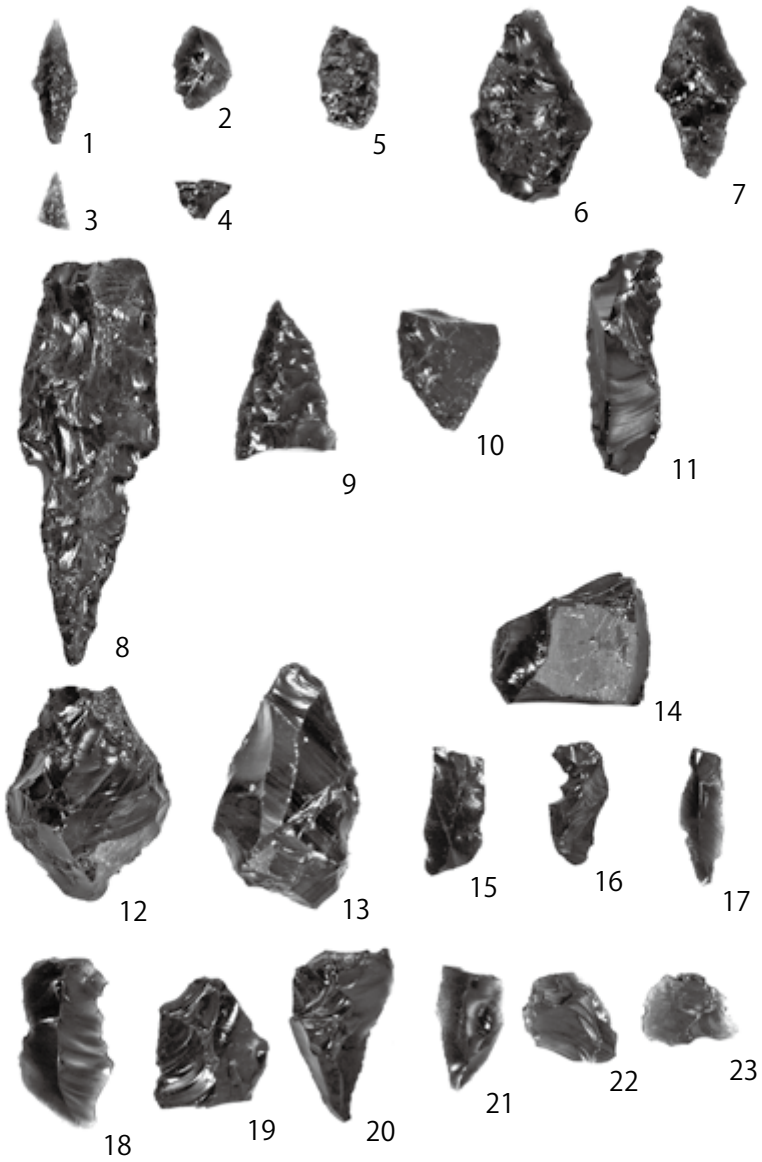
遺構外出土土器　VIIa 層



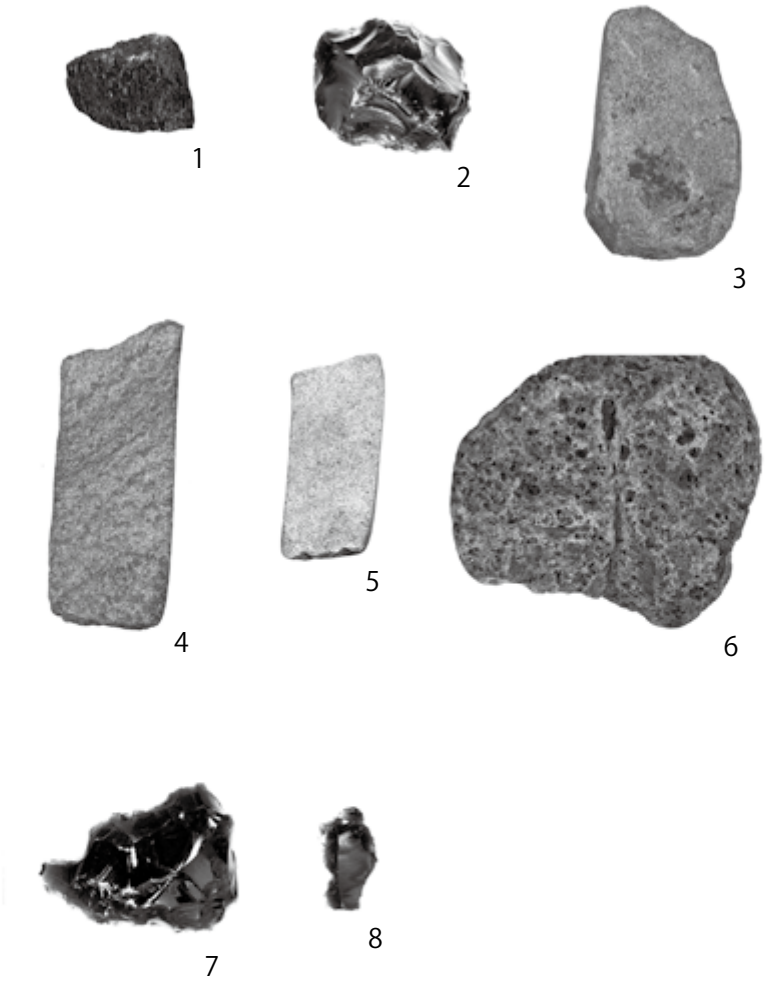
遺構外出土石器　VIIa 層



遺構外出土土器　表土



遺構外出土石器　表土（1）



遺構外出土石器　表土（2）

斜里町文化財調査報告 XXXIX

川上 1 遺跡

発行日　2015 年 3 月
発行者　北海道斜里郡斜里町本町 12 番地
　　斜里町教育委員会
印　刷　北海道斜里郡斜里町本町 55 番地
　　星印刷工業株式会社